

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Research of sentence patterns in colloquial Japanese (2) : On materials in speech

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001235

国立国語研究所報告 23

話しことばの文型(2)

— 独話資料による研究 —

国立国語研究所

1963

国立国語研究所報告 23

話しことばの文型(2)

— 独話資料による研究 —

国立国語研究所

1963

刊行のことば

本書は『話しことばの文型(1)』(報告18, 昭和35年刊)に続くものである。『文型(1)』では、対話形式の資料にもとづいて研究を行なったが、本書は、講演・講義・演説・祝辞・テーブルスピーチ・ラジオニュース解説等の独話形式の資料によって研究を進めた。研究の態度や方法は、大体『文型(1)』を受けついでいるが、方法の細部においては、かなりの修正を加えている。『文型(1)』における研究方法をさらに一段と進めることが出来たと考える。世の批判を仰ぎたいと思う。

なお、文型の研究は、話しことばの文法を明らかにするためのものとして行なって来たものであって、話しことばの文法研究としては、今後さらに大きく発展させて行く必要がある。問題を文型だけに限って見ても、残された問題は少なくない。ことに、基本文型の設定に関しては、別に新しい計画による研究調査を必要とする。

本研究は、第一研究部話しことば研究室が担当し、大石初太郎(室長)・宮地裕・南不二男・鈴木重幸がこれに当たった。

昭和38年3月

国立国語研究所長 岩淵悦太郎

目 次

I 概 要	1
1. 分 担	1
2. 研究結果のあらまし	1
2.1 表現意図	1
2.2 構 文	3
2.3 イントネーション	7
2.4 総合的文型の試み	9
3. 研究の立場	9
3.1 『話しことばの文型(1)』との関係	9
3.2 今後の発展	12
4. 資 料	13
4.1 種類・量と実例	13
4.2 資料から除外したもの	18
<付>不整・誤用についての若干の考察	22
(1) 話しことばの不整・誤用等における傾向	22
(2) 整と不整, 正用と誤用の間	26
II 表現意図	30
1. 概念規定について	30
2. 表現意図の分類とそれに応ずる文表現について	32
3. 表現意図に応ずる文の文末部分について	33
3.1 よびかけ・わかれなどの表現	33
3.2 詠嘆表現	34
3.3 判叙表現	34
3.3.1 判断既定の表現	35
a 事実の叙述表現	35
b 断定の様相表現	44
3.3.2 判断未定の表現	51
a 判断の未確定の表現	51
b 判断への疑念の表現	51
3.4 要求表現	52

a 質問的表現	52
b 命令的表現	58
3・5 応答表現	62
4. 各種表現のあらわれかた	62

Ⅲ 構文

1. 対象と方法	64
1・1 対 象	64
1・1・1 構 文	64
1・1・2 構文の型	65
1・2 方 法	67
1・2・1 調査の手順	67
1・2・2 一次成分	67
1・2・3 一次成分の分類	70
a 一次成分分類の立場	70
b 一次成分の種類	71
(1) 述 語	71
(2) 主 語	72
(3) いわゆる連用修飾語の扱い	73
(a) 目的語 (b) 補 語 (c) 連用語 (d) 状況語	
(4) 陳述的成分	80
(5) 独 立 語	84
(6) 句 の 扱 い	86
c 陳述的変容について	96
1・3 構文の型の分類	97
1・3・1 構文の型の分類の立場	97
1・3・2 構文の型の分類の概観	98
1・3・3 独立語構文	99
1・3・4 述語構文	99
a 基準構文	100
(1) 骨ぐみ構文	100
(2) 拡大構文	104
(3) 複合構文	105
b 付加構文	105
1・3・5 分類についての諸問題	107
1・4 付 録	110
1・4・1 略号一覧	110

1.4.2	各構文型における成分(従属句)の意味的特徴概観	111
1.4.3	構文の型概観	111
1.4.4	『話しことばの文型(1)』との対照表	113
2.	構文の型	113
2.1	独立語構文	113
2.1.1	独立語1つだけからなるもの	114
2.1.2	陳述的成分のついたもの	114
2.2	述語構文	115
2.2.1	基準構文	115
a	骨ぐみ	115
	(1) 主語1 (1-0) 目的語0 (1-0-0) 補語0 (1-0-1) 補語1	
	(1-1) 目的語1 (1-1-0) 補語0 (1-1-1) 補語1 (1-2) 目的語2	
	(1-2-0) 補語0	
	(2) 主語2 (2-0) 目的語0 (2-0-0) 補語0 (2-0-1) 補語1	
	(2-1) 目的語1 (2-1-0) 補語0	
	(0) 主語0 (0-0) 目的語0 (0-0-0) 補語0 (0-0-1) 補語1	
	(0-1) 目的語1 (0-1-1) 補語1	
b	拡大	137
	(1) 連用語拡大	137
	(2) 状況語拡大	140
c	複合	146
2.2.2	付加構文	148
a	陳述的成分の付加	149
b	独立語の付加	151
c	陳述的成分と独立語の付加	152
d	従属句の付加	152
e	陳述的成分と従属句の付加	155
2.2.3	その他の問題	156
a	同格	156
b	挿入	160
c	ひっくりかえし	163
d	派生	165
e	はしょり	168
f	複合述語的な構文	170

Ⅳ イントネーション 178

1.	はじめに	178
----	------	-----

2.	イントネーションのつかまえかた	178
2.1	アクセントとイントネーション	178
2.2	準アクセントとイントネーション	178
2.3	イントネーションの分類と表記法	180
2.4	『話しことばの文型(1)』とのちがい	183
3.	イントネーションの調査	186
3.1	表記法	186
3.2	表記例	187
3.3	調査結果	188
3.3.1	イントネーションの上昇調・高調をともなる音節数	188
3.3.2	意図表現イントネーションのあらわれかた	189
3.3.3	卓立表現イントネーションのあらわれかた	192
a	カナタイプ定本1行についていくつの割合であらわれているか	192
b	詞に多いか、辞に多いか	193
c	文節のどういう部分にあらわれやすいか	194
d	句末にはどのようにあらわれるか	196
3.3.4	イントネーションの問題例の処置	198
3.4	イントネーションは、話しことばの文型にどういう位置を占めるか	203
3.4.1	イントネーションと構文	203
3.4.2	イントネーションと表現意図	205
4.	おわりに	206
V 総合的文型の試み		209
1.	はじめに	209
2.	総合に関する二、三の問題	210
2.1	成分の陳述的変容について	210
2.2	「主題—解説」の類型について	218
2.3	表現意図との関連から見た状況語について	233
3.	構文の型と表現意図・イントネーションとの相互関係一覧表	239
〈参考〉 これまでの文型研究		253
1.	概観	253
2.	文型研究文献抄	254
3.	諸説の紹介	257
4.	結び	271
索引		273

I 概 要

1. 分 担

はじめに、作業ならびに執筆の分担を示しておく。

この研究調査は話しことば研究室の全員の共同作業であるが、主として、

表現意図・イントネーション 宮地 裕

構 文 南不二男・鈴木重幸

の分担により、随時、問題を大石初太郎を加えた全体討議にかけて進めた。また、泉喜与子・吉村香苗が、常時、作業を補助した。

この報告書の執筆は、次のような分担によっている。

I 概要 大石初太郎

II 表現意図 宮地 裕

III 構文 南不二男・鈴木重幸

IV イントネーション 宮地 裕

V 総合的文型の試み 共同

(参考) これまでの文型研究 大石初太郎・南不二男(外国文献に関して)

2. 研究結果のあらまし

この報告書の主要部は、「II 表現意図」「III 構文」「IV イントネーション」「V 総合的文型の試み」の4章より成る。II・III・IVでは、独話資料^{注)}について、文をそれぞれの面から分析して、その文法的特徴に迫り、Vにおいて、それらの総合による文型について考えた。次に、これら各章の要約を示す。

注) 話し手・聞き手の立場がたがいに交換されて展開されることばのやりとりを「対話」とよび、話し手・聞き手の立場が固定して一方的になされる発話を「独話」とよぶ。

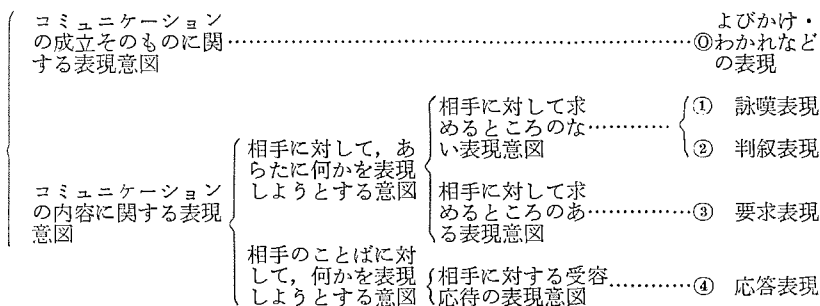
2・1 表現意図

(1) 表現意図に対応する文表現の類別を考え、それぞれの文末形式を調べる。

ここにいう表現意図とは、言語主体が文全体にこめるところの、いわゆる命令・質問・叙述・応答などの内容のことであるが、ここでは、社会習慣としての言語形式と対応をもつ表現意図に限定する。

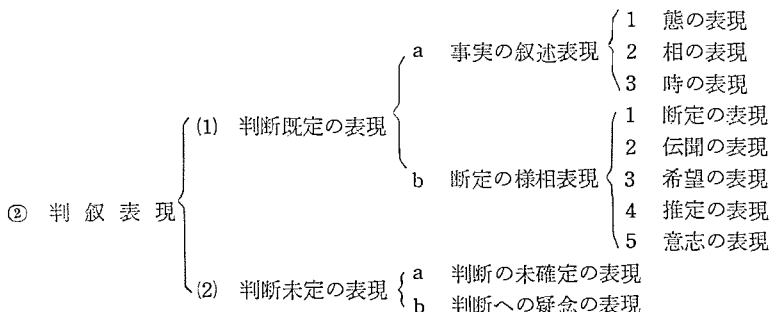
表現意図に対応する社会習慣としての言語形式には、文法的形式（たとえば、「命令」に対応する「行け」「行きなさい」「行ってください」など）と、語彙的形式（意義として命令表現の役割をになうことのある「行ってほしい」「行くことを希望する」など）の2種があるが、ここでは、文法的形式を中心として記述し、資料に見られる範囲で、語彙的形式を加えていく。

(2) まず、表現意図およびそれに応ずる文表現を、次のように分類する。



① よびかけ・わかれなどの表現 { よびかけ（コミュニケーションの発始）などの表現
わかれ（コミュニケーションの終止）などの表現

① 詠嘆表現 { 未分化表現（感動詞による）
やや分化した表現（形容詞類による）



- ③ 要求表現 {
- a 質問的表現 {
 - 肯否要求の表現 {
 - 1 確認要求の表現
 - 2 判定要求の表現
 - 選述要求の表現 {
 - 3 選択要求の表現
 - 4 説明要求の表現
 - b 命令的表現 {
 - 1 消極的行為要求の表現
 - 2 積極的行為要求の表現
- ④ 応答表現 {
- 未分化表現 (応答詞などによる)
 - やや分化した表現 (指示詞などによる)

(3) 上記の細分された文表現の種類に従って、表現意図に応ずる文末の形式を調べ、例文とともに示す。たとえば、次のごとくである。(例文を省く。)

推定の表現 ～ラシイ、～マシヨウ・～デシヨウ、～ヨウデス、～ハズデス、～カモシレナイ、～カモワカラナイ、～ソウデス

意志の表現 文法的形式としては「～ウ」。語彙的形式としては「～スルツモリダ」。

説明要求の表現 「ド」系統の疑問詞によるものが最も多く、ほかに「イカガ」、「イツゴロ」、「ナ」系統のものなどがある。文末はほとんど「カ」をとまなう。「カ」をとまなわないものはすべて「～デシヨウ」の形になっている。「～カト」の形の「ト」終止の例があり、独話での説明要求が、かなり、問題提起の意図によることを示している。

積極的行為要求の表現 はだかの命令形は、独話資料にはない。命令形に準ずる形式に、次のようなものがある。「～シテクダサイ」「オ～クダサイマセ」「ゴ～クダサイマセ」「～シテゴランナサイ」

2・2 構文

(1) 構文の型を明らかにしようとする。

構文とは文の構造であると考え。文の構造は、文がどのような部分から成り立っているか、また、それがどのような関係で結びついて全体(統一体)としての文を作っているかを見ることによって明らかにされると考える。

構文の型は、いろいろな文の構造からさらに抽象されたものである。いいかえれば、成分の組合せの類型である。

(2) 成分については、一次成分(文の構成に一次的に参加しているもの。二次成分は、直接的には一次成分の構成に参加し、文の構成への役割が二次的の

もの。)だけに注目し、これを

述語 (Z) 主語 (S) 補語 (H₁, H₂) 目的語 (M) 連用語 (R)
状況語 (J) 陳述的成分 (T) 独立語 (D)

と分ける。さらにそのほかに、従属句 (K) を認めた。

このうち、述語構文 (後出) 関係の成分では、述語・主語と、述語の自立語の性格によって要求される成分である補語・目的語を、文の骨ぐみを成す成分として骨ぐみ成分と認め、骨ぐみによって表わされることがらをいっそう具体化して骨ぐみの内容を拡大する役割をもつ連用語・状況語を拡大成分と認める。独立語・陳述的成分は、独立語構文 (後出) と述語構文の両方にあらわれる成分である。

以上の組合せによる構文の型を、次のように分類する。

I 独立語構文

II 述語構文

1 基準構文

- a 骨ぐみ構文 骨ぐみ成分より成るもの。
- b 拡大構文 骨ぐみ構文に拡大成分の加わったもの。
- c 複合構文 骨ぐみ構文に従属句の加わったもの。(このばあいの従属句は、主語あるいは状況語を、その文の述語と共有する。)

- 2 付加構文 基準構文に陳述的成分・独立語・従属句などの加わったもの。(このばあいの従属句は、主語あるいは状況語を、その文の述語と共有しない。)

以上の各構文の型における各成分は、それぞれ、ほぼきまった意味的特徴をもつ。その概要は、次の表のとおりである。

		意 味 的 特 徴
独 構 立 語 文 【D】	D	呼びかけ・応答・評価・提示……
	T	文脈的導入、表現意図の補足……
	基準構文 (骨ぐみ成分) Z	(主体などの) 動作・状態・性質・種類……

述語構文	S	(動作・状態・性質・種類……)の主体……
	M	Zのことがらの成立に参加するものごと
	H ₁	結果の状態……
	H ₂	言語活動・精神活動の内容……
	(拡大成分)	
	R	(動作の)ようす, (動作・状態・性質……)の程度, 量……
	J	空間・時間・原因・理由・目的・条件(未定・確定)……
	【Z】(従属句)	
	K	比較的はっきり現われている条件(確定)
	付加構文	
T	文脈的導入, 表現意図の補足, 評価, 提示……	
D	呼びかけ・応答・評価・提示……	
K	条件(確定——主観的な), 事実の提示的表現……	

述語については, 次のような類(～の部分を含む全体)を, 2文節以上でひとつの述語をなすものと認め, 複合述語とよぶ。

～シテイル ～シテシマウ ～シテヤル オ～ニナル オ～スル
 ～シタリスル ～ワケデス ～ハズデス ～カモシレナイ
 ～シタラヨイ ～シナケレバナラナイ ～カドウカ 等々

(3) 上記の分類にもとづいて, 主として資料にあらわれた構文の型とその例文をあげる。たとえば, 骨組み構文には, 次のような型がある。

/SZ/

/SH₁Z/ /SH₂Z/

/SM_γZ/ /SM_αZ/ /M_αSZ/ /SM_αZ/

/SM_{γγ}Z/ /M_{γγ}SZ/ /SM_γZ/ /SM_γZ/

/SM_γH₁Z/ /SM_γH₂Z/ /SM_αH₁Z/ /SM_αH₂Z/

/SM_αM_γZ/ /SM_{γγ}M_γZ/

/S'SZ/ (S'は総主)

/S'H₂SZ/

/S'M_αSZ/ /S'M_γSZ/

/Z/

/H₂Z/

/M_αH₂Z/

各型について、それぞれ特徴を記述する。たとえば、／SZ／については、おもな点は次のとおりである。

この型の述語には、大部分の名詞・形容詞・形容動詞になる。また、動詞のうち、目的語や補語を要求しない動詞（いわゆる完全自動詞）になる。

資料にはこれ以外の動詞述語があらわれたが、そのばあいは、他の骨ぐみ成分が補充されうるものである。

／SZ／で注意すべきものに、次のようなものがある。

述語に連体修飾語がなければ意味をなさない 構文 (▽デ ソウシマスト、
現在ノ 新聞デハ アー アー 朝日新聞ハ ダイタイ ^{ゴジュウパーセント以上}
ノ 漢字含有率デス。(123-44-20)_(注))

述語の打消しと特に深い関係のある部分を含む主語をもつ構文 (▽コレク
ライ 日本ノ 国民ニ 対スル 恥シラズナ 不信頼ナ コノヨウナ 政府ノ
態度ト イウ モノハ アリマセン。(124-31-13))

注) 数字は、左から資料のリール番号、台帳のページ、行を示す。

(4) 述語構文の型の記述からもれたものや、あと回しにしたものがある。

a 同格

2つ以上の同格の成分をもつ構文。

b 挿入

ある述語構文の中に、従属句あるいは他の述語構文が挿入されているもの。

c ひっくりかえし

ふつうの構文では主語以外の成分で表現されるものを主語とし、述語以外の成分で表現されるものを述語として表現したと解釈できるような構文。

d 派生

動詞述語の骨ぐみで、その動詞が受身・使役・可能の形や、～テアル、～テモラウの形になるに応じて主語・目的語の現われ方の変ったもの。

e はしより

たとえば食堂でいう「ボクハ ウナギダ。」のような構文。(場面・文脈をはなれては、ことがらの意味があいまいになる。)

f 複合述語的な構文

いわゆる補助用言(～テイル, ～テシマウなど)のような付属的文節に準ずる機能をはたしていると思われる述語(～ト イウ コト デス, ～予定 デス, ～スル コトニ ナリマス, ～ト 思イマス など)をもつ構文。

2・3 イントネーション

(1) 独話資料のイントネーションを分析調査して、その実態を明らかにするとともに、話しことばの文型にイントネーションがどのように参与するかを考える。そのために、イントネーションの基本的な諸問題をも考究した。

この報告書で扱うイントネーションを、次の2種とする。

a 意図表現のイントネーション

文末述語の末尾音節につき、話し手の判断叙述や質問などの意図表現に参与するもの。型は↘(下降調), ↗(上昇調)の2種。

アラシガクルヨ↘ ハナガサイタ↗

b 卓立表現のイントネーション

何らかの強調の気持ちを表現するもの。型は^ (高調), v (低調)の2種。低調は特に低められる音調で、まれにあらわれる。

アラシガクルヨ[^] ハナガサイタ^vネ

以上のほか、朗読調あるいはそれに準ずるふしまわし、子どものダダコネ調などは、文の音調であるよりも発話全体をおおうもので、メロディーに近いものと見て、ここでは除外する。

(2) 独話資料について、イントネーションに関する次のような調査を行なった。

a イントネーションの上昇調・高調をとまなう音節数——話し手ごとに調べる。

b 意図表現イントネーションのあらわれ方——上昇調の具体例を見る。

c 卓立表現イントネーションのあらわれ方

a) 発話量との対比——話し手ごとに調べる。資料の範囲では、女性に卓立表現イントネーションの多い人が多い。

b) 詞に多いか、辞に多いか——話し手ごとに調べる。共通して辞に多い。

c) 文節のどういう部分にあらわれるか——文節の末尾音節、あるいは末尾

から2つめの音節につくことが多い。

d) 句末にはどのようにあらわれるか——具体例を見る。

(3) イントネーションの分類整理上、問題となったものがあり、その処置を考えた。

▽「セケンノ ヒトガ ユ トキニウ」 ▽「カナジユ ニ トルト イタシマス
ト」——アクセントに従う形と認める。

▽「センゴ トクニ サケバ レテイル アウ」 ▽「ヒトツ ホケンジヨ ガ ホシイ
ト」——卓立表現イントネーションと認める。

▽「ダイ シ ナ コトナンデスケレドモ」 ▽「ダン ダシ ソノ カイグイノ クセ
ニ ナッテ シマウ」——卓立表現イントネーションのうちの遅上がり型と認
める。

▽「イ ロンナ モ」 ▽「イ チ ガ ア」——アクセントがくずれていて、イントネ
ーションの問題の対象としたいと認める。

その他

(4) イントネーションは話しことばの文型にどのような位置を占めるか。

まず、イントネーションと構文との関係を考えて、もっぱらことがら関係を表わす構文(一面からいえば抽象度が高い)に対しては、意図表現イントネーションは直接の関係をもたない。もしも、表現意図の加わったものを構文とする広義の立場をとって、たとえば、「断定の述語」「質問の述語」というような区分をするならば、イントネーションと構文とは直接の関係をもってくる。卓立表現イントネーションも、主としてことがらとしての関係に注目した狭義の構文の範囲では、構文と直接の関係をもたない。しかし、広義の構文の立場をとって、たとえば、副助詞の機能を構文の範囲に含めるならば、「ホンヲ [↑]カッタ」の「ヲ」の卓立表現イントネーションを、これに対応するものとして取り上げることができる。

次に、イントネーションと表現意図との関係を考えて、意図表現イントネーションは、当然、表現意図と関係する。しかし、意図表現イントネーションを欠いては文の意図表現にさしつかえるというばあいは、疑問詞・疑問文末助詞をもたない質問文に限られるから、全般的にいて、意図表現イントネーションは、文の意図表現のための補助手段である。卓立表現イントネーションは文全体の情意や判断のしかたにかかわるものでないので、文の表現意図には関

係しない。

要するに、イントネーションは、話しことばの文型に直接的、積極的に関係をもつことが少なく、間接的、消極的につねに関係をもつものである。

2.4 総合的文型の試み

(1) 表現意図・構文・イントネーションの諸面を総合した総合的文型をとらえることはなかなかの大事業で、ほとんど大部分を今後に残さなければならぬ。ここでは、総合のための問題点のいくつかを指摘し、解説を加え、あるいは、ある程度の見通しを述べる。特に問題点として取り上げたものは、次の3点である。

a 成分の陳述的変容について

たとえば、「～ハ」と「～ガ」のちがひ、語順の変換、卓立のイントネーションのあるなしなど、「構文」の章で同一成分の陳述的変容とみなしたものの概略を取り上げる。

b 「主題——解説」の類型について

たとえば「子供ハ 感受性が 強イ。」のような「主題——解説」の文構成について、資料の上にあられた実態にもとづいて記述する。

c 表現意図との関連から見た状況語について

たとえば、確定条件を表わすノデ・ノニのあとには、命令や意志を表わす文末の形式はあらわれにくいということなど。

(2) 次に、総合の途上のひとつの試みとしての表現意図・構文・イントネーションの対応関係を示した、主として独話資料からの抽出による文型一覧表をかかげる。

3. 研究の立場

3.1 『話しことばの文型(1)』との関係

この報告書が、さきに刊行された報告書『話しことばの文型(1)^{注)}』につながるものであることは、書名の示すとおりであるが、どのようなつながり方をもつかは、説明を要する。

注) 以下では『話文型(1)』とよぶ。また、この報告書を『話文型(2)』とよぶ。

研究の基本的な立場や方法の基本線については、『話文型(1)』と『話文型(2)』との間に変化はない。ただし『話文型(2)』は『話文型(1)』に比べて、調査資料を変え、方法の細部を改め、問題の取り上げ方を広くし、構文の研究調査にいっそう大きく力をさいた。したがって、『話文型(2)』は、『話文型(1)』と一応並列する立場にあるけれども、単純に並列するものでなく、『話文型(1)』から一段発展しているところがある。以上について、次にやや詳しく述べる。

まず、この文型研究の基本的な立場はどういうものかといえ、すでに『話文型(1)』で述べたとおりだが、『話しことばの文法』の研究という立場に属する。『話しことばの文法』を研究目標とし、その中で『文』を対象として取り上げ、『文型』を具体的目標に立てたものである。文型は、一般には言語教育のためという実用的目的から要求されることが多く、直接そういう目的にもとづく文型研究も少なくない。しかし、ここでは、第一次的には、そういう実用的目的によってははいない。日本語の文の文法的特徴を追究して、それにもとづく文の種類をつかもうとする、すなわち、文の文法的類型としての文型を明らかにしようとするのが、基本の態度である。(もちろん、ここで求めようとしている文型も、実用的目的と無関係のものではありえない。実用的文型の体系を編成しようとする際、有力な基礎を提供すべきこと、また、国語教育などの現状にかんがみれば、そのまま相当程度、実用的にも利用されるべきことは、じゅうぶん予想ないし期待される。しかし、実用的目的のための研究としては、追究目標の立て方にせよ、資料の取り方にせよ、分析・調査の方法にせよ、それなりの効果的なやり方があるはずである。)

方法の基本線としては、これも『話文型(1)』におけると同様、表現意図・構文・イントネーションの3つの面から文の文法的特徴に迫り、次に、それらの相関関係を追究して、総合的な文型を求めようとするものである。なお、なまの話しことば資料(録音およびその文字化)の操作を中心として上記の目標に迫ろうとするやり方も、『話文型(1)』におけると変わるところはない。

次に、変わった点については、まず第一に、『話文型(1)』が対話資料によったのに対し、『話文型(2)』は独話資料によった。対話と独話とは、話しこ

とばの上の、ひとつの2分法による対立領域だから、その意味では、これで、話しことばの全体について文型の研究を行なってきたことになる。しかし、両面の資料について統一的方法で進めえたものでなく、したがって、両面の研究を直接対比してみたり、ただちにひとつに合わせて示すことのできるような状況にはいたっていない。

また、『話文型(1)』の反省から、方法については、かなり改めるところがあった。特に構文については、それが大きかった。最も大きな点は、文の成分の分け方を変え、それにもとづいて構文の型の種類を立て直したことである。イントネーションについても、そのとらえ方を再考、修正し、その種類の認め方を改めた。

次に、『話文型(1)』は概して基礎研究の段階にとどまり、文の認定に関する考察ととりきめ、および表現意図・構文・イントネーションのそれぞれの研究を中心とし、総合的文型については、単純な方式でのそれらの組合せをひとつの試みとして示すにとどまり、表現意図・構文・イントネーションの相互の制約関係を十分追究して総合的文型を立てるにいたらなかった。また、たとえば構文については単純文(句を含まない文)の構造を見るにとどまり、句を含む文の構造には及ばなかった。その他、再考を要すること、及びえなかった細部などが各部分についてあり、それらは『話文型(1)』の巻末の「反省」にもしたとおりである。(この「反省」も現在の観点からは書き直すべきところがある。)この『話文型(2)』でも、なお十分ではないが、以上の段階から一歩ふみ出すことにつとめた。構文に関しては、単純文の範囲にとどまらず、句を含む文の構造にも及んだ。陳述副詞その他の陳述的な成分などに関する構造にも触れるところがあった。資料の狭さによる未決定や予測なども少なくなく、問題をはらむ点があるが、構文の考察では、ある程度、新しく開拓しているところがあると思われる。イントネーションについても、その種類の認め方などは、イントネーション研究がまだ一般的に開拓がおくれているだけに、新しい提唱となっている。また、イントネーションの文型への参与のしかたについても、『文型(2)』では、いっそうはっきり考えた。

総合的文型については、その体系的把握はさらに残された課題とせざるをえ

ないが、そのためにさらに調査考察すべき、表現意図・構文・イントネーションの相関に属する問題点を個別的に指摘し、ある程度の解説や見通しを記述した。それらの研究をさらに進めて、その基礎の上に総合的文型の体系的な記述が成り立つものとする。『話文型(1)』の「総合的文型の試み」に準じた文型表は、途上のひとつの試みとして、ここでもやはり示すことにした。

3・2 今後の発展

ここに一応のまとめを報告するのだが、なお、この研究の発展として、今後に期待すべきものが少なくない。次に、順序にこだわらず挙げてみる。

(1) 総合的文型については、上にのべたように、今後、そのための基礎的研究が積み重ねられなければならない。

また、研究計画の構想を新たにしたとき、うかがいがってくる問題がいくつかある。たとえば、

(2) 語順は残された大きな問題のひとつだ（語順の変換については陳述的変容に関して多少ふれるところがあったが、それをいっそう明らかにするためにも、標準的な語順が明らかにされなければならない。）が、そのためには、相当の規模の実態調査や実験的研究が必要である。

(3) 待遇表現に関する相違や年齢別・性別等による表現の相違の調査は別の整理に属するが、そういう調査から、文・文型に関して見直されるところが出ないとはいえない。

(4) イントネーションについては、今後、より実証的な調査研究が必要であろう。その際には、規模の大きい実態調査や実験も期待される。

(5) 言語教育等の実目的に対して考えれば、前述のように、これは直接その目的のためになされた研究でないので、実用的文型設定のための研究は、あらためて独自の計画をもって進められなければならないが、そのためにこの報告がひとつの土台となることが期待される。

(6) 「基本文型」の概念はかならずしも一定していないが、ことに使用頻度をその基準のひとつだとすれば、そのための調査も今後のことに属する。

(7) 「話しことばの文型」に対して、「書きことばの文型」が考えられる。両者は、ある程度、内容上の差異のあることが想像される。したがって、文型研

究としては、今後、書きことば資料についての研究を進めることも、ひとつの課題である。

4. 資料

4.1 種類・量と実例

はじめに、独話資料約9時間半の分量を採った。これは、表現意図・構文・イントネーションの作業に共通に使ったもので、共通資料とよぶ。その内容は次に示すとおりである。

(リール番号)	(略称)	(時間)	(媒体)	(内容)
122	講演4人	76分	生	男性4人
123	国語講義	123分45秒	生	男性4人
124	祝辞・演説	90分52秒	生	賀宴祝辞 男性10人, 選挙演説 男性2人
125	女性講義ほか	61分44秒	ラジオ	女性5人, 男性1人
126	ラジオ解説ほか(1)	120分3秒	ラジオ	男性7人, 女性3人
127	テレビ解説ほか(1)	91分15秒	テレビ	男性6人, 女性4人

次に、下記の約6時間分を加えた。これは構文の調査のために補充したもので、補充資料とよぶ。

129	テーブルスピーチ(2)	35分41秒	生	賀宴祝辞 男性5人
133	ラジオ文化講演会(1)	58分55秒	ラジオ	男性1人
134	ラジオ文化講演会(2)	57分38秒	ラジオ	男性1人
135	ラジオ解説(2)	35分53秒	ラジオ	男性3人
136	ラジオ雑2種(2)	20分25秒	ラジオ	解説・随想 女性2人
137	テレビ 心と人生	44分22秒	テレビ	随想 男性3人
138	テレビ雑2種(2)	44分40秒	テレビ	講義 男性8人
139	テレビニュース解説(3)	57分51秒	テレビ	男性4人
140	テレビニュース解説(4)	14分23秒	テレビ	男性1人

以上の資料について、文字化・訂補・文切り・カード化・選別(不整・誤用等の除外)等の手数をかけたことは、『話文型(1)』における作業と同じである。

文切りに関して、『話文型(1)』の文の認定の基準に加えて、二次的な文(「句」あるいは「文中文」)のひとつとして「引用提示句」を認めた。

▽マー ソレダケ ヒトツヒトツノ 保健所が エー 仕事ガ ノ… 分量ガ 多

イト、オー コウイウ コトニモ ナル ワケデスガ マー ダイタイ イー 八
百チカクノ 保健所ガ アッテ エー 約 ウー 十万チョット 十万強ノ 人
口 十万以上ノ 人口ニ ーツ アルト、 マー コンナ コトハ 常識ニ ナ
ッテ イル ワケデス。 (125-25-3)

▽デスカラ 横浜デハ 横浜ノ 市デ 作ッタ 保健所ガ アル、川崎ニモ 川崎
ノ 市デ 作ッタ 保健所ガ アルト、神戸ニモ 神戸ノ 市デ 作ッタ 保健
所ガ アルト、京都ニモ ヤハリ 京都市デ 作ッタ 保健所ガ アルト、コウ
イウ フウニ イー ナッテル ワケナンデス。 (125-25-19)

____の部分を用示句とよび、これを含んだ全体をひとつの文と認める。

次に、それぞれ性質のちがう資料の例を若干示す。いずれも冒頭の約3分間の部分である。

- (備考) 1 |は文切りのしるしで、前後に|のあるひとつづきの部分を1文とした。
2 末尾に▲のつけてあるものは、資料から除外したものである。(4・2参照)

リール番号124「祝辞・演説」のうちの祝辞

|エー 国語研究所ノ 学問 エー 研究 アルイハ 調査ト イウ モノト オー
密接ナ マタ 非常ニ 深イ 関係ヲ モッテ オリマス 国語 オ 学会ト イタ
シマシテ エ 今回 研究所ガ アー 十周年ヲ オ迎エ ナサッタ コトニ ツキ
マシテハ エー ココロカラノ オ祝イノ 気持ちヲ 表明イタシタイト 思ウンデ
アリマス|

|ウー 研究所ガ 十周年ヲ 迎エテ 祝賀ノ オ 式典ヲ 催サレル マス コト
ノ 意義ニ ツキマシテ エー タダ 十年ノ オー 歳月ヲ一 経テ 今日ノ 盛
況ヲ カチエタ ソウイウヨウナ アー コトラ 喜ブト イウダケデ ナクッテ
エー コノ 機会ニ イ 過去ノ オ 十年ノ 歩ミヲ 振り返ッテ ソレニ イ
一応ノ 決算ヲ 与エ ソレヲ 踏ミ台ニ シテ サラニ イ 将来ノ 飛躍ヲ オ
期ソウト コウ サレルンデ アロウト 思ウンデ アリマス|デ シタガッテ エ
ー 研究所内部ニ イ オカレマシテハ サダメシ イー 過去ニ 対スル 自己批
判ナリ アルイハ アー 将来ニ 対スル 新シイ 構想ナリヲ オー オ考エニ
ナッテ イラッシュルト 思イマスンデ エー ソノ 点ニ ツキマシテハ ア 今
後ノ ゴ発展ヲ オー カツモクシテ エー 待ッテ イル モノデ ゴザイマス|
デ ココデハ 学会ニ イ 籍ヲ オキマス モノノ ヒトリト イタシマシテ エ
ー 研究所ノ オ 外部ニ アル 第三者的ナ 立場ニ オキマシテ エー 研究所
ノ オ 十年ノ 歩ミヲ オー 振り返ッテ ミマシタ、ソノ 感想ノ 一端ヲ 申
シノベサシテ イタダキタイト 思ウンデ アリマス|

|デ 国語ニ 対スル 関心トカ 研究ッテ イウ コトハ ナニモ オ 今日ニ

始マッタ コトデハ ナクッテ エー スデニ 江戸時代 国学者ノ 手ニ ヨリマシテ エ 非常ニ イ 貴重ナ 研究成果 カガヤカシイ 研究ヲ 今日ニ 残シテ クレテ オリマス⁴ | エー シカシナガラ アー 国学ノ 一ツノ オ 理念ノ シカラシメタ トコロデ アリマショウ, アー ソノ 研究ノ 対象ト イウ モノハ 主トシテ エ 古代ノ コトバニ 限ラレ エー 問題ト シ イタシマス トコロモ 文献ノ 解釈ト イウヨウナ コトガ 主要ナ 問題ニ ナッテ エ オッタヨウニ 思ワレルンデ アリマス⁴ |

| デ エー サラニ 明治以後ニ ナリマシテ エー 国語学ガ アー ヨーロッパノ 近代ノ 言語学ヲ 受ケ継ギマシテ ソノ 基礎ノ 上ニ 新シイ 国語学ヲ 建設イタシマス 時ニモ ンー ヤハリ 別ノ 意味ニ オキマシテ エー 国語ノ 問題ト イタシマス トコロハ エー 国語ノ 起源デ アルトカ アルイハ 国語ノ オ 歴史的変遷ト イウヨウナ コトガ 主要ナ ア 問題ニ シボラレテ オリマシテ エー シタガッテ エー 現代ノ ワレワレノ 生活ニ イ 密着シタ トコロノ 国語ノ イロイロナ 種々ナ 問題ッテ イウ モノハ アー 比較的 取り上ゲラレル コトガ 少ナクッタノデハ ナクッタカト 思ウンデ アリマス!

リール番号124「祝辞・演説」のうちの演説

| ワタクシ タダイマ ゴ紹介ニ アズカリマシタ キシモトデ ゴザイマス | 今日^{コンニチ}ノ 選挙ニ アタリマシテ ワタクシハ ドウシテモ ヤラナケレバ ナラナイ 二三ノ 問題ガ アリマシテ 浅学ビサイ^{*}ヲ カエリミズ 立ちアガッタ シダイデ ゴザイマス | * ヒサイ(非才)の誤りか

| マズ 第一番ニ 人ノ 親ト シテ 日本^{ニホン}ノ 国民ト イタシマシテ, ドウシテモ コレヲ ダマッテ ミテハ イラレナイト イウ 問題ガ ヒトツ | スナワチ ワレワレノ 皆様ガタノ カワイイ 子ドモたちノ 教育ヲ ホウリナゲテ ミズカラノ 要求ヲ 貫徹センガ タメニ 闘争ヲ 通ジテ ソノ 要求ヲ 貫徹セント シテ イル 先生ガタノ 愚カナ 行為ト イウ モノハ コレハ タダチニ ヤメサセナケレバ ナリマセン | モチロン 皆様ガタ 通勤ノ 足ヲ ウバイ 国民ノ 犠牲ノ 上ニ タッテ ミズカラノ 利権ヲ 獲得セン ミズカラノ 要求ヲ 獲得セント イウ コノ 考エカタハ カツテ 戦争当時 国民ノ 多クノ 犠牲ノ 上ニ タッテ 戦争ヲ 通ジテ 領土 権益ヲ 獲得セント シタ トコロノ コノ 軍国主義 指導者ト ソノ 利己主義ト イウ 点ニ オイテハ アエテ スコシモ カワリガ ナイト イウ コトデ ゴザイマス | シタガッテ 今日^{コンニチ}ノ 社会ニ オイテ 行ナワレテ イル ショウ シドウ 使用者ト 労働者ノ 争イト イウ モノガ コノ 戦争ガ 国際社会ニ 拡大サレテ イギト スルナラバ 社会主義国ハ 労働者陣営ヲ 応援(シ) 自由主義国家陣営ハ 必ズトモ 使用者側ヲ 応援スルヨウニ ナリマス |

| コノヨウニ シテ 国際社会ニ オケル 国家集団ト 国家チュウ団^{*}ノ 争イヘト 発展シタ バ(ア)イ コレガ オソロシイ 戦争デ アル コトハ ワタクシ 申スマ

デモ ゴザイマセン | コノ オソロシイ 戦争指導者ト 同じ 観念ノ 上ニ 立ッ
テ 指導サレテ イル 今日^{コンニチ}ノ 闘争ト イウ モノハ ゼヒトモ ヤメサセナケレ
バ ナリマセン | 子供^{コドモ}たちハ 感受性が ツヨイ | コノ 感受性ノ ツヨイ 子供^{コドモ}
たちが 尊敬シテ イル トコロノ 先生^{ウシ}たちが ナニヒトツ 矛盾トモ 思ワズ
ナニヒトツ アヤマチトモ 思ワズ 闘争ヲ 通ジテ ミズカラノ 要求 貫徹シヨ
ウト イウ 行為ヲ 今後 ナガク 続ケテ イッタト スルナラバ ソコノ 影響
ヲ ウケル トコロノ 子供^{コドモ}たちハ ヤガテ 感化サレ 自分ノ 要求ヲ 貫徹スル
タメノ 手段ヲ 闘争ヲ エラブ コトガ アタリマエノ コトデ アルト イウ
意識ヲ シテ シマッタナラバ ドウイウ コトニ ナルカ | * シュウ(集)団の誤りか。

ルール番号125「女性講義ほか」のうちの講義

| エー 六月ハ 雨期ニ ハイリマスノデ 気候ノ カワリヤスイ 月デス | ア コ
トニ 夜^{ヨル}ハ ムシ暑カッタリ 冷エタリ スルノデスカラ オ子サンガタノ 健康ヲ
マモッテ ソシテ 暑イ 夏ヘノ ツヨイ 抵抗力ヲ ツケテ ヤリタイ モノデ
ゴザイマスネ |

| ソレニハ 夜ノ 安眠ガ 一番 タイセツデハ ナイデ ゴザイマシ ヨウカ | オフ
トンカラ モウ ミンナ コロゲ出テ シマウシ 掛ケプトンナドハ モウ スグニ
ハイデ シマウ | デ モウ ドウシテモ ウー ソノ チイサイ オ子サンデスカラ
イロイロト 寝具ノ クフウハ ガンガエテ イラッシュアルデ ゴザイマシ ヨウケレ
ドモ マズー 直接 ハダヲー カラダヲ ウー マア マトウ ネマキデ ゴザイ
マスカ、コレヲ アノー イロイロト オ考エン ナッテハ イカガデ ゴザイマシ
ヨウカ | エー オ子サンノー 着ル モノハ ミンナ オカアサンノ 手デ 作ッテ
アゲたらバ 一番ニ アノー ヨイ コトジャ ナイカト 思ウノデ ゴザイマスケ
ド マア トッテモ セワシクッテ ソウイッタヨウナ オ仕事 デキナイヨナ カ
タダチハ 既製品ヲ どうシテモ 買う コットン ナルト 思ウノデス | デ ドチラ
ニ シテモ 子供^{コドモ}サンノ ネマキノ アリカタト イウ コトヲ シッカリ 知ッテ
オク コトガ アノ ダイジデス |

| デー マズー ソレニハ 年齢ニ ヨッテ ソレゾレノー 差ガ ゴザイマスケレ
ド アノ 幼児、小サイ オ子サンハ 自分デ 着タリ スイダリガ デキナイノデ
ドウシテモ オカアサンガ アノ 自分デ 着セテ オアゲン ナルノデ エー ソ
バニ 寝カシテ オイトイタリ アルイハ ソウシタ 目ガ 届キマスノデ エ 夜
オコシテモ ミンナ オカアサンガ スガシタリ 着セタリト ソウイウ コトガ
ゴザイマスノデ イロイロ トメタリ ハズシタリ スル 点モ エ ソウイッタヨ
ウナ 形ノ 中^{ナカ}カラ イロイロニ 考エテ 作レルノデ ゴザイマス | ン ケド ド
ウシテモ マタ 子供^{コドモ}ニ ヨッテ エー 汗ヲー 非常ニ アノー タクサン カク
ー 子ガ オリマシタリ マタ 汗ノ 出ドロガ どうシテモ イロイロニ アノー
違ウノデ ゴザイマスノデ 一度^{イチド} モウ 夜 どうシテモ トリカエテ ヤラナキヤ

ナラナイッテ イウヨウナ 子ドモサンハ ドウシテモ ソノ 上ダケヲ トリカエ
 テ ヤルト イウヨウナ ニハ、ドウシテモ アノー ^{ジョウガ}上下ガ ワカレテ イルト
 イウヨウナ コト 考エナキャ ナラナイ[▲]デスケド マズ ヤハリ オナカヲ タ
 イセツニ エ アタタカク シテ ヤルト イウ コトデ ゴザイマスカラ モウ
 コレハ ドウシテモ ウー 考エテ イタダキタイ コトデ ゴザイマス | ソレカラ
 アノー 子供ニ ヨッテ ウツブセン ナッテ シマウ 子デスネ、デ コレハ ア
 ノー オナカガ 下ノ ホウニ ナリマスノデ コウイッタ^{ウツブ}ヨウナ オ子サンニハ
 アノ ウシロアキニ ツクッテ アル ウー ネマキデスネ、^{ウツブ}上着ヤ ナニカモ ウ
 ウシロアキニ シテ アゲテ ソシテ アノ オナカノ ホウ ナニモ ゴロゴロ
 シナイヨウニ、ト イウヨナ コトモ[▲]マタ アノ エリグリデスケレドモ 暑イカ
 ラト イッテ グット アケテ シマイマスト アキガ 多スギルノデ 今度ハ 寝
 返リヲ ウツテル ウチニ 肩ノ ホウガ ハズレテ シマッタリ シテ カエッテ
 逆効果ン ナル コトガ アルノデ ゴザイマス | ソレカラ アノー ヨクー 暑イ
 カラ 腕ヲ ミンナ オトナノヨウニ 出スノデ ゴザイマスガ 冷タイッテ イウ
 感ジハ ドウシテモ アノー ウデニ 感ズルノデ ゴザイマスカラ ソデナシヨリ
 半ソデグライガ ヨロシイノジャ ナイカト[▲]

ルール番号127「テレビ解説ほか」のうちの料理説明

| ミナサマ | コンニチハ | ゴキケン イカガデ イラッシュイマスカ | キョウハ 豆
 腐ノ コロモ焼キト インゲンノ ゴマジョウユアエヲ 申シアゲマシヨウ | ソレニ
 吸イモノヲ ツケテ ゴザイマス | ドウゾ デキアガリガ ゴザイマスノデ ゴラン
 クダサイマセ | コチラニ ゴザイマスノガ アー 豆腐ノ コロモ焼キデ ゴザイマ
 シテ オ豆腐ヲ オ 卵ト エビ ソレニ ネギヲ チイサク キザミマシタ モノ
 ラ コロモニ シテ フライパンデ 焼イタ モノデ ゴザイマス | ショウガト オ
 ショウユ(-)デ エ サッパリト メシアガッテ イタダキトウ ゴザイマス | ソレ
 カラ コチラニ ゴザイマスノガ インゲンノ ゴマジョウユデ ゴザイマシテ イ
 カト オ インゲンヲ オ ゴマジョウユエデ ツケテ メシアガッテ イタダク
 ワケデ ゴザイマス | オ豆腐ガ 半丁 余リマスノデ エー 続イテ 吸イ物ヲ コ
 チラニ オ目ニ カケル コトニ イタシマシヨウ | ナスト 油揚^{イヂニツ}ゲラ 加エマシテ
 コレ 吸イ物ヲ 添エテ ゴザイマス | コノ 三点デ ダイタイ 一人前ガ 三十八
 円デ ゴザイマスシ エー デキル 時間モ 三十分グライデ デキル 予定デ ゴ
 ザイマス[▲]

| ソレデハ 最初ニ イー コロモ焼キノ ホウノ 材料カラ オ目ニ カケル コ
 トニ イタシマシヨウ | デ コチラニ ゴザイマスノガ オ豆腐デ 二丁半デ ゴザ
 イマシテ、コレガ アー ダイタイ 半丁ガ ヒトリマエデ ゴザイマス | 東京ノ
 オ豆腐ハ チョウド コノヨウナ 格好 シテ オリマスガ、ソレカラ コチラニ
 ゴザイマスノガ エビデ ゴザイマシテ キョウハ アノ サクラエビーノ 乾燥シ

タ モノヲ 十グラムデ ゴザイマス | 大サジ 二杯ホドノ 予定デ ココニ 用意
 イタシマシタ | ソレカラ ネギデ ゴザイマス | ネギハ ア コマカニ キザミマシ
 テ エー ヤハリ 大サジ 二杯ホドデ ゴザイマス | ツケマスノニ 卵 一個 ソ
 レカラ ショウガガ 一カケデ ゴザイマスネ | ソレデハ モウ一度 材料ヲ クリ
 返シテ 申シアゲル コトニ イタシマシヨウ | オ豆腐ガ 二丁半デ ゴザイマシテ
 サクラエビガ 大サジ 二杯 | 約十グラムデ ゴザイマス | ミジンネギガ 大サジ
 二杯デ ゴザイマス | 卵ガ 一個 ショウガガ 一カケデ ゴザイマス |
 | ソレデハ サッソク コチラデ 下ゴシラエヲ オ目ニ カケル コトニ イタシ
 マシヨウ | ソレデハ アー ココニ マナイタガ 二枚 ゴザイマシテ コノ 二枚
 ノ 間ニ オ豆腐ガ ハサンデ ゴザイマス | フキノ 間ニ コノヨウニ アノ
 ハサミコミマシテ スコーシ ハスニ 置キマスト 自然ニ エー 三十分モ イタ
 シマスト オ水ガ キレマスカラ オ水ヲ キッテ イタダク ワケデ ゴザイマス
 | イマ オ豆腐ガ オ水ノ キレタノガ コチラニ ゴザイマスノデ チョット オ
 目ニ カケマシヨウ | エ コチラニ ゴザイマスノガ ア オ豆腐デ ゴザイマシテ
 エー 一丁ヲ ダイタイ タテニ 包丁ヲ 一ツ イレマシテ 横ニ 切ッテ ハツ
 ニ 切ッテ ゴザイマスカラ オヒトリマエガ ダイタイ 四切レデ ゴザイマス |

4・2 資料から除外したものの

資料から除外したものは、大別して次の2類である。

- (1) 不整・誤用・中断等の文
- (2) 録音不良による聞き取り不能の文

なお、不整のうち、次のように取り扱ったものがある。

- (1) 言い直しを含む文は、言い直し部分を切り捨てて採る。

▽オフサルモグラフニ ヨル<能力ノ発達>読ミノ 能力ノ 発達ナドハ アメリ
 カノ 調査ト<クラベマシテモ ウー 一ツノ>クラベラレル 一ツノ 成果ヲ
 ミセテ オリマス。 (122-25-3) < >内は切り捨てる部分。以下同じ。

▽デ 直接ニ<アカチャンイジメノ……>ア アカチャンイジメラ スル カワリ
 ニ オ人形ヤ オモチャ< 〆 ……>ニ コウシタ 感情ヲ ブチマケル コト
 モ ゴザイマス。 (125-12-6)

言い直しは、いわば一種の推敲過程の露呈のようなものである。

- (2) 単純な重複を含む文は、重複部分を切り捨てて採る。

▽(略) トニカク<保健所デ>コウイウ ソノ 予防注射ニ ツイテモ オー
 保健所ガ 面倒 見テ クレル ワケデス。 (125-28-8)

▽ソレデ エ ワタクシモ キョウハ<ヒトツ>ウー 皆サント ゴイッショニ
 保健所ノ コトニ ツイテ ヒトツ ウー ヌックリ 考エテ ミマシヨウ。
 (125-23-7)

- (3) 連体修飾語・引用文・提示句・従属句等の内部の不整・誤用は無視して採る。連体修飾語・引用文・提示句・従属句等の内部構造は、この調査では分析の対象としないからである。

連体修飾語——▽エー ソレデ ソレデハ アー イッタイ 保健所ニハ ア 私立ノ 保健所ガ アツタリ エー アルイハ 公立ノ 保健所トカ イウヨウ ナ 保健所ノ 区別ガ アルデシヨウカ。 (125-25-13)

引用文——▽(略) 普通 働イテ イル カタハ 夏ダカラト イッテ 決シテ 淡泊ナ 食事ニ スル コトハ 損ダト ワタクシハ 思イマス。 (126-40-8)

提示句——▽(略) ソレカラ アトノ 墓地デ アルトカ 火葬場ト, ソウイウ コノ エー 火葬場トカ 墓地ナシカノ 設備, 施設デスネ, 施設 アルイハ アー 指導トカ 取締マリト, ソシナ コトモ 保健所デ ヤッテルデス。
(125-29-4)

従属句——▽ マア コノ 話ノ 真偽ハ アー ドコマデ ホントカ ワカリマ センケレドモ, タブン ソウイウヨウナ アー 方法ガ 取ラレテルンダロウト 思ウンデ アリマス。 (124-2-30)

- (4) 文の構成を見る上にさまざまにならないと思われる語形のくずれを含むものは採る。

▽(略) 自由主義国家陣営ハ カナラズトモ 使用者側ヲ 応援スルヨウニ ナリマス。 (124-20-13)

要するに、不整・誤用等の除去といっても、この作業の計画に応じての選別であり、また、ある範囲の操作を加えた上で採用しているものもあり、不整・誤用の例をすべて除去去ったわけでは決していない。

また、不整・誤用とそうでないものとの限界はかならずしも明確にしがたいところが多く、それ自体、将来の研究課題に属するものであるが、ここでは大體かなり甘い線で選別したといえる。すなわち、きびしい選別をすれば不整・誤用として捨てられるかと思われるものも、かなり採った。

除外資料の分類一覧（共通資料のもの）

(1) 文脈不整 178例

(a) 中 断 64例

▽マズ ソノ一 読ム 人ガ 読ミヤサイト 感じテ クレルト イウ コトガ 第一デスカラ……(123-41-19)

▽エー キューバツテ イウノハ コノ 地図デ ゴ覧ニ ナリマスヨウニ
(127-8-20)

(b) 首尾の不照応 114例

(ア) 単純文不整 85例

▽ソノ 財政ノ 中味ハ ワレワレ 国民大衆ガ イッシヨウケンメイ 働イテ
オサメタ トコロノ 税金ガ コノ 財政ノ 中味デ ゴザイマス。
(124-24-1)

▽デ エー ワタクシガ キョウ 申シアゲマス コトハ エー 話シコトバノ
文法体系ハ コウイウ モノダト イウ コトヲ カカゲテ エー 示スト
イッタヨウナ 用意ハ 今ノ トコロ ワタクシハ アリマセン。
(122-14-32)

(イ) 句関係不整 17例

▽ソレデモ 結構デスシ、エー アンマリ 日ノ アタル 所デ エ 朝顔ガ
水ヲ モラワナイデ エー ションボリシテタト。(126-35-5)

▽ (略) コノ 助詞 助動詞ハ ドウイウ 意味デ コンナ フウニ 並ベタ
カト 申シマストイウト エー 形態的ニ コノ 順序ガ アル 意味ヲ
モット 思ワレマス。(123-11-21)

(ウ) 句点を越える結び 12例

▽デ コレハ アノ ドウイウ コトカト 申シマスト、オー プラスチックス
ト イウノハ 英語デ コウ 書キマス。(略)可塑性ト イイマシテネ、エ
ー チョウド コノ エー 粘土 粘土ノヨウニ コウ 押ス 押シタリナン
カ スルト 自由ナ 形ニ コウ オー スル コトガ デキルト イウ ソ
ウイウ 性質ッテ コトナンデスネ。(127-26-9)

▽エー トコロガ ソノ Bノ ホウハ エー スグ 近クノ 農家ノ 庭ニ
イー カキノ 木ガ アッテ エ キレイナ 実ガ 鈴ナリニ ナッテ イ
ル。(ソレヲ オ ウマソウダナアト オ 思イナガラ エー 歩イテ イル。)
(123-22-15)

この類は()内に示した後接部分に受けがある、いわば句点を越えたところ
に結びがあるもので、そこまでを1単位ととらえることも考えられる。しか
し、今は前部分の終止の形をおさえてここで文を切ることとし、首尾不照応の
不整文と扱う。

(2) 語の不足 15例

▽国語研究所ヲ…ガ ドウイウ 経路ヲ (ヘテ) ウマレタカト イウ コトハ サ

キホドノ イロイロ ゴ祝辞ノ 中ニモ ノベラレテ アリマシンド 別段 必要ナインデ アリマス。(124-8-3)

▽エー コウイウ コノー オ 人気ノ アルー 政治家, エー コウイウ コノー アメリカニ 対シテ エー 反米政策ヲ ヤッテ オル(ト)。(127-9-5)

(3) 語の誤用 15例

▽ソノ バアイ 「サケハ」ハ エー コノー イワユル エ 対象語ッテ 申シマスカ エー コノ オ 目的語ト 申シマスカ, ソウイウ 意味デ アリマス。(123-18-5)

▽日本ガ ソウイウ モノハ ドウモ 全般的ニ 多少 風潮ガデスネー アノー マダマダ 医学的 心理学的ナ 面ガ 強イヨウニ 思ワレル ワケデス。(122-10-17)

語の誤用の範囲は広いが、ここでは、純粋に語彙的な問題にとどまるものには触れず、多少とも文脈に影響するようなものを取り上げた。

(4) 文意不明 6例

▽エー マー イロイロー 申シマシタガ, エー 結局 ソノ 子ドモガ アー コノー デキタ 喜ビヲ 味ワエルヨウニ, コノー デキタト イウ 喜ビガ 次ノ 建設へ 進ムンダト イウ マー 原理デスネ。(126-36-17)

▽デ ココノ 人間関係ト イウ モノハ 近所ドナリノ ツキアイノ ホウガ チガッテ マイリマス。(126-50-1)

「文意不明」の類は、文脈不整とか、語の不足とか、誤用とか、単純に解しがたいような不整、つまり、不整の点を指摘して、文意を察することの困難なものである。

(5) 録音不良 29例

計 243例

(備考)

- 1 1例に2種以上の不整・誤用をもつものが多いが、そのうちのひとつだけを取り上げて数えた。
- 2 ひとつの現象で2様以上の見方のできるものがあるが、そのうちのひとつの見方で扱った。

なお、語順が乱れていると見られる例が少なくない。これを資料から除外するとすれば、文脈不整の1種とされることになるが、これは、取り上げないことにした。語順に関しては、大部分を将来の課題として残す。^(注)次に例をあげておく。

注) 「V・2・1 成分の陳述の変容について」の中で、語順の変換について多少考察を試みる。

▽タイヘン ヤワラカク 水ヲ 入レナクテモ コウイウ フ(ウ)ニ デキアガリ
マスデ(ゴザイマ)スネ。(127-19-2)

▽オ米ヲ マー 普通ニ タキマスンデスガ、スッカリ ア 熱イ ウチニ 洗ッ
テ シマイマス。(127-20-7)

▽アトデ ムシロ コレハ 済美研究所ノ ホウカラ マトメテ ゴ報告 イタダ
イタ ホウガ…(122-11-2)

▽(略) ソウイウ トコロニハ 環境衛生監視員ト イウ ウー ソノ ヤハリ
保健所カラ アー 職員ガ イキマシテ エー ソレヲ イロイロ 指導 トリ
シマリヲ スルト、(略)(125-29-12)

▽カナラズ マスコミュニケーションデ アルト 印刷ト イウ モノガ 絶対ニ
トモナウ ワケデスネ(略)(123-38-6)

以上は、共通資料から除外した例を分類してみたものだが、大まかな分類である。たとえば、「語の不足」の中には、いわば舌足らず的のものど助詞の脱落の類とが含まれており、「語の誤用」の中にも、詞的な語の誤用例と助辞の誤用例とが含まれている。それぞれ、かなり性質のちがうものだともいえる。

なお、心理的解釈を加えて見ることになれば別の分類が成り立つし、また、「ことばの正しい使い方」「正しい言い方」などの実用的観点に立てば、さらに別の分類や指摘がありうるだろう。

・<付>不整・誤用についての若干の考察

ついでに、除外資料にふれてみて気づいたことを、二、三述べてみる。

(1) 話しことばの不整・誤用等における傾向

○いちじるしい類

上述の共通資料における除外例の中で、比較的数の多い類をあげてみる。多少、解釈を加えてみるところがある。

中断のうちに、次の(a)(b)(c)の類が目立つ。

(a) 接続助詞切れ

▽ナカナカ タクサン アルンデスガ……(123-42-13)

▽拍手ナンテノ アリマスガネ、ラジオナンカDEST(123-29-1)

このほか「～カラ」の切れが多い。「～ノデ」「～ケレドモ」などの例も見ら

れ、総じて条件句の例が多い。

(b) 引用文切れ

▽(略) エー 「ナニカ イマ オスキデ ヤッテ イラッシャル コト アリマセン？」ト タズネラレテ エー 「別ニ イマ ナニモ ヤッテ イナインデスケド コレカラ タイプ 習オウカト 思ッテ イルンデス」ト。 (122-17-21)

▽(略) タトエバ ソノ 中デ 一ツ ウー デハ チョット 読ンデ ミマスト 「翻訳ニ ツイテ コノ 問題ハ 翻訳ト 非常ニ 密接ナ 関係ヲ モツ モノデ アリマスガ 翻訳ニ ツイテ ラフカディオ・ハーンハ 次ノヨウニ イッテ オリマス」。 (122-15-19)





(c) 「ワタクシハ」の受けないもの

▽ソコデ ワタクシハ ドウシテモ コノ ^ベ来ソト イウ モノノ 力, コノ 力ニ マサル トコロノ, コノ 力ヲ 制御スル トコロノ 機関, 権能ヲ モッタ 機関ヲ 一ツ 作ラナケレバ ナラナイ。 (124-27-8)

▽マタ アー 東京ヤ 大阪ノヨウナ 非常ニ 大キナ 都会ニ ナリマスルト 山ノ手ノ* 下町デ(ハ) ワタクシハ チガウト。 (126-49-20) * 山ノ手トの誤りか。

これらは引用文切れと見ることもできるが、「ワタクシハ」が間投的にはいっているようにも見られる。

中断の中には、言語行動の上では、言いよどみや外的障害（相手の発話によるさえぎられなど）によったりした発話の中断というべきばあいがあり、また場面その他への依存などでことばを省略し、表現としては完結しているというばあいがある。これを、たとえば、「中断」と「省略」というようによびわけることもできようが、實際上、区別は困難である。ただ、傾向としては、上記の3類などは、「省略」にしばしばあらわれる形であるように思われる。

単純文不整には、それ・のぼし・切れ・つぎと名づけたい類がある。図式的には、(それ) 。(のぼし) 。(切れ) 。…(つぎ) 。のようなものといえる。

(d) それ

▽ダガ シカシ ココニ 一ツ 政治ト イウ モノヲ 通ジテ ゼヒトモ ナサレナケレバ ナラナイ コトハ コノ 現在 コレラノ 闘争ト イウ モノヲ アエテ 起コシテ イグヨウナ マタ 起コサセルヨウナ ^{ソノ}今日ノ 社会制度ソノモノニ 大キナ 欠陥ガ アルト イワナケレバ ナラナイノデ ゴザイマス。

(124-21-20)

(e) のぼし

▽コレーガ エー ナンデス、エー ソノ ア 東京 ナラビニ 秋田県デ エー
ヤリマシタ アー 調査ノ 結果ガ 書イテ アリマス。(123-43-18)

(f) 切れ

▽デー ヨク コノ ワタクシドモ 耳ニ シマスノハ ソノ オカアサンガ ヨソ
ノ 子ト スグ クラベテ シマウ。(126-36-19)

(g) つぎ

▽コノ エー パプロフ先生ハ ンー ロシアデハ オモシロイデスネ エー パプ
ロフ先生ト ワタシガ アー エー プロフェッサー・パプロフトカ アルイワ
エー ドクター・パプロフトカ ハジメー イイマシタ。(126-17-8)

のぼしや切れも、それだともいえるが、“ことがら”的内容に関して延長あるいは中断と見られるということによって、こう分けてみたのである。

それ・のぼしの中に語句の重複するものがかなり多く、また、それの中には、類縁表現へのそれといえるようなものが少なくない。

(h) 重複

▽今 ワガ 国ニ オケル モットモ 重大ナ 仕事ハ 民主主義ノ 危殆ニ 瀕シ
ツツ アル コトラ コレヲ 挽回シ、ソウシテ 国民ノ 生活ノ 安定ヲ 保証
シ、ソトハ 外交ニ ムカッテ 国威ヲ 発揚スルヨウナ コトガ モットモ タ
イセツナ コトデ アロウト 思ウノデ アリマス。(127-35-4)

▽(略) 第一ノ 理由ハ アー 未開発国ノ オー 援助ト イウ モノハ 東西兩
陣営ノ オー 競争ニ ナッテ オリマシテ、日本ガ コレ(ニ) 参加シナイト
イウ コトハ コノ 競争カラ トリ残サレルト、マー パスニ 乗りオクレルト
イウ コトガ 第一ノ ゲ…… 理由デ アリマス。(127-4-3)

(i) 類縁表現へのそれ

▽エー ソノ 次ニ 読ミヤササノ 問題ト イウ コトガ 書イテ オリマス。
(123-40-20)

▽サバノ ジカ火焼キト キャベツノ ムシ煮デ ゴザイマスガ ドウゾ デキアガ
リ ゴラン イタダキマシヨウ。(127-15-3)

▽(略) 一秒間ニ 何字 読ンダカト イウ コトガ アー デキマス。
(123-39-18)

▽(略) エー コレハ ドウモー アカルイ 人間関係ト イウニハ エー ハタシ
テ エ ドウデシヨウカ。(126-46-14)

かりに類縁表現へのそれとよんだものの中に、上記の例に見られるように、各

種のものがある。

(j) 句関係不整も、単純文不整と同じ性質の不整である。すなわち、それ
その他の現象である。例は「除外資料の分類一覧」にあげたものにゆずる。

(k) 句点を越える結びの類もかなり目立つ。すでに説明を加え、例も示し
た。

(I) 助詞の誤用

▽ソノ 第三番目_レ オー 「青少年ト 新聞」ト 書イテ ゴザイマス。

(123-43-11)

▽エ コウイウヨウナ…… マッタク ウ コトナッタ 意味ノ オ 続キカタヲ
スル 構文ガデスネ エー 主語 述語ト イウ 考エカタデハ カナラズンモ
ワリ切ル コトガ デキナイ。(123-17-11)

それなどの文脈不整とも見られる例も少なくないが、そういう関係のない単
純な助詞誤用の例も多い。さらに多量の例を集めることができれば、助詞の誤
用の上の傾向がなんらかとらえられるかもしれない。

○不整・誤用等の発する理由と、話しことばにおける状況

不整・誤用等の発する理由を考えることは、言語行動の心理についての推測
を試みるにすぎない、はかないしごとなのだが、一般的に、次のようなことが
考えられる。

(a) 表現管理のくずれ

話しことば・書きことばを通じて、いわば表現の管理のくずれが不整や誤用を
ひきおこすことが多いと考えられる。文はそれぞれ1個の統一体である。発話
においては文の統一性を保持するための管理が発話者の意識（ことばの規範の
意識）によってなされるのだが、往々にして、その管理がくずれることがある。
そこに首尾の不照応や語の誤用などが起こる。たとえば、それ・のばし等
の現象は、発話者の意識の座の流動によるものと解釈されよう。また、誤用の
あるものは、管理のゆるみで適応を欠いた用語があらわれたものと解釈され
る。こういったことは、主として、発話行動が時間的行動であるために負う制
約によるものだと考えられる。

なお、長い文のばあい、時に、首尾の照応を欠く構造がかえってわかりよさを
助けることさえある。受け手の行動もひとしく時間性的のものであるので、時

問性の制約にもとづいたある種の不整が、受け手にとっても自然のもの、受け入れやすいものであることがあるのである。たとえば、ラジオニュースなどの文のひとつの類型とも見られる「○○ハ『……』ト、コノヨウニ○○ハ語リマシタ。」などは、その典型的な例で、技法としても用いられるものである。

(b) 言語外要素への依存

音声・表情・身ぶり・場面等に依存することによると見られる不整が少なくない。とくに中断の例には、この類が多い。対話では、相手の発話と相補なような関係をもつ中断もよくあらわれる。また、

▽ソシテ 原料ヲ 加エテ 型ニ オスト、 サア コレハ ナンデンショウ。

(127-24-3)

のような句関係不整の例などもあらわれる。

(c) ことばへの不熟や慣用のずれ

個人的な欠陥、あるいは集団のもつ欠陥としての不熟やずれによる誤用や不整を見つけることもある。

(d) 表現の自由への飛躍

ことばは本質的に、自由な表現ではない。ことばのわくを越えた表現の要求があれば、ことばの規範の立場からは、不整とか誤用とか見なければならぬ現象を起こすことがありえよう。たとえば、文学者の文章に文法的見方や辞書見方から軽々しく手を加えたり批判を下したりすることが、表現を尊重する立場からは、当をえないばあいがある。

以上の(a)(b)(c)(d)のうち、話しことばに特に多くあらわれるものは、(a)(b)である。前に指摘した、話しことばの不整・誤用等の中のいちじるしい類は、おおかた、これに属するものと見ることができる。

(2) 整と不整、正用と誤用の間

不整や誤用の中には、その使われの広がりや時間の長さによって、ついに正格のものの中に入り入れられるものが出てくると思われる。また、不整・誤用から出たことは明らかだが、今日すでに慣用的形式と認めることが適当と思われる類もある。そういう変化に関して注目される類例を、いくつかあげてみる。ただし、取り扱った資料の範囲で気づいた程度のものにすぎない。

(a) 慣用省略文と中断

『話文型(1)』で、「省略文由来の慣用による完全な文」(簡単に「慣用省略文」とよぶことにする。)というものを認めた。

▽ポスターヲ ドウゾ。

▽ドウゾ コチラへ。

これらは、述語を欠く点で省略(中断)というべきだが、すでに固定して、それだけで特定の意義を社会慣習としてもっていると認められるので、慣用省略文としたものである。これに対して、

▽ゴ注意ハ アトデ ヒトツ (123-29-15)

▽マタ 来週マデ (127-33-7)

などは、中断と取り扱ったものだが、まさに慣用省略文に接するものである。これらの中断と慣用省略文とは連続している。

(b) 転成終助詞文と接続助詞切れ

『話文型(1)』で、「接続助詞由来の終助詞終止文」を認めた。

▽デスガ コレハ モウ ワタシハ 報告書ニ 書イテ アル 以上ニ ナニモ
アリマセンカラ。(123-29-11)

▽ヤッパシ 寝マキノ 上ニ アノー ツケテ イタダクト イウ コト デスケ
ド。(125-5-8)

などは、これに属する。次の例の「ヨウニ」も、終助詞と認めていい。

▽デ、失ッタ 汗ヲ 補エバ イインデスカラ、ソレ以上ノ 水ヲ トラナイヨウ
ニ。(126-40-15)

これらを合わせて「転成終助詞文」とよぶことにする。これと、接続助詞切れ、

▽ナカナカ タクサン アルンデスガ…… (123-42-13)

▽マズ ソノー 読ム 人が 読ミヤスイト 感じテ クレルト イウ コトガ
第一デスカラ…… (124-41-19)

などとの境界もはっきりしたものがあるわけではない。

(c) ト終止文と引用文切れ

▽第一番目ニハ コノ オー 中南米ノ 経済構造ト イウ モノガ アメリカト
クラベルト タイヘン 違イガ アルト。(127-9-13)

上の例において、文末の「ト」は、引用の「ト」と見るよりも、終止に使わ

れていると見るほうが適当であろう。話しことばにしばしばあらわれる用法だが、一種の終助詞とも見られる。「コレデ ヨシト。」「モウ ヤメトコウト。」などでは、その性質がもっともはっきりしてくる。このような「ト」で終る文を「ト終止文」とよぶことにする。引用提示句と扱った類における「ト」にしても、文末的な感じがある。以上のような「ト」については、さらに詳しい調査・考察を加えたい。引用文切れの「ト」もその問題のうちにはいる。

▽ソノ 家庭生活モ カナラズンモ ソレジャー 家庭ト イウ コトバデ モッテ
ー 人間関係ガ スベテ 説明 デキルカト イウト ソウハ イカナイト。
(126-49-1)

などは引用文切れと扱うとしても、ト終止文とかならずしも明確に区別されるものではない。

(d) 類縁表現

▽(略) ドウゾ デキアガリ ゴ覧 イタダキマシヨウ。(127-15-3)

のような、類縁表現へのそれ(「ゴ覧クダサイ」→「ゴ覧イタダキマシヨウ」)と認められるものの中には、やがて将来、正用として定着するかもしれないと思われるものがある。「ゼヒ 希望スル」「ゼンゼン アルコール抜キノ 会食」「オソラク ～カモシレナイ」など、この類のものが、一般にある。

(e) 助詞の誤用

▽デ ソレヲ オトナノ 標準デ スグ ケチヲ ツケテ シマウ。(126-34-11)

▽(略) ソビエツトハ アー イチバン カヲ 入レテ オリマスノハ インドデ
アリマス。(127-5-1)

▽エ コウイウヨウナ…… マツタク ウ 異ナッタ 意味ノ オ 続キ方ヲ スル
構文ガデスネ エー 主語 述語ト イウ 考エ方デハ カナラズンモ ワリ切ル
コトガ デキナイ。(123-17-11)

上の「ヲ」「ハ」「ガ」は、それぞれ「ニ」「ガ」「ハ」の誤りだと見ればそれまでだ(文脈のそれと見ることもできる)が、とにかく、話しことばにおける語の用法の非厳密さ、ないし構文のルーズさを示す事例である。だが、これに社会がなれて、異常と感じられなくなるものが出てくるかもしれない。そうなったときは、助詞の意味用法の記述が書きかえられなければならないこともあろう。こういうことは、もちろん、語一般について、ありうる。

(f) 助詞の抜け

▽(略) コレガ 恐ロシイ 戦争デ アル コトハ、ワタクシ 申スマデモ ゴザイマセン。(124-20-15)

あるばあい、ある種の格助詞の抜けることは、一般的なこととして認められるが、その限界はかならずしも明確でない。上記の例の「ガ」の抜けなどは、そのように認められるものかどうか、問題になるところであろう。

(g) 挿入

▽タトエバ 種痘デ アルトカ、エー マー 種痘ガ、イチバン オモン ナリマス ケレドモ、オー ソウイウヨウナ 予防注射ヲ イロイロ ヤリマス。

(125-28-6)

統一体としての文という規準に照らせば、挿入をもつ文は、ともかくも、くずれたものといわなければならない。しかし、くずれをもちながらそれを包んで統一性を得ているもの、くずれを包んだ統一体というべきであろう。

(h) 倒置・補足

倒置——▽ツマリ イー 人間トシテノ 成長ノ 基礎ト 考エタ ホウガ イイデスネー、人間形成ナンテ イウト チョット イカメシク ナリマスカラ。

(123-27-6)

補足——▽カナラズ マスコミュニケーションデ アルト 印刷ト イウモノガ 絶対ニ 伴ウ ワケデスネ、印刷技術ガ。(123-38-6)

倒置や補足も一種のくずれである。しかしまた、全体として統一性を得ていると見られる。その統一性は2文の接続が統一性をもつ場合に似てもいる。意味的な面の統一についていえば、まったく同じだといえる。そこで、倒置や補足を1文と見るか2文と見るかという問題があるわけだが、後置(補足)の部分はもっぱら先行部分への補足をその役割とするものだから、やはり、全体で1文と扱うが適当と考えられる。そうすると、これらは、統一体としての文(先行部分)を内に含む第2次統一体としての文だといえよう。((g)(h)は(a)~(f)とちがった性質のものだが、とくに話しことばに多く現れる構造である。)

(大石初太郎)

Ⅱ 表 現 意 図

1. 概念規定について

「ここに言う表現意図とは、言語主体が文全体にこめるところの、いわゆる命令・質問・叙述・応答などの内容のことである。」(前報告書「話しことばの文型(1)」86ページ)として、前書には、多少の説明を加えるにとどめた。本書でも、基本的態度に変化はなく、前書とほぼ同様の考えかたで論究を進めている。また、同じ「表現意図」あるいは「意図」という用語を使う学者・教育者も散見するのであるが、ここに、用語についての説明を少し書き加えることとする。その趣旨は、概念内容をより明瞭にすることにある。

たとえば、<相手ニ行クコトヲ求メル>という言語主体の意志的思考が、言語形式をとるときは、

- (1) 「行け。」「行けよ。」「行きなさい。」「行って下さい。」
- (2) 「行かれない。」
- (3) 「行ってほしい。」
- (4) 「行くことを希望する。」「行くことを要求する。」

など、さまざまに表現される。これらは、逆に、そう言われれば、<行クコトヲ求メテイルノダ>ということが聞き手には、わかる。つまり、こういう言語形式によって、<相手ニ行クコトヲ求メル>という話し手の意志的思考内容が対応的に聞き手に伝達され理解されるという一般的な社会習慣がある。

このうち(1)(2)は、話し手が聞き手に対して直接<行クコトヲ求メル>ばあいのみ使われるが、(3)(4)は、そうとは限らない。第三者に対して<行クコトヲ求メル>ばあいにも使うことができる。たとえば(3)(4)では、「私」を主格に置いて「私は彼に行ってほしい。」「私は彼が行くことを希望する。」などと言えるが、(1)(2)では「私は彼が行け。」「私は彼が行かれない。」などとは言えない。つまり、命令形(の命令用法)や、「～タイ」という形式は、話し手の直接的要求の意志表現を担う文法的形式であり、「～テホシイ」や「～スルコトを希

望する」「～スルコトを要求する」などは、意義として、その役割りを担うことがある語彙的形式である。

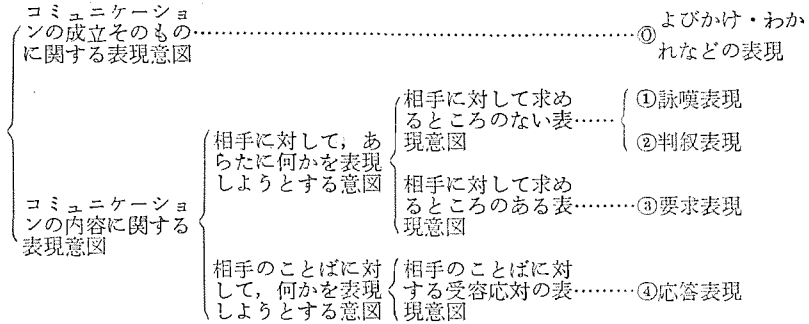
いわゆる「陳述」は、狭義にも広義にも規定されているが、ほぼ、上記の文法的形式に対して、言語主体が負わせる役割りを指すと言ってよいようである、やや具体的には、「判断の陳述」とか「質問の陳述」とか「命令の陳述」とか言われるから、「判断の表現意図」とか「質問の表現意図」とか「命令の表現意図」とか言うのと、きわめて近似するであろう。しかし、「陳述」は、文の成立そのものの条件を、主として文の「述語」の形式と意味との両面から追究する考えかたに立っているが、「表現意図」は、意味の面から文を成立させる力の基底を追究する考えかたに立っており、話し手と聞き手とのあいだの言語的勢力圏の張りあいを、話し手の側から見て秩序づけるものであって、それ自体外的言語形式を持つものではないし、すべて対応する外的言語形式を持つという保証もない。そこで、その範囲を限定して、ここで扱うのは「社会習慣としての言語形式との対応を持つ表現意図」とする。そのように限定しても、なお、前記(1)(2)のような文法的形式としての「行け」や「行きなさい」は言うまでもなく、(3)(4)のような語彙的形式としての「行ってほしい」や「行くことを希望する」なども、「要求の表現意図に対応する社会習慣としての言語形式」と認められる。これに対して、「要求の陳述に対応する社会習慣としての言語形式」あるいは、「特定の言語形式が持っていると思われる要求の陳述のはたらき」は、(3)(4)を含まない(1)(2)、あるいは(1)(2)の述語のはたらきと認められる。(3)(4)は(1)(2)とは別の陳述とみなされる。)この点で「陳述」は、「表現意図」と観点もちがうが、扱う言語形式の範囲もちがう。現象的に言えば、文法的(辞的)形式に関する範囲では、だいたい同じことである。ただ、「表現意図」からすれば、語彙的(詞的)形式をも扱いうるけれども、「陳述」からすれば、語彙的形式を扱うことはない、というところがちがう。

しかし、語彙的形式に関する部分は、その限界が不明瞭なものであるし、とくに、当面の独話の共通資料について、多くの形式を見いだしうるわけではない。したがって、以下の実例についても、これで十分という保証はない。ここでは、文法的形式を中心として記述し、資料に見られる範囲で、語彙的諸形式

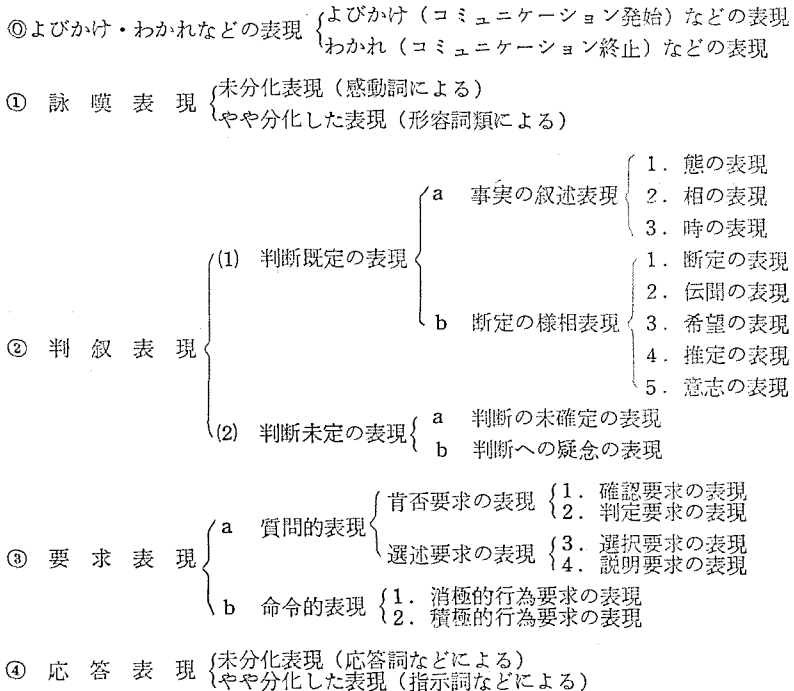
を加えてゆくことになる。

2. 表現意図の分類とそれに応ずる文表現について

2.1 大分類



2.2 文表現の細分



前報告書「話しことばの文型(1)」(131ページ)には、上記のほか、詠嘆・応答両表現の下位分類、判叙表現の語的表现としての「反唱の表現」、要求表現の未分化なものとしての「疑問兆候の表現」、ならびに、要求・判叙両表現にわたる複雑な表現として「反語の表現」の3種をあげた。

このうち、「反語の表現」は、本書では要求表現に含めて扱った。「形式上も意義上も、肯否要求または説明要求の質問的表現と区別することの困難なもの」(同前)だからである。

「反唱の表現」というのは、相手のことばを[・]お[・]う[・]む[・]がえしに唱えるように言うもので、前書(132ページ)の例示から引けば、

▽「ソレハ 値段ガ 問題ダナー」「値段ガ

▽「フタリノヲ 2枚デス」「2枚」

などであって、対話のばあいの特徴的表現の1つであるが、独話には、あらわれない。分類表の複雑化を避けるために、本書では省略する。

「疑問兆候の表現」というのは、疑念よりは質問としての意図がはっきりあらわされ、いわゆる感動詞単独で、または疑問詞単独で表現されることが多い。おなじく前書(133ページ)から引けば、

「エ?」、「エッ?」、「ン?」、「ハ?」、「ナニ?」

などが、典型的なものである。これも、独話には、特別のばあいのほかあらわれないであろう。当面の資料にも、あらわれていないから、同様に、本書では省略する。

詠嘆・応答両表現の下位区分は、本書では必要でないから記さない。独話という資料の性質によることであって、各項にその実態を記した。

3. 表現意図に応ずる文の文末部分について

以下に独話共通資料からの文例を記す。^{注)}

3・1 よびかけ・わかれなどの表現

例が少ない。全例を示す。

▽ミナサン! (124-30-11)(124-30-14)ほか2例

▽エー ミナサン! (124-29-1)(125-23-4)

▽ミナサマ! (126-1-1)(126-3-15)ほか6例

- ▽満堂ノ 諸君！ (127-35-1)
 ▽先生！ (127-24-9)
 ▽コンニチハ！ (127-11-3)(126-1-1)ほか3例
 ▽コンバンハ！ (124-29-1)
 ▽オハヨウゴザイマス。 (125-18-2)
 ▽ソレデハ キョウハ コレデ。 (125-17-4)(126-3-15)
 ▽ソレデハ キョウハ コノヘンデ。 (127-33-7)
 ▽デハ コレデ。 (126-27-11)
 ▽ゴキゲンヨウ。 (125-17-4)(126-3-15)
 ▽デハ ゴキゲンヨウ。 (127-33-8)
 ▽サヨウナラ。 (126-27-11)(127-10-23)

このほか、話しのおわりに、静聴を謝する意味でか、英語などの影響でか、「アリガトウゴザイマシタ」と言うことがある。当資料にも、

▽アリガトウゴザイマシタ。 (127-35-16)

があり、話しおえの表現に使われつつあるかと見られる。

注) ▽エー タイヘン キョウハ オメデトウゴザイマス。 (124-10-3)

などの謝意の表現は、判叙表現のなかのイディオムのなものとして判叙表現に入れる。

3・2 詠嘆表現

独話資料の性質上、例は少ない。全例を記す。

▽アー！ (123-29-3)(123-29-4) ▽ア！ (127-24-5) ▽サー。 (127-24 5)

これらは、話し手の感情の直接的・非分析的な表現であり、相手に対する言語的な影響力を度外視しているものである。いわゆる「感動文」「詠嘆文」に入れられるが、一般には、「よびかけ」や「応答」も含めることが多いようである。前書同様、「よびかけ」「応答」などは除外し、狭義の「感動文」「詠嘆文」を詠嘆表現と認めた。前書では、対話資料の性質上、前記「文表現の細分」に各文例を得たが、ここには、「感動詞による未分化表現」の例を得るにすぎない。

3・3 判叙表現

独話資料の性質上、予想されることだが、判断叙述の表現が多く、全文数の90%を越える。(1961年度に対話との比較検討を行なったときの独話資料では、不整・中断などを除いた816文のうち751文で、約92%、当独話共通資料でも約

92%である。)

述語にあらわれるこの表現の特徴的形式は、いわゆる「～ダ」「～デス」などの判断辞に代表される文法的形式のほか、用言の終止形式に代表される語彙的形式の種々相がある。とくに、動詞の分化として、「～テイル」「～テアル」「～テオク」などの「態の表現」は、その顕著なものであるが、ほかに、複合述語的な表現、「～スルワケデス」「～スルモノデス」「～スルコトガアル」「～スルコトニスル」などがあって、意義の分化を表現する。これらは各種の活用形を持っていて、かならずしも終止法に立つとは限らないが、その終止法に立つとき、判叙表現のための特徴的文末形式となる。すなわち、動詞やいわゆる補助動詞類、あるいは「(ラ)レル」「(サ)セル」という接尾語的助動詞など、活用の多彩な語において顕著な各種の用法のうち、文末の終止法だけを、ここではとりあげる。文の意図表現と、その特徴的形式との関係については、以下も同様である。

3・3・1 判断既定の表現

a 事実の叙述表現

前述「文表現の細分」に見られるとおり、「判断既定の表現」は「判断未定の表現」に対立し、そのなかに「事実の叙述」と「断定の様相」とがわけられる。「事実の叙述」は、ことがらをあらわし述べるいわゆる“詞”的表現であるから、文末の終止法のほかは、意図表現にかかわるものではない。したがって、文法論的には「断定の様相」をあらわすいわゆる“辞”的表現を媒介として、はじめて意図表現にかかわるとされ、終止法もまたゼロ辞をとまなうもの、あるいは辞の機能を含むものと解釈される。しかし、ここでは前述のように、語彙的形式でも、文末の用法としては、その文の意図表現の特徴形式として扱うから、以下、やや細かく「態」(いわゆるアスペクトに準ずる)・「相」(いわゆるヴォイスに準ずる)・「時」(いわゆるテンスの一部)の3表現を記述する。もしも、これらのことがらの分化を担う語彙的(詞的)形式に触れることなく、文法的(辞的)特徴形式だけを記述するととどめれば、判断叙述という分析的文表現の中心にある表現の分化に対して、あまりに大まかな記述にすぎ、総合的文型のためにも、また予想される実用上の諸問題に対しても、参与

しうる範囲がかなり狭く抽象的なものとなるであろう。しかし一面、語彙的形式の範囲をひろげてゆくならば、まったく個別の表現に関することとなってしまふであろう。そこで、ここには典型的に使われることの多い語彙的形式（語彙的特徴形式と仮称）として、辞的な性質を持つ詞の形式の文末用法に、範囲を限定する。

a 1 態の表現

概観すれば、「～(動詞連用形)テオリマス」の形式が圧倒的に多かったが、ついで、「～テオク」「～テイル」など、“存在”をあらわすもの、「～テオク」「～テイク」など“移動”をあらわすもの、「～テミル」という“試み”をあらわすもの、「～テシマウ」という“完了”をあらわすもの、「～テモラウ」「～テヤル」という“授受”をあらわすものなどがあり、いずれも敬讓形・否定形を持つ。

これらのいくつかが複合した形式は、当然、複雑なものが予想される。（たとえば、「書イテヤッテシマッテキテアリマス」など。）けれども、独語資料には、案外、頻度の少ないものらしく、共通資料には、2つのものの複合形式だけが、15例あらわれているにすぎない。しかも、そのうち13例までは、「～テキテイル」（およびその敬讓形・否定形）であって、変化に乏しいと言えるだろう。以下に全例を記す。

▽民主的ナ 大キナ チカラガ ウマレテ キテ イル。 (124-34-11)

▽サキホドモ 申シアゲマシタヨウニ 戦後ノ 日本ノ 国民ノ アイダニハ 本当ニ 大キナ チカラガ ウマレテ キテ イル。 (124-34-11)

▽(略) アー 「メ」ガ 高クテ アトハ ズーット コウ 低ク ナッテ キテ イルト。 (122-18-16)

▽(略) コレハ モウ カナリ オチツイテ キテ イマスネ。 (123-27-21)

▽(略) 解決ノ 方法ト イウ モノガ ダンダン デキテ キテ イマス, 専門家ノ アイダニハ。 (123-27-3)

▽(略) 政治的ナ 勢力ニマデ コレガ 発展シテ キテ イナイ。 (124-34-12)

▽(略) 現代ノ 国語学習ト イウ モノガ 活動主義的, 経験主義的ナー ヤリカタンナッテ キテマス。 (123-26-15)

▽(略) タシカニ (略) 目ツキガ ダイブ 柔和ニ ナッテ キテ オリマス。
(126-21-7)

▽(略) 近隣ノ 関係ガ 非常ニ コノ セマク ナッテ キテ オリマス。

(126-49-18)

▽(略) 経済援助ノ オー 面^{イソ}デ エー 競争ガ スデニ イ デキテ キテ オルト。
(127-10-3)

▽ダンダンニ 顔ヲ ダス作品ノ カズガ 少ナク ナッテ ユー マイッテ オリ
マス。(122-4-15)

▽(略) ガスパジーンノ ホウハ エ 年代的ニ 減少シテ マイッテ オリマス。
(122-5-14)

▽(略) 少ナクトモ コノ 三ツガ 非常ニ 必要ナ モノダト イウ コトラ シ
ミジミト 感ジテ マイッテ オリマス。(124-7-7)

▽コノ 本ニハ コウイッタ 読書ヲ メグル イロイロノ 心配ニ ツイテ 親切
ニ 答エヲ ダシテ クレテ イマス。(126-1-12)

▽(略) タトエバ 「ト」ノ バアイノ 子^{イソ}音ハ 無声デ アリマスカラ エ 一応
針ガ 下マデ オチテ シマッテ イル。(122-18-25)

複合形式が少ないから、用例から帰納できないが、前記諸形式をその相互承接の可否によって大別すれば、下記の7種になる。たてのならびは相互承接がほぼ自由であり、よこのならびは相互承接することがない。(たてのならびについても、相互承接の細部に関しては、別に記述されねばならないし、さらに調査・考察する必要がある。)

- ① ～テオク
- ② ～テクル・～テイク
- ③ ～テミル
- ④ ～テシマウ
- ⑤ ～テモラウ
- ⑥ ～テヤル
- ⑦ ～テイル・～テオル・～テアル

たてのならびは、それぞれの働きと意味にちがいがあって、互いに結びあう性質であろうし、よこのならびは、それぞれの働きと意味が同類に属するかまたは矛盾しあう性質なのであろう。承接の順序はほぼ自由のようだが、⑦は比較の後置され、とくに、「～テアル」はもっとも後置される。「態の表現」は、動詞の属性の“動作性”、“作用性”から“存在性”に至る各段階において、ことからのありかたの分化を担うものであろう。

以上のように考えたから、前報告書では「態の表現」に含めた語彙的形式のうち、“例示”の「～(シ)タリスル」・“変化”の「～(形容詞連用形)ナル」・“例示経験”の「～(スル)コトガアル」・“もてあまし”の「～(シ)

テシヨウガナイ」・『類発』の「ヨク〜スル」は、ここから除外して「断定の表現」に入れ、『伝聞』の「〜ダッテ」「〜ッテ」「〜ダソウダ」は別立ての「伝聞の表現」とした。以下に一部例示するが、その前に一覧しておく。

- (1) 〜テオル類…「〜テオリマス (〜テオリマセン)」(131例)・「〜テオル」(5例)
・「〜テオルト」(1例)・「〜テオラレル」(1例)・「〜トリマス」(3例)
・「〜トル」(1例)
- (2) 〜テイル類…「〜テイル (〜テイナイ)」(26例)・「〜テイルト」(4例)・「〜テマス」(5例)・「〜テル (〜テナイ)」(7例)・「〜テイマス (〜テイマセン)」(15例)・「〜テラッシャル」(1例)
- (3) 〜テアル類…「〜テアリマス」(4例)・「〜テゴザイマス (テゴザイマセン)」(9例)
- (4) 〜テクル類…「〜テクル (〜テコナイ)」(10例)・「〜テクルト」(2例)・「〜テキマス」(4例)・「〜テマイリマス (〜テマイリマセン)」(20例)
- (5) 〜テイク類…「〜テイク」(5例)・「〜テイキマス」(3例)
- (6) 〜テシマウ類…「〜テシマウ」(9例)・「〜テシマウト」(2例)・「〜テシマイマス」(12例)
- (7) 〜テヤル類…「〜テヤル」(3例)・「〜テヤルト」(2例)
- (8) 〜テオク類…「〜テオクト」(1例)・「〜テオキマス」(7例)・「〜トク」(2例)
- (9) 〜テミル類…「〜テミマス」(2例)
- (10) 〜テイタダク類…「〜(サセ)テイタダキマス」(1例)

以下、一部を例示する。

(1) 〜テオル類

▽イチニンマエノ 独立国ニサエ ナッテ オリマセン。(124-30-15)

▽(略) コノ トコロー 小学生ノー 集団赤痢ガ ツヅイテ オリマス。

(125-16-8)

▽ピカイチ的 存在ダト 言ワレテ オリマス。(126-23-20)

▽エー ココニ 香料ガ イロイロ 並ンデ オリマス。(127-15-14)

▽第二表以下 アー 第五表マデハ エー 大体 五百語ケントウデ アツメラレテ オル。(122-4-6)

▽皆サンガタニハ ヨク ワカッテ オル。(124-30-6)

▽トコロガ (略) アメリカノ オー 政府ハ 非常ニ ^{ニキ}日本ノ 参加ヲ 期待シテ オルト。(127-4-2)

▽マー オ盆ニ パンヲ 並ベテ キチット コノヨウニ シテ オラレル。

(127-22-18)

▽大体 コウイウ 項目ガ アガットリマス。(122-10-12)

▽(略) 文学ノ ホウカラ エー イロイロ コノ エー オテツダイヲ スベキ
コトガ 多イノジヤ ナイカト コー 思ットリマス。(124-13-11)

▽ウ 世界人口ノ 三十六パーセント 占メトル。(127-1-17)

(2) ～テイル類

▽デ 十二以下ノ 作品ニ 顔ヲ ダシテ イル テイドノ モノハ コノ表カラ
ハブカレテ イル。(122-4-16)

▽国民カラ コノ 事実ヲ 隠ソウト シテ イル。(124-31-12)

▽(略) コー 行動スル コトニ イー ヨロコビヲ 感ジテ イル。(126-8-13)

▽デ コウイウ 性質ヲ 利用シテ イロイロナ アー 合成樹脂ヲ 作ッテ イル
(127-27-14)

▽タトエバ アー 新聞記者ナラ 新聞記者ガ アル 事実ヲ 報道シテ イルト。
(123-37-6)

▽トコロガー エー 奥サンダトカ 女ノ カタハ ワリアイニ ヨク 知ッテマス
ネ。(125-24-1)

▽(略) 非常ニ ワタクシハ 重要ナ 意義ヲ 持ッテ イル モノダト カヨウニ
考エテマス。(126-51-21)

▽コウイウ コトナッテル。(122-5-16)

▽態度モ 技能モ 知識モ ゼンブ 含ンデル。(123-30-21)

▽最近ハー アメリカノ ジェット機ガ (略) 日本ノ 上空ヲ パトロール シ
テル。(124-31-4)

▽コウイウ 国ハ アー マダ ハッキリシテナイ。(127-4-15)

▽皆サンガタハ モー マー 中学校グライノ トコロヘ イッテラッシャル。
(122-8-2)

▽デ ソノサイハ アー 「メ」ト ソレカラ 「デ」ノ トコロガ 高ク ナッテ
イマス。(122-18-16)

▽大体 ソノー ワタシハ (略) 学習指導案ニ デテ クル ソノ 单元ニハ
六種類 アルト コウイウ フウニ 考エテ イマス。(123-32-15)

▽コリャ マー ホントニ コノ トオリニ 使ッテ イマス。(124-19-8)

▽デ ワタクシハ 幼児期ト イウノハ ヒトツノ 感情形成ノ 時期ダト 思ッテ
イマス。(126-10-2)

▽エー コレヲ フショウト イイマシテ 日本人ハ 持ッテ イマセン。
(126-16-9)

▽コレモ モウ ズイブン イロンナ モノニ 作ラレテ イマスネ。(127-28-16)

(3) ～テアル類

▽(略) ソノ ウー ハジメノ ホウノ ニツ 三ツ チョットバカリ マー 例ガ
ダシテ アリマス。(122-15-4)

- ▽^{ニッポン}日本デハ マダ (略) 特殊教育ノ 正教授ハ オイテ ゴザイマセン。(122-9-18)
- ▽マー コウイウ フウニ 書イテ ゴザイマス。 (122-12-13)
- ▽ソレニ スイモノヲ ツケテ ゴザイマス。 (127-11-4)
- ▽ナスト アブラアゲヲ 加エマシテ コレ スイモノヲ ソエテ ゴザイマス。
(127-11-11)

(4) ～テクル類

- ▽(略) エー 子ドモサンガ (略) エ 結婚ニ 近ヨッテ クル。 (125-28-17)
- ▽(略) 他ヲ 愛スルト イウ コトガ 必要ニ ナッテ クル。 (126-53-7)
- ▽コレガ 五オグライカラ ボツボツ 出テ クル。 (127-14-12)
- ▽タトエバ 文字ノ オー 学習ナンテ イウヨウナ モノハ (略) 具体的ナ 生活経験ノ ナカデハ 一回シカ 出テ コナイ。 (123-26-19)
- ▽ソレデ サキホド 申シマシタ ^{レイゴウビョウ}冷房病ト イウヨウナ モノガ オキテ クルト。
(126-42-10)
- ▽(略) イマダニエ ソノ ^{ニッポン}日本語ノ 調査ガ 行ナワレタト イウ コトハ エー
ワレワレニ 聞コエテ マイリマセン。 (122-1-13)
- ▽デ コノヨウナ ヤキモチハ イロンナ カタチデ アラワレテ マイリマスネ。
(125-11-18)
- ▽ソノ ウー ソレヲデスネ 判断スル 人ノ 立場トカ 解釈トカ ソウイウ モ
ノガ ハイッテ マイリマス。 (126-46-17)
- ▽(略) エー ソレデ エ オナベノ ナカガ 少シ コー ホッポク ナッテ マ
イリマス。 (127-18-10)
- ▽手ヤ 足ヲ 使ッテ イマスト ^{カンニク}筋肉ノ 収縮ガ オトロエ 酸素ガ 不足シテ
キマス。 (127-32-9)

(5) ～テイク類

- ▽マー コウイウヨウニ (略) コノ コトヨリハ コノ コトノ ホウガ 基本的
ダト ダンダン シボッテ イク。 (123-26-11)
- ▽ソシテ ソノ 水分ガ ウバワレルト イッショニ ^{カラダ}体ノ ナカカラ ^{ニンブン}塩分ガ ウ
バワレテ イク。 (126-40-1)
- ▽ソシテ コノ 武力ノ 行使, 指揮・^{トクスイ}統帥ノ ^{ケンリク}権能ヲ 国際連合ノ 総会ニ オイ
テ イキマス。 (124-27-14)

(6) ～テシマウ類

- ▽ソレカラ マタ (略) イイカエラレナイト イウ バアイニハ (略) カタカナ
デ 書イテ シマウ。 (123-45-6)
- ▽(略) コウイウ トキニ ナンカ コノ ケガラ シテ シマウ。 (126-14-4)
- ▽アルイハ ヨソノ 子ト クラベテ シマウ。 (126-36-21)
- ▽タトイ 火ガ ツイテモ スグ コー 消エテ シマウ。 (127-28-19)

▽エー ナカノ 水^{スイ} 飲ンジャッタラ アト コウ ヤッテ 折りタタンデ ソレデ
エー シマッテ シマウト。 (127-28-2)

▽(略) コレハ 利害ヲ 別ニ スルヨウナ 状態ト ナッテ シマイマス。
(124-22-20)

▽シカシ タイガイノ 男ナラ コレデ マイッテ シマイマス。 (126-26-4)

▽(略) 都会ノ バアイニ オキマシテハ 職場ガ ハナレテ シマイマス。
(126-50-4)

▽(略) 筋肉ガ 硬直^{コウチヨク}シテ シマイマス。 (127-32-10)

(7) ～テヤル類

▽ソノ トキニ (略) エー ソノ 疑問ニ 答エテ ヤル。 (126-35-12)

▽(略) 発達段階ニ 応ジテ エー ソレゾレ デキタ ヨロコビガ アジワエルヨ
ウナ ソノ 経験ヲ ツマシテ ヤルト。 (126-35-4)

(8) ～テオク類

▽コノ 言語行動ノ ホカニ (略) 諸条件ノ 観察記録モ トッテ オキマス。
(122-24-5)

▽デスカラ コウイウ モノハ (略) 吸湿剤ヲ イレナオシテ オキマス。
(125-21-16)

▽ソレカラ エンジンモ (略) コウイウフウニ ウスーク 切ッテ オキマス。
(127-16-16)

▽デ コレヲ アノー ヨク マゼアワセテ オキマス。 (127-17-15)

▽(略) オタガイガ オタガイヲ 助ケアウヨウナ アノ グループデ アルヨウナ
コトヲ ヤハリ 静カニ 教エテ オクト。 (126-14-17)

▽デ ソレハ ウワギノ ウチアワセヲ ダブルニ シテ 作ッタク。 (125-2-18)

(9) ～テミル類

▽(略) エ 「女ハ 男デ アル」, コウイウ 表現, ニ ツイテ 考エテ ミマ
ス。 (123-14-3)

(10) ～テイタダク類

▽(略) コノ ナカノ 一ツ ニツノ 問題ニ ツイテ (略) ツマリ セマク 深
ク 考エテ ミヨウト イウ ツモリデ エ オ話ヲ サセテ イタダキマス。
(123-13-7)

やや細かく例示したのは、かなり多彩なことと、「～テオル」「～トル」
「～テル」「～テクル」など、はだかの終止形がかなりあらわれることを示す
ためである。独話の性質を示すものであろう。一面、「～テオルト」「～テイ
ルト」「～テクルト」など、「ト」終止の形が散見し(14例)、みなはだかの

終止形のあとについている。また、これらに「ノデス」「ノデアリマス」等のついた形も多い(52例)が、それらは後述する「断定の表現」に一括して扱うこととした。

a 2 相の表現

- (1) 受身・使役の表現……「～(動詞未然形)レル・ラレル・セル・サセル」
- (2) 自発・可能の表現……「～(動詞未然形)レル・ラレル」「～(可能動詞)」「～(スル)コトガデキル」「～(漢語)(ガ)デキル」

この2種のうち、動詞の接尾語的形式「レル・ラレル・セル・サセル」による表現は、文法的特徴形式に近いけれども、他は語彙的特徴形式である。以下に例示する。

○～(ラ)レル類 (46例)

- ▽(略) 文脈ト イウ モノニ ヨッテ エ 補充サレル ウ タメニ コトバガ 省略サレル。(122-16-36)
- ▽ソウシマスト オー コレニ タイシテ 母子手帳ト イウ ウー ーツノ オー マー 帳面ガ ア 交付サレルト。(125-26-9)
- ▽(略) アトハ 月賦デ セメラレル。(126-32-5)
- ▽(略) コレハ 石炭酸ト オー ホルマリンナドカラ 作ラレル。(127-27-7)
- ▽(略) コレハ 国民全体ニ ヨッテ ソノ 企業ガ 支持サレマス。(124-24-8)
- ▽(略) アアイウ マンガニ ナリヤスイ 顔ガ イインダト 言ワレマス。(126-20-13)

○～(サ)セル類 (1例)

- ▽(略) 国際連合ノ アラユル 機関ノ 決議 ゼンブ、コレニ 強制力ヲ 持タセマス。(124-27-11)

○～(可能動詞) (11例)

- ▽デ エ タトエバ アー カタカナノ 「ン」ガ 書ケナイ。(122-23-22)
- ▽(略) エー 停留ノ カスト イウ モノガ ツカ…ツカメマス。(123-39-21)
- ▽(略) ドレモ フライパンナドデ イッテ 焼キモドシテ モウ 一度 使エマス。(125-22-1)
- ▽バターデ ジャーチャー イタメマスヨリモ (略) オイシク イタダケマス。(127-19-3)

○～(スル)コトガデキル類 (17例)

- ▽マ ソレヲ カリニ 再活用ト 呼ブナラバ、再活用ヲ スル コトガ デキル。(123-12-15)

▽(略) コノ 株式 ソノモノヲ 見ル コトモ デキナイ。 (124-22-18)

▽コレヲ カレラハ トウテイ 理解スル コトガ デキナイ。 (124-33-3)

▽(略) コー 適当ナ コノ 型^{カガ}ヘ イレテ 固メル コトガ デキマスネ。
(127-26-23)

○～ (漢語) デキル (2例)

▽(略) アー 大体 コレデモッテ 反応ハ 推定デキルト。 (123-43-6)

▽(略) プラスチックハ ソウイウ グアイニ イロイロ 加工^{カキウ}デキル。
(127-26-15)

○～ (漢語) ガデキル (1例)

▽マー 緊張ガ ナイト イウ コトデ 協力が デキマスネ。 (126-45-16)

○～ハ デキエマセン (1例)

▽(略) コレラノ ヒトビトヲ スクウ コトハ トウテイ デキエマセン。^{注)}
(124-25-17)

注)最後の1例の「デキエマセン」の形式は、規範的ではない。

a 3 時の表現

時の表現については、諸説があるが、日本語ではその中核的意義が、いずれも時の概念をあらわすというよりは、回想・確認・断定・推定など、超時間的判断の一種の分化だとも言われる。事実、いわゆる過去の「～タ」の形式がすべて過去の事実をあらわすものでもないし、いわゆる未来の「～ウ」の形式がすべて未来の事実をあらわすものでもない。とくに、未来の表現は、言語主体の推定に属することであって、物理的時間の未来の事実を表現する形式ではないであろう。いわゆる現在も、言語主体の判断そのものの表現にすぎないかもしれない。過去の表現もまた、過去の事実についての認識を表現し、主体的回想・確認などの判断の分化であるとも見られよう。一般には、ことがらがそれぞれ未来のこと・現在のこと・過去のこと属するという一面を見て、時の表現というにすぎない。ただ、過去の表現は、その事実の客観性によるのか、未来および現在と比較して、時の表現と見られる程度が強いようである。

ここには、現在を「断定の表現」その他において、時の概念と直接関係なく扱い、未来を「推定の表現」において扱う。したがって、同様に過去を「回想の表現」あるいは「確認の表現」として扱うこともできる。また、反対にこれ

らをすべて「時の表現」のなかで扱うこともできないではない。また、観点が別だとして、二重の扱いをすることもできる。ここでは、二重の扱いをしたいところだけでも、過去の表現だけを「時の表現」において扱うこととした。文末における「～タ」の形式が、すべて共通資料では、回想・確認の表現というよりは、明らかに過去のことから表現することに重点があり、その点で「回想・確認の表現」を立てるまでのことはないと思われるからである。要するに、過去の表現の特殊性を認めるためと、記述の複雑化を避けるためとによる。以下に例示する。

▽(略) ソウイウ モノノ ナカカラ 例ヲ ココヘ ヒロツテ オキマシタ。
(122-15-15)

▽マ ハジメハ コノ 機械ガ アー ナカッタ。 (123-38-18)

▽日本^{ニホ}ノ 国民ノ アイダデ 六百万ト イウ 大キナ 労働組合ノ 運動ガ 発展
シテ マイリマシタ。 (124-32-16)

▽デ ソノタビニ オカアサンカラ タシナメラレテ イマシタ。 (125-11-10)

▽デ ソノ 内容ハ ツギノヨウナ モノデ アリマシタ。 (126-19-8)

▽(略) コノ フタリノ アイダニ イ 協定ガ ムスバレタ。 (127-8-22)

b 断定の様相表現

前記の「a 事実の叙述」は、ことがらの表現に属し、その文末終止のゆえに「判断既定の表現」に含められるが、「b 断定の様相」は、判断叙述のうちの断定のしかたの表現に属し、もっぱら言語主体がことがらをどう断定しているかの表現の分化にあずかる。判叙表現のなかでも、aはとくにことがらの表現に関係しており、b1以下は、次第に情意の表現に関係するようになるものであって、並列される性質のものではない。

b 1 断定の表現

一般的な断定の形式は、「体言・用言(プラス判断辞)」であり、当面の資料では「デス・マス」をとこなう形が大部分であるが、判断辞の形式には、ほかに「ダ・デアル・ノダ・ノデアル」などがあって、やはり敬讓形・否定形を持つ。形式は体言だけのばあいでも、判断辞ゼロと見て、同類に扱う。

前記「事実の叙述」は、判断辞ゼロで判断の分化をあらわすものである。

また、本章全般の整理の方法として、文末の文法的特徴形式によって文の表現意図を1つに限定して各項に分属させ、その複合形式については扱っていない

い。したがって文末に「～ノダ」「～ノデス」「～ノデアリマス」などの断定の形式があれば、その前に事実の叙述表現の形式があっても、断定の様相表現があっても、一括して「断定の表現」としてこの項に扱われる。「～サレルノデス」「～シタノデス」「～シテイルンデス」など、すべてここに扱った。

断定の表現としての語彙的形式は、限りないことであるから、やや具体的に記述するとしても、その程度は種々さまざまに限定されよう。ここでは、用言関係の慣用的形式をあげておきたい。それは、“複合述語”あるいは、それに準じて用いられる複合的形式である。これについては、「構文」の章に、文例とともに述べられるところがあるから、ここにはその特徴的形式を列挙することにとどめる。^{注1・2)}

○アル ▽～スルコトガアル ▽～スルコトモアル ▽～シタコトガアル ▽～スル
 オソレガアル ▽～スルヒツヨウガアル ○スル ▽～スルコトニスル ▽～スル
 ヨウニスル ▽～トイウカンジガスル ▽～トイウキガスル ▽～デアルトスル
 (仮定の意)▽～シタリ～シタリスル ○ナル ▽～スルコトニナル ▽～トイ
 ウコトニナル ▽～スルヨウニナル ▽～トナル ▽～スルキニナル ▽(形容詞連
 用形)ナル ○イイ ▽～シタホウガイイ ▽～シタライイ ▽～スレバイイ ▽
 ～スルトイイ ○コマル ▽～シテハコマル ▽～スルトコマル ▽～シタラコ
 マル ○ダメダ ▽～シテハダメダ ▽～シテモダメダ

注1) 「～シタホウガイイ」「～シタライイ」「～スレバイイ」「～スルトイイ」「～シテハダメダ」などは、直接相手に向けられると、断定としてよりも消極的な行為要求の表現となることがある。しかし当面の独話資料には、きわめて例が少なかった。そのような例については、その項に例示する。以下も同様である。

注2) 「イウ」の抽象化による用法「～ダトイウコトダ」「～ダトイウ」の形式は、多く「伝聞の表現」に用いられる。「イウ」の実質的意味のあるばあいとの区別がつきにくいこともあるが、「断定の表現」のなかで、言語主体の断定の責任を避ける表現であるから、別立てにすることとした。なお「～カトカンガエル」「～カトオモウ」の類までは、責任を避けるわけではなくて、断定のしかたがいまいになるにすぎないと認め、「～トオモウ」と同類の引用を含む「断定の表現」とした。(なお、Ⅲ「構文」2・2・3f「複合述語的な構文」参照。)

注3) *印をつけたものは、「構文」の章で「複合述語」に扱われているもの。それ以外のものは、「複合述語」に近いが、まだその扱いをするに至らないと認められたもの。

上記のほか、否定形としてあらわれるものがある。

○ナラナイ ▽～シナケレバナラナイ ▽～シナクテハナラナイ ▽～シテハナ

ラナイ ○イケナイ ∇^* シテハイケナイ ∇^* シナケレバイケナイ ∇^* スル
 トイケナイ ○チガイナイ ∇^* スルニチガイナイ ∇^* ニチガイナイ
 ○シカタガナイ (シヨウガナイ・ショウガナイ の形とも) ∇ シテモシカタガナ
 イ ∇ デシカタガナイ ∇ スルヨリホカシカタガナイ ∇ ノホカシカタガナ
 イ ○ホカナイ (ホカハナイ の形とも) ∇ スルホカナイ ∇ スルヨリホカ
 ナイ ∇ ノホカナイ ○ハズガナイ ∇ スルハズガナイ ○カギラナイ
 ∇ スルトハカギラナイ ○イカナイ ∇ スルワケニイカナイ ○タエナイ
 ∇ スルニタエナイ ∇ ニタエナイ ○エナイ ∇ セザルヲエナイ ○カ
 ネナイ ∇ シカネナイ ○ッコナイ (ハズガナイ の意) ∇ シッコナイ

以上、当面の資料にあらわれたものに限って記した。否定形としてあらわれ
 るものは、その肯定形が普通は想定しがたいものであって、種々の観点から注
 目されよう。

b 2 伝聞の表現

○～ダソウデス (18例)

∇ (略) コンドノ ^{ナナヒネクオクエン}七百億円ノ 減税ノ ナカニハ コウイウノガ アル ソウデス。
 (124-33-21)

∇ (略) 生活ハ ワリニ キリツメテ イルソウデス。 (126-26-15)

∇ ソウシマスト チョット 目ヲ ハナシタ アイダニ ソノ 子ドモガ (略) 奥
 サンニ 連レテ コラレタノダソウデス。 (126-29-7)

∇ (略) タイヘン エー 親善関係ヲ アタタメタソウデ アリマス。 (127-9-1)

○～トイウコトデス (2例)

∇ (略) 国立劇場ノ コノ 建物ヲ 建テルダケノ 費用ガ 三億円ト イウ コト
 デ ゴザイマス。 (124-5-24)

∇ (略) 入学祝モ ^{イワ}クレナカッタ イウ コトデス。 (126-26-12)

前述 (38ページ) のように、この種を立てたが、「伝聞の表現」と一般の
 引用の表現との区別のつかないものがある。「～トイウ」の形式によるもの
 だけのことはあるが、一方では、明瞭に引用の表現と見られる「～トイウ」の
 形式もあるのだから、その中間的性質の表現ということになる。 「～ダソウ
 デス」とちがって、「～トイウコトデス」という形式が語彙の特徴形式に近い
 からである。以下に中間的性質の表現と見られるもの (7例のうち) を示す
 が、その形式はすべて、「～トイウコトデス」ではなくて、「～トイウコトナ
 ンデス」「～トイウノデス」「～トイイマス」「～トイウ」などであった。

▽デスケレドモ ソノ 完全ニ ナオツテナイト, ナオッタヨウニ 見エテモ, 健康
保菌者^{キン}トシテ 菌ヲ マキチラス ヒトガ 多イト イウ コトナンデス。

(125-16-18)

▽人口^{ジンコウ}ノ 爆發^{バツパツ}ト イッタ コトバマデ 使ワレテ イマシテ コトシ^{センキユウヒヤクロクジュウ} 千九百六十
年^{ネン}ガ 一億八千万^{イチオクハツセンマン}ナノニ, 二十五年^{ニジュウゴネンゴ}後^ゴノ 千九百八十年^{センキユウヒヤクハチジュウネン}ニハ 二億五千万^{ニオクゴセンマン}ニ ナル
ダロウト イウノデス。 (126-30-21)

▽イッタイ 政治家^{セイジカ}ノ 妻^{ツメ}ノ 座^ザハ ムズカシイ モノデ, (略) 奥^{オク}サンガ ワルイ
ト ソノ オー 政治家^{セイジカ}ハ 伸ビナイト イイマス。 (126-23-17)

終りのほうの例ほど, 「イウ」の実質の意味が強くて, 引用の表現に近いであ
らう。対比の参考までに, 明らかな引用の表現を例示しておく。

▽デ イチバン 目^メダツノハ ハジメテノ 赤^{アカ}ンボウガ ウマレテカラ コノ 赤^{アカ}
ボウニ 対^{タイ}シテ ヤキモチヲ イダクツテ イウ コトデス。 (125-11-15)

▽タトエルト, タトエバ, (略) パノ^{パノ} 馬^{ウマ}ニ ナツテ 歩^ツクト, ソレデ キャッ
キャッキャッキャ ヨロコブト イウヨウナノモ 通^ツリコシテ イカナイトデス
ネ, 永遠^{エイエン}ニ ナニカ ソウイウ コトラ コワガルヨウナ コドモニ ナリハ シ
ナイカト イウ コトデス。 (126-9-21)

b 3 希望の表現

その文法的特徴形式は「～タイ」であるが, 資料には 9 例しかない。

▽(略) ソウユナ コトラ 強^{キョウ}調^{テウ}シタイ。 (123-26-17)

▽新^{シン}シイ 家^{イェ}モ 買^カイタイ。 (126-32-4)

▽ルームターラーモ ツケタイ。 (126-32-5)

▽アア シタイ。 (126-35-14)

▽コウ シタイ。 (126-35-14)

▽アルイハ オトナノ ヤルヨウナ コトラ マネヲ シタイ。 (126-35-14)

▽トナリノ オニイサンノ マネヲ シタイ。 (126-35-15)

▽ソレデ コノ 週^{シユウ}間^{カン}ニハ ソコヲ トクニ 強^{キョウ}調^{テウ}シタイ。 (126-44-15)

▽(略) コレハ モー カカス コトノ デキナイ トコロノー 基礎^{キソ}的^{テク}ナ モノト
ー ワタクシドモハー アー コノ 考^{カウ}エテ マイリタイ。 (126-48-18)

なお, 「～シテイタダキタイ」の形があらわれる。しかし, 当面の独話資料
のばあい, 「～シテイタダク」相手は, みな聞き手であって, 当の相手であ
る。つまり, これは判叙表現としてでなく, 要求表現として用いられていると
解釈したから, その項に例示する。「～シテイタダキタイモノデス」「～シテ
イタダキタイワケデス」などになると, 判叙表現か要求表現か, 文脈などによ

る判別のほか、区別しにくい。文法的特徴形式としては判叙表現であるが、文脈などによっては、要求表現の語彙の特徴形式となりうるからである。以下に全例を記す。

- ▽(略) コレモ 保健所デ エー シテ モラッテ イタダキタイ ワケデス。
(125-27-7)
- ▽(略) エ 結婚ノ マエノ 健康診断ヲ ウケテ イタダキタイ ワケデス。
(125-28-19)
- ▽(略) 思ウニ 池田サンニモ 若々シク ガンバッテ モライタイ モンデス。
(126-22-1)
- ▽(略) エー 近代政治家ノ ミチヲ 開イテ モライタイ モンデス。(126-27-5)

b 4 推定の表現

○～ラシイ (5例)

- ▽(略) ソレハ 千九百五十年ノ コトラシイ。(122-2-17)
- ▽西尾先生ニ ナニカ ヨコッチョカラ 悪口ヲ 言ウ 役目デ アルラシイ。
(124-10-1)
- ▽ドウヤラ 裏デ 自由党ト 社会党トノ 間デ 話シアイガ アッタラシイ。
(124-35-11)
- ▽ワガママハウダイノ 子ドモダッタラシイ。(126-22-3)
- ▽趣味ニツイテモ 基ヤ ゴルフデモ (略) イヤン ナルト サッサト ヤメテ シマウラシイ。(126-26-15)

○～マシヨウ・～デシヨウ (35例)

- ▽(略) マアマア テギワガ ヨカッタト 言エマシヨウ。(126-20-1)
- ▽(略) コノ 関係ハ 大変 明ルイ 関係ダト 言ウ 人モ アリマシヨウ。
(126-47-3)
- ▽マ セイゼイ 十分分 十五分ガ 適當デシヨウ。(125-8-9)
- ▽コノヘンヲ 池田サンハ マダ 知らナカッタ ワケデシヨウ。(126-26-3)
- ▽(略) ドウイウ フウニ ナッテ イルカト イウヨウナ エ 研究モ オコナワ
レタデ アリマシヨウ。(124-2-35)
- ▽タブン 最長年齢ノ ユエヲ モッテデ アリマシヨウ。(127-35-2)
- ▽(略) 赤ンボウノ スリエヲ ホンガッタリ オカアサンノ オチチヲ 飲ミタガ
ッタリ スルモノモ オ コノ レイデ ゴザイマシヨウ。(125-12-13)
- ▽エー ヤク 十五分グライ カカリマスデ ゴザイマシヨウ。(127-18-13)

○～ヨウデス (24例)

- ▽エー ソレデ アメリカノ 軍部ヤ 政府筋デハ ソウトウ コノ ニガリキッテ

イルヨウデ アリマス。 (124-29-9)

▽マダ ^{ロクジュウ}六十才ノ 書生ト イッタ 人間ノ キジヲ ムキダシニ スル トコロモ
アルヨウデス。 (126-26-17)

▽(略) ^{イチ}一瞬間ニハ ^{ハチ}八字 エー グライヲ オ ツカム モノノヨウデス。
(123-39-21)

▽(略) オ切リン ナリマス ホウガ エー 焼ク トキニ ツゴウガ イイヨウデ
ゴザイマス。 (127-16-8)

○～ハズデス (2例)

▽(略) 目ハ コウイウフウニ イク ワケデスカラ コノウチ ^{カナラ}必ズ エー コウ
イウ 線ガ アラワレル ハズデス。 (123-39-11)

▽(略) 外気温カラ 数度ノ 相違ガ アレバ ワタクシタチハ 涼シク 感ズル
ハズデス。 (126-41-18)

○～カモシレナイ (6例)

▽(略) エー 都市ト イウ 地域ノ 特殊性ガ アー デスギルカモ シレナイ。
(122-21-12)

▽(略) キレイナ モノハ ソコニ ナオ ホカニモ アルカモ シレナイ。
(123-22-21)

▽デ (略) アイテニ シットヲ イダクノハ 当然カモ シレマセン。
(125-13-5)

▽(略) 子ドモタチニ トッテハ 大キナ ヤキモチノ 原因ト ナルカモ シレマ
セン。 (125-13-14)

▽(略) イロンナ 原因ガ 考エラレルカモ シレマセン。 (125-13-17)

▽ソんな コトハ (略) マー トクニ イー トリタテテ 言ウト イウ コトニ
ハ ナラナイカモ シレマセン。 (126-29-18)

○～カモワカラナイ (1例)

▽(略) コレヲ オー ヒトツノ 活用形ト シテ (略) タテナイ ホウガ イイ
カモ ワカリマセン。 (123-10-9)

○～ソウデス (1例)

▽デ ドウモ (略) ヨク 考エテ ミル 必要ガ アリソウデスネ。 (125-7-12)

この項には、「ダ」の形の例が出ていない。つまり、「～ダロウ」「～ヨウ
ダ」「～ハズダ」が、共通資料には見当らなかった。「～テイル」「～ラレル」
「～タイ」「～テホシイ」「～ラシイ」などははだかの終止形がよくあるこ
と、前記のとおりだが、こういう「ダ」の形は、ひどくぞんざいな感じを与え

るために、避けられる傾向があるのであろうか。

b 5 意志の表現

文法的特徴形式は「～ウ」である。(36例ある。)

▽マー ヤリマシヨウ。(123-30-3)

▽一・三・六ニ シマシヨウ。(123-29-7)

▽ソレカラ モウ ヒトツ 社会保障ノ 問題ヲ モウシアゲマシヨウ。

(124-25-8)

▽スナワチ ヒトツ タトエルナラバ、ココニ 生活ノ 保護法、生活保護法ニ モ
トツク 補助ノ 計算ヲ スル 標準ト イウ モノニ フレテ ミマシヨウ。

(124-25-12)

▽ソノ コトニ ツイテハ 明日^{ミヨウニチ} オハナシスル コトニ イタンマシヨウ。

(125-13-20)

▽ソレデ ワタクシモ キョウハ ヒトツ ウー ミナサント ゴー諸ニ 保健所^{ケケンシヨ}ノ
コトニ ツイテ ヒトツ ウー ヌックリ 考エテ ミマシヨウ。(125-23-7)

▽カワイソウダカラ ヒカゲニ イレテ ヤリマシヨウ。(126-35-6)

▽シカシ 一応^{イチオウ}ノ メドハ アリマスノデ、ソレヲ モウシアゲテ オキマシヨウ。

(126-38-6)

▽イマ オトウフガ オ水ノ 切レタノガ コチラニ ゴザイマスノデ、チョット
オ目ニ カゲマシヨウ。(127-12-6)

▽デ ソレデハ ヒトツ ヒトツー スコシ 合成樹脂ニ ツイテ オハナシタ
シマシヨウ。(127-27-14)

以上のほか、語彙的形式で「～スルツモリダ」の類が5例ある。

▽コレラハ 発達事例ノ 調査ノ 資料ト シテ エー 役ダテル ツモリナンデゴ
ザイマス。(122-24-11)

▽(略) 今後^{コンゴ}モ コノ 政策ヲ 忠実^{チュウジツ}ニ 実行シテ イク ツモリデ アリマス。

(124-34-19)

▽シカシ ワタクシたちハ 熱心ニ コレヲ ヤル ツモリデス。(124-35-3)

▽カナラズ 成功サセル ツモリデス。(124-35-3)

▽(略) エー ワタクシハ エー 身近^{ミヅカ}ナ 学生ノ 代弁^{ダイベン}、ソレカラ 身近^{ミヅカ}ナ 研究
者ノ 代弁ヲ シタ ツモリナンデ ゴザイマス。(127-31-1)

これによく似た形で、「～スルカクゴダ」が2例(127-34-3・6)あるが、「覚悟」は明らかに名詞としての働きを持ち、語義による個別の表現になると考え、ここには記さない。

このほか、意志の表現にもなりうる形式がある。「～シマシヨウカ」(「判断

への疑念の表現」下記参照) および「～スルヨウニ イタシマシ ョウ」「～ニシテイタダキマシ ョウ」「(ゴ注意) イタダキマシ ョウ」(「消極的 行為要求 の表現」58 ページ) であるが、いずれも意志の表現とは認められなかった。

3・3・2 判断未定の表現

a 判断の未確定の表現

前報告書に記したところを引けば、これは、「自問的にみずから納得する表現であって」「自問による反語の表現が内的に存在すると認められる」ものである。たとえば、その例のうちには、

▽ナンダイ、相撲カト 思ッたら 相場カ。

▽映画ノ 話デモ スルカー。

などがある。こういう表現は、独話資料には、あらわれにくいこと、言うまでもなく、わずかに1例を見る。

▽イケナイカ。(122-11-3)

やはり、疑念を含みつつ、みずから納得する気持をあらわすもののように見える。

b 判断への疑念の表現

○～シマシ ョウカ (3例)

▽ヤッパリ 一・三・六ニ シマシ ョウカ。(123-29-8)

▽(略) シュルイト イウ モノニ ツイテ 考エテ ミマシ ョウカ。(125-3-7)

▽(略) カオノ ハナシカラ ハジメマシ ョウカ。(126-20-9)

○～デシ ョウカ (1例)

▽コレガ マー 池田流ナノデシ ョウカ。(126-26-14)

これは、他に対する質問あるいは消極的 行為要求 の表現に一転しうる形式を持っている。しかし、なお、文脈などから推定すると、話し手みずからの意志の、婉曲で不明確な表現として、判断に関する疑念をあらわしていると思われるものである。ほかの2つの表現に一転しうるというのは、1つには文末が上昇調のイントネーションをとると、それは質問の「～シマシ ョウカ」の形式で、明らかな判定要求の表現となること、また1つには、上昇調をとらずに、相手の意向について行為上の同意を求める「さそい」をあらわすことである。とくに後者は、話し手だけの意志でなくて、相手を含める全体の意志的表現だ

とも言えるが、同意を求めるという点で、要求表現に属し、それが行為に関するという点で行為要求に属する。したがって、その項に例示される。「～シマシヨウカ」でなくて、「～シテイタダキマシウカ」となると、たいてい相手に対する行為要求をあらわして、判断への疑念とは見られない。要するに、「～シマシヨウカ」の形式は、「さそい」にも、判断への疑念の表現にもなりうる形式であり、（そのうち、「～シテイタダキマシヨウカ」は多く消極的行為要求になるが）「～シマシヨウカ」の形式は、質問の表現（判定要求）になる形式だということになる。

3・4 要求表現

a 質問的表現

要求表現は、いわゆる「質問文」「命令文」の総称であって、要求するものが相手の返答であるものを、「質問的表現」とし、要求するものが相手の行為であるものを「命令的表現」として2分した。しかし、いわゆる修辭的質問など、形式は質問だが内容は命令であるものもあって、その区別のむずかしいことがある。「要求表現」として一括することができるのは、その共通性としての要求ということであるが、依頼とか勧誘とか、いろいろの意味をあらわすこともあり、細部の峻別は困難である。ここでは、文法的特徴形式を優先して各項にわけたが、「希望の表現」におけると同様、語彙の特徴形式をも、要すれば、各項に記述することとする。

念のため、本書での質問的表現の分類のしかたを再掲し、以下各項について記述する。

質問的表現	肯否要求の表現	1. 確認要求の表現
		2. 判定要求の表現
	選述要求の表現	3. 選択要求の表現
		4. 説明要求の表現

a 1 確認要求の表現

▽エー コノ ソレカラ 皆サン オ持チニ ナルヨウニ ナッテマスネー、コレヲ。(123-29-12)

▽エー バアイニ ヨリマスト コレ ヨク ジュウブン コノ コウイウ 火薬ノ

ヨウナ アー 燃エカタヲ スルッテ イウノハ モウ セルロイドデ ミナサン
ゴ存ジデスネ^ノ (127-25-12)

▽チャント オー 金魚ガ ハイッテマスネ^ノ (127-28-10)

▽エート ア イマ 見エマスネ^ノ (127-28-10)

▽シカシ コレモ 新シイ コトデハ アリマセンネ^ノ (124-33-17)

▽アルイハ コノ ミナサン コノ 金魚ナンカラ コー イレタ 袋ッテ イウノ
ガアルデショウ^ノ (127-28-9)

以上、全6例である。いずれも文末に上昇調 ^ノ をともなう。話し手が、自分の判断を相手に確認してもらおう、同意してもらおうとする表現である。形式として、確認要求がもっともはっきりするのは、「～ダロウ^ノ」「～デショウ^ノ」の類であるが、「～デスネ^ノ」「～デショウネ^ノ」の類になると「～デス^ネ」「デショウ^ネ」等、卓立のイントネーションをとともなう判叙表現との区別がしにくく、断定や推定とまぎれやすい。

a 2 判定要求の表現

○～(デス・マス)カ (4例)

▽ヨロシイデスカ。 (122-8-14)

▽オワカリニ ナリマスカ。 (127-25-17)

▽ソレカラ 会社側ノ 漁民トノ コノ 誠意ヲ 持ッタ 話シ合イガ デキテ イ
タカ。 (125-16-4)

○～デショウカ (4例)

▽(略) 公立ノ 保健所トカ イウヨウナ 保健所ノ 区別ガ アルデショウカ。
(125-25-13)

▽「ノンちゃん 雲ニ 乗ル」ッテ イウ 童話 ゴ存ジデショウカ。 (126-1-5)

○～ノデハナイカ (2例)

▽(略) 意味ノ ^{ウエ}上デハ エー ^{カナラ}必ずシモ オ 説明ニ ナッテ イナイ ト イウ
コトガ デキルノデハ ナイカ。 (123-15-19)

▽(略) 自動車ガ エンカツニ 動イテ イク 上ニハ ドウイウ フウニ シタラ
イカト イウ トコロニ (略) ソノ 調査ガ アッタンジャ ナイカ。

(124-3-4)

○～ノデハナカロウカ (1例)

▽(略) エー ホトンド スベテノ 問題ガ ア コレカラ 築カレテ イカナケレ
バ ナラナイト イウ 状況ニ アルノデハ ナカロウカ。 (122-14-2)

○～ノデハナカロウカト・～ノデハナイダロウカト。 (5例)

▽(略) ソノ タメニハ エー コトバニ ツイテ フタツノ メンニ 着目スル
コトガ 必要デハ ナカロウカト。 (122-13-23)

- ▽(略) オー ナニカ 研究機関ト イウ モノガ 国民ノ 生活トハ ウイタ ト
コロニ エー 学者が 集マルト イッタヨウナ コトニ ナッテ シマウノデハ
ナイダロウカト。 (124-7-1)
- ～ジャナイカシラ (1例)
▽デスカラ スコシ チョット 親^{オヤジ}ハ 危険カナート 思ウヨウナ コトデモ (略)
思イキッテ スコシ ヤラシテモ イインジャ ナイカシラッ。 (126-10-6)
- ～ノジャゴザイマセンカ・～ンジャナイデショウカ・～ノデハナイデショウカ・ンジャ
ナイカト (7例)
▽ソレカラ チイサメノ オ子サンハ ソノ 年齢ノ サイズデ ヨロシイノジャ
ゴザイマセンカ。 (125-5-5)
- ▽(略) オシマイニハ (略) コウ 手ヲ フリアゲテ シマウッテ イウヨウナ
バアイガ ズイブン アルンジャ ナイデショウカ。 (125-7-2)
- ▽(略) マタ ソノ 買イニ イク, ソシテ マタ ソレヲ タベルッテ イウ コ
トニ ナリマスト, (略) マー 弱イ 体^{カラダ}ヲ 作ッテ イッテ シマウヨウナ
原因トモ ナルノデハ ナイデショウカ。 (126-5-21)
- ▽エ ケレドモ コノ イヤナ 季節モ 心ガケシダイデハ 万端^{マンタン}ノ ソナエヲ シ
テ マタ 楽シク 迎エル コトモ デキルノデハ ナイデショウカ。
(125-18-6)
- ▽ソコデ エー ゴ承知ノ 長イ 人間ノ ナン^{センネン}平年 アルイハ ナン^{マンネン}万年ノ 歴史
ト イウ モノハ 結局 コノ 人間ガ 自由ト 人權ヲ ^{カクトク}獲得スル タメニ ^{タカ}戦
ッテ キタ 歴史ダト イウ コトモ イエルンジャ ナイカト。 (126-51-18)
- ～ンデショウカ (1例)
▽(略) ソレデモ ヤッパリ 本ハ 読マナケレバ イケナインデショウカ。
(126-1-8)
- ～デハナイデゴザイマショウカ・～ンジャナイデショウカ・～ンジャナイカ (3例)
▽ソレニハ^{ヨル}夜ノ 安眠ガ イチバン 大切デハ ナイデ ゴザイマショウカ。
(125-1-5)
- ▽自分デ 自分ノ 権威ヲ ナゲダシテ イルヨウナ モノジャ ナイデショウカ。
(125-8-19)
- ▽(略) ソウイウ モノヲ 引き出スト イウ コトガ マー コレ 非常ニ ^{ダイジ}大事
ナ コトジャ ナイカ。 (126-34-14)
- ～デショウカ (1例)
▽半面 ソノ 自分デ イウ トオリ 単細胞^{タンサイボウ} バカ正直, ソレデ イテ 天性 人
ノ アタマニ 立ツヨウナ マー 未完ノ 大器ト イッタ エー トコロデショ
ウカ。 (126-26-19)

以上, 全29例。そのうち, 「～カシラ」「～ウカ」は, 文脈などによるほか,

形式上は 3・3・2「判断未定の表現」の「b 判断への疑念の表現」と区別がつかない。イントネーションで末尾が上昇調をとると、質問の表現らしくなるが、それととも、現実には、卓立の高調との区別がしにくいことがある。卓立の高調とすれば、依然として疑念をあらわすにとどまる。したがって、イントネーションによっても、両者を完全には弁別できない。文脈などから、明らかに「判断への疑念の表現」と見られるものだけを、その項に置いた。意図表現上、「疑念の表現」と「判定要求の表現」とは、連続する性質を持つ表現と見られる。

a 3 選択要求の表現

▽(略) カズカラ イウト (略) エー ^{セン}千以上 アルト 思イマスカ、アルイハ
アー ^{ゴヒヤク}五百以下デショウカ。(125-24-14)

▽(略) コレガ ソレゾレ ヤハリ ヒトツブンナノカ、フタツブンナノカ。
(122-17-26)

典型的な選択要求は、「Aカ、Aデナイカ」の型であって、それ以外の選択を許さないとされる質問（実際には、ほかに選択されうる事項があっても）の形であろうが、ここには、そういう形のものはいなかった。上記2例は、いずれも、「Aカ、Bカ」の型である。この型では、「Aカ、Bカ、Cカ、…」と延長されうるが、実際には、そんなに多いものは少ないだろう。このほか、つぎに記すような、「Aカ、ドウカ」の型がある。これは「Aカ、Aデナイカ」の変形で、疑問詞「ドウ」を含みはするけれども、それについての説明を求めるものではない。全体として、やはり、選択を求める表現である。

▽タトエバ (略) ジュウブンナ 監督ヤ 指導、コレガ デキテ イタカ、ドウカ。(125-16-4)

▽本当ニ 信頼デキル ^{サイゾウ}宰相ノ 顔ト ナルカ、ドウカ。(126-21-10)

▽(略) イマノヨウナ 予算ノママデ イイノカ、ドウカ。(124-5-31)

選択要求の表現は、以上の5例である。単独の「～カ」は、疑問詞を含まなにかぎり、肯定か否定かの応答ができるが、これは、2つ以上の「～カ」の形の複合だから、肯定か否定かの応答ができない。その点で肯否要求ではない。もし、複合と認めず、ばらばらにすれば、1つ1つは判定要求であるが、述語が並列して、同一の主語や修飾語を受けることも多いし、「(彼はこの仕事をやる

のかね、やらないのかね?) 全体として、説明要求のあるもの(「どっち」「どちら」「どれ」など、選択の意の疑問詞をとるもの)と同じ内容をあらわす(「彼はこの仕事をやるのかね、やらないのかね? どっちかね?」)から、一括すれば「選述(選択と説明)」を求めるものと見られる。結局、選択の意の疑問詞を媒介として、つぎの「説明要求の表現」に連続してゆく性質のものであり、「判定要求」と「説明要求」との中間的性質を持つ表現と見られる。

a 4 説明要求の表現

これには、選択要求に類するものから、一般の疑問詞による説明要求、さらに、説明要求というよりは相手に対する詰問(形は質問的であるが、一方的断定に近い。「なんたることだ?」「なんで そんなことをするんだ?」)の表現に至るまで、いろいろの表現を含む。また、資料にはないが、疑念から発展したかと思われる「まー どうでしょう、犬がみんな食べてしまったんです」のように、驚きをあらわしたり、あるいは、後出の「すすめ」の表現「～シテハイカガデショウ」「～ナド、イカガデショウ」(資料にはないが、「～したら、どうでしょう」「～しては、どうでしょう」なども)に連続するものである。

疑問詞別に見ると、「ド」系統が30例で圧倒的に多く、「イカガ」4例、「イツゴロ」1例、「ナ」系統7例、計42例である。また、文末は、ほとんど「カ」助詞をとまなう。「カ」をとまなわないのは5例で、すべて「デショウ」の形になっている。また、「カト」の形の「ト」終止が9例あり、独話での「説明要求」が、かなり、問題提起の意図によることを示している。このことは、文末に、「デス・マス」をとまなわず、いわゆる普通体になっているものが多い(42例中20例に及ぶ)事実と相関すると思われる。

以下疑問詞別に例示する。

○ドウ (2例)

▽サテ コウシタ 子ドモノ ヤキモチヲ ドウ トリアツカッタラ ヨロシノデショウカ。(125-13-20)

○ドウイウ (6例)

▽(略) ソレヲ 研究スルノニ ドウイウ 機械ヲ 用イタカト。(123-38-16)

▽第一ニ 日本ガ ^ニドウイウ 状態ニ ナッテ イルンデショウカ。(124-30-24)

▽ソレカラ マタ 合成樹脂ト イウノハ イッタイ ドウイウ 種類ノ モノナンデショウカ。(127-24-8)

- ドウデシヨウ (カ) (3例)
- ▽ (略) コレカラ オハナシンタイト 思イマスガ ドウデシヨウカ。 (123-28-7)
- ▽ソレカラ ヨク オカアサンタチガ 「オトウサンニ イッテ ヤリマス」 ッテ、
コウ イウノハ ドウデシヨウ。 (125-8-19)
- ドウデスカ (1例)
- ▽エー 二番ガ イイ カタ、ドウデスカ。 (123-29-3)
- ドウナンデシヨウ (1例)
- ▽チカゴロノ 子ドモハ 本ヲ 読マナク ナッタト イワレテ イマスガ、コレハ
ドウナンデシヨウ。 (126-1-7)
- ドウシテ (1例)
- ▽ドウシテ コレヲ トカサナイカト。 (126-53-1)
- ドノクライ (5例)
- ▽^{ガイライ}外来語ヤ ^{ゲンゴ}原語ガ アー ドノクライ 用イラレテ イルカ。 (123-42-9)
- ▽ソレカラ 固有名詞ガ ドノクライ ハイッテ クルカト。 (123-42-10)
- ▽ (略) ^{フナキヨウキヨウシ}不適応癡視ガ (略) ^{イチギヨウ}一行ニツキ ドノクライ オコルカト。 (123-40-10)
- ドレクライ (1例)
- ▽ (略) ソウイウ 文体ガ モチー… ドレクライ 用イラレテ イルカ。
(123-42-11)
- ドンナ (5例)
- ▽エー タトエバ ソウイッタヨウナ アー モノヲ 用イテ、ドンナヨウナ アー
研究ヲ ワタクシドモガ アー シテ マイッタカト。 (123-38-1)
- ▽ (略) ドンナ 技巧ヲ オー 技術ヲ 用イタカト。 (123-45-5)
- ▽サテ ミナサンガタハ アー モウ スデニ ドンナ マー ^{シヨクバ}職場ヲ オエラビニ
ナッタデシヨウカ。 (127-23-4)
- ドノヨウナ (1例)
- ▽コノ オソロシイ コノ 核兵器ト イウ モノハ 廃棄サセル タメニハ ドノ
ヨウナ 方法ヲ モチイ… 用イタラ ヨイカ。 (124-27-4)
- ドノヨウニ (2例)
- ▽コレヲ ドノヨウニ カンガエタラ ワリキル コトガ デキルデ アロウカト。
(123-17-12)
- ▽デハ ドノヨウニ シタナラバ コノ 闘争ヲ 解消スル コトガ デキルカ。
(124-21-14)
- ドレ (1例)
- ▽エ コノ 順番ハ ドレガ イイデスカナ。 (123-29-8)
- ドコ (1例)
- ▽ジャ 財源ヲ ドコカラ 持ッテ クルカ。 (124-25-20)
- ナニ (2例)

- ▽(略) サー ナニガ デキルンデシヨウ。 (127-24-5)
- ナンデシヨウ (カ) (2例)
- ▽コレハ ナンデシヨウ。 (127-24-4)
- ナン〜 (1例)
- ▽ウー ^{ヒヤクジツ}百字ノ ナカニ ナン字 漢字ガ フクマレテ イルカ。 (123-42-8)
- ナゼ (2例)
- ▽ナゼ カレハ ソレヲ ヤッタカ。 (124-35-20)
- イツ (1例)
- ▽(略) イッタイ イツゴロカラ コレハ デキダシタノデシヨウカネ。
(127-24-7)
- イカガ (4例)
- ▽ゴキゲン イカガデ イラッシャイマスカ。 (127-11-3)
- ▽イカガデ ゴザイマシヨウカ。 (127-14-12) (127-32-4)

b 命令の表現

要求するものが相手の行為である表現で、前述のように、「質問的表現」と合わせて「要求表現」となる。2分して、

命令的表現 { 1. 消極的行為要求の表現
2. 積極的行為要求の表現

とする。以下各項にわけて記す。

b 1 消極的行為要求の表現

この表現と、前の「説明要求の表現」とは、前述したように、つぎのような形式を媒介として連続する。

- 〜シテハ イカガデシヨウカ
- ▽(略) アノー イロイロト オ考エンナッテハ イカガデ ゴザイマシヨウカ。
(125-1-6)
- 〜ナド イカガデシヨウカ
- ▽キョウハ ハンペンノ オツユ, カツオノ バタヤキニ オロンドレッシン グカ
ケ, ツケアワセニ コフキイモ, ソシテ ^{アオナ}青菜ゴハンナド イカガデ ゴザイマシ
ヨウカ。 (125-22-10)

いずれも、婉曲に「すすめ」の気持をあらわす類型であり、この「すすめ」をはじめ、「たのみ」「ねがい」「命令」など、相手の行為を要求する表現が、行為要求の「命令的表現」である。それを、「消極的」「積極的」に2分するのは、段階的連続性を持ちつつも、婉曲から直截まで、程度のちがいがあ

るからにすぎないが、構文上も、婉曲な表現には、複雑なものが多く、直截な表現（極端には「～シロ」「～セヨ」の類）になるほど、簡単なものが多いようである。しかし、独話には、極端に直截な表現はあらわれていない。以下例示する。

○～スルヨウニ イタシマシヨウ

▽（略） 修理ヲ 早目ニ スルヨウニ イタシマシヨウ。 (125-19-7)

▽（略） 戸棚ノ ナカノ タベモノハ キチント フタノ デキル イレモノニ イレテ オサメルヨウニ イタシマシヨウ。 (125-20-7)

○～イタダキマシヨウ

▽（略） ソノ バアイ タベモノヤ ^{シヨクツナ} 食器ナドニ ^{チヨククセツ} 直接 カカラナイヨウニ ^ゴ注意イタダキマシヨウ。 (125-20-12)

▽葱モ オ オナジヨウニ ミジンニ シテ イタダキマシヨウ。 (127-12-9)

以上の形式は、対話資料による調査にも出て来ている。また、対話の補助資料によって採られた「質問形式による」もの（前書 120 ページ参照）として、ここには、

○～デ ネガイマシヨウカ

▽エー ソイジャ 拳手デ ネガイマシヨウカ。 (123-29-1)

の形式だけがあらわれている。これらは、みな「すすめ」の気持をあらわすが、もともと質問や意志の表現であったものが、転用されて、婉曲に、相手の行為を要求する表現として類型化したものであろう。

語彙的形式としては、

○～ヲ オススメ イタシマス

▽デスカラ 仕事ガ ナカッタラ 屋寝ヲ スル コトヲ ワタクシハ オススメイタシマス。 (126-40-13)

がある。同様に、「さそい」の気持をあらわすものとして、

○～シテイタダキマシヨウカ

▽ソレデハ ^{ナガ} 鱈ヲ 見テ イタダキマシヨウカ。 (127-16-2)

▽ソレデハ オコンダテノ ホウ モウ ^{イツカイ} 一回 見テ イタダキマシヨウカ。

(127-19-1)

がある。これは、「判断への疑念の表現」のうち、「～シマシヨウカ」に近いが、「テイタダク」があるために、相手への要求を示すと見られる。「カ」自体は、表現を不確定にし、それによって婉曲な言いまわしとする役目を果たし

ている。

これに対して、希求・依頼などの気持ちをあらわすものには、

○～シテホシイ

▽(略) ヒトツ マー ^{イナダ}稲田サンニ オオイニ 働イテ ホシイ。(124-5-33)

○～シテイタダキタイ

▽(略) コレモ ミンナ アノ ソノ オ子サンノ 体質ニ ヨッテ アノ 考エテ
イタダキタイ。(125-3-12)

▽(略) コレモ ヤハリ ソノ オ子ニ ヨッテ カタク ナイヨウニ シテ イタ
ダキタイ。(125-4-12)

▽ソレカラ (略) コレハ ヤメテ イタダキタイ。(125-5-7)

▽ソシテ (略) スベテ ユルミト イウ コトラ ワスレナイデ イタダキタイ。
(125-4-4)

○～シテクダサイマスヨウニ

▽マズ (略) レモンカ アルイハ ダイダイノヨウナ モノガ アッたら ゴ用意
クダサイマスヨウニ。(127-15-18)

▽デ ソノ オシオハ (略) スコーシ オオメニ オ使イクダサイマスヨウニ。
(127-16-9)

▽^{アツ}熱イ ウチニ オカケクダサイマスヨウニ。(127-17-19)

「～シテクダサイマスヨウニ」は、「～シテクダサイマスヨウニ オ願イイ
タシマス」などの述語省略の類型化したものだろうが、ために、「私ハ アナ
タニ ～シテクダサイマスヨウニ」と終止することができない。その点で、こ
れは「～テホシイ」「～テイタダキタイ」とちがう。これらは「私ハ アナタ
ニ ～シテホシイ」「私ハ アナタニ ～シテイタダキタイ」と言うことがで
き、それだけ、「テホシイ」「テイタダキタイ」には接尾語的性質があると見
られる。「テクダサイマスヨウニ」は詞的述語の省略によって、辞的な文法的
特徴形式になったものと見られよう。これには過去形が想定できないのも他と
ちがう。逆に言えば、過去形もある「～テホシイ」「～テイタダキタイ」は、
それだけ、語彙的形式なのでもあるけれども、一層ははっきりした語彙的形式
としては、

○～ヲ オネガイイタシマス

▽ワタクシハ (略) ミナサンガタガ (略) オオッピラニ 積極的ニ 支持シテ
クダサル コトラ オ願イイタシマス。(124-36-8)

○～ヨウ(ニ) オネガイイタシマス

▽(略) シメッタ 場所ニ ^{ビー}B・^{エフチ}H・^{ジー}Cナドノ 薬品ヲ マク コトモ ワスレナイ

ヨウニ オ願イイタシマス。(125-20-9)

▽(略) 石井君ト シテモデスネ (略) 国家ノ タメニ ゴ奮闘イタダケルヨウ
オ願イヲ イタシマス。(127-35-9)

○～シテイタダキマス

▽(略) プリントヲ ゴランナッテ イタダキマス。(123-24-1)

▽ソコデー イマ オクバリシマシタ プリントノ ホウ 見テ イタダキマス。
(123-24-12)

▽ソシテ ヤハリ ヨク カキマゼテ イタダキマス。(127-12-15)

○～シテイタダキトウゴザイマス

▽ショウガト オ醬油デ エ サッパリト 召シアガッテ イタダキトウ ゴザイマ
ス。(127-11-7)

があり、その短い固定形に、

▽ヨロシク オ願イイタシマス。(127-24-9)

▽ドウゾ オ願イイタシマス。(127-31-5)

▽ソレジャ 戸田サン ドウゾ オ願イイタシマス。(126-50-16)

▽ドウゾ ミナサン ヨロシク オ願イ申シアゲマス。(127-34-8)

がある。その他、「判叙表現」(45ページ)に記したように、「～スルガイ
イ」「～シテハコマル」「～シナケレバナラナイ」「～シタラダメダ」など、
判叙表現の形式でありながら、直接相手に対して、消極的に行為を要求するば
あいがあるが、当面の独話資料には、きわめて例が少なく、その例としてよい
と思われるものは下記1例にすぎない。

▽デスカラ 火ヲ ゴーク 弱ク ナサッテ イタダキマシテ、コゲナイヨウニ 気
ヲ ツケナケレバ イケマセン。(127-18-8)

b 2 積極的の行為要求の表現

いわゆる命令文は、多く、これに属するが、はだかの命令形は、独話資料に
はない。前書同様、命令形に準ずる形式をとるものは、この表現に入れられ
る。

○～シテクダサイ (4例)

▽ナンカ ミナサン 言^イッテクダサイ。(123-29-1)

▽ソレカラ 足首^{アシクド}ヲ カタホウズツ 十回カラ 十五回グライ グルグル マワシテ
クダサイ。(127-32-21)

○オ～クダサイマセ (11例)

▽デハ オサカナヲ (略) コゲナイヨウニ オヤキクダサイマセ。(127-18-19)

▽オ元気デ オ働キニ ナッテクダサイマセ。(127-33-8)

▽ドウゾ オタメシクダサイマセ。(127-14-12)(127-19-11)

○ゴ〜クダサイマセ。(4例)

▽顔ノ シワヲ 気ニ スルノト 同様 足ノ ホウモ ジュウブン ゴ注意クダサイマセ。(127-33-5)

▽デハ ココニ 準備イタジマシタノ ゴランクダサイマセ。(127-17-21)

○〜シテゴランナサイ (1例)

▽財政投融资ト イウ モノノ ナカノ 融資ノ 面ヲ 見テ ゴランナサイ。
(124-26-12)

○ゴランナサイ (1例)

▽ゴランナサイ。(124-32-16)

その他、前書に記したさまざまな形式、たとえば「〜シテクレヨ」「〜シテ」「〜シテヨ」「〜シナサイ」「〜シタマエ」「〜シテテョウダイ」「お(連用形)」「お飲み」「お行き」など、あるいはまた、判叙表現で、相手に向けられるときに積極的要求表現となるもの(「早く歩くんだ」「早く歩くの)など、すべて独話共通資料には出て来ていない。

3・5 応答表現

前節の要求表現も、独話資料では、対話資料ほど多彩ではないが、応答表現は一層はなはだしい。詠嘆表現や応答表現の少ないことは当然予想されるとおりであるが、とくに応答表現は、本来、独話にとっては無用に近いもので、たまたま、当資料では、聴衆とのやりとりが少しあらわれたので、顔をのぞかせたにすぎない。全例列举しておく。

▽ハイ。(122-11-3)(123-29-3)ほか6例

▽ソウ。(123-29-4)

▽ソウカ。(122-11-2)

▽ソウデスカ。(123-29-3)

前書における応答表現の細分を、本書でくりかえす必要はないだろうし、その範囲を出る独特のものは全くない。

4. 各種表現のあらわれかた

以上、各種表現に多少の説明を加えつつ、例示した。参考として、その表現の文の数を一覧表としてかかげる。前述同様、両様の解釈のできるものは、文法的特徴形式を優先し、ここでは、1文を1項に分類した。

リールナンバー	よびかけの表現	詠嘆表現	判 叙 表 現										要 求 表 現					応答表現	合計	
			態	相	時	断 定	伝 聞	希 望	推 定	意 志	疑 念	判 断 未 定	確 認	判 定	説 明	選 択	消 極 的 行 為			積 極 的 行 為
122	0	0	62	16	28	193	0	0	2	1	1	0	0	7	1	1	0	0	2	314
123	0	2	53	34	33	374	0	1	6	2	0	1	1	0	14	3	2	9	536	
124	13	0	49	8	41	219	3	0	5	7	0	0	1	2	1	9	5	2	0	365
125	10	0	15	5	15	183	0	0	16	5	0	1	0	9	2	5	13	0	0	279
126	7	0	71	10	59	321	16	8	36	2	0	2	0	7	1	3	7	0	0	550
127	11	2	65	6	39	321	1	0	9	26	0	0	4	3	0	10	14	17	0	528
	41	4	315	79	215	1611	20	9	74	43	1	4	6	29	54	42	21	11	2,572	

(宮 地 裕)

Ⅲ 構 文

1. 対象と方法

「構文」の項では、文型の1つの側面としての構造上の文の類型（構文の型）を扱う。1.「対象と方法」では、主として資料の分析の方法について述べ、2.「構文の型」では、主としてその結果を述べる。

この項は『話しことばの文型(1)』の「構文」の項を受けつぐものであるが、資料の分析の方法には、『話しことばの文型(1)』の方法を改めたところが多い。

現在の段階では、「独話における構文の型」といったような、文体あるいはジャンルの上での独話の特徴を浮かび上がらせるまでには進んでいない。この報告は、独話資料による日本語の構文の型の研究であって、独話そのものの特徴の研究ではない。

1・1 対象

1・1・1 構文

構文とは文の構造である。文の構造とは、文がどのような部分からなりたっているか、それがどのような関係でむすびついて全体（統一体）としての文を構成しているかということである、とここでは考えておく。

文の部分としては、ふつう「主語」「述語」のような「文の成分」があげられている。文の成分とは、文の中で果たしている機能によって一般化して得た文の部分の種類である。だから、文の部分の性格は、それがどのような文の成分に属するかということ^{注)}で明らかにされる。

注) 文の成分というばあい、たとえば、主語では、「～ハ」と「～ガ」の表わす意味ないし機能のちがいは無視される。このことについては 1・2・3 c「陳述的変容について」、V 2・1「成分の陳述的変容について」参照。

したがって、個々の文の構造は、文がどのような部分にわかれ、その部分がそれぞれどのような成分に属し、その成分がどのようにくみあわさって文をな

しているか、ということで抽象される。たとえば、

○ケサ アサガオガ 咲キマシタ。

という文の構造は、

〔時間を表わす連用修飾語〕〔主語〕〔述語〕

という3つの成分のくみあわせである、ということである。

1・1・2 構文の型

○ケサ アサガオガ 咲キマシタ。

○キノウ ユウガオガ 咲イタ。

○オトトイ ヒルガオガ 咲カナカッタ。

という3つの文を比べると、どの文も第1の部分が時間を表わす連用修飾語であり、次の部分が主語であり、最後の部分が述語である。したがって、これらは同じ構造の文である。このような構造上の共通性にもとづいて、これらの文から構造を抽象すれば、

〔時間を表わす連用修飾語〕〔主語〕〔述語〕

という文の構造の類型が得られる。

このように、文は、構造上の特徴を抽象することによって、構造の面から一般化することができる。構造の面から一般化して得た文の類型が構文の型である。だから、構文の型とは、具体的にいえば、文における成分のくみあわせの類型である。ここでは、個々の文の個別的なちがい（上の例でいえば、ケサ、キノウ、オトトイなどのちがい）はきりすてられている。それは、成分とそれのくみあわせの図式として抽象的に表現することができる。

このように、構文の型は抽象的なものであるが、その抽象の段階にはさまざまなものがありうる。

○ケサ アサガオガ 咲キマシタ。

○庭デ アサガオガ 咲キマシタ。

はそれぞれ、

〔時間を表わす連用修飾語〕〔主語〕〔述語〕

〔空間を表わす連用修飾語〕〔主語〕〔述語〕

という構文の型に属するといえるが、これらの2種類の連用修飾語は一括して連用修飾語と認めることができるから、この2つの文は、

〔連用修飾語〕〔主語〕〔述語〕

という一段と抽象的な型に属するということができる。

さらに、

〔主語〕〔連用修飾語〕〔述語〕

という型との語順のちがいを捨象した型を認めることもできる。

なお、あとで述べるように、この種の連用修飾語は、文において「骨ぐみ成分」ではないと見て、これを捨象して、連用修飾語のない

〔主語〕〔述語〕

という型と同じ「骨ぐみ」の型に属させることも可能であろう。

どの段階まで抽象し、どの段階で抽象をとどめるべきであるかは、文の中の成分どうしの相互関係 (syntagmatic な関係) や他の構文 (の型) との相互関係 (paradigmatic な関係) を明らかにする必要に応じてきめられるはずである。

したがって、個々の構文の型は、厳密に言えば、他の構文の型との相互関係を明らかにして、その言語(方言)の構文の型全体の中に位置づけて、はじめて真の意味の構文の型と認めることができるわけである。構文の型の認定は、構文の型の分類をまっ^{注)}て、はじめて意味を持つわけである。

注) われわれはここで

構文……個々の文の構造

構文の型……個々の文の構造を抽象して得た、構造上の文の類型

のように表現したが、この表現は一面的である。個々の文の個々の部分がどの成分に属するかということは、逆にどのような構文の型の部分に位置づけられているかということであって、構文の型を前提にしているわけである。

実用的な文型では、抽象の段階はさらに、それ相応の実用的な要求によっ^{注)}ても、修正されるだろう。

注) われわれは、成分以下の単位は、理論的な文型にとっては直接の問題にならないと考える。実用的な文型では、単語から文までの各段階が扱われるようである。たしかに、ある成分に現われる品詞とか活用形とか助詞・助動詞とかを示した方が便利なばあいが多いだろうと思われる。しかし、文の構造の最小単位は成分である。成分以下の単位 (いわゆる自立語や付属語、接辞など) はその成分を構成する単位であって、文の構造の次元のものではない。だから、ここでは成分以下のものは、

原則として扱わない。しかし、成分を十分に認定できないばあいや、成分の下位区分などに、便宜的に、それ以下の単位（主として助詞）を利用したばあいがある。これは、研究の現段階における制約から行なったものであって、ゆくゆくは訂正されるべきものである。

1・2 方法

1・2・1 調査の手順

構文の型が以上のようなものだとすれば、それは次のような段階をへて見いだされるはずである。

- (i) 個々の文を部分に分解する。
- (ii) それぞれの部分成分を成分に分類する。
- (iii) 成分のくみあわせとしての構文を分類して、構文の型を見いだす。

実際の手順は必ずしもこの順序に一方的に行なえるわけではない。(i)は(ii)を前提にしなければ行なえないし、(ii)は(iii)を考慮しながらなされるだろう。

具体的な作業としては、われわれは、「句」という単位を認め、「句を含まない文」と「句を含む文」とに分けて、別個に分析を進め、その上で、「句」および「句を含む文」について再整理を施した。(1・2・3 b (6)「句の扱い」参照)

1・2・2 一次成分

文を部分に分けるさいに、次の方針をとった。

a 文節以下の単位には分解しない。

文節は、原則として、文の中で他の部分に対し文を構成する部分として一定のかかりうける関係(統合関係)を示す最小の単位であって、文の構成部分としては、文節より小さい単位を考える必要はない。

文節のうちでも、橋本進吉のいう「付属の関係」にある文節連続のなかの付属的な文節は、文の構成部分ではなく、それをともなった文節と合わさって1つの部分をなす。そのほかにも、「ドチラカト イウト」「ソレニモ カカワラズ」のように2文節(以上)で1つの構成部分になっているものもある。

b 一次成分に注目し、二次成分はとりださない。

文節は、文の部分としては最小のものであるが、文の構成に果たしている役

わりはさまざまであって一様ではない。われわれの作業では、文を部分に分解するさいに、このことを考慮にいられた。すなわち、文構成上の役わりに段階をつけて、一次成分に属する部分と二次成分に属する部分とに分け、分解を一次成分のものまでにとどめた。二次成分のものまでには分解しなかった。^{注2)}

注1) ここでいう一次成分とは、文の構成に一次的に参加しているという意味である。二次成分とは、直接的には、一次成分の構成に参加している成分であり、文の構成に果たす役わりが二次的という意味である。同様にして三次、四次……の成分というものも考えられる。

注2) 二次成分への分析は必要でないという意味ではない。二次成分もやはり文の成分であると考える。

われわれは、現在の学校文法でいう次のような成分を一次成分と認めた。

(a) いわゆる文の主語・述語

(b) 文の述語にかかるいわゆる連用修飾語（文の述語以外の成分にかかるものを除く）

(c) いわゆる独立語（述語以外の成分にしかかからないものを除く）

文の主語と述語が一次成分であることは問題ないと仮定して、論を進める。問題は、いわゆる連体修飾語と連用修飾語である。

いわゆる連体修飾語は、被修飾語である体言(名詞)と合わさって、全体として、主語になったり述語になったり連用修飾語になったりする。＜連体修飾語＋体言＞は、原則として文中では＜体言＞と同等の資格をもつ。したがって連体修飾語は、文の一次成分ではなく、二次成分である。(70 ページ補注参照)

いわゆる連用修飾語は、被修飾語である用言と合わさって、全体として述語となったり連体修飾語や主語（「シズカニ 歩クノハ ニガテダ」）となったりする。この点では、＜連用修飾語＋用言＞は＜用言＞と同等の資格をもち、連用修飾語は二次成分である、ということができそうである。しかし、連用修飾語は、連体修飾語とは次にあげるようなちがった面がある。

文の述語あるいは主語・述語の統合体にかかる連用修飾語は、他の成分（主語や陳述副詞などの成分）との語順のいれかえが比較的的自由である。これに反し連体修飾語と体言とのあいだには、他の成分がほとんどはいらぬ。たとえば「ケサ キレイナ アサガオガ 咲イタ」「キノウノ アサ アサガオガ

咲イタ」の意味で、「キレイナ／ケサ／アサガオガ 咲イタ」「キノウノ／アサガオガ／アサ 咲イタ」とは言えない。）

このことから、連体修飾語と体言的な成分とをひとまとめでした単位を他の一次成分に対して考えることは可能であるが、連用修飾語と用言とをひとまとめでした単位を他の一次成分（主語や陳述副詞などの成分）に対して考えることはむずかしい。まずこの点で、この種の連用修飾語を二次成分と見ることができない。

さらに、この種の連用修飾語は、主語と同じく、係助詞が自由につきうるが、連体修飾語には、それがつかない。連用修飾語に係助詞がつくということは、それが単に（単語としての）用言を修飾しているのではなく、主語と同様に、（文の部分としての）述語と関係している、ということを示している。^{注)}この点からも、この種の連用修飾語は、文の部分として、主語・述語と同じ次元にある、つまり一次成分である、といわなければならない。

注) 連用修飾語という用語は、2つの別の次元に属するカテゴリーを指すのに使われている。1つは被修飾語である用言だけと関係する概念であって、その用言が文中でどのような部分としてはたっているかにかかわりない（つまりそれを捨象した）ばあいである（「ヤキイモヲ モグモグ タベル」）。もう1つは、文の述語・主語などと同次元の概念であり、文の成分の1種である。むしろ、述語にかかるものというべきで、体言的な述語のばあいにも現われる（「ボクタチハ イツマデモ 友ダチダ」「失敗シタノハ 全部 数学ダ」）。

次のような連用修飾語は、二次成分である。

○カレハ 映画ヲ 見ニ 行ッタ。 ○カレハ シズカニ 歩ク 人ダ。 ○シズカニ 歩クノハ ニガテダ。

このばあいは、原則として、「映画ヲ 見ル」「シズカニ 歩ク（ノハ）」が全体でそれぞれ連用修飾語・連体修飾語・主語になっていて、「映画ヲ」「シズカニ」はそれらの部分になっていると見られるからである。

いわゆる並立の関係に立つそれぞれの成分も二次成分である。これらの成分は全体で主語・述語・連用修飾語などの成分としてはたらくからである。^{注)}

注) ここでは、並立と同格とを区別した。同格というのは、2つ以上の部分が、それぞれ同じ資格で他の部分と関係しているものである。（2・2・3 a 「同格」参照）

○学校ヤ 家庭ニ テレビガ アル。（並立）

○学校ニモ 家庭ニモ テレビガ アル。(同格)

いわゆる独立語は、文の述語以外の成分の部分に含まれないかぎり、一次成分である。^{注)}

注) たとえば「家へ 帰ルト 『アンタ、ドコヲ ホツキ歩イテ イタノ!』 ッテ ドナラレタ。」などの「アンタ」は、引用の部分に含まれているから、二次成分である。

このほかに、われわれは、従属句という単位を認める。これについては、

1・2・3 b (6) 「句の扱い」参照。

補注) われわれは、文の成分を一次・二次……と分け、連体修飾語を二次成分としたが、これに関しては、次のような問題がある。

(i) 連体修飾語の中には、次の体言のはたらきを制約するものがある。

たとえば、

○ロクナ 人ガ イナイ。○メッタナ コトハ イエナ^イ。○コレホド 染シイ コトハ ナ^イ。

などでは、<連体修飾語+体言>の主語は単なる<体言>の主語とちがって、述語の打消しの表現と呼応しなければならない。

(ii) 連体修飾語がないと意味をなさない構文がある。たとえば、

○カレハ 大キナ 手デス。○コノ 機械ハ ボタンヲ 押スダケデ 動ク シクミデス。

1・2・3 一次成分の分類

a 一次成分分類の立場

一次成分の分類にあたって、われわれは、「原則として通説に従うが、構文の型を明らかにするという必要から、部分的にそれを修正する」という立場をとった。その結果、従来の一般的な説とはかなり形の変ったところがある。しかし、まだわれわれの分類は中途はんばなものであり、方法論上の一貫性にも欠けている。新しい概念や用語をとりいれた部分は、すべて中間的な試案である。^{注)}

注) 文の部分は、一定の意味と一定の形との統一体である。だから文の部分の分類は、その意味と形との両面からなされなければならない。一定の形のうらづけない意味による分類や、もっぱら形の上からの分類は、一面的であり、不十分である。これがここでの分類の原則である。しかし、現在のところ、この原則は、十分に適用されていない。われわれにとっては、いわば努力目標である。

ここでとった分類の結果のおもな特徴は、次のとおりである。

(i) 主語・述語については通説に従う。

(ii) いわゆる連用修飾語は解体し、新たに4つの成分を立てる。

(以上の諸成分については、係助詞のあるなしなどのちがいを無視する。)

(iii) 独立語の範囲を限定し、そのほかに、1つの成分(「陳述的成分」と呼ぶもの)を立てる。

b 一次成分の種類

以上のような立場で、われわれは、次のような成分を認めた。

述語・主語・目的語・補語・連用語・状況語・陳述的成分・独立語
こうした成分のほかに「従属句」という単位を認めた。(1・2・3 b (6) 「句の扱い」参照)

以下、各成分および従属句の特徴や認定や範囲などについて、注意すべきことをあげる。

(1) 述語(略号 ^{注)}Z)

注) 以下、各成分と従属句には略号を与える。原則としてローマ字のかしら文字をこれにあてる。

述語は、文中で主語・いわゆる連用修飾語・独立語などと関係する文の成分である。述語になっている体言にかかる連体修飾語は、述語内部の二次成分と認める。

文を終止する機能をもった成分には、述語のほかに、独立語がある。それとの区別については、1・2・3 b(5)「独立語」の項参照。

述語まで言いきらずに、途中で臨時的に中断したと認められる文は、「中断文」として、構文の対象からはずしてある。^{注)}(27ページ参照)

注) 臨時的でなく、慣用的に述語を言わない表現が、資料にもいくらかあった。これらの扱いは保留とした。

▽デハ コレデ。(126-27-11) ▽ソレデハ キョウハ コノ ヘンデ。
(127-33-7)

次のようなものは、述語として扱った。(2・2・3 e「はしより」参照)

▽エビラ ミジン切りニ イタシマシタノガ 大サジ 二杯ホド。(127-12-13)

いわゆる付属の関係にある文節連続からなる述語があるが、ここでは、その範囲をややひろげて、次のような文節連続を述語と認めた。これを、仮に「複合述語」と呼ぶことにする。(* は、共通資料にその例が見えるものである。)

- (i) ○～シテ イル* (オル*, イラッシャル*, オイデニ ナル) ○～シテ
アル* (ナイ*, ゴザイマス*) ○～シテ シマウ* ○～シテ オク* ○～シ
テ ミル* (ゴランナサイ*) ○～シテ クル* (マイリマス*) ○～シテ イ
ク* (マイリマス*) ○～シヨウト スル*
- (ii) ○～シテ ヤル* (アゲル) ○～シテ モラウ (イタダク*) ○～シテ ク
レル* (クダサル*)
- (iii) ○オ～ニ ナル* ○ゴ～ニ ナル
- (iv) ○～デ アル* (オラレル, イラレル*, イラッシャル, ゴザイマス) ○<形
容詞のウ音便の形> ゴザイマス*
- (v) ○～シタリ スル* (イタシマス*)
- (vi) ○～ワケデス* ○～ハズデス* ○～ツモリデス* ○～シダイデス*
- (vii) ○～カモ シレナイ* ○～カモ ワカラナイ*
- (viii) ○～シテ ヨイ (イイ*, ヨロシイ) ○～デ ヨイ (イイ, ヨロシイ*) ○～
シテ ホシイ* ○～シテモ ヨイ (イイ*, ヨロシイ*) ○～シテモ 結構デス*
○～シテ コマル* ○～シテハ コマル* ○～シテハ ダメダ* ○～シテモ
ダメダ* ○～スレバ ヨイ (イイ, ヨロシイ*) ○～シナケレバ ヨイ* (イイ,
ヨロシイ) ○～シタラ ヨイ* (イイ*, ヨロシイ*) ○～スルト ヨイ (イイ*,
ヨロシイ*) ○～スリヤ イイ* ○～シナケレバ ナラナイ* (ナラン*) ○～
シナキャ ナラナイ* (ナラン*) ○～シナキャ イケナイ* ○～シテハ イケナ
イ* ○～シナケレバ イケナイ* ○～シナクテハ ナラナイ*
- (ix) ○～シツツ アル*
- (x) ○～カ ドウカ*
- (xi) ○～ニ チガイナイ*

その他次のようななかば慣用句的な文節連続も全体で述語とした。

○～ワケニハ イカナイ (マイリマセン) ○～セザルヲ エナイ ○モウス マデ
モ ナイ ○シカタガ ナイ ○シヨウガ ナイ ○デキッコ ナイ ○オ目ニ カケル
2文節以上の連続が1つの複合述語に移行する現象にはさまざまなタイプが
あり、その移行の段階にもさまざまなものがある。この調査で、複合述語と認
めずにおいたものななかにも、これに近いもののがかなりある。これについ
ては、2・2・3f「複合述語的な構文」参照。

(2) 主語 (略号 S)

ここでは、便宜的に、「<体言>ガ」の示す関係で述語にかかっていると認
められる成分を主語と認定した。実際には「<体言>ハ、モ、サエ…」などの
形をとっていても、その表わす関係が「<体言>ガ」と同じであると認められ
たものは、主語と認定した。いわゆる「総主」や時枝誠記のいう「対象語」な

ども主語とみなした。^{注)}

▽ジョンソンテノハ ワタクシ 知りマセン。(122-10-1)

▽子ドモタチハ 感受性ガ 強イ。(124-21-3)

▽シカシ タイガイノ 卑ナラ コレデ マイッテ シマイマス。(126-24-4)

▽デ ニー ソノ ツギガ ポリエチレン。(127-27-20)

注) いわゆる総主と共存する第2の主語をここでは仮りに「部分主語」と呼ぶ。上の例の「感受性ガ」など。

(3) いわゆる連用修飾語の扱い

いわゆる連用修飾語のなかには、文の成分としてかなり異質のものが入れられている。構文の型を明らかにするというわれわれの立場からは、こうした大ざっぱな分け方では不十分である。

われわれは、連用修飾語という成分を解体し、あらたに、構文上の機能からA類、B類の2つの種類を立て、さらにこれらを下位区分して、次のような4つの成分を認めた。

A類 (i) 目的語 (略号 M)

○子ドモニ ミカンヲ ヤル ○市場カラ 店ニ ミカンヲ 運ブ
○石炭カラ 繊維ヲ 作ル ○イスニ ヨリカカル ○駅ニ 近イ

(ii) 補語 (略号 H)

○夕方ニ ナル ○サビシク ナル ○壁ヲ 白ク スル
○彼女ヲ 先生ト ミナス ○キノウ 帰ッタト イウ

B類 (iii) 連用語 (略号 R)

○静カニ 歩ク ○ボンヤリ 山ヲ 見ル ○ヤキイモヲ モグモグ
食ベル ○リンゴヲ ミツ 買ウ ○急ニ 静カニ ナル

(iv) 状況語 (略号 J)

○ケサ アサガオガ 咲イタ ○夕方ニ 友ダチニ 会ウ
○砂場デ 遊ブ ○病氣ノ タメニ 休ム

A類(i)目的語(M)は、述語の表わすことからの成立に参加する対象(実体あるいは実体化されたこと)を示す。

(ii)補語(H)は述語の表わすことからの成立に参加する属性(あるいは実体の属性的な面)——変化の結果の状態や認識活動・言語活動の内容——を示す。

これらは、述語の自立語の性格によって、いわば、要求される成分である。

「ヤル」という動詞は、「ダレカニ ナニカヲ ヤル」のであって、「ダレカニ」「ナニカヲ」の成分を要求するし、「運ブ」という動詞は「ドコカカラ ドコカニ ナニカヲ 運ブ」のであって、「ドコカカラ」「ドコカニ」「ナニカヲ」の成分を要求する。また、「ミナス」という動詞は、「ナニカ(ダレカ)ヲ ナニカ(ダレカ・ドンナカ)ト ミナス」のであって、「ナニカ(ダレカ)ヲ」「ナニカ(ダレカ, ドンナカ)ト」の成分を要求する。

述語(の自立語)は、このように文法上何かを要求するあるいはしないという要求上の性格をもっていて、それに応じない目的語・補語は、その述語と共存しない。^{注)}たとえば、「ヤル」「与エル」「贈ル」「手渡ス」などは

○子ドモニ ミカンヲ ヤル(与エル・贈ル・手渡ス……)。

のように、所有権の移動の対象「ナニヲ」とその相手の「ダレカニ」とを要求する性格をもっているが、この種の動詞は、「運ブ」「持参スル」のような移動動作の要求するゆくさきの「ドコニ」とは共存しない。(「アパートニ ミカンヲ ヤル」と言ったばあい、「アパートニ」はゆくさき(場所)ではなく、人格化されてミカンをもろう相手となっている。)逆に「運ブ」「持参スル」のような種類の動詞は相手の「ダレカニ」とは共存しない(「子ドモニ ミカンヲ 運ブ」とはいえない)。このことは、A類(目的語・補語)と述語(の要求上の性格)とは、お互いに制約関係があることを示している。

注)「コンドハ 子ドモニ ミカンダ」のような、一定の場面・文脈の中ではじめて意味をもつ文のばあいは、また別である。これについては2・2・3 e「はしより」参照。

さらに、2種以上の要求上の性格をもった述語は、目的語・補語に属するどの成分がつくかによって、そのうちの一つの性格が実現する。たとえば「教エル」「作ル」「ヌル」は、

子ドモヲ 教エル	(ツイードデ オーバーヲ 作ル ツイードヲ オーバーニ 作ル
子ドモニ 英語ヲ 教エル	
カベニ ペンキヲ ヌル	
ペンキデ カベヲ ヌル	
カベヲ 白ク ヌル	

のように、2種(以上)の要求上の性格を持っているが、これが同時に実現することはない(たとえば、「子ドモヲ 英語ヲ 教エル」「ツイードデ オーバーニ 作ル」とはいえない)。「ツイードデ」という材料を示す目的語がくれ

ば、生産物は「オーバーユ」という目的語で示されなければならないし、「ツイードユ」という状態変化の対象を示す目的語がくれば、生産物は、「オーバーニ」という変化の結果の状態を示す補語で示さなければならない。このことは、目的語・補語は述語を介して、お互いに制約しあっていることを示している。^{注)}

注) この種の「～ユ」「～ニ」「～デ」などが動詞を介してもつ相互関係についての記述は、奥田靖雄『を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ』(1960～1961)『に格の名詞と動詞とのくみあわせ』(1962) (ともに言語学研究会での研究発表プリント) に負う。

B類の表わすことがらは、述語の表わすことがらの成立に直接参加するものではない。この類は、述語の(要求上の)性格によって要求される成分ではない。

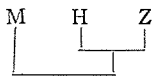
(iii)連用語(R)は、述語(あるいは述語にかかる主語・目的語・補語とのくみあわせ)の表わすことがらの性質・ようす・程度など、属性を一層くわしく示す成分である。

(iv)状況語(J)は、述語(あるいは述語にかかる主語・目的語・補語・連用語とのくみあわせ)の表わすことがらを取りまく外的な状況(時間・空間・原因・理由・条件……)を示す成分である。

A類のなかの目的語(M)と補語(H)とのちがいても、単に意味的なものではなく、あとであげるように、その表現形式にちがいがあがる。また目的語と補語とが共存するばあい、

- 彼女ヲ(M) 先生ト(H) ミナス。
- 憲法ニ(M) 戦争放棄ト(H) 書イテ アル。
- 計画ヲ(M) ホゴニ(H) スル。

のように、ふつうの語順では、補語の方が述語にちかい位置に現われる。目的語・補語・述語の表わす3つのことがらは、



のような関係でむすびついているとみなすことができる^{注)}だろう。

注) さらに一步進めて、H Z全体をSやMに対して、述語であるとする(Hを一次成分としてとりたてず、Zの構成部分とみる)ことも考えられる。

B類のなかの連用語(R)と状況語(J)とのあいだにも、述語に対する関係の仕方のちがいに応じて、語順のちがいがあるようである。ふつうは、連用語の方が述語に近い位置に現われる。

○ケサ(J) アサガオガ キレイニ(R) 咲イタ。

次に各成分について説明を補足する。

(a) 目的語 (略号 M)

これには体言あるいは体言的な性格を帯びた形式(「～スルノ」)に(「ガ」以外の)格助詞のついたものの大部分になる。これには次のようなものがある。(これは厳密な下位区分ではなく、便宜的なものである。)

(i) 「<体言>ヲ」の表わす関係で述語にかかるもの(略号 M₁)

これは具体的には、「～ヲ」の形のほかに、「～ハ」「～モ」「～サエ」^{注)}や助詞のつかない形「～」などの形をとる。

○ソウメン類ヲ 召シ上ガル ○足首ヲ マワス ○ラジオヲ 聞ク ○精神的ト
イウ コトバラ 使ウ ○訂正ヲ スル

○空ヲ 飛ブ ○家ヲ 出ル

注) ▽ソレカラ パセリハ アー フタツ ミツツニ コウ チギリマシタ モ
ノヲ イレマシタ。(127-16-17)

などの_____の部分は～ヲの関係に立つと見ない(1・2・3 b(4)「陳述的成分」参照)。

なお、「暑イ ナカヲ タイヘンデシタネ」「遠イ トコロヲ フザワザ オイデクダサイマシテ……」などの「～ヲ」は状況語とする。

(ii) 「<体言>ニ」の表わす関係で述語にかかるもののうち、次のようなもの(略号 M₂)

(ありか・ゆくさきなど)^{注)} ○日本ニ ソウイウ 人ガ イル ○ココニ 香料ガ
並ンデ イル ○本ニ 書イテ アル ○公園ニ 行ク

(相手) ○子ドモニ 尋ネル ○政府ニ 申シイレル ○磯村サンニ オ願イス
ル ○ミナサンニハ ワカッテ イル

(対象) ○義父ノ 孫ニ アタル ○コノ 点ニ 気ヅク ○駅ニ 近イ

「<体言>ニ」の形で表わされるものでも、時間・場合の意味を表わすもの(「夕方ニ 出カケル」など)は状況語とする。また、変化の結果や精神活動の内容を示すもの(「夕方ニ ナル、富士山ニ 見エル」)は補語

とする。

注) 場所を表わす「～ニ」を目的語とし、「～デ」を状況語としたのは次の理由による。

- (1) 「～ニ」の場所は、述語の自立語の表わすことからの成立に参加するものごととして、それに要求される成分であるのに対して、「～デ」の場所は、ことからの成立に直接に参加するものごとではなく、そのことがらより外的な状況を示して、述語の自立語によって要求されるものではないこと。
- (2) 場所の「～ニ」は、他の目的語の「～ニ」(相手など)と、特殊なばあいを除いて共存しないのに対し、場所の「～デ」は目的語の「～デ」(材料など)や場所の「～ニ」と共存する。
- (3) 多義的な動詞で、相手の「～ニ」と場所の「～ニ」とのどちらを要求するかに応じて意味が変わるものがある。(「子ドモガ ムコウ岸ニ 渡ル」「(給料ガ) 全員ニ 渡ル」など。場所の「～デ」と目的語の「～デ」との間にはこうしたことはないようである。

(iii) 「<体言>へ」の表わす関係で述語にかかるもの(略号 M_h)

これの示す関係は(ii)M_hの一部分と重なるので、M_hからM_hをとりたてる必要はないかもしれない。

○学校へ 行ク

(iv) 「<体言>ト」の表わす関係で述語にかかるもののうち、次のようなもの(略号 M_t)

(比較・結合・異同等の対象) ○Aト 結ビツク ○ヨソノ 子ト 比ベル
○ソースト 合ウ ○前ノ 額ト 違イガ ナイ ○日本ノ 基本法ト 同ジダ
(相互的動作の相手) ○太郎ト 結婚スル ○太郎ト ケンカスル ○Aチームト
戦ウ ○先方ト 話シアウ ○親類ト ツキアウ

「<体言>ト」の形で表わされるものでも、変化の結果(「引キ分ケトナル」)や精神活動・言語活動の内容を示すもの(「引キ分ケダト 思ウ」)は補語とし、一緒に行動する仲間を示すもの(「太郎ト 出カケル」「太郎ト オ茶ヲ ノム」)は状況語とする。

(v) 「<体言>カラ」の表わす関係で述語にかかるもののうち、次のようなもの(略号 M_{ka})

(出どころなど) ○タナカラ オロス ○窓カラ ガラスヲ ハズス ○駅カラ
出発スル ○窓カラ 出ル ○表カラ ^{ヒョウ} 省カレル
(原料など) ○アンモニアト 炭酸ガスカラ 作ラレル

(相手) ○オカアサンカラ タンナメラレル

「<体言>カラ」の形で示されるものでも、時間や原因の意味を表わすもの、(「朝カラ 降ッテ イル」「フトシタ コトカラ ケンカニ ナル」)は状況語とする。

(vi) 「<体言>デ」の表わす関係で述語にかかるもののうち、次のようなもの(略号 M_デ)

(成分など) ○人デ イッパイダ

(材料など) ○ツイードデ オーバーヲ 作ル

「<体言>デ」の形で示されるものでも、空間や原因・理由を表わすもの(「運動場デ 遊ぶ」「病気デ 休ム」)は状況語、手段・方法やようすを表わすもの(「ナタデ マキヲ 割ル」「郵便デ 送ル」「ハダシデ 歩ク」)は連用語とする。

(b) 補語(略号 H)

いわゆる連用修飾語のうち

(i) 状態変化を表わす動詞的述語にかかり、変化の結果の状態を表わす成分(略号 H₁)

(ii) 言語活動、知覚活動、思考活動などを表わす動詞的述語にかかり、その内容を表わす成分(略号 H₂)

および、それらに準じるものを表わす成分。

結果的な補語(H₁)には

<体言>ニ・ト

<形容詞・形容動詞>連用形

<用言・体言+助動詞>連用形

<副詞(コウ・ソウ・アア・ドウ)>

などになる。

○一人前ノ 独立国ニ ナル ○強ク ナル ○ジェリーミタイニ スル

○信頼デキル 人間ト ナル ○原水爆ノ 基地ニ サレル

内容的補語(H₂)には、結果的補語(H₁)と同じ形になるほかに、

<体言+助動詞の終止形>ト・ニ・カ

<用言(+助動詞)の終止形>ト・ニ・カ

などになる。

○林ト 申シマス ○舞台監督ノ コトヲ ブタカント イウ ○コノ 会ヲ ウレシク 思ウ ○行キタイト 思ウ ○コウ 書イテ アル ○ナンノ 回答ナノカ
ワカラナイ ○富士山ニ 見エル ○本気デ 反対スル モノト 見ラレル

補注) 補語にも、要求の度合いにいろいろある。「ナル」という動詞述語は、結果的な補語を要求する度合いが非常に強く、具体的な文脈・場面の中でも、省略されることはまれである。これに対して、「変ワル」などは、結果的な補語を要求できるが、必ずしもつねに要求するとはかぎらない(「信号ガ(赤ニ)変ワル」など)。

(c) 連用語(略号 R)

いわゆる連用修飾語のうち、述語(または述語とそれにかかる成分とのくみあわせ)の表わすことがら(動作・状態・性質……)の内的な属性(質・ようす・手段・方法・量・程度など)を表わす成分。

これには、主として形容詞・形容動詞の連用形、(いわゆる)情態副詞・程度副詞・数量を表わす体言のはだかの形、ようす・手段・方法を表わす「<体言>デ」の形などになる。

さらに、「<動詞>テ」の形のなかのあるもの(「ナランデ 歩ク」の類)「<動詞>ナガラ」の形のなかのあるもの(「ヤキイモヲ 食ベナガラ 歩ク」の類)もこれになる。(1・2・3 b (6)「句の扱い」参照)

具体的な用例は2・2・1 b (1)「連用語拡大」参照。

補注) なりゆきを示す「ウマク(マズク……) イク」や態度を示す「大キク 出ル」などの表現では、「ウマク(マズク……)」「大キク」などがなければ「イク・出ル」は意味をなさない。これらの動詞はこうしたくみあわせの中ではじめて特定の意味をもつ。これは慣用語的なくみあわせであって、一定の動詞などが目的語や補語を要求する現象とは同列に扱えないだろう。

(d) 状況語(略号 ^{注)}J)

注) 述語(Z)と同字となることを防ぐため、ヘボン式ローマ字を利用した。

いわゆる連用修飾語のうち、述語(または述語とそれにかかる成分とのくみあわせ)の表わすことがらをとりまく状況的なことがら(時間・空間・原因・理由・事情・目的・条件……)を表わす成分。

これには、時間の副詞や時間・ばあいを表わす体言のはだかの形や「～ニ」

「～カラ」「～マデ」「～マデニ」の形，空間を表わす体言の「～デ」「～ニ
オイテ」の形，原因・理由・事情を表わす体言の「～デ」「～カラ」「～ノタ
メニ」の形，目的を表わす体言の「～ニ」「～ノタメニ」の形，などがある。
さらに，「<用言(+助動詞)・体言+助動詞>バ」「～タラ」「～ナラ」「～テ
モ」「～ト」「～テ」のなかのあるもの，「～ナガラ」のなかのあるもの，「～
ノデ」「～ノニ」「～クセニ」「～トコロガ」の形，および動詞の「～テカ
ラ」の形（「家へ 帰ッテカラ 食事スル」の類）がこれになる。（1・2・3 b
6）「句の扱い」参照）

具体的な用例は，2・2・1 b (2)「状況語拡大」参照。

なお，次のようなものは，述語の自立語の性格によって要求されるものとい
うことができないであろうし，意味的にも，述語の自立語の表わすことがらの
成立のためにそれらが前提になっているというほどのことはなく，一般の目的
語・補語と述語とのくみあわせの表わすことがらより相対的に外的なことがら
を表わすと認めてよいだろう。そこで，仮りに状況語に置いておく。（これら
の成分を連用語としなかったことについては，状況語は連用語の二次成分とな
りにくいという仮説を適用することができるかもしれない。1・2・3 b (6)「句
の扱い」参照）

一緒に行動する仲間を示す「～ト」「～ト イッシヨニ」

資格などを示す「～ト シテ」

比較の基準などを示す「～ヨリ」「～ト チガッテ」「～トハ 別ニ」

その他「～ノ ホカニ」「～ニ 応ジテ」「～ニ 従ッテ」など

補注)「～ニ ツイテ」「～ニ 関シテ」「～ニ ヨッテ」「～ニ トッテ」などは，にわか
に所属をきめかねる。用法を分析して，いくつかに分けなければならないかも知れ
ない。たとえば，「～ニ ツイテ」は，「試験ニ ツイテ 話シアウ(考エル…
…)」などでは目的語的であるし，「試験ニ ツイテハ 家庭教師ニ 一切ヲ 任シ
タ」などでは，次に述べる「陳述的成分」のようである。

なお，いわゆる陳述副詞の類は，次の「陳述的成分」とみなした。

(4) 陳述的成分(略号 T)

この成分は何らかの点で，もっぱらその文の陳述的な面に関係するものである。
「陳述的成分」と呼ぶのは，この成分だけがその文の陳述を荷なっている
とか，陳述に関係しているとかという意味ではない。他の成分ももちろん陳述

に關係する。この成分は他の成分とくらべてどちらかというと陳述的な面にだけ關係する、という意味である。

ここでは、「陳述的な面」と一口に言うけれども、その内容はけっして単純なものではない。述語における表現意図に関するものがある。またその文に述べられていることがらに対する話し手の一種の評価的な態度を示すものもある。また、ひゆ的に言えば、もっと外側の、ことばの上のことだけに關係するものもある（あとでいう文脈的導入の部分）。いわゆる提示的な表現に関するものもある。これらをひっくるめて言っているわけである。

陳述に關係した性格がつよいという点では「独立語」(後出 1・2・3 b (5) 参照) と似たところがある。ちがうところは、独立語はそれだけで1つの構文として現われることがある(独立語構文)のに対して、こちらはそれが無いということである。陳述的成分はそれだけ従属性がつよい。

従属性がつよいという点では、陳述的成分は連用語や状況語に似ている。ちがうところは、連用語や状況語が主としてことがらの面に關係するのに対してこちらはそれとちがって上にのべたようにもっぱら陳述的な面に關係するということである。

これに属するものは、表現意図にもっぱら關係あるものの類、文脈的導入の部分(後述)、評価的な意味をもった部分、提示的部分、およびその他である。

(a) 表現意図にもっぱら關係あるもの

これは主としていわゆる陳述副詞^{注)}の類である。

トウテイ、ケッテ、イチガイニ、アンマリ、モウトウ、ドウモ、ドウヤラ、タブン、カナラズ、ムロン、モチロン、ドウシテモ、ドウカ、ドウゾ、ゼヒトモ、マタ、ヤハリ、ナルホド、ジツハ、マコトニ、ジツニ、ホントニ、タシカニ、ゼツタイニ など。

注) 陳述副詞と呼ばれているものにもいろいろあって、ほんとうはさらに分類しなければいけない。少なくともここでは、ここでいうところの句(1・2・3 b(6)参照)にしか現われないものは考察の対象から除いておくことにする(「イクラ、モン、タトイ」の類)。

(b) 文脈的導入の部分

これは大きく分けて、2つの類になる。

その1つはいわゆる接続詞の類である。

アルイハ、カラ、^{*}ケレドモ、コウシテ、コレデ、サテ、シカン、シカシナガラ、シ

カモ、シカルニ、シタガッテ、ソウスルト、ソウイタシマストイウト、ソウナッテクルト、ソコデ、ソシテ(ソウシテ、ソウシマシテ)、ソレカラ、ソレデ、ソレデハ(ソイジャー)、ダカラ、ダカラトイッテ、タダ、タダシ、ツマリ、デ、デスカラ、デスケレドモ、デハ(ジャ)、ト、トコロガ、トコロデ、トニカク、トトモニ、ナゼナラバ、マタ、……。 *「ソレカラ」の意。

もう1つは、その大部分がここでいう句(1・2・3 b (6)参照)と同じ形をもっているものである。なかには、成分とせず従属句(1・2・3 b (6)参照)としたものと似た形をもつものもある(「～ガ」「～ケレド」など)。この種のものの特徴——とくに内容的な面での特徴は、それがその文の表わすことがらとか、そのことがらに対する話し手の表現意図とかに関係するというよりも、もっぱら“ことばの上のこと”(verbal な面)に関係しているということである。つまり、これらはある文によって表現される内容に直接関係するものではない。その内容を表現することばそのものに対して補足的な説明を加え、かつそのことばを導入するものである。「ヨケイナ コトデスガ、～ヲ モウシアゲル コトニ ナリマシタガ、～ハ ソレクライニ イタシマシテ、ソレヲ モウイッカイ モウシマスト、～カントンニ イエバ……」の類がそれである。^{注)}

注) 「カントンニ イエバ、A氏ハ B君ヲ ダマシタノデス。」というようなばあいの「カントンニ イエバ」はこの文脈的導入の部分である。「カントンニ イエバ ワカッテ モラエルダロウ。」の「カントンニ イエバ」は文脈的導入ではない。状況語(J)である。

(c) 評価的部分

その文でのべられていることがらに対する話し手の態度——とくに評価的な態度を表わす部分。独立語にもこれとおなじようなものがあるが(「カナシイカナ」)、それは単独でも現われうる形をもつものである。こちらの方はそれができない。われわれの資料であきらかにここに該当するとみられるものとしてはつぎのようなものがあつた。

▽ヒジョウニ ザンネンナ コトデ エー ヒョット シタラ コノ ササキサント
オッシャル オ名前ガ ウー 仮名^カデハ^イ ナカッタカト 思ウデス。(127-30-3)

もっとも、次のようなのはどちらにしていいか問題である。「サイワイ 一命ダケハ トリトメマシタ。」「不幸、大学ノ 入試ニ 失敗シ……。」「ザンネン、ヤラレタカ。」とくに最後のものなどは独立語としてよさそうである。

(d) 提示的部分

この種のものについては問題が多い。いろいろなものがこのなかにはいる。大ざっぱに整理してみると、つぎの2種になる。(i)「～ハ」「～モ」の形をもつもの。格的な性格がはっきりしないものをここに入れる。格的な性格がはっきりしているものは主語あるいは目的語に入れた。(ii)「～ダ(デス、デアリマス)ガ」とか「～ダ(デス、デアリマス)ケレド(ケレドモ)」の形をもつもの。

▽ソレカラ パセリハ アー フタツ ミツニ コウ チギリマシタ モノヲ 入
レマシタ。 (127-16-17)

▽ツケアワセノ パレイショデ ゴザイマスガ コレハ アノ オ タテニ 四ツカ
六ツグライニ オ割リニ ナリマシタ モノヲ (略) 塩 コショウノ オ味ヲ ト
トノエマシタ モノデ ゴザイマス。 (127-18-20)

「～ハ」「～モ」の形で問題になることは、第1には主語や目的語にしたものとの関係。第2には独立語としたものとの関係。第1についていうと、主語や目的語にしたものはその格的な性格がわりにはっきりしているから(形の面での現われをいうならば「～ガ」におきかえられるとか、「～ヲ」におきかえられるとか)、そうしたのだが、ここで扱うものはそれがはっきりしない(たしかに「～ニ ツイテ」とか「～ニ トッテ」とかといいかえられないでもない例も多いのだが、それらは格として扱われるものなのか、格としても一体何格な^{注)}のか)。しかし、主語や目的語にしたものでも、ここで扱うものとの共通点はあると考えられる。とくにその共通点をとり上げる立場もありうる。ことがらの関係に重点をおく観点からするならば、主語や目的語のようにことがらの関係(このばあい格関係)のはっきりしているものと、それがはっきりしていないもの(ひゆのないい方をするならば、ことがらの関係がゆるめられて、ぼやけてしまったもの)とは区別される。この点まだ問題が残っている。第2についていうと、やはり、ここで扱ったものと独立語のなかのあるもの(「提示」としたものの。1・2・3b(5)参照)とは共通性がある。にもかかわらず区別したのは、それだけで文として扱われる形であるか、ないかということである。

注) 上に出した例の「パセリハ……」の「パセリハ」のようなものは格的な性格がはっきりしないものと見た。三上章のように、これは<パセリノ フタツ ミツニ

チギッタ モノ>の意味と見てそこに格的な性格を認めようとする意見もある。

(『象ハ鼻ガ長イ』)

(e) その他、陳述的成分とすべきだと考えられるもの

つぎのようなものがある。ただ、その位置付けは問題だが――。

▽デ ドチラニ シテモ 子ドモサンノ 寝巻ノ アリカタト イウ コトラ シッ
カリ 知ッテ オク コトガ アノ ダイジデス。(125-1-11)

▽ソウイウ 子ハ ドチラカッテ イウト イツノ マニカ 動ク コトガ ヘタニ
ナッテ イマス。(126-9-14)

▽デ コノ ヤキモチハ 総領ノ オ子サマニ トクニ 現ワレルノデハ ナイデシ
ョウカ。(125-11-15)

(5) 独立語(略号D)

文の終止の位置に現われる成分で、それに伴う表現意図がおもに①(コミュニケーションの成立に関する表現)、②(詠嘆表現)と④(応答表現)であるものがある。これを「独立語」(D)という。

これに属するおもなものは、応答のことば、「オヤ」とか「マア」とかといった問投詞の類、呼びかけのことば、あいさつのことば、提示(「結婚、ソレハ 恋愛ノ 墓場……」など)、また挿入の句として扱ったものの一部分(「オシイカナ」^{注)}「カナシイカナ」……)などである。

注) ふつうの学校文法でいう独立語は、ここでいう独立語(D)と、陳述的成分(T)の一部を含む。その点やや内容にずれがある。

文を終止する成分としては他に述語がある。独立語と述語とのちがいは、どこにあるか。第1はそれに伴って現われる表現意図についてである。述語の方には②(判叙表現)、③(要求表現)が現われうる。独立語の方はそれがだめである。第2に、述語は、もちろんそれ単独で述語構文をなすが、多くのばあい、主語(S)、目的語(M)、連用語(R)、状況語(J)のいずれか、あるいはすべてを伴って現われる。独立語は、それが文を終止するばあい(つまり独立語構文――後出)、上^{注)}にあげた諸成分(S, M, R, J)と共存することがない。

注) これら諸成分と独立語が共存するばあいは、その全体の構文は述語構文である。また、名詞だけの文のばあいは、上にあげたような述語構文を特徴づける諸成分がないから、その名詞(文)を独立語(構文)と見るか、述語(構文)と見るか、判定に困ることが少なくない。その判定は表現意図が何であるかということにかかっている。

独立語がそれ単独で、あるいは他の成分（別のD，または陳述的成分(T)）を伴って終止の位置にたつ構文は「独立語構文」である。

おもなものをあげれば次のとおり。

(a) 間投詞の類

▽コレガ マア 池田流ノデショウカ。(126-26-14)

▽エー マア 概略 ウー 現在 ヤッテ オリマスマデニ 到達シタ モノヲ
チョット注) 項目ダケ エー ソコニ アゲテ エー オキマシタ。(123-38-1)

注) この「チョット」は「紫色ヲ チョット スル」, 「ガーリックヲ チョット フリカケル」といったもの——つまり連用語(R)とは見ない。もつと間投的なものとする。むしろ次に近い。「ネエ オ前サン, チョイト。」

(b) 呼びかけ

▽エー ミナサン イマ ソビエトノ 人工衛星 第三号ガ 上空 高ク 飛ンデ
オリマス。(124-29-3)

▽ドウモ 杉先生 アリガトウ ゴザイマシタ。(127-31-6)

(c) 挿入の句としたもののなかのあるもの

▽シカシ カナシイカナ コレガ ホントウニ ^{イッポン}一本ニ 結集サレテ、ソレガ ホントウノ 自由民主党ト 政治ノ 舞台デ タタカウヨウナ 政治的ナ 勢力ニマデ
コレガ 発展シテ キテ イナイ。(124-34-12)

この「カナシイカナ」は形の上からいうと、それが文を終止する位置に現われるならば述語構文とするという考え方もありうる。しかし、この形がまともな述語構文であると認められるのは、古代語あるいは文語のことであって、現代語ではそうとはいえない。「彼ノ 死ガ(ハ) カナシイカナ。」「財布ヲ オトシテ タイヘン カナシイカナ。」などということはできない。また「アノ トキハ カナシカッタカナ。」などともいえない。現代語では、「カナシイカナ」とか「オシイカナ」とかといった表現は文語のいわば化石化した形なのであって、ある限られた場面のもとにある効果をねらって使われているだけである。いわば、「 」に入れて使われているようなものである。だから、文を終止するばあいにも述語構文とは考えない。独立語構文とする。

(「君ハ……白玉楼中ノ 人ト ナル。アア カナシイカナ。」)

(d) 応答, その他

▽アトデ ムシロ コレハ ^{サイゴ}済美研究所ノ ホウカラ マトメテ ゴ報告イタダイタ

ホウガ……。ソウカ。イケナイカ。ソウ イッチャ イケナイナ。ハイ。

(122-11-2)

(e) 提示

▽コノ 電器材料ナンカニ 使ウ ベークライト コレハ 石炭酸ト ホルマリンナドカラ 作ラレル。 (127-27-7)

▽第三ノ 転機, ソレハ 造船疑獄事件ニ 佐藤サント トモニ 疑イヲ カケラレタ コトト, 吉田内閣ガ 総辞職ニ 追イコマレタ トキデス。 (126-26-6)

▽素材ガ, 反映 (スレ) シタ モノ, ソレヲ 話題ト 名ヅケマス。 (123-20-14)

こういったものをなぜ独立語とするか。問題は文を終止する位置に現われることがあるのかということだが、表札の名前、看板の店名や品名、新聞、雑誌などにおける文章の見出しなどがそれだ^{注)}と考える。われわれの資料のなかにも次のようなものが見いだされた。

▽ソレカラ, ツケアワセノ ジャガイモ。 (127-15-16)

注) こういう種類のものは文ではないとする見方もあろう。

(f) 句の扱い

作業の上で、ふつうの成分とは扱いを一応別にして「句」という名前で呼んだものがある。大ざっぱに言って、重文とか複文とかといわれているものに出てくるもので、従属句（その他、従文、subordinate clause, Nebensatz…）などの名前で呼ばれているものである。句として扱ったものをまとめてあげると、次のとおりである。

(i) 用言（用言＋助動詞、体言＋助動詞）の連用形で終わっているもの（連用中止）、また、名詞述語の中止も。^{注1)}

(ii) 次のような接続助詞などで終わっているもの。タリ、テ、ズ(ズニ)、ナイデ、ナガラ、バ、タラ、ナラ、テモ、^{注2)}ト₁、ト₂、ノデ、ノニ、ガ、カラ、ケレド、シ。

(iii) いわゆる形式名詞（多くのばあい形式名詞＋助詞）のうちの接続助詞的な性格をもっているもので終るもの。クセニ、トコロガ、ト トモニ、……

(iv) いわゆる挿入。^{注3)}

(v) その他。

ここで分析の対象としたものは、含まれる句が1個の文にかぎった。なお、見

かけ上は2個(以上)の句をもっている、ある句が他の1つの句のなかに含まれるようなものは、句1個のものとして扱った。たとえば、

▽デ ソノ 水分ガ ^{1%}一グラム 蒸発 イタシマスト ダイタイ イー ^{ニブン}二分ノ一カ
ロリーグライン 熱ガ ウバワレテ イキマスノデ ^{カラダ}体ヲ ヒヤスノニハ タイヘ
ン ツゴウノ イイ シクミダト 思ワレマス。(126-38-15)

では、「水分ガ 一グラム 蒸発 イタシマスト」は「～ノデ」という句に含まれると考えられる(「……蒸発スルト……熱ガ ウバワレテ イク」)。従ってこの文は句1個のものとして扱う。それに対して、

▽デー ^{イサ}鯛ハ サカナノ 王様ト 申シマスケレドモ ウー イワユル タンパク質
脂肪ト イウ テンカラ イウト マー 含有率ガ スクナイノデスネー。
(138-2-16)

は、句2個(「～ケレドモ」, 「～ト」)を含むものと見る。

注1) たとえば、「タマゴガ ^{1ツ}一個 ショウガガ ヒトカケデ ゴザイマス。」
(127-12-1)などがそれ。

注2) ここの「ト」は「雨が フロウト 風ガ 吹コウト～」の「ト」。次の「ト」は、「金ガ ナクナルト 借リニ クル」などの「ト」。

注3) 「日本語モ シャベレルト イウ 意味デ アア エー ナント 申シマショ
ウカ ソノー イワバ コノー ^{ジュンニツゴシリン}準日本人ト イウヨウナ (略)。(123-22-7)「エー コノ ^{ツバキ}椿モ エー 松ノ ハツバモ エー ミナ 形コソ チガエ コノ ク
チクラガ* 発達シテ イルト イウ コトハ (略)。(138-14-14)などの類。(*常緑樹の葉にあるクチクラ(cuticula)層のこと。)

これらの、句という名前のもとに一括したものは、その文論上の性格がかならずしもみな同じとはいえない。それで、それらについて再整理を試みた。その結果はまず次の3種に分かれる。

これはあとでのべるような作業仮説によったものだから、別の観点から見ればまたおのずからちがった結果が出るはずだ。

イ ある成分の一部とするもの

ロ 今までにたてた成分のいずれかに入れるもの

ハ 成分とはせず、「従属句」(略号K)という名前で呼ぶもの

それぞれにはいるものをあげれば、次のとおり。

ある成分の一部とするもの

(1) 複合述語(の形式的部分)とするもの

○～テのなかのあるもの： ～テ イル， ～テ アル， ～テ オク， ～テ ヤル，
～テ アゲル， ～テ モラウ， ～テ イタダク， ～テ ヨイ， ～テハ イケナイ，
～テハ ナラナイ。……

○～タリ： ～タリ ～タリ(スル)^{注1)}

○～バのなかのあるもの： ～バ ヨイ；^{注2)} ～(ナケレ)バ ナラナイ， ……

○～トのなかのあるもの： ～ト ヨイ， ～ト ヨロシイ， ……

なお，複合述語については 1・2・3 b (1) 参照。

注1) ～タリ スルのように～タリの部分が1つだけのこともある。また，(～タリ)～
タリ スルの形をとらないものは複合述語とはしにくい。これをどう扱うかはまだ
結論を出していない。「(略)小学校を出て上級中学に進むものと，高小へ行ったり，
すぐ実業につくものとの間に (略)。」(書きことばの例， 国立国語研究所『現代語
の助詞・助動詞』70ページ)

注2) 「豚ニ クワレテ 死ネバ ヨイ」などの類。

(2) 助詞に準じて扱ったもの

～カラ スレバ，～カラ スルト，～ト シテ，～ト シテハ，～ニ オイテ，～
ニ タイシテ，～ニ トッテ，～ニ ヨッテ，など。

今までにたてた成分のいずれかに入れるもの

(3) 連用語(R)とするもの

○～テのなかのあるもの： ナランデ 歩ク，笑ッテ 答エル，……の類など。

▽(略) コウ 目ヲ カガヤカシテ (R) ソノー ナニカ 報告ヲ スル。

(126-35-10)

○～ナガラのなかのあるもの： ガムヲ カミナガラ シャベル，泣キナガラ 走
ル，……の類など。

▽(略) 上ノ 男ノ オ子サンニ アー スカートヲ ヒッパラレナガラ (R) ハ
イッテ イラッシャイマシタ。 (125-10-4)

(4) 状況語(J)とするもの

○～連用形のなかのあるもの： 家へ 帰り 昼寝ヲ スル，靴ヲ ハキ 出カケテ
行ッタ，……の類など。

▽両足ヲ 十五センチホド ヒラキ (J) ツマサキヲ タテマス。 (127-32-20)

○～ズ・ズニ(ナイデ)： イヤナ 顔モ セズニ ヤッテ クレタ，ドコニモ 行カ
ナイデ 家ニ イタ，……の類。

▽日本デハ (略) 個人ノ 尊敬 両性ノ 平等ナンテ イウ コトハ モウ ユメ
ニモ 考エズニ (J) ズーット トオッテ キテ オルン(デス)。 (134-18-5)

○～テのなかのあるもの： カドノ 店へ 行ッテ 今川焼ヲ 買ッタ，サキニ 帰
ッテ 準備ヲ シヨウ，……の類。行ッテ ミテ オドロイタ，「コノ パンハ

- ナンデスカ」ト キイテ バカニ サレタ, ……の類。風邪ヲ ヒイテ 休ンダ,
荷ヲ 積ミスギテ 沈没シカケタ, ……の類など。
- ▽(略) フライパンニ 大サジ 一杯ホドノ 油ヲ 入レマシテ(J) ソシテ コ
コニ イマ オ豆腐ヲ 落トス ワケデ ゴザイマスネ。(127-12-18)
- ▽(略) コウイウヨウナ 方法ハ アマリ イイ 方法デハ ナイト イウ コト
ニ ナツテ(J) 現在ノ コノ 経験主義 イー テキナ ヤリカタン ナツテ
ル(略)。(123-31-20)
- ～バのなかのあるもの：雨ガ フレバ ボクハ 休モウ, 彼ガ クレバ タスク
ル, ……の類。雨ガ フレバ カナラズ 休ンダ, ……の類など。
- ▽コレヲ ヒヤセバ(J) カターク ナリマス。(127-27-1)
- ～タラ：仕事ガ スンダラ オイデヨ, 煮エタラ スグ タベヨウ……の類。行ッ
テ ミタラ イナカッタ, 謔ンダラ ヨク ワカッタ, ……の類など。
- ▽ソレヲ クドクド イワレタラ(J) 子ドモモ ヤリキレマセンネ。(125-8-8)
- ～ナラ(ナラバ)のなかのあるもの：君ガ コマルナラ ヤメトコウ, 金ガ 足
リナイナラ 貸シテ ヤル, ……の類。
- ▽(略) ドノ ヨウニ シタナラバ(J) コノ 闘争ヲ 解消スル コトガ デキ
ルカ。(124-21-14)
- ～テモ：雨ガ フツテモ 出カケル, ドンナニ 疲レテモ ヘコタレナイ, ……
の類。チョット 浜ヘ 出テモ イクラデモ 見ツカッタ, ……の類。
- ▽(略) 核兵器ヲ 日本(ニ) 持チコンデ イテモ(J) ソレハ 岸政府ノ 責任
デハ ナイ。(124-31-8)
- ～ト₁(～ウ・ヨウト……～ウ・ヨウト)：雨ガ フロウト 風ガ 吹コウト 行ク
ツモリダ……の類。
- ▽(略) 国会ガ イニシヤティブヲ トロウト 政府ガ イニシヤティブヲ トロ
ウト(J) (略) 相互ノ 責任ナンデス。(135-10-16)
- ～ト₂のなかのあるもの：台風ガ クルト 出港ハ トリヤメダ, 金ガ ナクナル
ト 借リニクル, ……の類。聞イテ ミルト ソレハ ウソダッタ, ……の類など。
- ▽(略) ソウイウ トコロデ 働キマス(J) (略) 汗ヲ ウント カキマス。
(126-39-21)
- ～ナガラのなかのあるもの：体ガ 小サイナガラ 力ガ 強イ, ……の類。
- ▽(略) 自分ガ 消化系統ノ 研究デ ノーベル賞ヲ トッテ オラレナガラ(J)
「ベツノ 話ヲ ゼヒ シタイ」ト 申出ター(略)。(126-19-2)
- ～ノデのなかのあるもの：金ガ ナクナッタノデ 買ワナカッタ, 景色ガ イイ
ノデ 有名ダ, ……の類。
- ▽(略) 六月ハ 雨季ニ ハイリマスノデ(J) 気候ノ カワリヤスイ 月デス。
(125-1-2)

○～ノニ： 金モ ナイノニ 車ヲ 買ッタ，……の類。

▽「(略)」ト ナオシャ イイノニ(J)ソレガ ナオセナインデスネ。(134-23-6)

○～形式名詞(+助動詞)：キエテ ミタ トコロガ ナニモ 知ラナカッタ，走者ガ トラクニ 現ワレタ トコロデ 拍手ガ ワイタ，ヨク 知ッテル クセニ シラン顔 シテル，など。

▽(略) 相談ニ イッタ トコロガ(J)「(略)」ト オッシャル。(137-16-13)

○挿入としたもののなかのあるもの：行クニ シロ 休ムニ シロ 報告ダケハ シトケ，……の類。イウ コトコソ チガエ 考エハ 同ジダ，……の類など。

▽^{ソバキ}樞モ エー 松ノ ハッパモ エー ミナ 形コソ チガエ(J) コノ クチク ラガ 発達シテ イル(略)。(138-14-14)

▽「(略)」ト イウ コト ダケハ アー イイニ セヨ ウルイニ セヨ(J) チ ョット 印象的デシタ。(125-14-11)

(5) 陳述的成分(T)とするもの

○～ガのなかのあるもの：途中ニ ナリマシタガ，最後ニ ナリマシタガ，……の類。例ノ問題デスガ (アレハ…)，コノ 前ノ 本デスガ (コレハ…)……の類。

▽アー アノ ヨケイナ コトデスガ(T) アメリカノ (略) 特殊教育ノ 専門 ノ ホウハ(略)。(122-10-14)

▽ツケアワセノ 馬鈴薯デ ゴザイマスガ(T) コレハ アノ オ タテニ 四ツ カ 六ツ グライニ オ割リニ ナリマシタ モノヲ(略)。(127-18-20)

○～ケレドモ(ケレド，ケドモ，ケド)のなかのあるもの：前後シマシタケレド，ナンベンモ 申シマスケレドモ，……の類。サキホドノ オ話デスケレド (ソレハ……)，結婚式ノ 花束ノ コトデスケド (アレハ……)，……の類。

▽チョット 見ニクイカモ シレマセンケレドモ(T) エー コノ ヘンガ ズッ ト アノ オー 白ク(略)。(127-28-6)

▽サテ エ 研究方法デ ゴザイマスケレドモ(T) ワタクシドモノ 実験ヤ 観 察テストハ(略)。(122-21-23)

○～ト₂のなかのあるもの：ヒトコト 付ケ加エマスト，モウ一回 申シマスト，… …の類。

▽ソレデ ソレヲ モウ一回 申シマスト(T) 二十五度カラ 下ノ 温度デハ (略)。(126-39-2)

なお、上の～トと同じようなもので～バのなかのあるもの、たとえば、簡単ニ 申シアゲレバ……の類を考えることができるが、資料にはその例がなかった。

(6) 独立語(D)とするもの

これは、挿入としたもののなかのあるもので「オシイカナ」「カナシイカナ」の類である。

▽シカシ カナシイカナ(D)(略) コレガ 発展シテ キテ イナイ。(124-34-12)

成分として扱うものは以上で終わり。次は、成分とはせず「従属句」(K)の名前で呼ぶもの。

(7) 従属句^{注)}(K)とするもの

○～ガのなかのあるもの：午前中ハ 雨ガ フッテ イタガ 午後ハ 晴レタ……の類。私ハ 先日 真鶴へ 行キマシタガ ナカナカ イイ トコロデシタ、……の類など。

▽(略) イヤナ ヤツハ 殺シテ イタニ チガイナインデスガ(K) (略) 殺サナイ ケンカラ スルヨウニ ナッタ。(126-45-21)

○～カラ：モウ オ金ガ ナイカラ 買ウノハ ヨソウ、……の類など。

▽(略) カビガ 発生シガチデ ゴザイマスカラ(K) トキドキ ヨク フイテ カワカシテ オク コトガ(略)。(125-19-13)

○～ケレドモ(ケレド, ケドモ, ケド)のなかのあるもの：私ハ 知りマセンケド アノ 方ナラ ゴゾンジデシヨウ, …の類。ボクハ アレヲ 使ッテ ミタケレド ナカナカ 便利ダゼ、……の類など。

▽(略) 特殊心理学ノ 正教授ガ ハ オイテ アリマスケドモ(K) 特殊教育ノ 正教授ハ オイテ ゴザイマセン。(122-9-18)

○～シ：夜フカシモ スルシ 昼寝モ スル、……の類など。

▽(略) ソノ 上ニ コウ ワレマセンシ(K) コワレタリ シテ ナカノ モノガ出ル 危険モ ナイ。(127-28-8)

以上のほかに、～連用形、～テ、～ノデの形のもので従属句(K)として扱うものがある。

▽日本ノ 政治モ 申シアゲタヨウニ チョウド 転換期デ(K) オオイニ 池田サンモ ワカワカシク ガンパッテ モライタイ モンデス。(126-22-1)

▽冷房病ト イウ モノハ 一ツノ キミョウナ 表現デ ゴザイマシテ(K) ソンナ 病気が アルトハ ワタクシハ 思イマセン。(126-42-10)

▽ドウゾ デキアガリガ ゴザイマスノデ(K) ゴランクダサイマセ。(127-11-4)

注) ここで「従属句」(K)というのは、主語とか状況語とかといった個々の成分の種類にあたるものではない。あたるといえば、むしろ成分一般にあたるものというべきである。主語とか状況語とかといったレベルのものにあたるものを求めるには、従属句をさらに分析しなければならない。

(8) 以上のほかに、句として扱われる形をもちながら主語(S)としたものがある。「～ナラ」がそれで「ボクナラ イインダ (カアサンノ オオキナ蛇ノ目ニ……)」の類である。

▽シカシ タイガイノ 男ナラ(S) コレデ マイッテ シマイマス。(126-26-4)

注) そのほか「～ナラ」には目的語(M)のものも考えられるが(「アジナラ 三枚ニ オロシマス」)、用例がなかった。また、「～ダッタ」「～トキタラ」などでも主語(S)になるのがあるはずだが、これも用例がなかった。(「オッペルト キタラ タイシタ モンダ。」)

以上のような結果は、以下にあげる仮説によるものである。われわれが扱っている資料は、そこだけから再整理の原理を見つけ出せるほど十分ではない。そこでこのばあいは、現代日本語におけるいろいろな文法的事実を考え合わせるにより次のようないくつかの仮説をたて、それによって資料の例を整理しなおすことにした。

(i) 従属性が非常に強いと認められるものは成分の一部とする。これによって、複合述語(の形式的部分)としたものと助詞に準じて扱ったものとが、その他のものから区別される。たとえば、「～テ(イル)」「～テ(アル)」…の「テ」と、「イル」「アル」…との結び付きは強いと考える。また、「(～ニ) オイテ」「(～ニ) ヨッテ」「(～ト) スレバ」などの「ニ」「ト」と、「オイテ」「ヨッテ」「スレバ」との関係もしかり。

そのほかのものについては、以下のようなことによって整理した。

(ii) 問題の句が連体修飾語の一部になりうるか、どうかということによって区別する。たとえば、「ナランデ」という句は「ナランデ 歩く 子ドモタチ」といえるから連体修飾語の一部になれる。それに対して「オナカガ スキマシタカラ タベタ ソバ」とはいえない。「オナカガ スキマシタカラ」は連体修飾語の一部とはなれない。この点については、連用語(R)としたものの、状況語(J)としたものは可、陳述的成分(T)としたもの、独立語(D)としたもの、従属句(K)としたものは原則として否と仮定した。^{注)}そこで、「Rとしたもの、Jとしたもの」/「Tとしたもの、Dとしたもの、Kとしたもの」という大きな区別がまずできる。

注) これは非常に大ざっぱなもので、くわしく見て行くと簡単にはわりきれない点がいくつかある。たとえば、陳述的成分(T)のなかにはいる「簡単ニ イッテ シマエバ」などは連体修飾語の一部になりうるかもしれない。「簡単ニ イッテ シマエバ ケチンボデ アル M氏」また、従属句(K)としたもののなかでも、連体修飾語の一部となるばあいがある。(「酒ハ ノムガ タバコハ ノマナイ 男」「イ

ワユル 総主ガ 想定サレルケレドモ 実際ニハ 現ワレテ イナイ 例) しか
し、これは構文の型と関係がありそうだ(後出の(iv)を見よ)。また、「彼ノ カイ
タ 本ノ 最近 出シタ ヤツダガネ 表紙ノ 絵ハ ズイブン フルッテルヨ」
などでも従属句が連体修飾語のなかに現われている。しかし、その現われ方は、文
中の他の部分とは同じレベルでつながっているものではない。この種のものについ
ては、2・2・3 b 「挿入」参照。

(iii) 句の末尾の述語、およびそれ以外の部分における陳述的な要素の現われ
によって区別する。具体的にいうと、述語では、丁寧語の「デス・マス」、そ
の他の助動詞「ナイ<否定>、タ<過去など>、ウ・マイ<意志——肯定
・否定>、ダロウ<推量>」、述語以外の部分では「～ハ<いわゆる主題の～
ハ>」、陳述副詞の類^{注1)}——「タブン、キット、トテモ、ケッシテ、サゾ、マ
サカ」——以上のようなものが現われうるかどうかということ。たとえば、「ノデ」「ノニ」の前には「ウ・マイ」は現われにくい。「ガ、カラ、ケレ
ド、シ」の前には現われる。「サゾ」は「～テ」「～ト₂」「～ノデ」「～ノ
ニ」などの句のなかには出て来ない。「～ガ」「～カラ」「～ケレド」「～
シ」のなかには出てくる。「サゾ 寒イダロウカラ」。以上のような点につ
いては次の表のように仮定する。

句 内部 形式	R		J										T		K								
	ナ テ ガラ	ナ ガラ	連 用 形	ズ ・ ズ ニ	テ	バ	ラ	ナ ラ	テ モ	ト 1	ト 2	ナ ガ ラ	ノ デ	ノ ニ	ガ	ケ レ ド モ	ト 2	ガ ラ	ケ レ ド モ	シ	連 用 形	テ	ノ デ
句 の 述 語 の 形	デ	ス	××	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
	マ	ス	××	×	(×)	○	(○)	○	(○)	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
	ナ	イ	××	×	×	×	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○
	タ		××	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○
	ダ ロ ウ		××	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	(○)	(○)	(○)	(○)	×	×	×	×	×	×
句 の 述 語 以 外 の 部 分	ウ	・ ヨ ウ	××	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	(○)	(○)	×	×	×	×	×	×	×
	マ	イ	××	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	(○)	(○)	×	×	×	×	×	×	×
	キ ッ ト		××	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	(○)	(○)	×
	ケ ッ ジ テ		××	×	○	×	○	○	×	×	×	×	(×)	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
	セ メ テ		××	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
タ ブ ン		××	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
サ ゾ		××	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
マ サ カ		××	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
～ ガ		××	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	
～ ハ		××	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	

(○) は、ありうると思われるけれども、やや疑問のあるものを示す。

(×) は、ないと思われるけれども、ばあいによってはあるかもしれないもの。

これらの点を見ると、いろんな段階があるからどこで線を引くかが問題だが、ここにあげるすべての種類の要素が現われうるという点で文句なく他と区別できるのは、従属句(K)としたものである。それで一応「Kとしたもの」／「Rとしたもの、Jとしたもの、Tとしたもの、Dとしたもの」という区別ができる。^{注2)}

注1) ふつう陳述副詞として扱われているもののなかで、ここでいう句のなかにだけ現われるもの——「イクラ、タトイ、モシ」などは除く。

注2) 陳述的成分(T)のなかの多くはある程度まで従属句(K)に近い。だが、ここにあげたいいろいろな要素の現われが従属句(K)としたものほど自由ではない。また状況語(J)としたものなかの「～ニセヨ(シロ) ～ニセヨ(シロ)」「～(ウ・ヨウ)ト ～(ウ・ヨウ)ト」についてもしかり。

(iv) 主語(S)および(または)連用語(R)および(または)状況語(J)が、句のなかに現われるかどうかによって区別する。たとえば、Rとした「～ナガラ」には主語(S)は現われ^{注)}ない。Jとした「～ナガラ」には現われる。「彼ハ体ガ 小サイナガラ ハヤイ 球ヲ 投ゲル。」 Tとした「～ガ」には、S, R, Jは原則として現われない。「～ガ」の形のものでもKとしたものには、これらすべてが現われる。「コノ 犬ハ(S) 子犬ノ トキ(J) ヨク(R) キャンキャン(R) ナキマシタガ、……。」これらのことについては、次のように仮定した。従属句(K)としたものおよび状況語(J)としたもの：S, R, Jとも可。連用語(R)としたもの：Rは可，SとJは否。陳述的成分(T)としたものおよび独立語(D)としたもの：S, R, Jとも否(ただしTとしたものなかにはR, Jが出てくるものがある)。これによって、K, J / R / T, Dという区別ができる。

注) 意味上の主語は考えられるわけだが、それはその文全体の主語と一致する。「彼ハ(S) ガムヲ カミナガラ(R) ジャベッテ イタ(Z)。」

(v) ある種の句が、他のある種の句の一部になりうるかどうか、ということによって区別する。(これは上の(iv)と重複するところがある)たとえば、「タキビヲ シテ 芋ヲ 焼クカラ オイデヨ。」という文では、「タキビヲ シテ」という句は「～カラ」という句の一部である。「タキビヲ スルカラ 芋ヲ モツテ オイデヨ。」では、「タキビヲ スルカラ」は「～テ」のなか

には含まれない。こうしたことについては次のように仮定する。(○=

可, ×=否。^{注)})

句の一部になる句	R	J	T	D	K
Rとしたもの	○	×	×	×	×
Jとしたもの	○	○	×	×	(×)
Tとしたもの	×	×	(×)	(×)	×
Dとしたもの	×	×	(×)	(×)	×
Kとしたもの	○	○	○	○	○

注) 原則的にはJのなかにはKは現われな^いといえるが、次のようないい方もある。

「電話ガ カカッテ キタカラ 行ッテ ミタラ 彼ハ モウ 死ンデ イタ。」
この「～カラ」は「～タラ」の一部とすべきか。Kでも構文の型のいかんによって(後述の基準構文におけるもの)Jに近い性格を示すばあいがあるが、これもその1つの現われかも知れない。(1・3「構文の型の分類」を見よ)

(vi) 次に、今までの区別を、別に考えたいくつかの構文の型(これも一種の作業仮説である)の観点から見直す。^{注1)} 構文の型は、まず独立語構文と述語構文とに大きく分かれる。後者はさらに基準構文と付加構文とからなる。基準構文は骨ぐみ構文、拡大構文、複合構文からなる。(これらの詳細については1・3「構文の型の分類」を見よ。)こうした構文の型の分類を考え合わせることによって、次のようなことが明らかになる。

イ 独立語構文の終止的成分になるかどうかによって、陳述的成分(T)としたものと、独立語(D)としたものとが区別される(ii)から(v)までのところでは、まだこれがはっきりしなかった)。

ロ 連用語(R)としたもの、状況語(J)としたものは、述語構文のなかの基準構文(さらに正確には拡大構文)だけに現われる成分であること。

ハ 陳述的成分(T)としたもの、独立語(D)としたものは、述語構文のなかの付加構文、および独立語構文だけに現われる成分であること。

ニ 従属句(K)は述語構文の基準構文(正確には複合構文)、付加構文のいづれにも現われること。^{注2)}

以上によって、まず、陳述的成分(T)としたものと独立語(D)としたものとの区別がはっきりした。つまり、それでR/J/T/D/Kという5種のもの

を区別する結果になったわけである。それから、それらのおたがいの間の関係もはっきりしてきた。

注1) 構文の型は、成分(従属句)がはっきり規定されていなければ明らかにできないわけで、成分の規定を構文の型のたすけをかりてやるのは逆のように見えるかもしれない。しかし分析のプロセスの上では、両者についての考察は相互規定的な関係にあるというべきである。また、そうしなければ実際の分析はできない。

注2) もっとも、それぞれに現われるものについては質的なちがいがあそうだ。大ざっぱに言えば、基準構文(複合構文)に現われるものはJに近い点があり、付加構文に現われるものはTに近い点がある。(1・3「構文の型の分類」を見よ)

c 陳述的変容について

以上の成分のうち、陳述的成分と独立語は、(他の成分と共存するばあいそれに対して)主として陳述的な関係だけに立つ成分である。ことがらとしての関係は、言語的には正面に出していない。その他の成分は、一定のことがらを表わして、それぞれことがらとしての関係で他の成分とくみあわさって、全体で一層具体的なことがらを表わす成分である。これらの成分の分類にあたっては、主としてこうしたことがらとしての関係に注目した。しかし、これらの成分はことがらとしての関係だけにたっているのではない。たとえば、これらの成分には原則として係助詞が自由につきうる。このばあい、係助詞のあるなしは、ことがらとしての面に関係せず、もっぱら、強調・提題など陳述的な意味に関係する。われわれの分類では、こうした陳述的な面は無視されたわけである。^{注2)}

注1) 状況語のうちのあるもの(条件を表わす「～バ」「～ノニ」「～ノデ」など)にはつかない。

注2) この種の成分の陳述的な面をすべて無視したというのではない。たとえば、「カレノ旅行」と「カレガ旅行スル」とのちがいは陳述の面でのちがいもあるといえるであろう。このちがいは、成分のちがい(連体修飾語と主語)に必ずものであるから、無視していない。

成分の分類にあたって無視された陳述的な面は、成分の陳述的変容とみなされることになる。この陳述的変容の問題は今回の調査では十分に扱えなかった。Vでいくつかの問題を断片的に取りあげることにする。(V 2・1参照)

なお、陳述的変容の表現手段には係助詞のほかには語順や卓立のイントネーションなどがある。

補注) いわゆる提題などは、文の構造にとって重要なものであるが、そのうちの大部分は主語の陳述的変容とみなされるから、以下にあげる構文の分類では、提題のある文の構造は、それとして浮かびあがってこない。今後に残された重要な課題である。

文末の述語、独立語の表現意図のちがいも、構文にとっては陳述的変容の1種であるとみなすべきかもしれないが、ここでは、そうみなさなかつた。

1・3 構文の型の分類

1・3・1 構文の型の分類の立場

一次成分だけを問題にしても、そのくみあわせの種類はかなりの数にのぼる。それらを一定の基準で分類して、構文の型全体の中に位置づけなければならない。

われわれの分類の原則を簡単にのべれば次のようになる。

- (i) ごく一般的に言って、いろいろの構文をみると、何らかの点で「もとになるもの」とそのもとになるものに「何かが加わってできたもの」とを区別することができる。それを区別する。またそれにはいろんな段階があるから、同じ段階にあるものと、ちがう段階のものとを区別する。たとえば、「酒ヲ ノンデル」と「火鉢ノ ソバデ 酒ヲ チビリチビリ ノンデル」とをくらべると、後者は前者に「火鉢ノ ソバデ」(ここでいう状況語(J))と「チビリチビリ」(ここでいう連用語(R))が加わったものといふことができる。「ゴランクダサイマセ」と「ドウゾ ミナサン ゴランクダサイマセ」とをくらべると、後者は前者に「ドウゾ」(陳述的成分(T))、「ミナサン」(独立語(D))がついたものといふことができる。また、「酒ヲ ノンデル」「飯ヲ クッテル」「本ヲ 読ンダ」は一応同じ段階のものと見ることができ(あとでいう骨ぐみ構文)。それに対して、「酒ヲ チビリチビリ ノム」「飯ヲ モリモリ タベル」「本ヲ イヤイヤ 読ム」はまた別の段階(あとでいう拡大構文)のものと見られる。
- (ii) その構文の成分いかん、またそれらの成分の組合せのいかんによって区別する。たとえば、「サア ‘ミナサン。」と「サア 行コウ。」では「ミナサン」は独立語(D)、「行コウ」は述語(Z)だが、これは単に成分のちがいというだけにとどまらず、そのちがいによってその構文の型もちがうとする。また、「彼

ガ(S) 島ニ(M_ニ) 帰ル(Z)」と「彼ガ(S) 島ヲ(M_ヲ) 歩キマワル(Z)」
 とでは、S...Zの部分と同じだが、M_ニとM_ヲというちがいがあがあるから、大きな
 分類では同じ型となっても、こまかい分類では別にされる。同じ成分でもそ
 の組みあわせり方がちがえば、別になる。たとえば「彼ハ 絵ハ ヘタダガ、
字ガ ウマイ。」における「～ガ」と、「彼ノ 絵ハ アノ コノ 前ノ 展覧
会ニ 出シタ ヲツダガ、アンガイ ツマラナカッタゼ。」の「～ガ」とはそ
 れぞれ文中の他の部分との関係のしかたがちがう。構文の型も別にする。

- (iii) (i), (ii)の観点から分類したいいくつかの型を、その相互関係と全体的
 な見通しから整理して位置づけをする。また、あるばあいには分類をやりな
 おすこともある。たとえば、「酒ヲ ノンデル」「飯ヲ クッテル」と「酒
 ヲ チビリチビリ ノンデル」「飯ヲ モリモリ クッテル」とは、さき
 のべたように連用語(R)があるものとないものとで区別された。「ドウゾ」
 とか「ミナサン」とかの類つまり陳述的成分(T)や独立語(D)——はその上
 にさらについたものと考えろ。陳述的成分(T)や独立語(D)は、連用語(R)
 や状況語(J)よりもさきにつくとは考えない。また、「ボクハ(S) 彼女ニ
 (M_ニ) ナグラレタ(Z)」と、「彼女ガ(S) ボクヲ(M_ヲ) ナグッタ(Z)」の間
 には、SM_ニZとSM_ヲZというちがいがあがあるが、さらに、前者は後者からでき
 たと考える(あとで「派生」と呼ぶもの 2・2・3 d 参照)。

1・3・2 構文の型の分類の概観

前にのべたような原則によって分類した構文の型は、大ざっぱにいうと、次
 のようなものだ。

- I 独立語構文(略号【D】)
- II 述語構文(略号【Z】)
 - 1 基準構文(略号[Z])
 - a 骨ぐみ構文(略号 /...Z/)
 - b 拡大構文(略号 R/...Z/, J/...Z/)
 - c 複合構文(略号 K/...Z/)
 - 2 付加構文(略号 T[Z] D[Z] K[Z])

独立語構文と述語構文とを区別したのは、その成分のいかんによる((ii)の

原則参照)。基準構文、付加構文の区別はまず(i)の原則による。基準構文のなかの骨ぐみ構文、拡大構文、複合構文の区別も(i)の原則による。拡大構文と複合構文の区別は(ii)の原則による。全体の特色づけと、骨ぐみ構文のなかに派生的な関係にある構文を認めたこととは(iii)の原則による。とくに、骨ぐみ構文、拡大構文、複合構文を一括して基準構文とし、付加構文と対立させたことなどはそうである。

これら各種の構文の型は、さらにいくつかの型に分かれる。たとえば、骨ぐみ構文などはその種類はきわめて多い。それらについては、それぞれのところで述べる。

1・3・3 独立語構文【D】

終止的な成分が独立語(D)であるものを、「独立語構文」(略号【D】)という。

われわれの資料の中の文は、終止的な成分をかならず1つずつ持つ^{注)}。2つ以上の成分からなる文では、かならずそのうちの1つが終止的な成分であり、他は、それと関係する非終止的な成分である。終止的な成分が独立語であるか、述語であるかによって構文は大きく2つに分れる((ii)の原則)。

前者が独立語構文で、後者があとで出てくる述語構文である。

注) 述語の同格のばあいを除く。

独立語構文には、独立語(D)が1つのもの、それに陳述的成分(T)あるいは他の独立語(D)、またはその両者がついたものがある。独立語構文には、主語(S)、目的語(M)、補語(H)、連用語(R)、状況語(J)は現われない。また、従属句(K)が現われる例もなかつた。^{注)}

○オハヨウ(D)。○コーヘイチャン(D)!

○デハ(T)、ゴキゲンヨウ(D)。○デハ(T) ミナサン(D)、ゴキゲンヨウ(D)。

注) たとえば、「私 アノ ネックレース ステキト 思ウンダケド(K)、ネエ(D) アナタ(D)。」という文は、形の上では K D D ということになる。しかし、これは述語構文(付加構文)の省略と見るのがふつうだろう。「私 アノ ネックレース ステキト 思ウンダケド(カッテ クダサラナイ?) ネエ アナタ。」

1・3・4 述語構文【Z】

終止的な成分が述語(Z)であるものを、「述語構文」(略号【Z】)という。

述語構文はさらにいろいろの型に分かれる。まず、大きく基準構文と付加構文の2種に分かれる。そして、基準構文はさらにこまかく分かれる。

a 基準構文 ([Z])

述語構文のなかで、陳述的成分(T)、独立語(D)を伴っていないもの、および従属句(K)を伴うが、その従属句がその文の主語(または状況語)をその文の述語と共有すると見られるものを「基準構文」(略号 [Z])と呼ぶ。基準構文は、付加構文に対してはそのもとになる構文である。陳述的成分(T)や独立語(D)あるいは従属句(K)がそれに付加されて付加構文ができる。^{注)}と同時に、それは述語構文一般にとっては、その一種の典型あるいは標準(norm)とも見られるものである。やや厳密を欠きたい方をするならば、述語構文とはどういうものか、ということの説明するばあいには基準構文をひきあいに出せばよいといったような存在である。基準構文という名前はそういうところから付けた。

注) この意味だけからすると、基本構文とか、基礎構文とかといった名前をつけてもいいわけだ。しかし、これらの名前は基本文型などとまぎらわしい。ここでいう基準構文は、もちろんいわゆる基本文型なる概念とは密接な関係があるにちがいないが、一応全然別なものとするべきである。

基準構文をさらに骨ぐみ構文、拡大構文、複合構文の3つに分ける。

(1) 骨ぐみ構文 (略号 /...Z/)

拡大成分(連用語(R)および(または)状況語(J)、後述)あるいは従属句(K)を全然伴っていない述語構文を「骨ぐみ構文」と呼ぶ。すなわち述語(Z)、主語(S)、目的語(M)、補語(H)のいずれか、あるいはすべて、そして、それのみが現われる構文のことである。(述語構文だから、述語はかならず現われなければならない。ここでいう中断文は別だが。27ページ参照)

述語構文にとって述語は必須の成分である。

主語のない述語構文はたくさんあるが、それは、多くのばあい場面・文脈などの条件によって、主語の示すべきことがらが明らかであるため、主語を必要としないからである。場面・文脈など文外の条件を考慮しなければ、いわゆる成分の省略の現象は正当に扱えないので、省略のある文を対象から除外するとすれば、多くの述語構文にとって、主語は必須の成分である。

目的語と補語は、一定の要求上の性格をもった述語(の自立語)によって要求される成分であって、やはり、述語の性格によっては、(場面・文脈などの条件を抜きにしたばあい)原則として必須の成分である。^{注)}

注) “原則として、”というのは、われわれがいう目的語と補語の中には、述語の自立語の要求の度合いに強い弱い差があり、弱いばあいには、ことがらの成立にとつて、かならずしも必須とはいえないからである。(「信号ガ 赤ニ(Hi) 変ワル」「マチヲ(M_マ) 歩ク」「家カラ(M_カ) 外へ 出ル」など)

これに対して、連用語と状況語は、述語(の自立語)の要求上の性格によって要求される成分ではない。これらの表わすことがらは、述語の表わすことがらの成立に直接参加することがらではなく、述語あるいは主語(目的語・補語)と述語とのくみあわせによって表わされることがらを一層具体化することがらである。つまり、述語構文にとっては任意の成分である。

また、主語・目的語・補語は、述語を軸として、いろいろな制約関係がある。目的語と補語の例については、74ページ参照。主語と目的語については、たとえば、

○オマエニ(M_マ) 東京マデ 歩ケルカ?

○オマエハ(S) 東京マデ 歩ケルカ?

という文ではM_マとSとは共存できない、というような制約がある。

これに対して、連用語・状況語のあいだ、これらと主語・目的語・補語とのあいだには、こうした制約関係はないようである。^{注)}

注) たとえば、目的語のうち、相手を表わす「～ニ」とゆくさきを表わす「～ニ」とは、限定された構文のなかでだけ共存可能であるにすぎない。(述語が受身・使役・可能・～テモラウの形などの動詞からなる構文。「太郎ニ 郵便局ニ 行ッテ モラウ」「太郎ニ 郵便局ニ 行カセル」など。)ところが、これらの「～ニ」と、ようすを表わす連用語の「～ニ」や時間を表わす状況語の「～ニ」とは共存が自由である。

○夕方ニ(J) 向ウ岸ニ(M_マ) ナナメニ(R) 泳イデ イッタ(Z)。

なお、次のような、組織を示す状況語の「～デ」があるばあいには主語がないのがふつうであるが、これはちよつと、事情がちがう。このばあいは、別に主語を入れることができる。「～デ」は一種の文脈として、はたらいっているために、別に主語を示す必要がないばあいが多いうことであろう。(ただし、この種の成分は、主語

の一種であるという見方もあろう。「陛下ニ オカセラレマシテハ……」などでは、別に主語がはいりえないので、一層問題である。

○本校デハ 10月10日ニ 運動会ヲ 行ナウ。

なお、次のような連用語の例も同様であろう。

○昔ハ 長岡カラ 東京ヘ 出ルノニ 汽車デ 二十四時間 カカッタソウダ。

これらのことは、述語構文にとって、主語・目的語・補語と連用語・状況語とが果たす役わりに区別のあることを示している。ひゆ的にいえば前者と述語のくみあわせにおける各成分のむすびつきはかた^いが、後者と述語（あるいはそれと前者の成分とのくみあわせ）とのむすびつきはゆる^いい、と表現できるだろう。

以上のような特徴から、われわれは、述語・主語・目的語・補語は、述語構文にとって重要な成分であると認め、その他の成分（連用語・状況語）と区別する。前者は、述語構文の骨ぐみ(中核)をなすという意味で、「骨ぐみ成分」と呼び、後者は、その骨ぐみによって表わされることからを一層具体化して骨ぐみの内容を拡大するという意味で、「拡大成分」と呼ぶことにする。

文における骨ぐみ成分（2つ以上あるばあいにはそれのくみあわせ）を文の「骨ぐみ」と呼ぶ。

骨ぐみは、述語(Z)だけのもの、およびZを軸として、それに主語(S)、目的語(M)、補語(H)のうちのいくつかがかみあわさったものであるが、このくみあわせには、いろいろな制約があつて、自由ではない。^{注)}

注) 同格の成分は、理論的にはいくつあつても自由であるが、これはここでは問題としない。別に「同格」の項をたてて扱う。(2・2・3a 参照)

同一構文のなかの成分の現われ方の制約については、たとえば、主語(S)は、同一構文内では、0か1か2が典型的である。^{注1)}

- 0……主語のない構文
- 1……主語1つの構文
- 2……いわゆる総主(S')と部分主語(S)^{注2)}をもつ構文

注1) 主語3つの構文（総主・部分的な総主・部分的な主語をもつ構文）もありうる。

注2) 総主と共存する第2の主語を仮りに部分主語と呼んでおく。

目的語には、M₁, M₂, (M₃), M₄, M₅, M₆ などがあり、それぞれ

$$M_7 \left\{ \begin{array}{c} 0 \\ 1 \end{array} \right. \quad M_{\sim} (M_{\sim}) \left\{ \begin{array}{c} 0 \\ 1 \end{array} \right. \quad M_{\text{カ}} \left\{ \begin{array}{c} 0 \\ 1 \end{array} \right. \quad M_{\text{ト}} \left\{ \begin{array}{c} 0 \\ 1 \end{array} \right. \quad M_{\text{ヲ}} \left\{ \begin{array}{c} 0 \\ 1 \end{array} \right.$$

が典型的であり、それらのくみあわせは比較的自由である。たとえば、

$$\begin{array}{l} 0 \\ M_7 \\ M_{\sim} M_7 \\ M_{\text{カ}} M_{\sim} M_7 \\ M_{\text{ト}} M_{\text{カ}} M_{\sim} M_7 \\ // \quad // \end{array}$$

のようなくみあわせがある。

注) 資料にはなかったが、 M_{\sim} が2つの構文もありうる。

○太郎が 次郎ニ 郵便局ニ 行カセル、○太郎ニ アメリカニ 行ケルカ？

○ボクニハ イマ 銀行ニ 預金ガ ナイ。

補語には、 H_1 、 H_2 があり、その現われ方は、

$$H_1 \left\{ \begin{array}{c} 0 \\ 1 \end{array} \right. \quad H_2 \left\{ \begin{array}{c} 0 \\ 1 \end{array} \right.$$

であり、 H_1 と H_2 とは共存しないようである。

次に、それぞれの骨組み成分の相互関係では、主語が1つのばあいには、目的語や補語の現われ方は自由であるが、2つのばあいには限定があるようだ。^{注)}

注) これは、構文上の制約かどうか疑問である。資料が少ないせいかもしれない。理論的には、次のような構文も可能である。

○ボクノ ウチハ(S') 第ノ ホウガ(S) タクサン(R) 月給ヲ(M₇) トル(Z)。

主語が0の構文は、主語が臨時的に省略されているものを除けば、目的語・補語の現われ方に制約があるようだ。(2・2・1(0)「主語0」の項、134ページ参照)

目的語と補語のあいだにも制約があるようだ。資料では、補語と共存している目的語は M_7 と M_{\sim} に限られていた。

構文と構文との相互関係について、たとえば

ダレカガ(S) 紙ニ(M₂) ～ト(H₂) 書イタ(Z)。 $SM_{\sim}H_2Z$
 →紙ニ(M₂) ～ト(H₂) 書イテ アル(Z)。 → $M_{\sim}H_2Z$

では、2番目の文は、述語が～テアルの形になっているために、1番目の文にあった主語がなくなっている。すなわち、この種の $M_{\sim}H_2Z$ は、もともになっ

(3) 複合構文 (K/...Z/)

骨ぐみ構文に従属句(K)がくわわったもので、しかも、その従属句が、その文の述語と主語(S) (あるいは状況語(J)) を共有するものを、「複合構文」(略号 K/...Z/) と呼ぶ。^{注)}

○ボクハ(S') 魚ハ スキダガ(K) 野菜ハ(S) キライダ(Z)。 ○コレハ(S') 本人ノ 話ダカラ(K) マチガイハ(S) ナイ(Z)。 ○アノ 映画ハ(S') ストリーパーハ イイケレド(K) 画面ガ(S) キタナイ(Z)。 ○彼ハ(S') 去年(J) 沖縄ニモ イッタシ(K) 八丈島ニモ 行ッタ(Z)。

といったようなものだ。

注) 実際は、拡大構文に従属句が加わった形のものもある。もっとも、このばあいの従属句と連用語または状況語とどちらがさきに骨ぐみにつくかには問題がある。

この複合構文に現われる従属句(K)は、その文の述語との結びつきが比較的固いといえることができる。たとえば、連体修飾語のなかに現われることができるばあいがあるのはその1つの証拠とすることができよう。「魚ハ スキダガ 野菜ハ キライナ M君」また、意味的な面についていうと、いわゆる条件の意味——確定条件(順接——カラ、逆接——ガ、ケレド)が表面に出ている、比較的はっきりしているばあいが多し。こういったところが、付加構文における従属句とちがう点である。また、一方では拡大構文における状況語(J)のうちのあるもの、——条件を表わすもの(「～ノデ、～ノニ、～バ、～タラ、～ナラ」など)に非常に近くなっているともいえる。

この型における従属句が状況語に近くなっているということは、その文の述語の表現意図との関係においても見られるばあいがある。「～ノデ」「～ノニ」が来ると、その文の述語に命令形、禁止などの形が現われにくい、同じようなことが、この型における従属句においても見られる。「君ハ 沖縄ニモ 行クシ 八丈島ニモ 行ケ。」とはいえないだろう。(V2・3「表現意図との関連からみた状況語について」参照)

だが、実際の例においては、複合構文か付加構文か、どちらとも考えられるものもあり、まだ問題が残っている。

b 付加構文 (T[Z], D[Z], K[Z])

基準構文に、陳述的成分(T)、独立語(D) あるいは(および) 従属句(K) がついたものを「付加構文」という。このばあいの従属句(K)のつき方は、か

ならずしもその文の述語と、主語（または状況語）を共有しなくてもよい。

（また、2・2・3 b「挿入」であげるような、従属句(K)の挿入されたものでもない。）付加構文には、

陳述的成分(T)がついたもの (略号 T[Z])

独立語(D)がついたもの (略号 D[Z])

従属句(K)がついたもの (略号 K[Z])

の3種、およびその組みあわせがあることになる。たとえば、次のようなものである。

○ドウゾ(T) アナタモ(S) オイデクダサイマセ(Z)。○大根^(注)ハ(T) ハッパヲ(M₇) ステマス(Z)。○ツギニ(T) キョウノ プロ野球ノ 結果ヲ(M₇) オ知ラセ イタシマス(Z)。以上、T[Z]

○アキラクン(D) オイタンチャ ダメヨ(Z)。○オーイ(D) 帰ロウヤ(Z)。○文法研究(D)、ナンテ(T) オモシロクモ ナイ 仕事ナンダロウ(Z)。以上、D[Z]
○キョウハ イイ オ天気デシタガ(K)、ワタシハ(S) 午前中(J) 散歩ニ(J) 出マシタ(Z)。○雨が 降りソウダカラ(K)、カサヲ(M₇) 持ッテ イキマシヨウ(Z)。○彼ハ フンゼント 座ヲ タチ(K) アトニ 残ッタ ワレワレハ(S) キマズク(R) オン黙ッテ イタ(Z)。以上、K[Z]

注)「～ガ」といいかえられないから、主語(S)とは見ない。

この付加構文における陳述的成分・独立語・従属句と、基準構文（にあたる部分）との結びつきは、基準構文のなかにおける、連用語や状況語あるいは従属句と骨ぐみとの結びつきよりもゆるいといえる。たとえば、この構文における陳述的成分・独立語・従属句は、連体修飾語のなかにはいることはできない。また、意味の面からいうと、基準構文における連用語や状況語あるいは従属句と骨ぐみ（とくに述語）との関係は、主としてことがらの面におけるものであったのに対して、こちらの陳述的成分・独立語あるいは従属句と基準構文との関係はことがらの面というよりも陳述的な性格が勝っているといえることができる。同じ従属句でも、基準構文におけるもの（つまり複合構文におけるもの）はさきに述べたように条件の意味（これはことがらの面である）がわりにはっきりと出ているのに、付加構文におけるものは、条件的な意味がぼやけていたり、あるいは条件的な意味でもそれに何らかの点で主観的な色合いがついていたりする。^(注)さきほどの複合構文における従属句は状況語に近づいていたが、

付加構文における従属句は陳述的成分（のうちのあるもの）や独立語（のうちのあるもの）に近くなっている。

▽（略）シカル トキノ オー コツデスガ（T） コレハ（S） サッパリト シカル
コトナンデス（Z）。 （125-8-7）

▽選手タチハ 走りオワルト 足ヲ モミマスガ（K） コレハ（S） タマッタ 疲労
素ヲ ハヤク 分解シテ 酸素補給ヲ ヨク スル タメデス（Z）。 （127-32-12）

注）永野賢『「から」と「ので」はどうちがうか』（『国語と国文学』334, 1952）参照。
永野は「から」と「ので」のちがいに関して、「から」の方が、主観的な理由を表
わすことを指摘しているが、「から」にも主観的な色合いの余りないものもある。ま
た、「ので」にも主観的なものもある（その文が命令形で終るなど）。それらの現わ
れる構文の型のちがいを考慮に入れなければその説明はできないだろう。

補注）基準構文と付加構文とを分けたことによって、今上に述べたようなことが非常
によく説明される。従来^のの文法では、助詞などの個々の文法的要素によってのみ説
明しようとして、ここでいうような成分のくみあわさった型において出てくる意味
（structural meaning とでもいうべきもの）を閑却していたきらいがある。

なお、以上のような分析をすると、基準構文における従属句はいっそのこと状況
語とし、付加構文における従属句は陳述的成分としては、と考えることもできる。
そうすれば、結果ははなはだすっきりする。しかし、1・2・3 b(6)「句の扱い」
で述べたような事情もあるので、それぞれいっしょにするかどうかはさらに調査し
て考えなければならない。

1・3・5 分類についての諸問題

構文の型の分類についてはなお問題となることがらいくつがある。

a 状況語による拡大構文と、複合構文との関係

状況語（J）のなかでも、「～バ」「～テモ」「～ノデ」「～ノニ」……とい
った条件関係の意味を表わす状況語によって拡大された構文と、複合構文とは
構文の形の点でも、意味の点でも非常に似ている。

▽エー ^{オクダツ}六月ハ（S） 雨季ニ ハイリマスノデ（J） 気候ノ カワリヤスイ 月デス
（Z）。 （125-1-2）

▽コレハ（S'） 本人ノ 実話デスカラ（K） マチガイハ（S） アリマセン（Z）。

（126-24-8）

複合構文における従属句（K）が状況語に近い性格を示すことはさきにも述べ
た。にもかかわらず、ここでは、「～バ」「～テモ」「～ノデ」「～ノニ」…
の類は状況語、またそれらがついた構文は（状況語）拡大構文として、「～ガ」
「～カラ」などの従属句、そしてまたそれらのついた複合構文とは別にした。

しかし、これについては、別の考え方をとる可能性が残されている。第1は、複合構文における従属句をすべて「～ノデ」や「～ノニ」と同じく状況語とするという考え方である。第2は、状況語のなかの「～バ」「～テモ」「～ノデ」「～ノニ」……を「～ガ」「～カラ」……と一っしょにして従属句とするという考え方である。第1の考え方をとるためには、今の複合構文における従属句と付加構文における従属句との間のちがいが複合構文における従属句と状況語拡大構文における状況語との間のちがいよりも大きいということを証明しなければならない。しかし、そこには問題がある(次のbを見よ)。第2の考え方をとるためには、今状況語のなかにいれている「～ノデ」「～ノニ」……と従属句(一般)としているものとのちがい(1・2・3 b (6)「句の扱い」でのべたような)が、構文の型にとっては大したものではないということを証明する必要がある。

b 複合構文と付加構文との関係

複合構文としたものと、付加構文としたものとの間には、構文の形の上ではちがいはある。主語(あるいは状況語)を共有するかどうかを一応のメルクマールとした。そして、きわめて大ざっぱにいうと、意味の上でもちがう傾向を指摘できる。すなわち、複合構文とした方は、条件的な意味が比較的是っきりしているのに、付加構文とした方はそれがはっきりしていない。ところが、形の方からみればあい付加構文とされるものの中にも、条件的な意味がわりにはっきり出ているものもある。

▽デ(T) ワタクシハ「オカアサンハ ヨク シカリマス、コウ シカリマス」ト
書イタ モノハ ナイカト 探シテ ミタンデスケド(K) ヒトリモ(S) ナイン
 デス(Z)。 (125-6-6)

たしかに、複合構文における従属句と付加構文における従属句とは区別しにくいばあいもあるから、いっそのこと、ここでいう複合構文を解消し、従属句がついたものはすべて付加構文にするという考え方もありうる。しかし、そうするためには a でのべたような複合構文と状況語拡大構文との互いに近い関係の処置^{注)}を考えなければならない。

注) なお、ここで状況語としたものがついた構文でも、付加構文的なものもあるかもしれない。「ワタンガ 家へ 帰ッテ ミタラ 彼ハ 酒ヲ ノンデ 上ケゲンダ ッタ。」など。「～ノデ ～シマショウ」「～ノデ ～シテ クダサイマセ」の「～

ノデ」もその類かもしれないが、ここでは「～ノデ」をまず従属句として扱った上で、その構文全体を付加構文とみた。(1・2・3 b (6)「句の扱い」参照)

c 付加構文についての問題

付加構文において、もとになる基準構文に付加される要素は一般的に言えば、陳述的成分(T)、独立語(D)、従属句(K)なのだが、それらについてくわしく見て行くとけっして同じような性格のものばかりではない。とくに意味の面についてみるとそうである。たとえば、文脈的導入とした、「ツギニ」「デハ」「途中ニナリマシタガ」……(T)とか、もっぱら表現意図に係するものとした「ドウゾ」「タブン」「セメテ」……(T)などと、提示とした「～ハ」「～デスガ」……(T)、「～(T)、～(コレハ)(D)」「～ハ～シマスガ(K)」とをくらべると、その間に相当大きな意味上のちがいがあるように思われる。後の提示の方はその構文の内容にさらに新しいことがらを付け加えているが、前の文脈的導入とか、もっぱら表現意図に関するものの方はことがらは何も付け加えられていない。この点をおもく見るならば、そしてそのちがいによって構文の型も別にすべきであるとするならば、ここで付加構文の名前で呼んでいるものをさらに分けなければならぬことになる。^{注)}ここでは、基準構文に何らかの要素が付加されたということだけで、一応付加構文として扱ったわけなので、これを分けるべきかどうかについてはさらに考察が必要である。

注) もしこのように分けるのであれば、まず陳述的成分(T)も分かれることになるだろう。なお、ここで陳述的成分(T)としたものは、別の観点からしても分かれる可能性がある。(1・2・3 b (6)「句の扱い」参照)

d 構文の型の記述について

以上われわれは、構文の型として、「○○構文」というものをいくつか認めたわけだが、これらは骨ぐみをもとにして、たとえば

骨ぐみ構文……骨ぐみそのまま

拡大構文 ……骨ぐみ + (R, Jによる) 拡大

複合構文 ……骨ぐみ (+拡大) + (Kとの) 複合

付加構文 ……基準構文 + (T, D, Kの) 付加

というプロセスをへてできあがったものと解釈される。さらに、骨ぐみは、骨ぐみ成分(Z, S, M, H)のくみあわせというプロセスをへてできあがった

ものと解釈される。

このプロセスとその結果としての構文(の型)とは、密接な関連があるが、い
ちおう別なものであって、構文の型の研究は、こうしたプロセスのタイプとそ
の結果のタイプとの両面を明らかにすべきである。ただし、今回の調査は、資
料が少ないので、結果としての構文の型を十分調査することができなかった。
われわれは、2.「構文の型」で構文の型について記述することになるが、そこ
では、主として、構文の型を形成するプロセスに重点を置くことにした。

1・4 付録

1・4・1 略号一覧

- Z ……述語
- S ……主語 (S' と共存するばあいは部分主語)
 - S' ……いわゆる総主
- M ……目的語
 - M₁ ……「<体言>ヲ」の関係に立つ目的語
 - M₂ ……「<体言>ニ」の関係に立つ目的語
 - ⋮
- H ……補語
 - H₁ ……結果的補語
 - H₂ ……内容的補語
- R ……連用語
- J ……状況語
- T ……陳述的成分
- D ……独立語
- K ……従属句
- s, m, z, …… S; M, Z, …とそれぞれ同格の成分
- 【D】** ……独立語構文
- 【Z】** ……述語構文
 - [Z] ……基準構文
 - /...Z/ ……骨ぐみ構文
 - R/...Z/ ……連用語(R) による拡大構文
 - J/...Z/ ……状況語(J) による拡大構文
 - K/...Z/ ……複合構文
 - T [Z] ……陳述的成分(T) のついた付加構文
 - D [Z] ……独立語(D) のついた付加構文
 - K [Z] ……従属句(K) のついた付加構文

1・4・2 各構文型における成分（従属句）の意味的特徴概観

		意 味 的 特 徴
独 立 語 文 【D】	D	呼びかけ・応答・評価・提示……
	T	文脈的導入，表現意図の補足……
述 語 構 文 【Z】	基準構文 (骨ぐみ成分)	
	Z	(主体などの) 動作・状態・性質・種類……
	S	(動作・状態・性質・種類……)の主体……
	M	Zのことがらの成立に参加するものごと
	H ₁	結果の状態……
	H ₂	言語活動・精神活動の内容……
	(拡大成分)	
	R	(動作の)ようす，(動作・状態・性質……)の程度，量……
文 【Z】	J	空間・時間・原因・理由・目的・条件(未定・確定)……
	(従属句)	
	K	比較的はっきり現われている条件(確定)
付加構文	T	文脈的導入，表現意図の補足，評価，提示……
	D	呼びかけ・応答・評価・提示……
	K	条件(確定——主観的な)，事実の提示的表現……

1・4・3 構文の型概観

I 独立語構文 【D】

D
T D

II 述語構文 【Z】

1 基準構文 [Z]

a 骨ぐみ構文 /...Z/

S Z
S H₁ Z
S H₂ Z
S M, Z
S M₂ M, Z
S M, H₁ Z
S M₂ H₂ Z
S' S Z
S' M₂ S Z
Z
M₂ H₂ Z
⋮

b 拡大構文

R/...Z/

SRZ
SM_rRZ
SRH₂Z
⋮

J/...Z/

JSZ
SJRZ
SJM_rZ
S'JSZ
⋮

c 複合構文

K/...Z/

SKZ
SKM_rZ
S'KSZ
⋮

2 付加構文

T[Z]

TSZ
TSM_rZ
TSRM_rZ
⋮

D[Z]

DSZ
DSM_rZ
DSRM_rZ
⋮

K[Z]

KSZ
KSM_rZ
KSM_rH₂Z
⋮

1・4・4 『話しことばの文型(1)』との対照表

	『話しことばの文型(2)』	『話しことばの文型(1)』	備考
成分の種類	(骨ぐみ成分)… { 述語・主語 目的語・補語 } (拡大成分)……連用語・状況語 } (いわゆる連用修飾語) 陳述的成分 } 独立語 } (いわゆる独立語)	述語・主語 体修語・副修語…(いわゆる連用修飾語) 孤立語…(いわゆる独立語)	→ 1・2・3 b 「一次成分の種類」 (71ページ以下) (一次成分だけを扱った点では共通)
いわゆる「句」の扱い	『話文型(1)』の「句」のうち、独立の文にちかひ性質をもったもの(～ガ、～ケレドモ、～シ…)だけを「従属句」として、一般の成分とは別扱いにした。他のものは一般の成分(連用語・状況語・陳述的成分)とする。(従属句を2つ以上含む文は扱わなかった。)	用言(+助動詞)・体言+助動詞の連用形および接続助詞のついた形を句とする。(句を含む文の分析はしていない。)	→ 1・2・3 b(6) 「句の扱い」(86ページ以下)
構文の型の種類	{ 独立語構文 述語構文 } 基準構文 { 骨ぐみ構文 付加構文 } 拡大構文 複合構文	自動詞文 他動詞(1)文 他動詞(2)文 形容詞・形容動詞文 名詞文 副詞文 感動詞文	→ 1・3 「構文の型の分類」(97ページ以下)

2. 構文の型

2では、主として資料に現われた構文の型とその用例をあげる。

われわれの認めた構文の型のおもなものは、1・4・3で示したとおりであるが、1・3・5 dでのべたように、ここでは、結果としての構文の型をあげずに、それを形成する部分あるいはプロセスをあげるばあひが多い。

なお、各成分および従属句の表示は、おもにローマ字による略号を用いる。

2・1 独立語構文【D】

独立語構文は、独立語(D)によって終止する構文である。この種の構文は

その構造が比較的単純である。大ざっぱにいうと次の2つの型がある。

終止の位置にたつD 1つだけからなるもの

終止の位置にたつDのほか、Tが現われるもの

2・1・1 独立語1つだけからなるもの

▽ミナサマ(D)。 (126-3-15, 他に数例)

▽ミナサン(D)。 (124-30-14, 他に数例)

▽先生(D)。 (127-24-9)

▽満堂ノ 諸君(D)。 (127-35-1)

(以上呼びかけの例)

▽^{ランナ}今日ハ(D)。 (127-15-3, 他に数例)

▽今晚ハ(D)。 (124-29-1, 他に数例)

▽サヨウナラ(D)。 (126-27-11, 他に数例)

▽ゴキゲンヨウ(D)。 (125-17-4, 126-3-15)

(以上あいさつの例)

▽ア(D)。 (127-24-5)

▽アー(D)。 (123-29-3, 123-29-4)

▽サー(D)。 (127-24-5)^{注1)}

▽ハイ(D)。 (122-11-3, 123-24-5, 他に数例)

▽ソウ(D)。 (123-29-4)

▽ソウカ(D)。 (122-11-2)

▽ソウデスカ(D)。 (123-29-3)

▽ハアッ(D)? (138-24-3)^{注2)}

(以上応答などの例)

注1) ▽サー。デキアガリマシタ。

注2) ▽エ ミナサン オ子サンニ 聞カレタ バアイ ドウイウ フウニ オ答エ
ニナリマスカ? ハアッ?

2・1・2 陳述的成分のついたもの

▽デハ(T) ゴキゲンヨウ(D)。 (127-33-8)

(以上あいさつの例)

▽ソレカラ(T) ツケアワセノ ジャガイモ(D)。 (127-15-16)

▽カラ(T) ルビ(D)。 (123-42-14)^{注1)}

▽ソレカラ(T) アー 「マス」ト イウ フウナ 助動詞ノ ツイタ 形(D)。

(123-10-8)

(以上表示の例)

注) 「ソレカラ ルビ(ノコトダ, ノコトヲ問題ニスル)」の意。

以上のほかに、TDDの型のもの（「ソレジャ(T) ミナサン(D)サヨウナラ(D)。」など）もありうるわけだが、資料にはなかった。

2・2 述語構文【Z】

述語構文は、述語(Z) によって終止する構文である。この種の構文は独立語構文とちがって、構造が複雑である。これは、大きく、基準構文・付加構文に分かれる。

2・2・1 基準構文【Z】

基準構文は、付加構文に対してもとになる構文である。基準構文は、さらに骨ぐみ構文・拡大構文・複合構文に分かれるが、これらを、ここでは、できあがった構文として扱わずに、それらを形成する骨ぐみ・拡大・複合に分析して扱う。

a 骨ぐみ /…Z/

骨ぐみは、すべての述語構文に存在する最も基礎的な部分である。

骨ぐみは、具体的な文では「陳述的変容」(1・2・3 c 参照)を受けるが、ここでは、そうした陳述的な面は捨象して、残ったことがらの面的な構造を問題にする。(陳述的な変容については V 2・1 参照)

陳述的な面を捨象した観点からすれば、場面・文脈や表現意図・敬譲表現などによって一定の成分が省略されているとみられる文は正当には扱えないから、当面の対象から除外しなければならない。ただし、目的語・補語の要求の度合いにはさまさまあって、現在の調査段階では、はたして省略とすべきかどうかにまよう点が多いので、目的語・補語に関しては、省略のある文というもの認めて対象から除外する、ということをしなかった。逆に、それに相当すると思われるものには、目的語・補語を補いうることを示した(例文のあとに《 》で)。主語が1つあるばあい、他に総主あるいは部分主語(2・2・1 a (2) 参照)を補いうるものについても、そのむね《 》で示した。結局、省略のある構文として、ここで除いたものは、主語1つの構文における主語の省略文だけである。

骨ぐみは、骨ぐみ成分であるZ, S, M, Hのくみあわせ(MやHはさらに, M₁, M₂, M₃, …… , H₁, H₂ などのくみあわせ)によって形成されるが、

これらの成分のくみあわせには、いろいろと制約があるので、ここでは、くみあわせの結果としての骨ぐみを扱う。

骨ぐみの分類は、同一構文内の骨ぐみ成分の相互関係（制約関係）や骨ぐみどうしの相互関係（派生的関係など）を考慮してなされるべきであろうが、ここでは、これらの関係を十分に明らかにしていないので、便宜上、次のような基準によって、骨ぐみの種類を整理して列挙するにとどめる。^(注)（数字 0, 1, 2 などは、その成分の数を示す。）

$$\begin{array}{ccc}
 \text{(第1基準)} & \text{(第2基準)} & \text{(第3基準)} \\
 S \begin{cases} 1 \\ 2 \\ 0 \end{cases} & M \begin{cases} 0 \\ 1 \\ 2 \\ \text{〃} \end{cases} & H \begin{cases} 0 \\ 1 \end{cases}
 \end{array}$$

注) 補語のあるなしを最後の基準にしたのは、補語が述語にもっとも近い関係にある成分で、補語を述語の一部とみなすことも考えられるほどであるからである。

主語と目的語のうち、主語を第1の分類基準にしたことについては、まだあまりはっきりした根拠をもっていない。

主語のあるなしを、1, 2, 0の順にしたのは、1が基礎的な型であり、2がそれからの派生的な型であるとみなされるものが（全部ではないが）あること、0が特殊な型であると考えられることなどからである。

以下、骨ぐみをあげるにあたって、Zを除く骨ぐみ成分の数を3つの数字で表わした整理番号を用いる。第1の数字はSの数、第2の数字はMの数、第3の数字はHの数である。たとえば(1-2-0)は/SMMZ/を示す。

(1) 主語 1

(1-0) 目的語 0

(1-0-0) 補語 0

/S Z/

いわゆる省略のある構文を除けば、この型のZには、大部分の名詞、形容詞、形容動詞になる。動詞のうち、目的語や補語を要求しない動詞——英文法流に言えば、完全自動詞——がこれになる。

(名詞述語の例)

▽ソシテ(T) ソノ 参加国ハ(S) アメリカ・ベルギー・カナダ・イギリス・西
ドイツ・イタリー・ポルトガルト イウ ^{ハツ}ハツノ オー 国デ ゴザイマス
(Z)。 (127-3-22)

▽コノ 本ノ 著者ハ(S) 石井桃子サン(Z)。 (126-1-3)

- ▽エー 第二ハ(S) マワリノ カタト 十分ニ イー ヨク 仲ヨク ソシテ
協力的ニ ヤッテ イクト イウ コト(Z)。 (127-23-13)
- ▽第三ノ 転機(D) ソレハ(S) 造船疑獄事件ニ 佐藤サント トモニ 疑イヲ
カケラレタ コトト 吉田内閣ガ 総辞職ニ 追イコマレタ トキデス(Z)。
(126-26-6)
- ▽エー トコロデ(T) エー 一般ニ 中学校ヲ 終エテ タダチニ 職場ニ 行^イ
カレル 方^{カタ}々^{カタ}ノ オ 職場ト イウ モノハ(S) ドンナ モノカ(Z)?
(127-22-10)
- ▽ソレガ(S) 冷房デス(Z)。 (126-41-2)
- ▽コレガ(S) ワタシノ オ 序論デス(Z)。 (123-24-12)
- ▽ソレカラ(T) シカル コトニ 一貫性ガ ナイッテ イウ コトモ(S) 考エ
モノデスネ(Z)。 (125-8-13)
- ▽ワタクシ(S) タダイマ ゴ紹介ニ アズカリマシタ 岸本デ ゴザイマス
(Z)。 (124-20-1)
- (形容詞述語の例)
- ▽(略) 実際ハ(T) コウ 考エテル 人ノ ホウガ(S) 多インデスネ(Z)。
(123-26-22)
- ▽二番ガ(S) スクナイネ(Z)。 (123-29-4)
- ▽マ ハジメハ(J) コノ 機会ガ(S) ナカッタ(Z)。 (123-38-18)
- (形容動詞述語の例)
- ▽コノ コトハ(S) 国語科ニ オイテモ(J) 同ジデ アリマス(Z)。
(123-32-10)
- ▽マ セイゼイ^{ジユツブン} 十分カ 十五分ガ(S) 適當デショウ(Z)。 (125-8-9)
- 《ナニハ(S)》
- ▽ソレニ 対シテ(T), 終止形ニ オケル 陳述ト イウノハ(S) モット(R)
論理的デ アリマス(Z)。 (123-6-22)
- ▽時局ハ(S) マコトニ (TまたはR) 重大デ ゴザイマス(Z)。 (127-34-6)
- ▽デ(T) イマ アー ココデ ソノ 注意ヲ シナケレバ ナラナイト イウ
ヒトツノ コトダケニ 限定シテ シカルッテ イウ コト(D), コレモ(S)
大切デショウ(Z)。 (125-8-11)
- (副詞述語の例)
- これは、ソウ、ドウに限られていた。
- ▽ソレカラ(T) ア 「イッタ」ト イウ フウナ 形モ(S) ソウデ アリマス
(Z)。 (123-9-19)
- ▽雨具ダトカ エー ソレカラ 袋 オー オー ソレカラ 風呂敷^{フウロ}, コノ テー
ブル掛ケダッテ(S) ソウデスネ(Z)。 (127-28-16)
- ▽エー 二番ガ イイ カタ(SまたはD) ドウデスカ(Z)。 (123-29-3)

▽ソレカラ(T) ヨク・オカアサンタチガ 「オトウサンニ イッテ ヤリマス」
ッテ コウ イウノハ(S) ドウデショウ(Z)。 (125-8-19)

動詞述語のばあいには、「完全自動詞」が典型的であるが、資料に現われた例では、さらに他の骨ぐみ成分で補充されうるものが多い。これらは、骨ぐみ成分の省略のある構文とみるべきかどうか疑問であるが、いちおうここに例をあげておく。

(アル……の例)

▽時間が(S) ゴザイマセン(Z)。 (124-26-20)

▽デ(T) コノ 「ユコウ」ト イウ フウナ 形ヲ オー 志向形ト イウ フ
ウニ 呼ンデ イル カタガ(S) アリマス(Z)。 (123-7-21)

▽今週モ(J) ズイブン イロイロノ デキゴトガ(S) アリマシタネ(Z)。
(125-14-3)

▽マダ 六十歳ノ 書生ト イッタ 人間ノ 生地ヲ ムキダシニ スル トコロ
モ(S) アルヨウデス(Z)。 (126-26-17) 《ダレハ(S') またはダレニハ(M₂)》

▽シカモ(T) 思ッタ コトラ ズケズケ 結論カラ サキニ 言ッテ シマウ
クセガ(S) アリマス(Z)。 (126-26-11) 《ダレハ(S') またはダレニハ(M₂)》

▽ソんな フウナ エー 陳述ノ 違イガ(S) アリマス(Z)。 (123-7-3)
《ナニト ナニトハ(S') またはナニハ(S') ・ナニト(M₁)》

(その他の自動詞の例)

▽コレデ(T) ゴマジョウユガ(S) デキマシタ(Z)。 (127-14-1)

▽ソレカラ(T) 会社側ノ 漁民トノ コノ 誠意ヲ モッタ 話シ合イガ(S)
デキテ イタカ(Z)? (125-14-4)

▽アー 有名ナ ヒゲガ(S) 現ワレテ キマシタ(Z)。 (127-8-23) 《ナニ(ド
コ)ニ(M₂)》

▽金魚ガ(S) 泳イデ イマス(Z)。 (127-28-11) 《ドコニ(M₂) またはドコヲ
(M₃)》

▽デ(T) ヤハリ(T) 同じヨウニ(RまたはT) ソノ 信号ノ タメニ(J) 自動車
ガ(S) 停滞シテ オリマシタ(Z)。 (124-2-23)

▽イマ(J) アメリカノ 人口ハ(S) 非常ナ 勢イデ(R) 増加シテ オリマス
(Z)。 (126-30-20)

▽エー コノヨウニ(TまたはR) イー ソビエツトハ アー アジア・アフリカグル
ープニ 対シテハ マー 非常ナ ア 力ヲ 入レテ オルト イウ コトガ
(S) マー ハッキリ イタシマス(Z)。 (127-5-4)

▽ミカケハ(S) コウ アンマリ(T) イー コノ ン 変ワリマセンヨ(Z)。
(127-25-11) 《ナニト(M₁)》

▽チャント(R) 金魚ガ(S) ハイッテマスネ(Z)。 (127-28-10) 《ナニ(ドコ)

ニ(M₂)》

▽エー 日本^{ニホン}デハ(J) 非常ニ(R) 略字・略語ガ(S) ハヤリマス(Z)。

(124-19-6)

▽ソレカラ(T) バターガ(S) イクラカ(R) トケダシテ マイリマスデ ゴザ
イマスネ(Z)。(127-18-11)

▽エー シカシ(T) ソウイウヨウナ 整理ヲ トッタ タメニ(J) 自動車ハ
(S) モウ(J) 川ノ 流レルガ ゴトクニ(R) ドンドン ドンードント(R)
シンコ(ウ) 運行シテ イル(Z)。(124-2-27)

▽日本^{ニホン}ノ 国民ノ アイダデ(J) 六百万ト イウ 大キナ 労働組合ノ 運動ガ
(S) 発展シテ マイリマシタ(Z)。(124-32-16)

▽池田新内閣ガ(S) キョウ(J) 発足^{ホツツク}シマシタ(Z)。(126-20-1)

▽サラリーマンノ 疲レハ(S) コノ 朝ノ ラッシュニ(J) 始マリマス(Z)。
(127-32-1)

▽イマ(J) 世界ノ 状態ハ(S) ドンドン(R) 変ワリツツ アリマス(Z)。
(124-30-3) 《ドンナ 状態ニ(Hi)》

▽デ(T) コノ ヨウナ ヤキモチハ(S) イロンナ 形デ(R) 現ワレテ マイリ
マスネ(Z)。(125-11-18)

▽シカシ(T) タイガイノ 男ナラ(S) コレデ(J) マイッテ シマイマス
(Z)。(126-26-4)

/SM, Z/のM₂の表わすことがらSの二次成分として表現されると, /S
Z/になる。/SM, Z/ (127 ページ) 参照。

このほかに, /SM, Z/ のZが受身(直接的な)・～テアルの形・可能の形に
なってきた, 派生的な/SZ/がある。^{注)}

注) 派生的な構文については2・2・3 d「派生」の項参照。ここでは, 受身を(A)
まともな受身(①直接的な受身 ②間接的な受身), (B) ③めいわくの受身の
2類, 3種に分けて考える。(165 ページ参照)。

(他動詞の直接的な受身の例)

これは, /SM, Z/ から派生した骨ぐみである。(Z(能動)→Z(受身),
M₂→S, S→0)

▽ソシテ(T) コノ 大西洋経済会議ガ(S) アー コトシノ 一月十二日ト 十
三日, 二日間ニ ワタリマシタ(J) バリーデ(J) 開カレマシタ(Z)。(127-3-1)

▽ソノ タメニ(R) 日本^{ニホン}ノ 国民ハ(S) 十三年間(R) 苦シメテ マル 苦シ
メラレテ マイリマシタ(Z)。(124-30-12) 《ダレニ(M₂)》

▽ソシテ(T) エ タクサンノ 合成樹脂ガ(S) アトカラ アトカラト(R) 作
り出サレテ オリマス(Z)。(127-24-2)

▽デー(T) マズ(T) エー (略) 話シコトバノ 文デハ アー 成分ノ 順序
ガ アー 正常デ ナイト イウ コトガ(S) ヨク(R) 言ワレマス(Z)。
(122-15-4)

▽デー(T) マタ(T) アー スネテ シマッテ オカアサンニ 近ヅコウト シ
ナカッタリ エー オドオドシテ ヒトリボッチデ ボンヤリシテ イルヨウナ
スガタモ(S) トキドキ(R) 見ラレマス(Z)。(125-12-19)

▽(略) コウイウ コノ 運動ガ(S) 続ケラレテ イル ワケデス(Z)。
(125-23-4)

(可能動詞の例)

これも、/SM₉Z/ から派生した構文である。(Z_(他動詞)→Z_(可能動詞), M₉
→S, S→0)

▽エー ソウイウ コトガ(S) アー コレデ モッテ(R) 測レル ワケデス
(Z)。(123-40-12)

▽デ(T) エ タトエバ(T) アー カタカナノ 「^フン」ガ 書ケナイ(Z)。
(122-23-22) 《ダレハ(S') ~ダレニハ(M₉)》

▽ソコデ(T) エー ゴ承知ノ 長イ, 人間ノ 何千年, アルイハ 何万年ノ 歴
史ト イウ モノハ^{注)} 結局 コノ 人間ガ 自由ト 人権ヲ 獲得スル タメニ
タタカッテ キタ 歴史ダト イウ コトモ(S) 言エルンジャ ナイカト(Z)。
(126-51-18)

注) これを一次成分として, 言エルの主語(総主S')とみて, 全体を /S'SZ/と
みることもできる。

(~テアルの形の例)

これも、/SM₉Z/ から派生した構文である。(Z_(他動詞)→Z_(~テアル), M₉→
S, S→0)

▽一等・二等・三等・^ヨ四等・^{ハチ}八等マデ(J) 活用形ガ(S) 立テテ アリマス
(Z)。(123-3-10)

(他動詞の例)

これは、/SM₉Z/のM₉の省略されたものであろう。主語の省略された(と
認められる)文はかなり多いのに対し, M₉の省略された(と認められる)文は
比較的少ないようだ。

▽トコロガー(T) エー (略) 女ノ カタハ(S) ワリアイニ ヨク(R) 知ッ
テマスネ(Z)。(125-24-1) 《ナニヲ (M₉)》

▽マア コウイウ カタガ(S) 非常ニ 一生懸命ニ(R) ヤッテ クレタ ワケ
デス(Z)。(124-5-5) 《ナニヲ (M₉)》

▽男性ノ カタモ(S) ドウゾ(T) オタメシニ ナッテ タダサイマセ(Z)。
(127-23-6) 《ナニヲ (M₇)》

▽ワタクシドモ(S) 期待シテルヨウナ シンダイデ ^{注)}ゴザイマス(Z)。(127-10-23)
《ダレニ(M₌)・ナニヲ(M₇) またはダレニ(M₌)・ナニト(H₂)^{注)} またはナニト(H₂)》
注) こうみなすばあいには、「期待スル」は自動詞。

次のものは、/S' S Z/のS(ナニガ)が省略されたもの、あるいは/S H₂ Z/のH₂(ナニガ ナンデ アルカ・ナニガ ドウシタカ)が省略されたものとみることができらる。

▽シカン(T) カレラハ(S) ワカラナイ(Z)。(124-30-6)

▽^{ニホン}日本共産党モ(S) ヨク(R) ワカッテ イル(Z)。(124-30-6)

なお、/S Z/で注意すべきものとして、次のような例があった。

<述語に連体修飾語がなければ意味をなさない構文>

▽デ(T) ソウシマスト(T) 現在ノ 新聞デハ(J) アー アー 朝日新聞ハ(S)
ダイタイ 五十パーセント以上ノ ^{ゴジニフ}漢字含有率デス(Z)。(123-44-20)

▽デ(T) オフサルモグラフィト イウ モノハ(S) ダイタイ コウイウヨウナ
構造デス(Z)。(123-39-2)

▽コレハ(S) 社会党ト 共産党トノ 大キナ 責任デ アリマス(Z)。

(124-34-16)

▽ワタクシハ(S) 一身ヲ カエリミズ 党ノ 融和ト 結束ヲ ハカリ、ワガ党
ニ 課セラレマシタ 使命ニ 向カッテ ^{注)}マイシンスル 覚悟デ アリマス(Z)。
(127-34-6)

注) これは、「～スル ツモリデス」などの構造にちかい。動作を表わす連体修飾語とくみあわさって複合述語的になっているともみられる。(2・2・3 f 「複合述語的な構文」およびⅡ 3・3・1・b 5 「意志の表現」参照)

<述語の打消しと呼応する主語をもつ構文>

▽コレクライ 日本ノ 国民ニ 対スル 恥知ラズナ 不信頼ナ コノヨウナ 政府ノ 態度ト イウ モノハ(S) アリマセン(Z)。(124-31-13)

(1-0-1) 補語 1

(i) /S H₁ Z/

(～ナルの例)

▽ダイイチ(T) ^{ニホン}日本ガ(S) ドウイウ 状態ニ(H₁) ナッテ イルンデシヨウカ(Z)? (124-30-14)

▽能力ハ(S) ムシロ(T) 方法ニ(H₁) ナッテ シマウンデス(Z)。(123-30-18)

▽コレガ(S) マタ(T) エー コウイウ プラスチックニ(H₁) ナルンデスネ(Z)。(127-29-1)

▽ソレガ(S) アタクシタチノ 家庭デハ(J) トキドキ(R) 逆ン(H₁) ナルン
ジャ ナイデショウカ(Z)。 (125-8-4)

▽ツマリ(T) 社会性ガ(S) 非常ニ 強ク(H₁) ナッテル(Z)。 (126-13-4)

▽ア トコロガ(T) 自動車モ(S) サッパリ 動カナク(H₁) ナッテ シマイマ
シタ(Z)。 (124-2-14)

▽デ(T) ソノ サイハ(J) アー 「メ」ト ソレカラ 「デ」ノ トコロガ
(S) 高ク(H₂) ナッテ イマス(Z)。 (122-18-16)

▽汗ヲ ウント カクト イウ コトハ(S) カラダカラ 水分ガ ドンドン 奪
ワレテ イルト イウ コトニ(H₁) ナリマス(Z)。 (126-39-22)

▽ソシテ(T) ソノ オー 第一回ノ オー 閣僚会議ハ(S) エー キタル 四
月十九日ニ 開カレル 予定ン(H₁) ナッテ オリマス(Z)。 (127-3-20)

▽略) コレガ(S) ソレゾレ(R) エ 話題ト(H₁) ナル ワケデス(Z)。

(123-23-1)

▽シカン(T) ハイアットガ 発明シタ セルロイドッテ イウノハ(S) タマツ
キノ タマヨリモ モット モット 便利ナ ワタシタチノ 非常ナ 便利ヲ
与エル 材料ト(H₁) ナッタ ワケデスネ(Z)。 (127-25-6)

この骨ぐみのZになる自立語は、「ナル」が代表的であるが、このほかに、
状態変化を表わす自動詞は、一般にこれになることができる。後者のばあいは、
H₁ は、前者のばあいより、^{注)} 任意的な成分である。

注) 「ナル」は変化を抽象的に示すだけで、H₁ がなければ、ほとんど意味をなさな
い。このばあいH₁ の省略されることはあまりないようである。また、H₁ と「ナ
ル」とのむすびつきは強く、「～ニ ナル」はしばしば、「～ン ナル」のようにな
ったりして、音声的にもひとつづきに発音されるようである。

○信号ガ(S) 赤ニ(H₁) 変ワル(Z)。 ○キツネガ(S) 女ニ(H₁) バケル(Z)。

次のものも、この例にいれてよいだろう。

▽エー マタ(T) ドンナ 職場ニ(M=) 就職ガ(S) オキマリデショウカ(Z) ?

(127-23-4)

▽コレハ(S) 生物学的ニ キット アルニ(H₁) キマッテル(Z)。 (134-21-15)

注) ～ニ キマッテルは、複合述語的な構文にちかい。(2・2・3 f 参照)

このほかに、/SM₃H₁Z/のZが受身(直接的な)・可能・～テアルの形にな
ってできた、派生的な/SH₁Z/がある。これのZは「サレル・シテアル」が
代表的であるが、このほかに状態変化を表わす他動詞のこれらの形も、このZ
になりうる。

(～サレルの例)

▽ソウイウ アゲクニ(J) 日本^{ニッポン}ノ 国民ノ 知ラナイ アイダニ(J) アノ 日本^{ニッポン}
ハ(S) 原水爆ノ 基地ニ(H₁) サレテ イル(Z)。 (124-30-17)

(その他の動詞の例)

▽コレモ(S) モウ ズイブン イロンナ モノニ(H₁) 作ラレテ イマスネ(Z)。
(127-28-16)

(ii) /S H₂ Z/

▽デ(T) ワタクシハ(S) 幼児期ト イウノハ ヒトツノ 感情形成ノ 時期ダト
(H₂) 思ッテ イマス(Z)。 (126-10-2)

▽ツギニハ(J) ワタクシハ(S) 愛情デハ ナイカト(H₂) 思ウ(Z)。 (126-52-7)
《ナニガ H₂の二次成分としてのS》

▽池田サンハ(S) コノ トコロ(J) 大イニ 低イ 姿勢デ(R) 「国民ニ マズ
知ラセル 政治ヲ」ト(H₂) コウ(H₂)^注言ッテ オリマス(Z)。 (126-27-4)

注) ～ト コウ, ～ト コノヨウニ などはH₂の同格であるとみなす。 (2・
2・3 a 「同格」参照)

▽ワタシハ(S) ソレハ デキナイッテ(H₂) イウンデス(Z)。 (134-13-6)

▽エー ミナサン(S) オ子サンニ キカレタ バアイ(J) ドウイウ フウニ(H₂)
オ答エニ ナリマスカ(Z)? (138-24-3)

▽コレニ 対シテ(T) ワタクシドモハ(S) (略) ソノ 発達ノ 実態ヤ 過程ヤ
段階ヲ 明ラカニ シタイ, マタ ソレガ ナニニ ヨルカ ア ソノ 条件ヲ
明ラカニ シタイト(H₂) 考エマシタ(Z)。 (122-20-14)

▽ダイタイ(T) ソノー ワタクシハ(S) (略) ソノ 单元ニハ 六種類 アルト
(H₂) コウイウ フウニ(H₂) 考エテ イマス(Z)。 (123-32-15)

▽マー ソノ 点デ マー 全体的ニハ 非常ニ 日本人ニ エー 親シイ エー
好印象ヲ 持ッテ 帰ッタト(H₂) ワタクシハ(S) 信ジテ オリマス(Z)。

(139-10-15)

この骨ぐみのZになる自立語は、たとえば、言語活動(イウ・話ス・書ク…
…)・思考活動(思ウ・考エル・ミナス……) 感覚・知覚活動(感ジル……)な
どを表わす動詞や「見エル」などである。

これらの動詞は、(「見エル」などを除き) /SM₉H₂Z/ 構文のZにもなりう
る。((1-1-1)(ii) 128 ページ参照)

/S H₂ Z/のばあい、H₂ は二次成分としてのSとZとを含んでいる(含み
うる)もの(いわゆる引用句)が多い。

○Aハ(S) Bガ Cダト(H₂) イウ(思ウ・考エル・ミナス・感ジル……)(Z)。

このほかに、/SM₉H₂Z/のZが、受身(直接的な)・可能・～テアルの形

になってきた、派生的な/S H₂Z /がある。

▽デー(T) コラ(S) マア(D) 要素的ナ^イ行キ方トモ(H₂) 言エマスネ(Z)。
(123-26-1) <← ~ハ コレヲ ~ト 言ウ>

▽エー コノ 時ノ ルターノ 立場ハ(S) アー 批評スル 人ノ コトバニ ヨ
リマスト(T), キワメテ コノ 自由サト ソレカラー モットモ 高イ 意味ニ
オケル 豪胆サ, 勇マシサニ ミチタ モノデ アッタト イウ フウニ(H₂) 批
評サレマス(Z)。 (137-5-14) <←~ハ ~立場ヲ ~ト 批評スル>

○天皇ハ(S) 昔ノ 憲法デハ(J) 神聖ニシテ オカスベカラザル モノト(H₂)
規定シテ アッタ(Z)。 <←~ハ 天皇ヲ ~ト 規定スル>

(1-1) 目的語 1

(1-1-0) 補語 0

(i) /S M, Z/

この骨ぐみの述語になる自立語は、たとえば相手を必要としない動作を表わす他動詞および移動を表わす自動詞などである。

(他動詞の例)

▽デ(T) ソレハ(S) コノ 性質ヲ(M₂) シシテ イル ワケナンデス(Z)。
(127-26-13)

▽明ルイ 社会ノ …ヲ 考エル バアイニ(J) ワタクシタチハ(S) 暗イ 社会
ヲ(M₂) 考エレバ ヨロシイ(Z)。 (126-53-12)

▽ソウスルト(T) ソノ 立ッテ イタ 男ガ(S) 「歩ケー？」ト コウイウヨウ
ナ 言イ方ヲ(M₂) シマス(Z)。 (122-17-10)

▽デ(T) 普通ノ 人ハ(S) ミナ(R) コノ ミツノ 名マエヲ(M₂) 持ッテ
イル(Z)。 (126-17-2)

▽エー 一番ガ イイ カタ(S)注) チョット(T) 手(M₂) 上ゲテ クダサイ
(Z)。 (123-29-3)

注) 呼びかけ(D) とみることもできる。

▽ジョンソンテノハ(M₂) ワタクシ(S) 知リマセン(Z)。 (122-10-1)

▽カレハ(S) アノ 戦時中(J) 東条内閣ノ 商工大臣モ(M₂) 勤メマシタ
(Z)。 (124-32-9)

▽ソシテ(T) マタ(T) 使用者側モ(S) (略 ~スル) トコロノ 考エ方モ(M₂)
コレマタ(T) 捨テナケレバ ナリマセン(Z)。 (124-21-17)

(自動詞の例)

▽最近ハ(J) アメリカノ ジェット機ガ(S) 原爆ヲ ダイテ(R) 日本ノ 上空
ヲ(M₂) パトロールシテル(Z)。 (124-31-4)

このほかに、/SZ_(他動詞)/のZが使役の形になってできた、派生的な/S
M₉Z/がありうる。

○母親ガ(S) 子ドモヲ(M₉) 歩カセル(Z)。<←子ドモガ(S) 歩ク(Z)。>

(ii) /SM₂Z/~/M₂SZ/

ある種の M₂ (たとえば、ありかを示すもの) は、Sより前の位置にあるこ
とが多い。M₂ の下位区分と並行して、調査が必要である。

▽日本^ニモ(M₂): ソウイウ 人ガ(S) オリマス(Z)。 (124-29-10)

▽朝ノ 疲レノ ヒトツニ(M₂) 出勤スル トキノ 歩ク 速度ガ(S) ゴザイマ
ス(Z)。 (127-32-3)

▽ダカラ(T) コノー 学習活動ト イウ モノト 経験ト イウ モノニハ(M₂)
多少ノ ズレガ(S) アリマス(Z)。 (123-32-10)

▽エー ココニ(M₂) 香料ガ(S) イロイロ(R) 並ンデ オリマス(Z)。
(127-15-14)

▽サキホドモ 申シアゲマシタヨウニ(T) 戦後ノ 日本^ニノ 国民ノ アイダニハ
(M₂) ホントウニ 大キナ 力ガ(S) 生マレテ キテ イル(Z)。 (124-34-11)

▽デ(T) コノ ヤキモチハ(S) 総領ノ オ子サマニ(M₂) トクニ(T) 現ワレル
ノデハ ナイデシヨウカ(Z)。 (125-11-15)

▽コチラニ(M₂) ゴマガ(S) ハイッテ オリマス(Z)。 (127-13-20)

▽ソレニ 対シテ(T) エー 「カラ」「マデ」「ニ」ト イウ フウナ 類ハ(S)
コウ 「スル」ト イウ フウナ 形ニ(M₂) 接続イタシマス(Z)。 (123-4-5)

▽現在(J) 池田総理ハ(S) ミツツナ ミツツノ 大キナ 問題ニ(M₂) エー ブ
ツカッテ オリマス(Z)。 (139-16-2)

▽コレハ(S) エー 日本語^ニデノ イワバ 自立スル コトバ イウノニ(M₂) 当
タリマス(Z)。 (122-6-18)

▽トコロガ(T) コレニハ(M₂) コノ 脂肪ガ(S) 非常ニ(R) 多イ(Z)。
(138-1-10)

▽ソレデ(T) ワタクシドモノ 研究室ニハ(M₂) アー 心理学ヲ 担当シテ イル
人ガ(S) 非常ニ(R) 多ウ^{オホク} ゴザイマス(Z)。 (122-22-19)

▽アデナウワーサンモ(S) ドチラカト イウト(T) ソレニ(M₂) マー(D) 近イ
(Z)。 (139-14-14)

この骨ぐみのZになる自立語は、たとえば、移動・接近・接触・出現・存在・
関係などを現わす自動詞、相手を必要とする自動詞、存在・関係・相手に対す
る心理状態などを表わす形容詞・形容動詞などである。

○太郎ガ(S) 花子ニ(M₂) ホレタ(Z)。 ○太郎ガ(S) イスニ(M₂) ヨリカカ

ッテ イル(Z)。 ○参観者ハ(S) コレニ(M_±) サワッテハ イケナイ(Z)。
○太郎ハ(S) 花子ニ(M_±) 夢中デ アル(Z)。 ○郵便局ハ(S) 駅ニ(M_±) 近
イ(Z)。 ○Aハ(S) Bニ(M_±) 等シイ(Z)。

このほかに、/SM_±M_±Z/のZが、受身(直接的な)・可能・～テアルの形
になってできた、派生的な/SM_±Z/がある。

▽エー ソレデ(T) (略) インド・パキスタン ソレカラ アフリカニ(M_±) 重点
ガ(S) 置カレテ オリマス(Z)。 (127-5-15)

▽エー 憲法九条ノ^{キニウ}第二項ニハ(M_±) アキラカニ(R) コノ^{リツカイタク}陸海空ノ 軍ハ 持
タント イウ コトガ(S) 書イテ アルンデ アリマス(Z)。 (134-11-5)

さらに、/SM_±Z/のZが、受身(直接的な)・可能の形になり、Sが M_±に、
M_±がSになってできた、派生的な/SM_±Z/がある。

○太郎ハ(S) 花子ニ(M_±) シカラレル(Z)。 ○コンナ コトハ(S) ボクニモ
(M_±) ヤレル(Z)。

また/SZ_(自動詞)/のZが受身(めいわくの)・使役^{注)}・～テモラウの形になっ
てできた、派生的な/SM_±Z/もある。

○母親ガ(S) ヒトリムスコニ(M_±) 先ダタレタ(Z)。 ○母親ガ(S) 子ドモニ
(M_±) 歩カセル(Z)^{注)}。 ○母親ガ(S) 子ドモニ(M_±) 歩イテ モラウ(Z)。

注) このばあいには /SM_±Z/の方がしぜんであろう。

なお、/SM_±Z/ /SM_±Z/のZが受身(間接的な)になってできた、派生
的な/SM_±Z/もありうる。

○花子ハ(S) 太郎ニ(M_±) ホレラレタ(絶交サレタ)(Z)。

(iii) /SM_±Z/

M_±の機能はM_±の一部に相当する。/SM_±Z/ は/SM_±Z/に含めるべきか
もしれない。

▽ワタクシハ(S) 岐阜市ヘ(M_±) イママデニ(J) 二回(R) 参ッテ オリマ
ス(Z)。 (133-1-1)

▽ミナサンガタハ(S) モウ(J) マア(D) 中学校グライノ トコロヘ(M_±) イ
ッテラッシャル(Z)。 (122-8-2)

(iv) /SM_±Z/~/M_±SZ/

この骨ぐみのZになる自立語は、移動・出現・分離・成立・関係などを表わ
す自動詞、関係を表わす形容詞・形容動詞などである。

▽コノ 勤勉サガ(S) ドコカラ(M_±) 出テ クルカト(Z)。 (137-6-16)

○窓カラ(M_カ) ガラスガ(S) ハズレル(Z)。 ○台風ハ(S) 南方カラ(M_カ) ヤッテ クル(Z)。 ○人カゲガ(S) 曲リカドカラ(M_カ) 現ワレル(Z)。
○Aハ(S) Bト Cトカラ(M_カ) デキテ イル(Z)。 ○郵便局ハ(S) 駅カラ(M_カ) 遠イ(離レテ イル)(Z)。

このほかに、/SM_カM_カZ/のZが、受身(直接的な)・可能・～テアルの形になってできた、派生的な/SM_カZ/がある。

▽コノ 電器材料ナンカニ 使ウ ベークライト(D) コレハ(S) 石炭酸ト オーホルマリンナドカラ(M_カ) 作ラレル(Z)。 (127-27-7)

▽デ(T) 十二以下ノ 作品ニ 顔ヲ 出シテ イル 程度ノ モノハ(S) コノ表カラ(M_カ) 省カレテ イル(Z)。 (122-4-16)

▽ソシテ(T) ソノ 水分ガ 奪ワレルト イッショニ(J) カラダノ ナカカラ(M_カ) 塩分ガ(S) 奪ワレテ イク(Z)。 (126-40-1)

○市場カラハ(M_カ) ミカンガ(S) 運ンデ アッタ(Z)。

さらに、/SM_カZ/のZが受身(直接的な)・～テアルの形になり、SがM_カになってできた、派生的な /SM_カZ/もある。

○父カラハ(M_カ) スデニ(J) 準備資金ガ(S) 発送サレテ イタ(Z)。

(v) /SM_トZ/

▽デ(T) コノ Cノ コトガデスネ(S) Aトモ(M_ト) 結ビツクンデス(Z)。
(123-27-1)

▽デ(T) コレハ(S) チョット(R) ソノ オー ポリエチレント(M_ト) ヨク(R) 以テ オリマス(Z)。 (127-28-17)

▽ソレカラ(T) マア 「ユクダロウ」ト イウ フウナ 想像スル 言イ方モ(S) ヤハリ(T) 今 申シマシタヨウナ 意味デ(J) ソレト(M_ト) 同質デ アリマス(Z)。 (123-9-1)

この骨ぐみのZになる自立語は、たとえば、比較・関係・相互的な動作を表わす自動詞や関係を表わす形容詞・形容動詞・名詞などである。^{注)}

○太郎ハ(S) 花子ト(M_ト) 結婚スル(Z)。 ○Aチームガ(S) Bチームト(M_ト) 試合スル(Z)。 ○太郎ハ(S) 花子ト(M_ト) 友ダチダ(Z)。 ○Aハ(S) Bト(M_ト) 同ジダ(Z)。

注) M_トの表わすことがらには、Sの二次成分としても表現される。このばあいの骨ぐみは/SZ/になる。

○太郎ト 花子(ト)ハ(S) 結婚スル(友ダチダ)(Z)。

このほかに、/SM_トM_トZ/のZが、受身(直接的な)・可能・～テアルの形に

なってきた、派生的な/SM₁Z/もありうる。

○太郎ハ(S) 花子ト(M₁) 結バレタ(Z)。 ○太郎ハ(S) 次郎ト(M₁) 比較サレル(Z)。

(iv) /S M₁ Z/

この構文の例には、次のようなものがありうるだろう。

○人間ノ カラダハ(S) 大部分(R) 水分デ(M₁) デキテ イル(Z)。

○会場ハ(S) 人デ(M₁) イッパイダ(Z)。

このほかに、/SM₁M₂Z/のZが、受身(直接的な)・可能・～テアルの形になってきた、派生的な/SM₁Z/がある。

○コノ 着物ハ(S) ガラスデ(M₁) 作ッテ アル(Z)。 ○現在デハ(J) ガラスデモ(M₁) 着物が(S) 作レルソウダ(Z)。 ○東京ノ 空ハ(S) ヨゴレタ 空気デ(M₁) ミタサレテ イル(Z)。

(1-1-1) 補語 1

(i) /S M₁ H₁ Z/

この骨組みのZになる自立語は、スルが代表的であるが、そのほかに、たとえば変エル、ナオス……など状態変化を表わす他動詞がこれになる。

○今度(J) 彼女ハ(S) 髪ヲ(M₁) アップニ(H₁) シタ(Z)。 ○組合ハ(S) 彼ヲ(M₁) 委員長ニ(H₁) シタ(Z)。 ○彼女ハ(S) 顔ヲ(M₁) 赤ク(H₁) シタ(Z)。 ○大蔵省ハ(S) 千円札ヲ(M₁) 新シイ デザインノ モノニ(H₁) 切り替エルソウダ(Z)。 ○彼女ハ(S) 着物ヲ(M₁) マッカニ(H₁) 染メタ(Z)。

(ii) /S M₁ H₂ Z/

▽ワタクシハ(S) 人間関係ト イウ モノヲ(M₁) 基礎的ニ マー ソンナ アー コノ 「目ノ トドク カギリ, 声ノ トドク カギリ」ト イウ フウナー ツナガリデ デキテ イル 状態ダト(H₂) マー コウイウ フウニ(H₂) 思イマス(Z)。 (126-48-9)

この骨組みのZになる自立語は、たとえば言語活動、思考活動、感覚・知覚活動のうち、主として、判断・評価・命名などを表わす他動詞である。

○彼ハ(S) 黒ヲ(M₁) 白(ダ)ト(H₂) 主張スル(Z)。 ○彼ハ(S) 自分ヲ(M₁) 秀才ダト(H₂) 考エタ(Z)。 ○ワレワレハ(S) コノ 現象ヲ(M₁) 放電ト(H₂) 呼ブ(Z)。 ○社長ハ(S) コチラノ 製品ヲ(M₁) 重ク(H₂) ミタ(Z)。

補注) M₁で表わされることがらは、H₂の二次成分としてのSでも表わされる。

((1-0-1) (ii) /S H₂ Z/ 参照)

(iii) /S M₁ H₁ Z/

この骨ぐみには、たとえば /SH₁Z/のZが受身(めいわくの)・使役・～テモラウの形になってできた派生的なものがある。

○彼ハ(S) オイニ(M₂) アトトリニ(H₁) ナッテ モラッタ(Z)。

○彼ハ(S) ムスコニ(M₂) アトトリニ(H₁) ナラセタ(Z)。

○彼ハ(S) 妻ニ(M₂) 病氣ニ(H₁) ナラレタ(Z)。

(iv) /S M₂ H₂ Z/

○彼ハ(S) 壁ニ(M₂) ～ト(H₂) 書イタ(Z)。

○彼ハ(S) 彼女ニ(M₂) ～ト(H₂) 書イタ(Z)。

このほかに、/SH₂Z/のZが、受身(めいわくの)・使役・～テモラウの形になってできた、派生的な/SM₂H₂Z/がある。

○太郎ハ(S) 次郎ニ(M₂) 花子ガ 病氣ダト(H₂) 思ワセタ(思ワレタ・思ッテモラッタ)(Z)。<←次郎ハ(S) 花子ガ 病氣ダト(H₂) 思ッタ(Z)。>

さらに、/SM₂M₂H₂Z/のZが、受身(直接的な)・～テアルの形になってできた、派生的な/SM₂H₂Z/もありうる。

○遺言ハ(S) ノートニ(M₂) 遺産ハ ダレニモ ヤラナイト(H₂) 書キツケテアッタ(Z)。<←彼ハ(S) ノートニ(M₂) 遺言ヲ(M₂) 遺産ハ ダレニモ ヤラナイト(H₂) 書キツケタ(Z)。>

(1-2) 目的語 〇

(1-2-0) 補語 〇

(i) /S M₂ M₂ Z/

この骨ぐみの述語になる自立語は、たとえば相手を必要とする動作・移動動作・生産・発見を表わす他動詞などである。

▽コンドー(J) ソビエトノ 政府ガ(S) コノ 問題ニ ツイテ(J) 岸政府ニ(M₂) 申シ入レヲ(M₂) イタシマシタ(Z)。 (124-30-18)

▽エー コレニ ツイテハ(J) コノ ウ 「言語生活」ト イウ 雑誌ノ 三月号ニ(M₂) ワタクシドモノ 仲間ノ 宮地所員ガ(S) エー 「話シコトバノ 文法」ト イウ……イヤ「話シコトバノ 文」ト イウー モノヲ(M₂) 書イテ オリマス(Z)。 (122-14-29)

▽過去ノ 日本ニ オケル 封建的ナ (コノ) 過去ノ 歴史ヲ フリカエル トキニ(J) ワタクシタチハ(S) 暗イ 社会ヲ(M₂) ココニ(M₂) 見イダス(Z)。

(126-53-13)

このほかに、/SM₂Z/のZが、受身(めいわくの)・使役・～テモラウの形に

なってきた、派生的な/S M₂ M₇ Z/がありうる。

○花子ハ(S) 太郎ニ(M₂) 次郎ヲ(M₇) ナグラレル (ナグラセル・ナグッテ モ
ラウ) (Z)。 <←太郎ガ(S) 次郎ヲ(M₇) ナグル(Z)。>

(ii) /S M₇ M₇ Z/

この骨ぐみのZになる自立語は、たとえば移動・分離・生産を表わす他動詞、
相手から作用を受ける動作を表わす他動詞などである。

○スリガ(S) 太郎カラ(M₇) サイフヲ(M₇) ウバウ(Z)。

○太郎ハ(S) 花子カラ(M₇) 年賀状ヲ(M₇) モラウ(Z)。

○太郎ハ(S) 花子カラ(M₇) 英語ヲ(M₇) 教ワル(Z)。

○太郎ハ(S) 窓カラ(M₇) ガラスヲ(M₇) ハズス(Z)。

○太郎ハ(S) 木片カラ(M₇) 舟ヲ(M₇) 作ル(Z)。

このほかに、/S M₇ Z/のZが～テモラウの形になってできた、派生的な/S
M₇ M₇ Z/もありうる。

○花子ハ(S) 太郎カラ(M₇) 次郎(M₇) シカッテ モラウ(Z)。 <←太郎ガ
(S) 次郎ヲ(M₇) シカル(Z)。>

さらに、/S M₇ M₇ Z/のZが受身(間接的な)になってできた、派生的な/S
M₇ M₇ Z/もありうる。

○太郎ハ(S) スリカラ(M₇) サイフヲ(M₇) ウバワレタ(Z)。

補注 (1-2-0)の型には、さらに次のような骨ぐみもありうる。

(i) /S M₇ M₂ Z/

これは、/S M₂ Z/のZが使役の形になってできた、派生的なものである。

○花子ハ(S) 太郎ヲ(M₇) 郵便局ニ(M₂) 行カセル(Z)。 <←太郎ガ(S)
郵便局ニ(M₂) 行ク(Z)。>

この骨ぐみは、M₇とM₂とがZに対して $\overline{M_7 M_2 Z}$ という関係になっている(すな
わちM₂の方がM₇より述語にちかい位置にある)ものと思われる。この点で本文
129 ページにあげた /S M₂ M₇ Z/が、 $\overline{M_2 M_7 Z}$ であるのと区別される。

(ii) /S M₂ M₂ Z/

これは /S M₂ Z/のZが、使役・～テモラウの形になってできた、派生的なもの
である。

○次郎ハ(S) 太郎ニ(M₂) 郵便局ニ(M₂) 行カセル(行ッテ モラウ) (Z)。

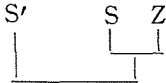
<←太郎ガ(S) 郵便局ニ(M₂) 行ク(Z)。>

このばあいも、新たに生じたM₂が、はじめからあるM₂より前に位置する。
同様の派生によって、/S M₂ M₇ Z/から/S M₂ M₂ M₇ Z/の骨ぐみも作られうる。

○次郎ハ(S) 太郎ニ(M₂) 郵便局ニ(M₂) 金ヲ(M₇) アズケサセル(アズケテモラウ)(Z)。<←太郎ガ(S) 郵便局ニ(M₂) 金ヲ(M₇) アズケル(Z)。>

(2) 主語 2

これは、いわゆる総主のある骨ぐみである。この構文では、2つの主語は、述語を介して



のような関係にある。すなわち、いわゆる総主(S')は、部分主語(S)と述語とのくみあわせ(SZ)全体と関係しているのであって、直接に述語だけと関係しているのではない。この骨ぐみでは、場面・文脈の助けを借りないばあい、部分主語がなければ、意味が不明であるばあいが多い。^{注1)} (「象ハ 鼻ガ 長イ。」に対する「象ハ 長イ。」など)だから、S'に対してはSZのくみあわせ全体が述語となっている、とみるべきかもしれない。^{注2)}

注1) この種の骨ぐみには、

○ヘビハ(S') カラダガ(S) 長イ(Z)。

のように、Sがなくても意味を持つものもある。この意味での「ヘビハ 長イ」を/S' SZ/のSの省略されたものとみることは無理だろう。むしろ、「カラダガ」は任意的な成分であって、このS' SZはSZに部分主語が補充されたものとみる方が常識的であろう。しかし、いまのところ、

象ハ 長イ。

ヘビハ 長イ。

のちがいを問題にするだけの根拠をもっていない。

注2) この調査では、通説に従って主語を認定したために、この種の骨ぐみを主語2つの骨ぐみと扱うことになったが、これはあくまでも便宜的な扱いである。

(2-0) 目的語 0

(2-0-0) 補語 0

/S' SZ/

この骨ぐみでは、Zになる自立語の性格に特徴があるようである。資料からは判断できないが、便宜上、いくつかに分けてあげる。

この骨ぐみの、S'のことがらとSのことがらとは、たとえば、全体と部分、一般と特殊、主体と属性・動作・生産物、あるものごとのありかとそのものご

と、その他いろいろな関係にあるようである。

(形容詞の例)

- ▽子ドモタチハ(S) 感受性ガ(S) 強イ(Z)。 (124-21-3)
- ▽最後ノ モノハ(S) 意味ガ(S) 狭イ(Z)。 (122-7-3)
- ▽コレハ(S') (タイヘン) タシカニ(T) 文章ガ(S) 悪イデス(Z)。(134-4-10)
- ▽コトシノ 冬ハ(S') ズイブン(R) 寒サガ(S) キビシイヨウデスネ(Z)。
(138-13-2)
- ▽トコロテ(T) コノ オ セルロイドト 申シマスノハ(S') コノ オ 原料ハ(S)
綿ナンデスネ(Z)。 (127-25-8)
- ▽夫ダケハ(S') 姦通ッテ イウ コトハ(S) ナイ(Z)。 (134-22-17)
- ▽綿ハ(S') ソンナ コトハ(S) ナイ(Z)。 (127-25-13)
- ▽エー ヒナドリガ(S') 蛋白質ガ(S) ナイ(Z)。 (138-1-7)
- ▽エ コノ 順番ハ(S') ドレガ(S) イイデスカナ(Z)。 (123-29-8)
- ▽ヤハリ(T) 天皇ハ(S') ソウイウ 国事ニ 関係シナイ ホウガ(S) イイ
(Z)。 (134-9-5)

(アルの例)

- ▽コッチノ ホウノ アツ… 冷タイ ホウハ(S') コノ 非常ニ(R) 弾力ガ(S)
アリマスヨ(Z)。 (127-26-4)
- ▽コレハ(S') 非常ニ(R) ビタミンCガ(S) アルデス(Z)。 (138-5-12)
- ▽子ドモノ 読書ノ コトデハ(J) ワタクシタチハ(S') イロイロト 心配ナ コ
トガ(S) アリマスネ(Z)。 (126-1-7)
- ▽普通(J) 疲レハ(S') 気分ノ 神経ノ 疲レト, ソレカラ 手ヤ 足ヲ 使ウタ
メニ 残ル 局部疲労トガ(S) ゴザイマス(Z)。 (127-32-8)
- ▽エー ワタクシハ(S') (略) ソウイウ 気持チハ(S) モウ(T) モウトウ(T)
ゴザイマセン(Z)。 (124-5-28)
- ▽ (略) コレハ(S') (略) アノ 行キ方ヲ フタタビ クリカエス 危険ガ(S)
タブンニ(R) アルノデ ゴザイマス(Z)。 (124-21-8)
- ▽財源(SまたはT) ケッテ(T) 不自由(S) ゴザイマセン(Z)。 (124-26-2)

(可能動詞の例)

- ▽シカシ(T) 政府ハ(S') 一言モ(R) ハッキリシタ コトハ(S) イエナイ
(Z)。 (124-31-1)
- ▽シカシ(T) ミナサン(D) 自由民主党ト 岸政府ハ(S') コウイウ 世界ノ
大キナ 移リ変ワリ, 発展ト イウ モノガ(S) ドウシテモ(T) ワカリマセン
(Z)。 (124-30-5)

(異同を表わす動詞の例)

- ▽ワタクシタチハ(S') エー ヒトソレゾレニ ヨリマシテ(J) 暑サニ 対シマス

ウナ モノニ(M±) アマリ (RまたはT) イー 同情ガ(S) デキナイノデ アリ
マス(Z)。 (134-10-8)

(ii) /S' M₁ S Z/

▽エー シカシ(T) ソノ コトハ(S') マタ(T) Aノ コトト(M₁) 関連ガ(S)
ナイ ワケデハ ナイ(Z)。 (123-26-14)

補注) なお、次のような例があった。

/S'' S' S Z/

▽コショウナンカハ(S'') 最後ニ オフリニ ナッタ ホウガ(S') カオリガ
(S) ヨイ(Z)。 (127-21-7)

▽柿モ(S'') (略) コノヨウニ コノ ウー 干シ柿ニ イタシマシタノハ(S')
ビタミンC^注ハ(S) ホトンド(T) ゴザイマセン(Z)。 (138-5-14)

これに似たものとして、次のような文もありうるだろう。

○ボクハ(S'') ベッドノ ホウガ(S') カラダガ(S) 休マル(Z)。

○今度ノ 講演会ハ(S'') Kサンガ 講演シタ ホウガ(S') 聴衆ガ(S) 喜ブ
ダロウ(Z)。

(D) 主語 0

主語のない述語構文には、

- (a) 構造上主語を必要としないもの（主語を入れる余地はない）
- (b) 述語が複合述語の形式的部分にちかくなっているために、それに対応する主語がなくてよいもの（主語があれば、その述語は、独立の述語になる）
- (c) 文内の他の条件（表現意図、敬譲表現、組織を表わす状況語、数量を表わす連用語など）で、主語がなくてもよいもの（主語を入れる余地はある）
- (d) 場面・文脈などで主語が臨時的に省略されたと認められるもの

などがある。

ここでは、(a)のばあいだけをあげる。

(b) については、2・2・3 f「複合述語的な構文」の項でとりあげる。

(c) (d) については、今のところとりあげる段階にいたっていない。^{注)}

注) 構文の項でとりあげなかった(c)と(d)の例をすこしあげておく。

(c) の例

(述語の表現意図・敬譲により主体が明らかなばあい)

- ▽ドウゾ ヨロシク オ願イ イタシマス。 (127-31-5)
- ▽ソレデ コノ 週間ニハ ソコヲ トクニ 強調シタイ。 (126-44-15)
- ▽ソレデハ シタゴシラエヲ ドウゾ ゴ覧クダサイマセ。 (127-31-11)
- ▽『ノンチャン 雲ニ 乗ル』ッテ イウ 童話 ゴ存ジデショウカ。(126-1-5)
(文内の他の成分により主体が明らかにならばあい)
- ▽(略) コウイウ モノモ 全部 保健所デ ヤッテル ワケデス。 (125-29-8)
- ▽シカシ コノ 四百万円ジャ ナントシテモ 足りマセン。 (124-4-26)
- ▽エー コレデ ヤク 十五分グライ カカリマスデ ゴザイマシヨウ。
(127-8-13)
- ▽コウイウ トクニ アタリマシテ 池田君ガ 多数ノ 投票ヲ 獲得セラレマシ
テ 新総裁ニ ゴ選任ニ アイナリマシタ コトハ 池田クン ゴ本人ハ 申ス
ニ オヨビマスマイ、ワレワレ黨員トシテモ マタ 国民トシテモ マコトニ
慶祝ニ タエマセン。 (127-35-6)

(d) の例

(池田首相が話題になっている文脈の中にある次のような文)

- ▽サテ ソノ 実家ハ 作り酒屋デ、女五人、男フタリノ 末ッ子。ワガママ放題
ノ 子ドモダッタラシイ。小学校デハ スモウノ スキナ アバレンボウデ、タ
イヘン マケズギライ。シカシ、点取り虫デハ ナカッタケレドモ、勉強モ デ
キタラシク、級長ヲ 続ケテ イタソウデス。 (126-22-5)

(0-0) 目的語 0

(0-0-0) 補語 0

/Z/

(i) あいさつ、謝意、祝意の表現

- ▽オハヨウ ゴザイマス(Z)。 (125-18-2)
- ▽アリガトウ ゴザイマス(Z)。 (126-53-19)
- ▽アリガトウ ゴザイマシタ(Z)。 (126-50-15(ほか))
- ▽ドウモ(T) アリガトウ ゴザイマシタ(Z)。 (124-7-27(ほか))
- ▽ドウモ(T) 杉先生(D) アリガトウ ゴザイマシタ(Z)。 (127-31-6)
- ▽エ キョウハ(J) オメデトウ ゴザイマス(Z)。 (124-15-1)
- ▽エー タイヘン(R) キョウハ(J) オメデトウ ゴザイマス(Z)。 (124-10-3)

これらは、表現意図の面でも、②の判断叙述の表現から①コミュニケーションの成立に関する表現へとちかづいている。構文の面でも、Sがはいりえなくなっている。R、Jもあまり自由ではないようだ。

文末の形式も、「ゴザイマス・ゴザイマシタ」に限られていて、「ゴザイマ

セン、ゴザイマシヨウ」などとはならない。ZからDへちかづいているものとみられる。とくに「オハヨウ ゴザイマス」は、R、Jさえつかず、過去の形もなく、もっともD的である。

なお、資料にはなかったが、「オハヨウ」「アリガトウ」など、「ゴザイマス」をつけない表現が一方にあって、これらとていねいさの上で対立している。このような対立の形式は一般の述語構文にはなく、特殊なものである。

なお、次のようなものも、(独話にはあまり現われないだろうが)この類にちかいだろう。

○スミマセン。○失礼シマス。○申シワケ アリマセン。○イラッシャイマセ。
○ゴ免下サイ。○オ帰リナサイ。

(ii) 応答の表現に準じる文

▽エー ソイジャ 挙手デ 願イマシヨウカ? (略) エ 一番ガ イイ カタ、チ
ョット 手 上ゲテ クダサイ。アー。ソーデスカ。^{注)}ハイ。ワカリマシタ。エー
二番ガ イイ カタ、ドウデスカ? 二番ガ 少ナイネ。ハイ。エー 三番ノ イ
イ カタ。ハイ。ワカリマシタ。 (123-29-4)

注)「ソウデスカ」も、やはり同じ類の表現である。ただし、こちらは、表現意図
の項で、「④応答の表現」と位置づけられているので、ここでは、独立語とみな
した。

(0-0-1) 補語 1

/H₂Z/

この骨ぐみは、/SH₂Z/のZが〜テアルの形または受身(直接的な)の形になつたために、Sが消えたものである。

▽ソレハ 教育ノ 目的デ アリ 内容デ アリ 方法デ アルト(H₂) 書イテ ア
リマスネ(Z)。 (123-30-11) 《ナニニ・ドコニ(M₂)》

▽観察日記ハ ドウ ツケタラ イイカナンテ(H₂) 書イテ アンデス(Z)。
(123-33-20) 《ナニニ・ドコニ(M₂)》

▽教育ノ 目的モ 経験ナンダシ ソレカラ 内容モ 経験ナンダシ 方法モ 経験
ナンダト(H₂) コウ(h₂) 書イテ アリマス(Z)。 (123-30-12) 《ナニニ・ドコ
ニ(M₂)》

▽コレガ 池田サンノ 人間ノ 変ワル 第一ノ 転機ダト(H₂) イワレテ オリマ
ス(Z)。 (126-23-12)

▽ソレバカリデ ナク(T) コノ 状態ガ 半年モ 続キマスト 中小企業ノ アイ
ダカラ 倒産スル モノガ 続出スルダロウト(H₂) イワレテ オリマス(Z)。
(124-31-20)

(0-1) 目的語 1

(0-1-1) 補語 1

/M₂ H₂ Z/

この骨ぐみは/SM₂H₂Z/のZが～テアルの形になったために、Sが消えたものである。

▽憲法第一条ニハ(M₂) 天皇ハ 国民統合ノ 象徴ト スルト(H₂) 書イテ アル(Z)。 (134-3-9)

なお、次のものは、上のZの自動詞的な表現であって、やはり、主語はいらないようである。

▽エー 昭和二十六年度指導要領ノ 小学校編ナンカニハ(M₂) コウイウヨウナ モノガ 単元ダッテ(H₂) 出テ イマスネ(Z)。 (123-34-2)

補注) なお、資料には現われなかったが、M₂を含まない/S...Z/のZが可能な形になり、SがM₂になってきた、派生的な骨ぐみとして、主語のない/M₂...Z/がありうる。

/M₂Z/ ○君ニ(M₂) 百メートル 十一秒デ(R) 走レル モノカ(Z)。

/M₂M₂Z/ ○君ニ(M₂) アメリカニ(M₂) 行ケルカ(Z)。

/M₂M₂Z/ ○君ニナラ(M₂) ヒトリデ(R) ココカラ(M₂) 帰レルヨ(Z)。

この派生的な骨ぐみで新しく現われるM₂で表わされる人は、S(～ハ、～ガ)でも表現される。M₂によって表現されるばあいには、文の表現意図あるいは、M₂の陳述的変容に、ある種の制約ないしは傾向があるようである。たとえば、「君ニ ヒトリデ ココカラ 帰レマス」とはいわないようである。

b 拡大

これは、骨ぐみに拡大成分を加えて、拡大構文を作ることである。これには連用語による拡大と状況語による拡大とがある。拡大構文にも陳述的変容があるが、やはりここではそれは無視される。

(1) 連用語拡大 R/...Z/

厳密な下位区分はまだできていない。便宜上いくつかにわけて例をあげる。

(i) ようすを表わす連用語による拡大

これは、動詞述語の構文に現われる。形容詞・形容動詞述語や名詞述語の構文には現われないようである。

▽マー 昔ハ(J) ソノ ナカデ イイ 知識ダケヲ(M₂) 系統的ニ(R) 与エタ(Z)。 (123-31-22)

- ▽マー コウイウ カタガ(S) 非常ニ 一生懸命ニ(R) ヤッテ クレタ ワケデ
アリマス(Z)。 (124-5-5)
- ▽日本^{ニホン}ノ 国民^{コンミン}ハ^ハ(S) 今日(J) 非常ニ 大キク(R) 変ワリマシタ(Z)。
(124-32-16)
- ▽ソウ イタシマスト(T), コチラノ ソースト(M^ト) ヨク(R) アウンデ ゴザ
イマス(Z)。 (127-17-15)
- ▽ダンダンニ(R) 顔ヲ ダス 作品ノ 数ガ(S) 少ナク(H^ト) ナッテ エー マ
イッテ オリマス(Z)。 (122-4-15)
- ▽オゲンキデ(R) オハタラクニ ナッテ クダサイマセ(Z)。 (127-33-8)
- ▽今(J) 世界ノ 状態ハ(S) ドンドン(R) 変ワリツツ アリマス(Z)。
(124-30-3)
- ▽ソシテ(T) エ タクサンノ 合成樹脂製品ガ(S) アトカラ アトカラト(R)
作りダサレテ オリマス(Z)。 (127-24-2)
- ▽サテ(T) コウシタ 子ドモノ ヤキモチヲ(M^ヲ) ドウ(R) 取り扱ッタラ ヨ
ロシイノデショウカ(Z)。 (125-13-20)
- ▽コリヤ マー(T) ホントニ(T) コノ トオリニ(R) 使ッテ イマス(Z)。
(124-19-8)
- ▽今(J) アメリカノ 人口ハ(S) 非常ナ イキオイデ(R) 増加シテ オリマス
(Z)。 (126-30-20)
- ▽エー ソイジャ(T) 拳手デ(R) 願イマショウカ(Z)。 (123-29-1)
- ▽エビトカ ソレカラ ピーマンナンカモ(M^ヲ) ナマデ(R) イタダキマス(Z)。
(127-20-15)
- ▽最近ハ(J) アメリカノ ジェット機ガ(S) 原爆ヲ ダイテ(R) 日本^{ニホン}ノ 上空
ヲ(M^ヲ) パトロール シテル(Z)。 (124-31-4)
- ▽ガマン シテ(R) ポント トビツク(Z)。 (126-14-3)
- ▽エー タトエバ(T) 子ドモガ(S) ナニカラ オー ミツケダシタ トキニ(J)
コウ 目ヲ 輝カシテ(R) ソノー ナニカ(T) 報告ヲ(M^ヲ) スル(Z)。
(126-35-10)
- ▽コウイウ コトガ(S) 戦後^{ジュウゴウサン} 十三年間ニ ワタリマシテ(J) イッカンシテ(R)
ヤラレテ マイリマシタ(Z)。 (124-34-2)
- ▽コンナ フウニ マー イロイロ トリアワセテ(R) メシアガッテ イタダキタ
イ ワケデ ゴザイマス(Z)。 (127-21-8)
- ▽デ(T) シマスト(T) ヒトリノ 若イ オカアサマガ(S) アカンボウヲ カカ
エテ(R) アトデ 五歳^{ゴサイ}児^コト ワカッタノデスケレドモ ウエノ オトコノ オ子
サンニ マー スカートヲ ヒッパラレナガラ(R) ハイッテ イラッシャイマン
タ(Z)。 (125-10-4)

▽ソレヲ ウマソウダナート 思イナガラ (R) エー 歩イテ イル (Z)。
(123-22-16)

▽コウシテ (R) エ 四方ヲ カエシナガラ (R) 焼イテ イタダキマシヨウ (Z)。
(127-13-2)

(ii) 道具・手段を表わす連用語による拡大

▽エー ソウイウ コトガ (S) アー コレデ モッテ (R) 測レル ワケデス (Z)。
(123-40-12)

▽シヨウガト オシヨウユ(一)デ (R) エ サッパリト (R) 召シ上ガッテ イタダ
キトウ ゴザイマス (Z)。(127-11-7)

▽コウシテ (R) コレデ (R) ヨク (R) アタル ワケデ ゴザイマス (Z)。
(127-13-23)

▽(略) エー ワレワレ ナカマノ 水谷所員ガ (S) チラバリ度ト イウ コトバ
ヲ 使イマシテ (R) エ レインジニ カワル ヒトツノ 考エカタヲ (M₉) 試
ミタ ワケデ アリマシタ (Z)。(122-5-5)

▽エー ダイタイ ソウイウヨウナ コトヲ オー メヤスニ シテ (R) エー フ
レッシュガ (S) マー ツクッタ ワケデス (Z)。(123-41-18)

(iii) 程度を表わす連用語による拡大

これは、形容詞・形容動詞述語や動詞述語の構文に現われるようである。名
詞述語の構文には現われないうである。

▽ツギニ (T) イー 〇ノ コトニ ツイテハデスネ (J), マー コレハ (S) モ
ウ (J) カナリ (R) オチツイテ キテ イマスネ (Z)。(123-27-21)

▽ソレニ 対シテ (T) 終止形ニ オケル 陳述ト イウノハ (S) モット (R) 論
理的デ アリマス (Z)。(123-6-22)

▽エ ソウ 考エテル 人ガ (S) タイヘン (R) 多イ ワケデス (Z)。
(123-24-20)

(iv) 量を表わす連用語による拡大

これは、述語の自立語にかかわりなく現われると思われるが、資料には動詞
述語の構文の例しかなかった。

▽最初ニ (T) チョット (R) 訂正ヲ (M₉) イタシマス (Z)。(122-1-1)

▽アト (J) 化学調味料ヲ (M₉) スコーシ (R) 入レマシヨウ (Z)。(127-14-1)

▽ソレカラ (T) バターガ (S) イクラカ (R) トケダシテ マイリマスデ ゴザイ
マスネ (Z)。(127-18-11)

▽デ (T) コノ 文字使用ト イウ コトニハ (M₂) 立場ガ (S) ア フタツ (R)
アル ワケデス (Z)。(123-43-4)

▽デ(T) 普通ノ 人ハ(S) ミナ(R) コノ ミツツノ 名前ヲ(M_?) 持ッテ
イル(Z)。 (126-17-2)

▽ソレデハ(T) オ献立ノ ホウ(M_?) モウ 一回(R) 見テ イタダキマシヨウ
カ(Z)。 (127-19-1)

▽エー ヤク 十五分グライ(R) カカリマスデ ゴザイマシヨウカ(Z)。
(127-18-13)

▽ソコデ イロイロ^{注)}(R) 問題ガ(S) 起キル ワケデス(Z)。 (126-39-8)

▽ソレガ(S) アタクシタチノ 家庭デハ(J) トキドキ(R) 逆ン(H₁) ナルンジャ
ナイデシヨウカ(Z)。 (125-8-4)

注) これは "ようす" 的でもある。

同一構文内に現われる R の数についてはとくに制約はない。

R 2 つのもの

▽デ(T) ソレデハ(T) ヒトツ ヒトツ(R) スコシ(R) 合成樹脂ニ ツイテ
オ話シ イタシマシヨウ(Z)。 (127-27-14)

▽「隣ノ ナニチャン ミナサイ。アンナニ ヨク デキルノニ、アンタ、ダメジャナ
イノ」ト「シッカリ ヤンナサイ」ソレカラ 「オニイサンガ 二年生ノ トキ
ハ コンナ リッパナ 絵ヲ カイタワ。アンタノ コンドノ 絵日記ハ ナッテ
ナイジャ ナイノ」ト イウ フウニ(R) コノ 兄弟ヲ(M_?) スグ(R) 比ベ
テ シマウ(Z)。 (126-36-19)

R 3 つのもの

▽実験学校デハ(J) 所員ガ アー 直接 教室観察ヲ 行ナッテ、ソレカラ 観察
記録ヲ トリ、ソレカラ イロイロノ 言語能力ノ テストヤ 調査ヲ 実施スル
ト イウ フウニ(R) スベテ(R) 資料ヲ(M_?) 直接(R) 集メテ オリマス
(Z)。 (122-21-8)

▽ソレカラ(T) 足首ヲ(M_?) 片方ズツ(R) 十回カラ 十五回グライ(R) グル
グル(R) マワシテ クダサイ(Z)。 (127-32-21)

(2) 状況語拡大 J/...Z/

下位区分はまだできていない。便宜上いくつかに分けて、例をあげる。

(i) 空間あるいはそれに準ずるものを表わす状況語による拡大

▽ソレデハ(T) ムコウデ(J) 盛りツケヲ(M_?) イタシマス(Z)。 (127-13-6)

▽コレハ(S) アメリカデハ(J) タイヘンナ コトデス(Z)。 (124-19-11)

▽ソシテ(T) コノ 大西洋経済会議ガ(S) (略) パリーデ(J) 開カレマシタ
(Z)。 (127-3-1)

▽トコロガ(T), Aノ 頭ノ ナカデハ(J) ソレガ(S) モミジノ 遠景ニ(M₌)
限定サレテ イル(Z)。 (123-22-22)

▽シカルニ(T) 国語科ノ ナカデハ(J) 文学ノ 問題モ(S) アルト(Z)。 (123-27-9)

▽コノ コトハ(S) 国語科ニ オイテモ(J) 同ジデ…同ジデ アリマス(Z)。 (123-32-12)

(ii) 時間やばあいを表わす状況語による拡大

▽池田新内閣ガ(S) キヨウ(J) 発足シマシタ(Z)。 (126-20-1)

▽ソレデハ(T) イマ(J) 焼ク トコロヲ(M?) オ目ニ カケマシヨウ(Z)。 (127-16-22)

▽ソレカラ(T) マ 夏ハ(J) ソウメン類ヲ(M?) ヨク(R) ミナサン(S) 羽シアガリマス(Z)。 (127-20-14)

▽今週モ(J) ズイブン イロイロノ デキゴトガ(S) アリマシタネ(Z)。 (125-14-3)

▽研究所ヲ ハジメテ 作ルニ ツイテ オ骨折リヲ イタダイタ カタガタニモ(M?) コノ 機会ニ(J) オ礼ヲ(M?) 申シアゲマス(Z)。 (124-7-4)

▽サラリーマンノ 疲レハ(S) コノ 朝ノ ラッシュニ(J) 始マリマス(Z)。 (127-32-1)

▽デ(T) トクニ コウイウノハ(S) 男ノ子ノ バアイニ(J) 多イヨウデ ゴザイマスネ(Z)。 (125-13-13)

▽エー トコロガ(T) 国語研究所ハ(S) ソー オー 設立ノ ソモソモノ 出発点カラ(J) (略) コウイウ 任務ヲ(M?) オー 負ワサレテ マイリマシタ(Z)。 (124-1-22)

▽ソレカラ(T) マタ(T) アー サキホド(J) ソノ「行ヲ マチガエル」ト(H?) 申シマシタ(Z)。 (123-40-9)

▽シカモ(T) ソレガ(S) コンダ(J) グループノ ナカデ ヤルヨウニ(Hi) ナル ワケデスネー(Z)。 (126-13-14)

▽マズ(J) 塩コショウヲ(M?) アテテ オキマス(Z)。 (125-22-13)

▽コノ ヘンヲ(M?) 池田サンハ(S) マダ(J) 知ラナカッタ ワケデシヨウ(Z)。 (126-26-3)

▽イロイロ クフウシタ 方法デ 子ドモヲ シカリ, バツヲ 与エタ アトデ(J) 多クノ 母親ハ(S) 「ヤッパリ アンタガ 好キナダヨ」ト(H?) コウ(H?) 言ッテ ヤル(Z)。 (126-29-20)

(iii) 原因・理由・事情を表わす状況語による拡大

▽池田歓迎相場デ 株ガ 上ガル コトデモ(J) ワカリマス(Z)。 (126-23-3)

▽マー 緊張ガ ナイト イウ コトデ(J) 協力ガ(S) デキマスネ(Z)。 (126-45-16)

▽ソシテ(T) ソノ 話題ノ クイチガイニ ヨッテ(J) 誤解ガ(S) 起ッテ ク

ル(Z)。 (123-23-4)

▽エー シカシ(T) ソウイウヨウナ 交通整理ヲ トッタ タメニ(J) 自動車ハ
(S) モウ(J) 川ノ 流レルガ ゴトクニ(R) ドンドン ドーンドント シン
コ(ウ)…運行シテ イル(Z)。 (124-2-27)

▽ドウシテ(J) コレヲ(M₉) トカサナイカト(Z)。 (126-53-1)

▽ナゼ(J) カレハ(S) ソレヲ(M₉) ヤッタカ(Z)。 (124-35-20)

▽朝 起キテカラ 寝ルマデ/ワタクシタチノ 両足ハ(S) /一日中 重イ カラダ
ヲ 支エ, ソレゾレノ 労働ニ 従ッテ イルト イウ コトデ(J) ^{注)} イチバン
疲労ガ ハゲシイ 部分デス(Z)。 (127-32-5)

▽コレガ(S) ヤハリ(T) イマ 申シマシタ ヨウニ 話シ手ノ 情意的ナ 陳述ヲ
表ワスト イウ 意味デ(J) ヤハリ(T) イ 志向形ノ グループニ(M₂) ハイ
リマス(Z)。 (123-8-21)

▽ト イウ コトカラ(J) オ動メノ カタガタハ(S₁) オ昼休ミ チョット オ行
儀ガ 悪イカモ シレマセンガ 足ノ 下デ コンナ 足 足ノ… 机ノ 下デ
コンナ 足ノ 体操ヲ スルノモ(S) ヨイデショウ(Z)。 (127-32-18)
注) 「ハゲシイ」までにしかかからないと見ることもできる。

(iv) 目的を表わす状況語による拡大

▽コノ 恐ロシイ コノ 核兵器ト イウ モノハ ^{注)} 廃棄サセル タメニハ(J)
ドノヨウナ 方法ヲ(M₉) 用イタラ ヨイカ(Z)。 (124-27-4)

▽シカシ(T) コノ タメニハ(J) 働ク モノハ 政党ト 称スル 共産党ト 社
会党トノ 任務ハ(S) 非常ニ 重大ン(H₁) ナッテ マイリマシタ(Z)。
(124-34-9)

注) 「モノヲ」の言ひあやまりか。

補注) 資料にはなかったが、「公園ニ 遊ビニ 行ク」「公園ニ 花見ニ 行ク」
などで、動詞の連用形または動作名詞の「〜ニ」の形は目的を表わすが、これ
は、移動を表わす動詞にかかるばあいに限って現われ、動詞とのむすびつきが強い
(動詞に近い位置に現われる)。この点で、「〜タメニ」などと区別される。状
況語から除いて連用語にいれるべきかもしれない。

(v) 継起する動作・状態あるいは並列的な動作・状態を表わす状況語による拡大

▽(略) コウイウ モノハ(T) 天気ノ イイ 日ニ 一度 アラタメテ ミテ 日
光ニ カワカシ(J) ^{キニウツゾイ} 吸湿剤ヲ(M₉) イレナオシテ オキマス(Z)。 (125-21-16)

▽両足ヲ 十五センチホド 開キ(J) ツマ先ヲ(M₉) タタマス(Z)。 (127-32-20)

▽タトエバ(T) コノ 食堂ニ イキマシテ(J) エ 仲間ト イッシヨニ(R) イ
ー ヒルメシヲ(M₉) タベル(Z)。 (123-15-6)

▽熱シテ オリマス フライパンニ 大サジ ^{イツパイ} 一杯ホドノ 油ヲ イレマシテ(J)
ソシテ(T) ココニ(M₂) イマ(J) オ豆腐ヲ(M₉) オトス ワケデ ゴザイマス

ネ(Z)。 (127-12-18)

▽コレモ(T) マー (メリ) 盛り付ケナンカラ スコーシ マー キレイニ スズ
シノウニ シテ(J) トリアワセニ(J) イロイロ(R) オカズヲ(M₉) ツケル
ワケデ ゴザイマス(Z)。 (127-20-14)

▽マ トニカク(T) アノー ^{ホメ} 生ノ オ野菜ヲ オツケニ ナラナイデ(J) コウイ
ウ フ(ウ)ニ エー 煮タ モノヲ(M₇) 油デ イタメタヨウナ モノヲ(m₇)
オツケクダサイマセ(Z)。 (127-19-8)

以下のものは、一応ここにあげてはおくが、Jとした部分はその構文の述語と意味の上でいわば対等なものである。これらをJとすべきかどうかについて、またJとしてもこの類に入れてよいかどうかについて、さらにこうしたものは取り出して別の構文型をたてるべきかどうかについて、なお考える余地が残されている。

▽現在 社会制度ヲ カイ 改革スル コトニ ヨツテ コノ 階級闘争ハ 解消
スルト イウ ミカタヲ イタシ マタ コレヲ 主張シテ イルノガ(S) 社
会党デ アリ(J) 共産党デ ゴザイマス(Z)。 (124-22-3)

▽コレハ(s') コレガ 自分デ(J) コレガ(S) アイテ(Z)。 (123-20-21)

▽エー 文語ノ イワユル ^イ已然形(J) 現代語ニ オケル ウ 仮定形デ アリマ
ス(Z)。 (123-8-20)^{注)}

▽今度ノ 人工衛星ハ(S) ミナサン(D) コノ 前ノ プンノ ニバイ半 チカク
アツテ(J) ヤク イットン半ト イウ トホウモナイ デッカイ ヤツデ アリ
マス(Z)。 (124-29-3)

▽二月ハ(S) ^ニ三十日デモ ^{ナンジユウイチチュ}ナケレバ(J) ^ニ三十一日デモ ナイ(Z)。 (138-24-2)

注) 主語はないが、一応想定することはできる。

(vi) 条件的な意味を表わす状況語による拡大^{注1)}

▽タトエバ 新聞デ ヒトトキト イウヨウナ ^{ラン}欄ガ アレバ(J) ン コノ 欄ヲ
ツウジテ イロンナ ヒトツノ ツナガリガ デキテ クルト 思ウン(デス)
(Z)。(126-50-11)

▽コレヲ ヒヤセバ(J) カターク(H₁) ナリマス(Z)。 (127-27-1)

▽ソレヲ クドクド イワレタラ(J) 子ドモモ(S) ヤリキレマセンネ(Z)。
(125-8-8)

▽デハ(T) ドノヨウニ シタナラバ(J) コノ 闘争ヲ 解消スル コトガ(S)
デキルカ(Z)。 (124-21-14)

▽タトエ アメリカガ アメリカノ 軍艦ヤ 飛行機デ 核兵器ヲ 日本^ニ持チコ
ンデ イテモ(J) ソレハ(S) 岸政府ノ 責任デハ ナイ(Z)。 (124-31-8)

- ▽ソノ ナカデ タダ 知識ダケヲ トッテ クルトカ アルイハ 技能ダケヲ ト
ッテ クルト コウイウヨウナ 方法ハ アマリ イイ 方法デハ ナイト イウ
コトニ ナッテ (J) 現在ノ コノ 経験主義 イー テキナ ヤリカタン(H1)
ナッテル ワケデスネ (Z)。 (123-31-20)
- ▽デ (T) コッ ^{ヨソカイ}国会ガ ^{注2}イニシヤティブラ トロウト 政府ガ ^ゴイニシヤティブラ
トロウト (J) ^ゴ議員内閣制度デ アル 以上ハ (J) イー オー 相互ノ 責任
ナン (デス) (Z)。 (135-10-16)
- ▽ダレデモ (ガ) 木登リ (ン) デキルノニ / ヤハリ (T) / ソノ 子ガ 木登リ
デキナイト (J) ヤハリ (t) ソノ 子ハ 自信ノ ナイ 子ニ (H1) ナッテ シ
マイマス (Z)。 (126-10-15)
- ▽ト イウノハ (T) 自分ガ 消化系統ノ 研究デ ノーベル賞ヲ トッテ オラレ
ナガラ (J) 「ベツノ 話ヲ ゼヒ シタイ」ト (H2) 申シ出ター アー ノデ
アリマシタ (Z)。 (126-19-2)
- ▽エー ^{ロクガツ}六月ハ (S) 雨季ニ ハイリマスノデ (J) 気候ノ カワリヤスイ 月デス
(Z)。 (125-1-2)
- ▽刑法ノ 規定モデスネ (T) 妻ガッテ イウ トコロヲ ノケテ 配偶者 カンツ
ウ シタル トキハト ナオシャ イイノニ (J) ソレガ (S) ナオセナインデス
ネ (Z)。 (134-23-6)
- ▽ヒロク ^{ミナト}河野派ノ 議員ニマデ 郷土ノ 名産ヲ オクッタリ スル クセニ (J)
生活ハ (M) ワリニ (R) キリツメテ イルソウデス (Z)。 (126-26-15)
- ▽教師サンニ 相談ニ 行ッタ トコロガ (J) 「オ前ハ 生キタ 籠ヲ ミタ コト
ガ ナイカ」ト (H2) オッシャル (Z)。 (137-16-13)
- ▽ソレデ (T) サイゴノ 組閣ダケハ (S) 常任委員長 選出デ トキヲ カセイデ
イタ セイデスカ 岸サンガ アー サッサト 約三四時間バカリデ オモイノ
ママノ 内閣ヲ ツクッタト イウ コトダケハ (S) アー イニ セヨ ワル
イニ セヨ (J) ^{注3}チョット (R) 印象的デシタ (Z)。(125-14-11)

以下にあげるものは、いわば“認識の根拠(あるいはきっかけ)”，を示すもの
であって、Jの部分のなかの主語は現われないのがふつうである。

- ▽デ (T) ソレヲ ジューツ 見テ オリマシタラデスネー (J), ハジメニ ヤルノ
ハ (S) ヤッパリ (T) ボスニ ナル 子ナンデスナー (Z)。 (126-13-21)
- ▽コノゴロ ニ…… ホ 銀座ナドヲ 歩イテ オリマシテモ (J) コノ カストロ
ヒゲト イウンデ ^{注4}コレヲ マネシタヨウナ ^{ヒト}人ガ (S) オリマス (Z)。
(127-8-24)
- ▽デ (T) コウイウ フウニ 見テ マイリマスト (J) エ 幼児ノ ヤキモチハ
(S) イロンナ 原因デ (J) シカモ イロンナ カタチデ (J) アラワレテ マ

イリマスネ(Z)。 (125-13-17)

▽エー ソレカラ(ト) ケンキュウジョー^{*}ノ 人が先生ノ トコロヘ 行ッテ
エー 話ヲ スルノヲ ヨク 聞イテ オリマスト(J) イキナリ 「イワン ペ
トロウィッチ イー コンニチハ ナニナニガ ドウシテ」ト イウヨウナ 話シ
カタヲ(M₂) スルンデス(Z)。 (126-17-13) *研究所ノ

注1) この条件的な意味を表わす状況語については、なおV 2・3「表現意図との関
連から見た状況語について」を参照。

注2) これは「～ヲ トロウト(J), ~ヲ トロウト(J)」とべつべつの成分と認め
る考え方もありうる。「ボクハ タトエ 会社ヲ クビニ ナロウト ソレハ
断行スル ツモリダ。」などに「～ト」が一つの場合もあるから。

注3) 「～ニセヨ(J), ~ニセヨ(J)」とする考え方もありうる。

注4) どういう成分であるかは未決定。おそらくTだろう。

(vii) その他

▽コノ 言語行動ノ ホカニ(J) モット 広ク ウ 性格的ナ 環境的ナ 知的ナ
身体的ナ 諸条件ノ 観察記録モ(M₂) トッテ オキマス(Z)。 (122-24-5)

▽エー 現在ノ オ 新聞ハ(S) アー 当用漢字ノ ワク内デ(J) エー マカナ
ッテ オル ワケデス(Z)。 (123-44-17)

▽コレデ(J) ^{イチマンサン} 一人前 二十三円ニ(H₁) ナリマス(Z)。 (125-22-20)

▽ソレカラ(ト) ハムガ(S) 四枚デモッテ(J) ^{ナナ} 七十グラムデ ゴザイマシヨウ
(Z)。 (127-17-20)

▽中学 三年生ノ 皆サンガタハ(S) モウー アト ^{トチカ} 十日ホドデ(J) イヨイヨ
卒業ト イウ コトニ(H₁) ナリマス(Z)。 (127-22-1)

▽エー ケレドモ(ト) コノ イヤナ 季節モ(S) 心ガケンダイデハ(J) 万端
ノ 備エヲ シテ マタ 楽シク 迎エル コトモ(S) デキルノデハ ナイデン
ョウカ(Z)? (125-18-6)

▽子ドモト 読書ノ コトデハ(J) ワタクシタチハ(S₁) イロイロト(R) 心配ナ
コトガ(S) アリマスネ(Z)。 (126-1-7)

▽コレガ(S) 五オグライカラ(J) ボツボツ(R) 出テ クル(Z)。 (126-14-12)

▽デハ(ト) サツソク(R) サバノ オ材料カラ(J) オ材料ヲ(M₂) 申シアゲマシ
ョウ(Z)。 (124-15-11)

▽一^{ノツ}等・二^{ノツ}等・三^{ノツ}等・四^{ノツ}等・八^{ノツ}等マデ(J) 活用形ガ(S) 立テテ アリマス(Z)。
(123-3-10)

▽ワタクシタチハ(S₁) エー 人ソレゾレニ ヨリマシテ(J) 暑サニ 対シマスル
抵抗力ハ(S) 異ナッテ オリマス(Z)。 (126-38-6)

▽デ(ト), マー ソウイウ コノ 子ドモノ 能力トカ 発達段階ニ 応ジテ(J)
エー ソレゾレ デキタ 喜ビガ 味ワエルヨウナ ソノ 経験ヲ(M₂) ツマシテ

ヤル (ト) (Z)。 (126-35-4)

▽ツマリ (T) 相手ト シテハ (J) エー ^{フタトオ}二通りノ モノガ (S) アッタ (Z)。
(123-21-21)

▽読ミノ 能力ノ 発達ノ ヒトリノ… ヒトツノ トラエカタト シテ (J) 音読
ヨリ 黙読へ ソレカラ 黙読ノ 速度ガ 非常ニ 速ク ナルト イウ コトガ
(S) 言ワレテ イマス (Z)。 (122-24-17)

▽モトモト (J) シカシ (T) 計数的ナ 頭ハ (S) 非常ニ (R) ヨカッタヨウデス
(Z)。 (126-23-9)

状況語も、同一構文の中に2つ以上自由にはいろいろ。

J 2つのもの

▽下ノ フタリノ 娘サンハ (S) イマ (J) アメリカデ (J) 勉強中デス (Z)。
(126-24-13)

▽ソウイウ アゲクニ (J) 日本ノ 国民ノ 知ラナイ アイダニ (J) アノ 日本
ハ (S) アメリカノ 原水爆核兵器ノ 基地ニ (H) サレテ イル (Z)。
(124-30-17)

J 3つのもの

▽ソノ コロニ (J) モウ (J) 日本デハ (J) ア 保健所ガ (S) ア デキタ ワ
ケデス (Z)。 (125-24-13)

c 複合 K/...Z/

これは、骨ぐみまたはそれに拡大成分のついたものに、さらにKがつくこと
である。しかも、そのばあいのKはその文のZと、SまたはJを共有する(共
有しう)ようなものである。複合構文に現われるKには～ガ、～カラ、～ケ
レド、～シがある。

(1) K_#(R, J)/...Z/

▽マー (T) 人間テ イウノハ (S) ケンカラ イタシマスト (J) ^{サイショ}最初 アー 人
ヲ 昔ハ 人ヲ 殺シテ イタ 相手ヲ コロ イヤナ ヤツハ 殺シテ イタニ
チガイナインデスガ (K) エー ダンダンニ (R) ソウイウヨウナ モノハ エー
オ 殺サナイ ケンカラ スルヨウニ (H) ナッタ (Z)。 (126-45-21)

▽アー モットモ (T) 中国ハ (S) マダー ア 援助スルト イウ トコロマデハ
イッテ オリマセンガ (K) ア ヤハリ (T) ソノ 資格ヲ (M) 持ッテ オリマ
ス (Z)。 (127-2-2)

▽エー ソレカラ (T) コレハ (S) コトバデハ アリマセンガ (K) サシエト (Z)。
(123-42-17)

▽エー 説得モ デキマセンガ (K) ^{センドウ}煽動モ (S) デキナインデ アリマス (Z)。

▽ツギニ(T) 西下先生ハ(S) 平安朝文学一般ニ ヒロイ ゴ知識ヲ モッテ オイデデ アリマスガ(K) トクニ(T) 和歌史ノ 研究家トシテ(J) キコエテ オラレマシタ(Z)。 (129-2-5)

▽デー(T) 光太郎ハ(S) エー 彫刻家ト 自分デハ イッテ オリマスガ(K) ヤハリ(T) スグレタ 詩ヲ(M) ツクッタ(Z)。 (133-17-13)

▽柿モ(s') コウシタ マダ ナマナマシイ 柿ナラ ケッコウデ ゴザイマスガ(K) コノヨウニ コノ ウー 干シ柿ニ イタシマシタノハ(S') ビタミンCハ(S) ホトンド(R) ゴザイマセン(Z)。 (138-5-14)^{注2)}

注1) いわゆる総主(S')が想定されるけれども実際には現われていない例。「煽動モ(s)」は部分主語である。また、これはKの部分が、その文の述語と意味上対等なものであって、その扱いについてはなお考慮の余地がある。(2・2・1b (v))「継起する動作・状態あるいは並列的な動作・状態を表わす状況語による拡大」参照)

注2) これはあるいは付加構文の例かもしれない。

(2) K_ヲ(R, J)/...Z/

▽スカミソオケヲ 置ク 近ク アルイハ 塩 ショウユ ミソナド ビンヤ ツボヲ 置ク 下アタリハ(S') 塩気ノ タメニ 湿気ヲ ヨンデ カビヲ 発生シガチデ ゴザイマスカラ(K) トキドキ ヨク ファイテ カワカシテ オク コトガ(S) 大切デ ゴザイマス(Z)。 (125-19-13)

▽コレハ(S') 本人ノ 実話デスカラ(K) マチガイハ(S) アリマセン(Z)。 (126-24-8)

▽シカシ(T) イー 梅毒ト イウ 病気ハ(S') モウ ツマリ 親ノ ホウカラデスネ コレ 遺伝デハ アリマセンケレドモ オカアサンカラ 子ドモサンニ オナカノ ナカデ ウツルト コウイウ 性質ノ 病気デスカラ(K) 知ラナイ マニ 不幸ニシテ ウツテル バアイモ(S) オー ナイ ワケデハ ナイト(Z)。 (125-27-5)

▽働イテ イル サイチュウニ 水ヲ ガブガブ 飲ムト イウ コトハ(S) 血液ノ 量ヲ タダ イタズラニ フヤシマスカラ(K) 損デス(Z)。 (126-40-18)

▽デ(T) 脂肪ガ スクナイカラ(K) ケッキョク(T) コノ オー テンプラニシテ 油ヲ ツケテ アゲルト イウ コトニ(H1) ナリマスネ(Z)。 (138-3-4)

▽デスカラ(T) 学校デストカ 工場ナドデ マー 集团的ニ 注射ヲ スル パアイ(J) アルイハ(T) 針ガ アリマセンカラ(K) 家畜ナドニ 注射ヲ スルトキナンカニ(J) ヒジョウニ(R) 役ニ タツ ワケデスネ(Z)。 (138-17-17)

▽デ(T) 白米ニ シテ シマウト コウイッタ トコロガ トリサラレテ シマウワケデスカラ(K) B^ビイチノ 量ガ(S) ヒジョウニ(R) スクナク(H1) ナル

ワケナンデス(Z)。 (138-21-11)

(3) $K_{ケレドモ}(R, J)/...Z/$

▽日本^{ニッポン}デハ(J) マダ(T) ア 特殊心理学ノ 正教授ガ ハ オイテ アリマスケドモ(K) 特殊教育ノ 正教授ハ(M₇) オイテ ゴザイマセン(Z)。 (122-9-18)

▽ツカマッタケドモ(K) ドウニモ ナラナイ(Z)。 (126-14-4)^{注)}

▽ナンダカ ワカランケレドモ(K) トニカク(T) 象徴ナンダト(Z)。

(134-8-12)

▽イッペン アヤマッテ ナニカ 悪イ コト シタンデシヨウケドモ(K) ヨク(HI) ナッテ イクンデス(Z)。 (134-15-16)

▽エー コノ 講演ハー(S₁) 講演ヲ 聞イタ アー モノハ ゴク 少数ノ ヒト ビトニ スギナイノデ ゴザイマスケレドモ(K) ソシテ(T) ソノ ナカミモ(S) ケッシテ(T) 長イ モノデハ アリマセン(Z)。 (137-1-10)

▽デ(T) コノ クチクラ層ハ(S) ホカノ 植物ニモ アルンデスケドモ(K) トクニ(T) エ 常緑樹ニハ タクサン(R) 発達シテ オリマス(Z)。 (138-14-9)

注) Sが想定されるが、実際には現われていない例。

(4) $K_{シ}(R, J)/...Z/$

▽デ(T) コレハ(S₁) アー ソノ 上ニ コウ ワレマセンシ(K) コワレタリシテ ナカノ モノガ 出ル 危険モ(S) ナイ(Z)。 (127-28-8)

▽デ(T) コレモ(S) オー 研究所デ ヤッテ オリマス 仕事ノ オー 結果ヲ 報告 スルト イウ モノデモ アリマセンシ(K) エー マタ(T) ア ナカマノ ミンナノ 意見ヲ 代表シテ ワタクシガ ココデ シャベルト イウ モノデモ アリマセン(Z)。 (122-14-35)

▽デ(T) 子ドモハ(S) ソノ 子ドモナリノ 判断力ヲ 持ッテ イルシ(K) 親トハ イッショニ ナリタイッテ イウ 感情ト イイマスカ 血ノ ツナガリ、ソウイッタ モノヲ 持ッテル モノナンデス(Z)。 (125-7-14)

▽オフトンカラ モウ ミンナ コロゲテ シマウシ(K) カケプトンナドハ(M₉) モウ(T) スグニ(R) ハイデ シマウ(Z)。 (125-1-5)^{注)}

▽ソノ タメニ(J) コノ 洗礼モ ウケナイシ(K) 天理教徒デモ ナイト(Z)。

(137-11-7)

▽カラ(T) 皮ノ ホウニモ(M₆) オー 実ノ サラニ^{ロクシチ} 六七倍モ^ツ ビタミンCガ 含マレテ オリマスシ(K) サラニ(J) カルチンナドモ(S) オー 含マレテイル ワケナンデス(Z)。 (138-7-13)

注) Sが想定されるが実際にはない例。

2・2・2 付加構文

付加構文は、基準構文にTおよび(または)Dおよび(または)Kが付加されたものである(1・3「構文の型の分類」参照)。

a 陳述的成分の付加 「[Z]」

(i) 「がもっぱら表現意図に関係するもの

▽コレヲ(M₇) カレラハ(S') トウテイ(T) 理解スル コトガ(S) デキナイ(Z)。
(124-33-3)

▽タブン(T) 最長年令ノ 故ヲ モッテデ アリマシヨウ(Z)。(127-35-2)

▽男性ノ カタモ(S) ドウゾ(T) オタメシニ ナッテ クダサイマセ(Z)。
(127-33-6)

▽国家ノ 保証 信用ノ 裏付ケガ(S) ジツニ(T) 財政デ ゴザイマス(Z)。
(124-23-20)

(ii) 「が文脈的な導入の部分であるもの

▽アルイハ(T) ジフテリヤノ 予防注射モ(M₇) ヤリマス(Z)。(125-28-7)

▽カラ(T) 文脈ガ 反映シタ モノヲ(M₇) オ 脈絡ト(H₂) 名付ケマス(Z)。
(123-20-15)

▽ソシテ(T) コノ パアイニ(J) イマ 申シアゲマシタヨウニ(T) スベテ(R)
ユルミト イウ コトラ(M₇) 忘レナイデ イタダキタイ(Z)。(125-4-4)

▽ダカラト イッテ(T) アンマリ 赤チャンヲ タカイ タカイ タカイ タカイ
シテ 頭ヲ フルナンテ イウ コトハ(S) 外国デハ(J) アンマリ シナイ
コトナンデス(Z)。(126-10-12)

▽マタ(T) 幼児ノ 時期ッテ イウ トクニ 四歳グライマ(註)(Z)ノ 時期ト イウ
ノハ(T) 自分デ カラダヲ 制御スル コトラ(M₇) 知りマセン(Z)。
(126-10-15)

▽アー アノ ヨケイナ コトデスガ(T) アメリカノ コウイウ 専門ノデスネー
エー 特殊教育ノ 専門ノ ホウハ(S') タイテイ(R) コウイウ メンガ(S)
ヒジョウニ(R) 重要視サレテ オルンデス(Z)。(122-10-14)

▽チョット 見ニクイカモ シレマセンケレドモ(T) エー コノ ヘンガ(S) ズ
ット(R) アノ オー 白ク(H₁) ウ スリガラスミタイニ(h₁) ナッテ オリマ
スネ(Z)。(127-28-6)

▽ジョッセルソンノハ ソレクライニ イタシマンテ(T) 次ニ(T) フランスノヲ
(M₇) ゴ紹介 イタシマス(Z)。(122-5-19)

▽ソレデ ソレヲ モウイッカイ 申シマスト(T) 二十五度カラ 下ノ 温度デ
ハ(J) エー カラダガ(S) 冷エテ クル(Z)。(126-39-2)

注)あるいはJか。

(iii) 「が評価的な部分であるもの

▽ヒジョウニ ザンネンナ コトデ(T) エー ヒョット シタラ(T) コノ ササ
キサント オッシャル オ名前ガ ウ 仮名デハ ナカッタカト(H₂) 思ウンデス

(Z)。 (127-30-3)

(iv) Tが提示的部分のもの

▽ソレカラ(T) パセリハ(T) アー^{フス} ツ^{ミツ}ニ コウ 切りマシタ モノヲ
(M₇) 入レマシタ(Z)。 (127-16-17)

▽デ(T) ソシテ(T) オンナジ 原因カラ イロイロナ ヤキモチガ 現ワレル
コトハ ゴザイマシヨウシ(K) マタ(T) ヒトツノ ヤキモチノ アラ アラワ
レモ(T) ソレヲ タドッテ ミレバ(J) イロンナ 原因ガ(S) 考エラレルカ
モ シレマセン(Z)。 (125-13-17)

▽エ コレモ(T) ミナサンガ ゴ承知ノ トオリデス(Z)。 (127-25-8)

▽ソレカラ(T) アー ツギニ(T) コノ(T) シカル トキノ オー コツデスガ
(T) コレハ(S) サッパリト シカル コトナンデス(Z)。 (125-8-7)

▽ツケアワセノ バレイショデ ゴザイマスガ(T) コレハ(S) アノ オ タテニ
四ツカ^{フツ}六ツグライニ オ割リニ ナリマシタ モノヲ (略) 塩 コショウノ
オ味ヲ トトノエマシタ モノデ ゴザイマス(Z)。 (127-18-20)

▽サテ(T) エ 研究方法デ ゴザイマスケレドモ(T) ワタクシドモノ 実験ヤ
観察テストハ(S) ヒジヨウニ(R) イ 多方面ニ(M₂) ワタッテ オリマス(Z)。
(122-21-23)

なお、以下のものは、いわゆる「引用提示句」を含むものである。このばあ
いの引用提示句をTと考えれば、この類にはいることになる。^{注1)}

▽ソコデ マー エー ソナヨウナ コトヲ ソンナ 立場カラ 研究シテ イク
ニ ツイテ 方法ト シテハ ドウイウ コトガ 考エラレルカト(T) コレハ
(T) オオヅカミニ ヤロウト スル バアイニハ(J) ドウシテモ(T) エー
社会調査ヲ(M₇) ヤラナケレバ ナラナイ ワケデス(Z)。 (123-37-16)

▽ソレデ エー ソウイウフウニ シテ 母子手帳ヲ モラッテ イロイロノ 注意
ヲ 保健所デ エー ウケルト(T) コレガ(S) オカアサンノ マー ニンシン
シタ バアイノ オカアサンノ 保健所トノ ツナガリデス(Z)。 (125-26-20)

▽エー 聞き手が エー ソノ オ 話シ手ノ 主観ニ 反映スルト(T) ソレヲ
(M₇) アイテト(H₂) ナヅケル(Z)。 (123-20-13)

▽社会主義ガ 実際ニ 資本主義ニ オイツイテ サラニ コレヲ ヒキハナシツツ
アルト(T) コレガ^{注2)} アノ 人工衛星ガ(S) ハッキリ(R) 証拠ダテテ イル
(Z)。 (124-30-4)

なお、次の例もここで問題にしたものに準じて扱ってよいかもしれない。

▽本^{ホン}ハ ソノ オカアサンニハ ホントウニ タノシカッタデシヨウ(ト), ダケド
ソノ 本モ 本 ソノモノノ 持ッテ イル タノシサト イウヨリカ 親ニ 禁
止サレタ タメニ ソレヲ コッソリト 見ル, ソウイウ タノシサガ 加ワッテ

イルンジャ ナイダロウカト, ソシテ コノ オカアサンハ 自分が 親カラ サ
レタ コトヲ イマ マタ 子ドモニ シテ ヤルト ソノ コトガ 子ドモニ
トッテ 幸福ダト 思ッテ イル, ソコニ マチガイガ アルンジャ ナイカ コ
ンナ コトモ(M₂) イッテ イルンデス(Z)。(126-2-19)

注1) こうした引用提示句をDと見るという考え方もありうる。引用提示句と同じ形の、「～ト」で終止する文があるから。しかし、そうすると「～ト」で終止する文を独立語構文と見なければならぬことになる。

注2) 意味から考えると、「コレヲ(M₂)」とあるべきところ。

(v) T その他

▽デ(T) ドチラニ シテモ(T) 子ドモサンノ 寝巻ノ アリ方ト イウ コトヲ
シッカリ 知ッテ オク コトガ(S) アノ(T) 大事デス(Z)。(125-1-11)

▽ソウイウ 子ハ(s') ドチラカッテ イウト(T) イツノマニカ(R) 動ク コ
トガ(S) ヘタニ(Hi) ナッテ イマス(Z)。(126-9-14)

▽ヤハリ(T) 日本ノ 働ク 国民ノ 側ニ ハッキリ タタナキャ ナラン(Z)。
(124-35-8)

b 独立語の付加 D[Z]

(i) Dが間投的な性格のもの

▽コレガ(S) マア(D) 池田流ナノデショウカ(Z)。(126-26-14)

▽エー マア(D) 概略(R) ウー 現在 ヤッテ オリマスマデニ 到達シタ モ
ノヲー(M₂) チョット(D) 項目ダケ(R) ^{注)} ソコニ(M₂) アゲテ オキマシタ(Z)。
(123-38-1)

注) Rとすることには問題がある。M的な性格もあるようだ。

(ii) Dが呼びかけのもの

▽エー ミナサン(D) イマ(J) ソビエトノ 人工衛星第三号が(S) 上空 高ク
(R) 飛ンデ オリマス(Z)。(12-29-3)

▽ドウモ(T) 杉先生(D) アリガトウ ゴザイマシタ(Z)。(127-31-6)

▽ソレジャ(T) 戸田サン(D) ドウゾ(T) オ願イイタシマス(Z)。(126-50-16)

(iii) Dが評価的な性格のもの

▽シカシ(T) カナシイカナ(D) コレガ ホントウニ イッポンニ 結集 サレテ
ソレガ ホントウノ 自由民主党ト 政治ノ 舞台デ タタカウヨウナ 政治的ナ
勢力ニマデ(M₂) コレガ(S) 発展シテ キテ イナイ(Z)。(124-34-12)

(iv) Dが提題的表示のもの

▽コノ 電器材料ナンカニ 使ウ ベークライト(D) コレハ(S) 石炭酸ト オー
ホルマリンナドカラ(M₂) ツクラレル(Z)。(127-27-7)

▽第三ノ ^{オンキ} 転機 (D) ソレハ(S) 造船疑獄事件ニ 佐藤サント トモニ 疑イヲ
カケラレタ コトト 吉田内閣ガ 総辞職ニ 追イ込マレタ トキデス(Z)。
(126-26-6)

▽素材ガ 反映 (スレ) シタ モノ (D) ソレヲ(M₂) 話題ト(H₂) 名付ケマス
(Z)。 (123-20-14)

(v) D その他

▽エ 小サナ オ子サンナラズトモ コレヲ コウ チクリト ササレル トキノ
アノ 痛サ (D) エー ナントモ イエナイ 気が(S) イタシマス(Z)。
(138-16-3)

このほかに、<「～」ト コノヨウニ, 「～」ト コウ……> というタイプの
<「～」ト>の部分をもDとみなすことも可能であるが、これは、コノヨウニ、コ
ウと同格のH₂とみなした。(2・2・3 a「同格」参照)

c 陳述的成分と独立語の付加 T D [Z]

前の(2) D[Z] にあげた,(127-31-6) (126-50-16) (124-34-12)の諸例参照。

d 従属句の付加 K [Z]

(i) K₂

▽選手タチハ 走りオワルト 足ヲ モミマスガ (K) コレハ(S) タマッタ 疲労
素ヲ 早ク 分解シテ 酸素補給ヲ ヨク スル タメデス(Z)。 (127-32-12)

▽タダイマ 私ノ 先輩ノ 内藤先生ガ イロンナ ゴ注文ヲ 出シニ ナリマン
タガ (K) 私モ(S) ヒトツ 注文ヲ 出シタイト(H₂) 思イマス(Z)。
(124-19-3)

▽^{ニッポン} 日本ノ 総理ト シテハ ゴク 若イ 部類デスガ (K) ツイ サキゴロ アメリ
カノ 民主党大統領候補ン ナリマシタ ケネディー氏ハ(S) 四十三歳(Z)。
(126-21-17)

▽コレガ ワタクシヲ 最初ニ 生理学ヲ 教エテ クレタ 先生デスガ (K) 二番
目ノ 先生ハ(S) エー パプロフ先生(Z)。 (126-16-3)

▽チットモ オチツイテ 本ヲ 読マナイ 子ハ オカアサンノ 頭痛ノ タネデス
ガ (K) ソレト 反対ニ 学校カラ 帰ッテ クルナリ 机ノ 前ニ スワリコン
デ 漫画ノ 本ニ シガミツイテ イル 子(T) コレモ(S) マタ(T) 心配デ
スネ(Z)。 (126-1-9)

(ii) K₂₂

▽ダイタイ アメリカノ 大統領ノ 平均年令ガ 五十五歳ト イウンデスカラ (K)
^{ニッポン} 日本ノ ホウガ (S) ダイブ (R) トシヲ(M₂) トリスギテ オリマス(Z)。
(126-21-19)

▽カワイソウダカラ (K) 日カゲニ(M₂) イレテ ヤリマシヨウ(Z)。 (126-35-6)

▽ソレカラ (T) ニンジンモ(M₇またはT) 皮ノ ママデ ケッコウデ ゴザイマスカ
ラ (K) コウイウ フウニ (R) ウスーク (R) 切ッテ オキマス (Z)。

(127-16-16)

▽ソレカラ (T) ハムモ ヤハリ 同ジクライニ 切りマシタ モノデ ゴザイマス
カラ (K) コレヲ(M₇) コウ (R) イレマシタ (Z)。 (127-18-2)

(iii) K_{フレ}

▽ココニ アノ キョウハ ガスデ 焼ク コトン ナッテ オリマスケレドモ (K)
ガスデモ マタ ^{スゝ}炭火ガ オアリン ナレバ 炭火ノ ホウガ ナオ イイヨウデ
ゴザイマスケレドモ (K) デ (T) コレヲ(M₇) 金網ヲ(m₇) マズ(J) 暖カク
(H₁) シテ オキマシヨウ(Z)。 (127-16-23)

▽ソレデ コレガ アノー コウ 蒸発シテ シマイマスト コレガ アノ 白イ
チョウド オー ゾウゲノヨウニ イー ナル ワケナンデスケド (K) エー コ
レガ (S) セルロイドナンデス (Z)。 (127-25-17)

▽足ガ 疲レルト イウ コトハ コノ ホカ 栄養ニモ 関係ガ ゴザイマスケレ
ドモ (K) タダイマノ 体操 (T) オフィスバカリデ ナク (J) オ宅ニ モドッ
テカラデモ (J) チョット (R) オタメシクダサイマセ (Z)。 (127-33-4)

▽デ (T) ワタクシハ「オカアサンハ ヨク シカリマス コウ シカリマス」ト 書
イタ モノハ ナイカナト サガシテ ミタンデスケド (K) ヒトリモ (S) ナイ
ンデス (Z)。 (125-6-6)

▽アー (T) シカル コトバッカリ イイマシタケレドモ (K) モウヒトツ タイセ
ツナ コトハ (S) ホメルト イウ コトデスネ (Z)。 (125-9-1)

▽(デ) (T) 教育熱心ナ オカアサンタチハ 熱心ナレバ 熱心ナホド ツイ タメ
ニ ナル オ話ヲ 第一ニ スルケド (K) 石井サンハ (S) ソノ オ話ッテ イ
ウノハ オモシロイ オ話ヲ 第一ニ シタ ホウガ イイット (H₂) イッテルン
デス (Z)。 (126-2-4)

(iv) K_レ

▽エー トコロガ (T) アー コウ イッタヨウナ 関係ニ 対シテ ワレワレハ
アルイハ 家族デ アリマストカ アルイハ ショタイデ アリマストカ ア
ルイハ マタ ウチナンテ イウ コトバモ 使イマス (ンデゴザイマス) シ (K)
ソウイッタヨウナ フウニ (R) コトバモ (S) チガッテ オリマス (Z)。

(126-48-22)

▽カラダハ ヒョロヒョロ シテ イルシ (K) トテモ (T) ソノ 子ニハ(M₂) ヤ
レソウモ ナインデスヨ (Z)。 (126-14-2)

▽タダシ 池田サンモ イツカ 岸 佐藤系ノ ヒモハ 切ロウト スルデ アリマ
シヨウシ (K) コノ ヘンニモ(M₂) 今後ノ 課題ガ (S) ヒトツ (R) アリマス

(Z)。 (126-22-21)

(V) $K_{\text{マ}}$

▽シカシ(T) 一応ノ メドハ アリマスノデ(K) ソレヲ(M_マ) 申シアゲテ オキマシヨウ(Z)。 (126-38-6)

▽イマ オ豆腐ガ オ水ノ キレタノガ コチラニ ゴザイマスノデ(K) チョット(R) オ目ニ カケマシヨウ(Z)。 (127-12-6)

▽オ豆腐ガ 半丁 アマリマスノデ(K) エー ツヅイテ スイモノヲ コチラニ オ目ニ カケル コトニ(H₁) イタシマシヨウ(Z)。 (127-11-10)

▽ドウゾ(T) デキアガリガ ゴザイマスノデ(K) ゴランクダサイマセ(Z)。 (127-11-4)

▽デ(T) コノ タマツキハ ゾウゲヲ 使イマスノデ(K) コレハ(S₁) タイヘン(R) 値段ガ(S) タカインデス(Z)。 (127-25-2)

▽ソシテ(T) ソノ オギ オギナイヲ モシ ツケナケレバ ワタクシタチハ 疲レテ マイリマスノデ(K) アー 夏 働ク カタガタハ ソノー 働キスギナイヨウニ 能率ノ イイ 働キカタヲ シテ ソシテ 出タ 汗ヲ オギナッテ 水分デ オギナッテ ソレデ エー 汗ト イッショニ 出テ キマシタ ^{ニンブツ}塩分ヲ オヨケイニ トリイレールト イウ コトヲ 考エテ イク コトガ マズ 第一ダト(H₂) ワタクシハ(S) 思イマス(Z)。 (126-40-2)

▽コレデ ヨロシユウ ゴザイマスノデ(K) バター(ヲ)(M_マ) ^{クニ}上ニ(J) ノセマスンデ ゴザイマス(Z)。 (127-18-5)

(vi) K (連用形) または $K_{\text{マ}}$

▽日本ノ 政治モ 申シアゲマシタヨウニ チョウド 転換期デ(K) オオイニ(R) 池田サンモ(S) ワカワカシク(R) ガンバッテ モライタイ モンデス(Z)。 (126-22-1)

▽デ(T) コレハ ワタクシハ トコロト 場所ニ ヨッテ ヒジョウニ チガウト 思ウンデ アリマシテ(K) エー 農村ナンカハ(S₁) コノ 近隣ノ 生活ガ(S) 家庭生活ト イッショニ(H₁) ナッテ オリマス(Z)。 (126-49-17)

▽デ(T) コレハ コノー ヤッパリ ソコカラ ワレワレハ……ノ 生活ハ シゲキヲ ウケルンデ アリマシテ(K) デ(T) ソノ 関係デ モッテ ワタクシドモハ ヤッパリ 間接ノ 人間関係ヲ ツクッテ イルト(H₂) 思ウ(Z)。 (126-50-9)

▽エー パブロフト イウノハ 家族名デ アリマシテ(K) タトエバ ワタシノー ^{ハツ}林ト イウ メイニ 相当スルノガ(S) パブロフ先生ノ パブロフデ アルト(Z)。 (126-16-10)

▽冷房病ト イウ モノハ ヒトツノ キミョウナ 表現デ ゴザイマシテ(K) ソ

ンナ 病気が アルトハ(H2) ワタクシハ(S) 思イマセン(Z)。(126-42-10)
▽コレハ シカタノ ナイ コトナンデ(K) 政治家ト イウ モノハ(S) コノ
両方ヲ(M7) ウマク(R) トリアツカワナキヤ イケナイ ワケデス(Z)。

(126-26-2)

▽デー(T) コノ 対話性ト ワタクシガ 申シマスノハ エー 話ヲ 実際ニ コ
ウ コトバラ ヤリトリ スルト イウ 対話ニ カギラレナイデ エ ヒトリガ
イッポウテキニ 話ス イワユル 独話ニ オイテモ ヤハリ 認メラレル モノ
デ アッテ(K) エー シタガッテ(T) アッ…… ソウイッタ 独話ノ ナカニ
モ ソウイウ 助詞ナドガ ア 使ワレル コトハ(S) ケッシテ(T) 珍シク
ナイ ワケデ アリマス(Z)。(122-16-17)

▽エ シカシ(T) マタ 話シコトバニ 省略ノ モノガ 多イト イウ コトハ
コレハ マタ 事実デ アリマシテ(K) エー マア(T) コノ 省略ト イウ
モノハ(S') フツウ(J) 場面 アルイハ 文脈ト イウ モノニ ヨッテ 補充
サレル ウ タメニ(J) コトバガ(S) 省略サレル(Z)。(122-16-36)

▽デー(T) チョウド コレハ エー 交通ノ 問題ニ オキマシテ エー アル
地点ニ 殺到スル 車ノ 数ヲ 調ベタリデスネ ソノ 車ノ オー 車体ノ オ
分析 シテ ソノ 車体ガ ドウイウ 構造ニ ナッテ イルカト イウ フウニ
…ノ コトヲ 考エルノト 同ジデ アリマシテ(K) コレデハ アー 交通ノ
アー 政策ノ 基本的ナ アー 理論テ イウ モノハ 見イダセナイ コトニ
(H1) ナッテ シマウンデ アリマス(Z)。(124-3-22)

なお、以下にあげるようなKが名詞でおわっているのも、一応ここにあげておくことにする。

▽カラ ビタミンCハ サキホド 申シアゲマシタヨウニ 二百グラムチュウ 四十
グラム(K) コレモ(S) オー ジュウブン(R) タリマス(Z)。

(138-8-16)

▽ナカミハ 鉄鋼トカ 機械 綿織物 船舶 ソレカラ 化学肥料ト イッタヨウナ
モノ(K) コノ ホカニ(J) マー(T) 雑貨 ソノタガ(S) ゴザイマス(Z)。

(139-5-3)

▽西ドイツノ 平均耕作面積ハ 一経営アタリ 一農家 アタリ 八町歩(K) フラ
ンスハ(S) ソノ 倍イジョウ(Z)。(139-28-2)

▽マー 日本モ ゴ参考マデニ 見テ イタダキマスト ダイタイ 一町歩(K) 問
題ニ ナラナイ 広サデス(Z)。(139-28-3)

e 陳述的成分と従属句の付加 T K [Z]

前の(4) K[Z]のところであげた諸例を参照。(127-16-16), (125-6-6) (125-

9-1) (126-48-22) (126-49-17) など。また、正確にはKT[Z] (126-1-9) (126-14-2), KKT[Z] (127-16-23)と表わすべきものもある。TK{T[Z]}とでも表わしたらよさそうなものもある(122-16-17)。

なお、DK[Z]という型も考えられるわけだが、資料にはその例がなかった。

2・2・3 その他の問題

以上、われわれは述語構文の型として基準構文と付加構文とを扱ったが、述語構文の型の記述としては、これだけでは十分ではない。上の記述でもれたもの、あとまわしにしたものをここであげる。それは、大まかにいって、次のようなものである。

まず、上にあげたそれぞれの構文に、同格や挿入の部分の加わった構文がある。これらは、かなり、臨時的なものであり、基準構文や付加構文とならぶ独立した構文の型と認めるべきかどうかにまようものである。(a・b)

つぎに、述語構文のいずれかの型に属しながら、独得の構造をもつものがある。(c・d・e)

さらに、述語構文のある型から他の型に移行しつつあって、にわかにその所屬を決めたいものがある。(f)

a 同格

同格とは、同一構文のなかで、2つ以上の成分が同じ資格で他の成分あるいは成分連続に関係しているばあいの、その2つ以上の成分の関係をいう。^(注)

注) われわれは、並立と同格とを区別する。(69ページ注参照)

同格の成分は、上にあげたどの種類の述語構文の成分にも自由にはいろいろ。同格構文という型を認めるとしても、それは、かなりゆるい型であって、他の型と同列に並ぶものではない。それは、もとの構文の一種の変種と見ることができるともかもしれない。

ここでは、資料に現われた同格の成分に注目して、それをとるあげる。便宜的にいくつかのタイプに分けて例をあげる。同格の成分の略号による示し方は、「アノ 犬ハ(S) ソレハ(s)……」「アノ 人ヲ(M_?) 伊藤氏ヲ(m_?)……」のように、同格の成分のはじめの成分だけ大文字(S, Mなど)で示し、2番

目（3番目……）に現われた同格の成分はそれと同字の小文字（s, mなど）で示した。

(1) 同類のことがらを列挙するもの

(Zのばあい)

▽ソレカラ(T) (略) コウイッタヨウナ アー 構造ノ モノ(D) コレガ(S)
アー ソレゾレ(R) ヤハリ(T) ヒトツノ 文ナノカ(Z), フタツノ 文ナノカ
(Z)。 (122-17-26)

(Mのばあい)

▽態度モ(M?) 技能モ(m?) 知識モ(m?) 全部(R) 含ンデ イル(Z)。
(123-30-21)

▽ワタクシタチノ マワリニハ(M=) タクサンノ 合成樹脂デ デキタ 製品ガ(S)
アリマスネ(Z), オウチノ 台所ニモ(m=) ソレカラ(T) ミナサンノ 机ノ ウ
エニモ(m=)。 (127-24-1)

(Jのばあい)

▽ワタクシドモハ(S) スベテ(R) エー コノ オ 家庭ニ オキマシテモ(J)
アルイハ(T) 社会ノ 生活ニ オキマシテモ(j) イロイロノ トコロデ(J)
イロイロノ 人間関係ノ ナカニ(M=) マー 置カレテ イル ワケデ ゴザイマ
ス(Z)。 (126-43-8)

▽コウイウ トキニ アタリマシテ 池田君ガ 多数ノ 投票ヲ 獲得セラレマシテ
新総裁ニ ゴ選任ニ アイナリマシタ コトハ(T) (略) ワレワレ黨員ト シテ
モ(J) マタ(T) 国民ト シテモ(j) マコトニ(R) 慶祝ニ タエマセン(Z)。
(127-35-6)

(Hのばあい)

▽(略) エー コノ ヘンガ(S) ズット(R) アノ オー 白ク(H1) ウ スリガ
ラスミタイニ(h1) ナッテ オリマスネ(Z)。 (127-28-6)

▽日本ノ 学者ノ 意見ニ ヨリマシテモ(T), コレクライ 大キケレバ 優ニ 人
間ガ 乗りコンデ 飛ブ コトガ デキルデ アロウト(H2), マタ(T) オソラク
コレナラバ オ月サンマデ 飛ンデ イケルダケノ カヲ 持ッテ イルンジャ
ナイカト(h2) コノヨウニ(h2) イワレテ オリマス(Z)。 (124-29-4)

(2) 同じことがらをくりかえすもの

(i) 同じことばをくりかえすもの

これは、同格の中でもいちばん臨時的なもので、強調などのために意識的に用いることもありうるが、多くは、不整的な表現とみなされるものである。

(18ページ参照)

▽コレハ(T) ポリエチレンノ コノ ビンノ ナカニ(M₂) イー コンナカニ
(m=) シュッサンアンモニアガ(S) ハイッテル ワケデスネ(Z), シュッサンア
ンモニアガ(s)。 (127-28-7)

▽ワタクシハ(S) (略) ソレハ 積極的ナ 冒険心デ アリタイト(H₂) ワタクシ
ハ(s) 考エテ イマス(Z)。 (126-15-11)

▽アノ オー オー エー 実ハ(T) アノー コノ 研究所ノ ナカニ 話シコト
バ研究室ト イウ コトガ ア アルト イウ コトラ(M₇) 実ハ(t) キョウ
(J) ハジメテ(J) 存ジアゲタ(Z)。 (124-10-4)

▽コレガ(S) ヤハリ(T) イマ 申シマシタヨウニ 話シ手ノ オー 情意的ナ
陳述ヲ 表ワスト イウ 意味デ(J) ヤハリ(t) イ 意向形ノ グループニ
(M₂) ハイリマス(Z)。 (123-8-21)

▽ワタクシハ(S) ドウカ(T) コノ タビノ 総選挙ニ オキマシテ ミナサンガ
タガ 沖縄ノ 人タチト 同ジヨウニ 勇氣ヲ モッテ /ドウカ(t)/^注 日本共
産党ニ 対シマシテ 大ッピラニ 積極的ニ 支持シテ クダサル コトラ(M₇)
オ願イタシマス(Z)。 (124-36-8)

注) 一次成分が二次成分のあいだに挿入されているばあい//でそれを示した。

(ii) 同じことがらを別の表現でくりかえすもの

(Zのばあい)

▽シカシ(T) ドレモ ソウイウ コトラ 試ミタ 人ハ(S) 全部(R) 医者デ
アッタト(Z), オ医者サンデ アッタト(Z)。 (122-12-7)

(Sのばあい)

▽デ(T) モーテームハ(S) ソノ ゴジウゴ 五十語ハ(s) 意義ノ 広イ コトバ(Z)。
(122-7-1)注

注) 前に、モーテームは五十あるとの説明がある。

▽ツギガ(S) 第二番目ガ(s) 教科单元ト イウベキ モノデ アリマス(Z)。
(123-33-3)

(Jのばあい)

▽タトエバ(T) コトバラ 非常ニ 使ッテ イル トコロデ(J) 内藤先生ナンド
ゴ関係ノ 映画ヤー 舞台芸術ナンカデ(j) 舞台監督ノ コトラ(M₇) 「ブタカ
ン」ト(H₂) イイマス(Z)。 (126-19-6)

(iii) 指示語でくりかえすもの

この同格は非常に多く資料に現われている。おそらく独話のスタイルの特徴
であろう。ふつう、指示語は「コレ」であるが、まれに「コッチノ……」「コ
ンナカニ」「ソレ」が使われている。

(Sのばあい)

▽イマ アノ一 基礎学カッテ コトデ 問題ニ ナッテ イルヨウナ 反復修練ト
イウヨウナノハ(S) コレハ(s) 生キタ 経験ジャ アリマセン(Z)。

(123-32-6)

▽コノ 「マス」ト イウノハ(S) コレハ(s) 実ハ(T) エー 文体ノ チガイ
デ アリマス(Z)。(123-10-4)

▽デスカラ(T) アル 人ニ トッテハ(J) ^{オソナダイガクシヤ}女大_学式ノ 封建的ナ 人間関係ト
イウノハ(S) コレハ(s) 明ルイ モノデス(Z)。(126-46-18)

▽デスカラ(T) チョウド ブラウスト エ オズポントノ 組ミアワセタ モノ
ガ(S) コレガ(s) パジャマデス(Z)。(125-3-14)

▽コウイッタ 式ノ モノハ(S') ソレハ(s') 効果ハ(S) アリマセン(Z)。

(125-8-10)

(Mのばあい)

▽スナワチ(T) ワレワレノ ミナサマガタノ カワイイ 子ドモタチノ 教育ヲ
ホウリナゲテ (略) 闘争ヲ 通ジテ ソノ要求ヲ 貫徹セント シテ イル 生
先ガタノ オロカナ 行為ト イウ モノハ(M₁) コレハ(m₁) タダチニ(R) ヤ
メサセナケレバ ナリマセン(Z)。(124-20-5)

▽スクナクトモ 現代語ヲ 考エル バアイニ(J) 六ツノ 活用形ト イウ コト
ハ(M₂) コレハ(m₂) イチオウ ベツニ(H₂)^注 考エタラ イイ ワケデス(Z)。

(123-5-20)

注) H₂ とすることにはなお疑問がある。

▽コレハ(T) ポリエチレンノ コノ ビンノ ナカニ(M=) イー コンナカニ(m=)
シュッサンアンモニアガ(S) ハイッテル ワケデスネ(Z), シュッサンアンモニ
アガ(s)。(127-28-7)

(Hのばあい)

▽ソウシテ(T) アメリカノ ナント イイマスカ ^{シロウマ}尻馬ニ 乗ッテサエ オレバ
ソウシテ コノ 社会主義ノ 国グニニ タテツイテ オリサエ スレバ ナニカ
ニ^{ホソ}日本ノ 国ガ コウ リッパニ 浮カビアガッテ クルヨウニ(H₂) コンナフウニ
(h₂) 考エテ (4)ル(Z)。(124-30-9)

この類の同格は、表現効果の上では、<独立語——指示語><陳述的成分——指示語>の表現に非常に近い。「結婚、ソレハ……。」「ツケアワセノ 馬鈴薯
デスガ、コレハ……。」しかし、この種のものでは、独立語または陳述的成分はただ提示されているだけであって、それ自身で文中の他の部分に対する関係を積極的に示していない。それに対して、ここで問題にしている同格のものは、第1の部分_が第2の部分の助けを借りずに他の部分に対する関係を示している。

そこにちがいがあある。

次のような、〈「～」ト コウ(コウイウ フウニ、カヨウニ……)〉という表現は、〈コウ〉などがなくても、〈「～」ト〉の部分を H₂ と見ることができるので、H₂ の同格とみなした。なお、1・2・3 b (4)「陳述的成分」および2・2「T[Z]」参照。

▽ダイタイ(T) ソノー ワタクシハ(S) (略) ソノ 単元ニハ 六種類 アルト
(H₂) コウイウ フウニ(h₂) 考エテ イマス(Z)。(123-32-15)

▽教育ノ 目的モ 経験ナンダシ ソレカラ 内容モ 経験ナンダシ 方法モ 経験
ナンダト(H₂) コウ(h₂) 書イテ アリマス(Z)。(123-30-12)

▽オ互イノ 人格ヲ 尊重シアウ コト(D) コレガ 人権ノ /ワタクシハ(S) /
内容ヲ ナス モノダト(H₂) カヨウニ(h₂) 考エテ イマス(Z)。(126-52-7)

次のようなものは、引用句を受ける「ト」がないが、やはり、これに準じるものとみなすことができよう。^{注)}

▽アメリカノ 父親ハ 子ドモノ 友ダチニ ナッテ シマッテ 父親ト シテ 教
エタリ 導イタリ スル 権威ヲ スッカリ 失ッテ シマッタ(H₂) コウ(h₂)
イウノデス(Z)。(126-32-16)

注) こういふばあいには録音では、そこに一定のポーズがあり、[t]の内破音があると思われることが多い。

(iv) まず指示語で示し、次に別のことばで言いかえるもの

▽エー コッチハ(S) アノー 塩化ビニールノ ホウハ(s) ヨク(R) モエナイ
ンデス(Z)。(127-28-19)

▽デハ(T) オサカナヲ(M?) チョウド コノヨウニ(R) エー 焼ケマシテ注)
コゲナイヨウニ(r) オ焼キクダサイマセ(Z)。(127-18-19)

注) 言いあやまりか?

(v) 言いなおしと認められるもの

▽岸政府ハ(S') 日本政府ハ(S') アメリカカラ 核兵器ヲ モラッタ コトハ(S)
ナイト(Z)。(124-21-8)

なお、従属句を二つ以上含む文は、今回の調査では無視したために、従属句の同格の例は、ここにあげていないが、そういう例もありうるだろう。

b 挿入

ある述語構文のなかに、従属句(K)あるいは他の述語構文がいわば「挿入」されているばあいがある。その1つは、その文中のある部分の表わすことがら

についての補足（詳細の説明，理由の説明……）である。「君ハ 彼ノ 画集，最近 G社ガ 出シタンダケド，見タカイ。」「彼ノ 画集ノ，コナイダ G社ガ 出シタ ヤツダガ，値段ハ ズイブン 高イナ。」「タンカーハ エンジンガ ウシロノ 方ニ，アスターンエンジント イウ ヤツダ，トモノ方ニ アル。」「ソノ タンカーハ，ヨッポド 油ヲ タクサン 積ンデ イタンデショウ，吃水ガ 深クテ 港ニ ハイレマセンデシタ。」など。もう1つは，その文の表現（verbal な面）のしかたについての一種の補足。「タンカーハ，エー ナント 申シマショウカ，船全体ガ タンクナンデスネ。」など。

このように挿入された従属句とか述語構文の，その文中の他の部分との関係は，今まで扱ってきた構文の型における，今まで扱ってきた成分（従属句）どうしの関係とは異なる。今まで扱ってきた構文の型における成分（従属句）どうしの間関係というものは，いわば同じレベルでの関係というべきものである。それに対して，挿入された従属句または述語構文と文中の他の部分との関係には一種のレベルのちがいがあるといえることができる。たとえば，従属句はふつう，連用語や状況語の一部とはなりにくい（1・2・3 b（6）「句の扱い」参照）。ところが，挿入された従属句は連用語や状況語のなかにも現われうる。また，従属句はふつう連体修飾語のなかには現われえないような性格をもっている（ただし，全体がここでいう複合構文にあたる形をもつばあいには連体修飾語のなかにおさまっていることもある。1・2・3 b（6）「句の扱い」参照）。それに反して，挿入された従属句は連体修飾語のなかにも自由に現われうる。また，ある述語構文が他の述語構文のなかにも現われることは引用文のばあいをのぞいてはふつうはありえないことである。ところが，この挿入された述語構文は上の従属句と同様連用語や状況語のなかにも，また連体修飾語のなかにも現われることができる。このようなことは，問題の従属句あるいは述語構文が，文中の他の部分とふつうのつながり方とはちがった関係にたっているためであると考えられる（それをここでは「レベルがちがう」と表現した）。

このように，挿入される従属句や述語構文の現われ方は相当自由であって，それはあるきまった型をなすとは認めがたい。挿入された従属句や述語構文を含む構文を「挿入構文」として1つの構文の型をたてることも考えられるわけ

だが、上のようなことからそうした扱いをしなかった。以下例だけをあげておく。

(1) K の挿入

▽ソウイウ 社会的接近(T) コレハ(S) ア モット ホカニモ イロイロ 出テ
キマスガネ オモニ(T) コノ ソウイウヨウナ コトト シテ(J) アラワレテ
ル ワケデス(Z)。 (123-25-17)

▽エ ^{センキニウヒヤクヨウシユウヘチ}千九百四十八年(J) スナワチ 昭和二十三年デ アリマスガ パリーノ
第三回ノ 国連総会デ(J) 全世界ノ 各国ガ(S) アノー 世界人權宣言ト イ
ウ 有名ナ 宣言ヲ(M) オー キメタンデ アリマス(Z)。 (126-51-19)

▽エー マー コノヨウナ エー イロイロナ 製品 イロイロナ 製品ヲ 作りダ
ス 合成樹脂(D) エー カタイノモ ヤワラカイノモ アル ワケデスガ イッ
タイ(T) イツゴロカラ(J) コレハ(S) デキダシタノデショウカネ(Z)。
(127-24-7)

▽デ シマスト(T) ヒトリノ 若イ オカアサマガ(S) アカンボウラ カカエテ
(R) アトデ ^{ゴタイジ}五歳児ト ワカッタノデスケレドモ ^{ウエ}上ノ ^{オトコ}男ノ オ子サンニ マ
ー スカートヲ ヒッパラレナガラ(R) ハイッテ イラッシャイマシタ(Z)。
(125-10-4)

▽エー タトエバデスネ(T) エー ワタクシハ(S) ヨク(R) 保健所ノ 働キト
^{オンナ}女ノ ^{イツシヨウ}一生ト ナニカ 映画ノ 題ニ アリソウデスケレドモ 女ノ 一生ト 保
健所ト オー コウイウヨウナ コトデ(J) オ話ヲ シテル コトガ アルンデ
ス(Z)。 (125-26-3)

▽食器モ(T) コレ 台所ノ ボールデ ゴザイマスケド コンナ モノニ モリ
アワセテ ミマシタ(Z)。 (127-21-4)

▽デ(T) コウイウ アイテニ ムカッテノ ^{カンジヨウヒヨウシユウ}感情表出トカ アルイハ 要求トカ
ト イウヨウナ アー モノガ 話シコトバニ 多く 出テ クルト イウ コト
ハ(S) コレハ(s) アー 話シコトバノ イワバ アー マア 対話性 エー
マア オオザッパナ 名ヅケカタデスケレドモ エー 対話性ト イウ モノニ
ヨルト イウ フウニ(H2) 考エテ エー イインジャ ナカロウカト(Z)。
(122-16-14)

(2) 【Z】の挿入

▽デ(T) マ(T) コノヨウナ マタ コレイガイノ イロイロナ 準備ノ オー
オコナワレ エ 準備ニ ヨッテ オコナワレマシタ 調査ノ 結果ハ(T) エー
文法上ノ イロイロナ 範疇 ^{ヘンヂニョウ}ロシア語ニハ エー 完了態・完了態トカ アル
イハ 格変化ニ ヒジヨウニ ムズカシイ イロイロナ コトガ ゴザイマス ノ
レニ ツイテノ オ 分析ガ(S) アー デテ オリマス(Z)。 (122-4-1)

- ▽カラ(T) 第三ハ コノ一 实用技術 マー 日本^ニデ イウト アノ 職業指導ト
イワレル ヤツデスネ 实用技術ノ 指導(Z)。 (122-10-11)
- ▽コウイウ トキニ アタリマシテ 池田君ガ 多数ノ 投票ヲ 獲得セラレマシテ
新総裁ニ ゴ選任ニ アイナリマシタ コトハ(T) 池田君 ゴ本人^ハ 申スニ
オヨビマスマイ ワレワレ 黨員ト シテモ(J) マタ(T) 国民ト シテモ(j)
マコトニ(T) ケイシュクニ タエマセン(Z)。 (127-35-6)
- ▽シカシ(T) ザンネンナガラ(T) 日本^ニ共産党ガ マダ 国会ニ 二人^ヲシカ イナ
イト イウ 状態ヲ 見テ 甘ク 見テルンデスカ 社会党ハ(S) ナカナカ(T)
イウ コトヲ(M?) キキマセン(Z)。 (124-35-2)
- ▽エー 子ドモハ(S) ダイタイ 冒険心ノ カタマリト イイマジョウカ タイヘ
ン(R) カラダ ゼンタイヲ 動かシテ コ(U) アブナイ コトヲ スルノガ
(S) 好キデス(Z)。 (126-8-1)
- ▽デー(T) タトエバ(T) エー ナンネンコロニ ナリマスカ エー アメリカノ
リンドバーク大佐夫妻ガ カラフト・チシマノ ホウカラ 日本^ヘ 飛行機デ ヤ
ッテ キタ コトガ(S) ゴザイマス(Z)。 (133-9-13)
- ▽スナワチ(T) エー 命令形ニオケル 陳述ト イウ モノハ(S) コレハ(s)
ナント 申シマスカ ビジウニ コノ一 聞キ手メアテノ 陳述デ アリマス
(Z)。 (123-6-19)
- ▽デ(T) ワタシハ(S) ナンテ イイマスカ コノ 心ノ 奥ノ ホウデ(J) エ
ー アー(T) ドンナ カタチデ アツテモ 自分ヲ 信ジテ イラレルト イウ
国民性ト イウ モノガ タイヘン ウラヤマシク(H₂) 感ジマシタ(Z)。
(136-10-5)

c ひっくりかえし

/SZ/で注意すべきものに、「ひっくりかえし」とでもいうべきものがある。これは、「ふつうの構文では主語以外の成分で表現されるものを主語とし、述語以外で表現されるものを述語として表現した」と解釈できるような構文である。このばあい主語は、「……ノハ(ガ)」の形式をとり、述語は、「<体言または体言相当の語句>ダ(デス……)」の形式をとる。

注) 「犯人ハ私デス」という文は、「私ハ犯人デス」のひっくりかえしの表現とみることもできるが、これは、ひっくりかえしの形式的な特徴がはっきりしないので、ここでは問題としなかった。

- ▽コウシタ トキニ 池田サンノ 第二ノ 転機ニ ナッタノハ(S) 例ノ 放言カ
ラ 通産大臣ヲ 棒ニ フッタ 事件デス(Z)。 (126-25-10) <~シタ 事件
ガ ~ノ 転機ニ ナッタ>
- ▽ソレヲ マズ ハッキリサセテ クレタノハ(S) P・T・Aノ 全国大会デシタ

- (Z)。 (126-30-7) <～ノ 全国大会ガ ソレヲ ハッキリサセテ クレタ>
 ▽台所デ イチバン ジメジメシガチナノハ(S) 流シノ シタノ トコロデ ゴザ
 イマスネ(Z)。 (125-19-7) <～ノ トコロガ ～ジメジメシガチダ>
 ▽デ(T) イチバン 目立ツノハ(S) ハジメテノ 赤ン坊ガ 生マレテカラ コノ
 赤ン坊ニ 対シテ ヤキモチヲ イダクツテ イウ コトデス(Z)。 (125-11-15)
 <～ッテ イウ コトガ イチバン 目立ツ>
 ▽ソレカラ(T) コチラニ ゴザイマスノガ(S) インゲン ソレカラ イカデ ゴ
 ザイマス(Z)。 (127-14-9) <インゲン ソレカラ イカガ コチラニ アル>
 ▽エー ツギニ ゴ紹介イタシマスノハ(S) ピエール ギロー エー 「フランス
 象徴詩人ノ 用語ニ ツイテノ 研究」デ アリマス(Z)。 (122-6-1) <～ノ
 研究ヲ ツギニ ゴ紹介イタシマス>
 ▽デ(T) ケンカラ シタ トキニ イツモ キマッテ シカラレル ホウハ アー
 オニイサンデ アレ 弟デ アレ 相手ニ シットラー イダクノハ(S) 当然カ
 モ 知レマセン(Z)。 (125-13-5) <～シカラレル ホウハ 当然 相手ニ シ
 ットラ イダク>
 ▽トクニ 困リマスノハ(S) オトウサン オカアサンガ 相当 秀才ナ バアイデ
 スネ(Z)。 (126-36-22) <～ガ 秀才ナ バアイニ トクニ 困リマス>
 ▽ソウシマシテ(T) エー 精神薄弱児ト イウ モノニ 対スル 教育ト イウ
 コトノ 考エ方ガ 出ルヨウニ ナッタノハ(S) 千八百年ゴロ、 ^{イッセン} 一千八百年ゴ
 ロ イワユル ^{ジュウキニウ} 十九世紀ゴロカラデ アル(Z)。 (122-12-5) <～ 十九世紀
 ゴロカラ ～ノ 考エ方ガ 出ルヨウニ ナッタ>
 ▽ソウシテデスネ(T) ソレガ 少ナクトモ ヤハリ 同ジ 人間ノ 一種デ、 一種
 ト (イッナイ イクナイ) 同ジ 一種、 一種デスネー アノ ^{ヒトイロ} 一色、 同ジ 人間ノ ウチ
 デ アルト イウヨウナ 考エ方ガ 多少 メバエタノハ(S) コノ キリスト教
 ガ 勢力ヲ 持ッテ キテカラデ アル(ト)(Z)。 (122-11-5) <～ガ 勢力ヲ
 持ッテ キテカラ ～ト イウヨウナ 考エ方ガ メバエタ>

次の例は、主語が指示語になっているが、述語の形式からみて、ひっくりかえしの変形と見られる。

- ▽デ(T) コレハ(S) 小サイ 子ハ 自分デ イイ 悪イノ 判断ガ ヨク ワカ
 リマセンシ、 大キク ナレバ 考エル 力ガ 出テ クルカラナンデスネ(Z)。
 (125-8-3)

次の例は、ひっくりかえしの表現とみられるが、述語が打ち消しの形になっているために、これに相当する(ひっくりかえしを受けていない)もとの表現がふつう使われないものである。

- ▽シカシ(T) ミナサン(D) ジツハ(T) ソビエトノ 人工衛星ヲ 見マシテー

ハナハダ ココロオモシロク ナイト 思ッテ イルノハ(S) ナニモ(T) アメリカダケデハ ゴザイマセン(Z)。 (124-29-9)

d 派生

動詞述語の骨ぐみで、その動詞が、受身、使役、可能の形や～テアル、～テモラウの形になると、それに応じて、S、Mの現われ方が変わるばあいがある。そうしてできた(と推定される)構文を、ここでは、もとの(と推定される)構文に対して、仮に派生的な骨ぐみと呼んできた。^{注1)}(これ以外に派生的な構文^{注2)}というものがないという意味ではない。)この種の派生的な構文については、各構文の箇所、断片的にふれたところがあるが、ここで、それを派生として一括して、その特徴を簡単にまとめておく。

注1) “派生的”という用語を、ここでは、2つの構文のあいだの構造上の関係を表わすのに使う。ここでいう派生的な構文に属する個々の文が、かならず、それに対応するもとの構文に属する文から発生したという時間的な前後関係がみられる、ということではない。各構文の箇所、たとえば「……のZが、受身または～テアルの形になってできた、派生的な骨ぐみ……」というような表現を用いたが、これは、便宜的な表現である。

注2) この種の派生を他のものから区別すれば、voice上の派生といえることができるだろう。

以下、それぞれの派生にみられるS、Mの転換の仕方のおもなものをあげる。なおここでは、転換の仕方におけるちがいによって、いわゆる受身を2類・3種に分けて考えた((A) まともな受身 ①直接的な受身 ②間接的な受身 (B) ③めいわくの受身)。次の(i)～(iii)はM₇→Sになる類であり、(vi)以下はそうならない類である。

(i) 直接的な受身による派生^{注1)} (例) SM₇Z (太郎ガ 次郎ヲ ナグル)
M₇→S →SZ (次郎ガ ナグラレル)
S →0, M₂, M_{カ7} →SM₂Z (次郎ガ 太郎ニ ナグラレル)
SM₂M₇Z (太郎ガ 郵便局ニ 金ヲ アズケル)
→SM₂Z (金ガ 郵便局ニ アズケラレル)
→SM_{カ7}M₂Z (金ガ 太郎カラ 郵便局ニ アズケラレル)

注1) この受身の特徴は、直接的な目的語のM₇がSに転換することである。

注2) ここに0を認めたのは、この種の受身による構文では、もとのSにあたるこ

とがら、表現されないことが多いからであるが、この0を認めることには問題がある。M_±あるいはM_カの省略と認めるべきかもしれない。次の～テアルのばあいの S → 0 とは質的にちがう。

- (ii) ～テアルの形による派生 (例) SM₇Z (太郎ガ 旗ヲ 立テル)
- M₇ → S → S Z (旗ガ 立テテ アル)
- S → 0 SM_±M₇Z (太郎ガ 旗ニ 落書キヲ スル)
- M_± S Z (旗ニ 落書キガ シテ アル)
- SM_±H₂Z (～ガ 憲法ニ ～ト 書ク)
- M_±H₂Z (憲法ニ ～ト 書イテ アル)
- (iii) 可能による派生 (例) S Z (子ドモガ 歩ク)
- 注1) M₇ → S, M₇ → S Z (子ドモガ 歩ケル) ……………(a)
- 注2) S → S, S', 0, M_± → M_± Z (子ドモニ 歩ケル モノカ!)…(b)
- SM₇Z (子ドモハ マチヲ 歩ク)
- SM₇Z (子ドモガ マチヲ 歩ケル)…(c)
- SM₇Z (子ドモガ コーヒーヲ 飲ム)
- S' S Z (子ドモハ コーヒーガ 飲メル)…(d)
- M_± S Z (子ドモニモ コーヒーガ 飲メル) ……………(e)
- SM₇Z (人ガ 大根ノ 葉ヲ タベル)
- S Z (大根ノ 葉ハ タベラレル) ……………(f)
- SM_±Z (太郎ガ アメリカニ 行ク)
- SM_±Z (太郎ハ アメリカニ 行ケル) ……………(g)
- M_±M_±Z (太郎ニハ アメリカニ 行ケル) ……………(h)

注1) もとの構文には必ずしもなくてよい。

注2) 自動詞構文に現われる M₇のばあい。→(c)。他動詞構文の M₇のばあいに、M₇がそのまま残されることがあるようだ。(「子ドモガ コーヒーヲ 飲メル」「～ハ、～ト、カタヲ ナラベラレルヨウニ ナッタ」など)。

注3) 他に新しいSが現われるばあい。→(d)

注4) もとの構文の M₇ (対象) の性質の表現として可能動詞が用いられたばあい、もとの構文の S (主体) は消えることがある。→(f)

注5) このばあいは、陳述的な面(表現意図・陳述の変容)にある種の制約がある。→(b)(h)

- (iv) 間接的な受身による派生^{注)} (例) SM_±Z (太郎ハ 花子ニ ホレル)
- M_±, M_カ, M_ト → S → SM_±Z (花子ハ 太郎ニ ホレラレル)
- S → M_カ, M_± SM_±M₇Z (太郎ハ 次郎ニ 英語ヲ 教メル)

→ SM_{カラ}M_ヲZ (次郎ハ 太郎カラ 英語ヲ 教エラレル)

SM_{カラ}M_ヲZ (スリガ 太郎カラ サイフヲ ウ バウ)

→ SM_{カラ}M_ヲZ (太郎ハ スリカラ サイフ ヲ ウバワレタ)

SM_トZ (太郎ハ 花子ト 絶交スル)

→ SM_ニZ (花子ハ 太郎ニ 絶交サレル)

注) この受身の特徴は、間接的な目的語 M_ニ, M_{カラ}, M_ト, などがSに転換することである。もとの構文に M_ヲがあるばあいには、M_ヲはそのまま残る(補注参照)。

(v) めいわくの受身による派生^{注)}(例)

SZ (子ドモガ 死ス)

→ S(新しい主語)

→ SM_ニZ (親ガ 子ドモニ 死ナレル)

S→M_ニ

SM_ヲZ (太郎ガ 次郎ヲ ナグル)

→ SM_ニM_ヲZ (花子ガ 太郎ニ 次郎ヲ ナ グラレル)

SM_ニM_ヲZ (太郎ガ 郵便局ニ 金ヲ アズケル)

→ SM_ニM_ニM_ヲZ (次郎ガ 太郎ニ 郵便局 ニ 金ヲ アズケラレル)

注) この受身の特徴は、その動作によってめいわくをこうむる人(これは、もとの構文のMによって表現されていない)がSとして表わされることである。

(vi) 使役による派生

(例) SZ (子ドモガ 歩ク)

S→M_ニ, M_ヲ^{注)}

→ SM_ヲZ (母親ガ 子ドモヲ 歩カセル) ...
.....(a)

→ S(新しい主語)

→ SM_ニZ (母親ガ 子ドモニ 歩カセル) ...
.....(b)

SM_ヲZ (自動) (子ドモガ 歩道ヲ 歩ク)

→ SM_ニM_ヲZ (母親ガ 子ドモニ 歩道ヲ 歩カセル)(c)

SM_ヲZ (他動) (太郎ガ 次郎ヲ シカル)

→ SM_ニM_ヲZ (花子ガ 太郎ニ 次郎ヲ シカ ラセル)(d)

SM_ニZ (太郎ガ イスニ ヨリカカル)

→ SM_ヲM_ニZ (花子ガ 太郎ヲ イスニ ヨ リカカラセル)(e)

→ SM_ニM_ニZ (花子ガ 太郎ニ イスニ ヨ リカカラセル)(f)

注) もとの構文のZが自動詞であって、M_ヲのないばあいに限って現われる。→

(a), (e)

(vii) ~テモラウによる派生

(例) SZ (子ドモガ 歩ク)

S → M_a

→ SM_aZ (母親ガ 子ドモニ 歩イテ モラ
ウ)

→ S (新しい主語)

SM_aZ (太郎ガ 次郎ヲ シカル)

→ SM_aM_aZ (花子ガ 太郎ニ 次郎ヲ シ
カッテ モラウ)

なお、動詞述語文の構文の動詞が、～テクレル、～テヤルになると、あらたに M_aが加わることがある。ただし、この M_aは、もとの構文(～スル)の形でも現われうるので、^{注)}上にあげた派生と区別される。

～テヤル (例) SM_aZ (ボクガ 本ヲ 買ウ)
→ SM_aM_aZ (ボクガ 妹ニ 本ヲ 買ッテ ヤル)

～テクレル (例) SM_aZ (オジサンガ 本ヲ 買ウ)
→ SM_aM_aZ (オジサンガ 妹ニ 本ヲ 買ッテ クレル)

注) 「ボクハ 妹ニ 本ヲ 買ウ」「オジサンハ 妹ニ 本ヲ 買ウ」などといえる。

補注) なお、受身には、次のようなものがある。

次郎ハ 太郎ニ 頭ヲ ナグラレタ。

花子ハ 親ニ 結婚ヲ 反対サレタ。

これらは

{ 太郎ガ (次郎ノ) 頭ヲ ナグッタ。
太郎ガ 次郎ヲ ナグッタ。
{ 親ハ (花子ノ) 結婚ニ 反対シタ。
親ハ 花子ニ 反対シタ。

という2組のもとの構文を前提にしているといえそうである。間接的な受身の一種とみなすべきか。

この項であげた派生にちかいものとして、さらに、～タイ、～テホシイ、～テモライタイなどがある。

e はしより

述語構文は、いわゆる省略のあるものを除いて、多くのばあい、場面・文脈などを無視し、陳述的な面(陳述的変容、付加など)を無視しても、ことがらの面が残って、ことがらとしての意味をなすものである。ところが、食堂などで発する「ボクハ ウナギダ。」「ボクハ キツネダ。」というような種類の文では、場面・文脈をはなれては、ことがらとしての意味はあいまいである。あるばあいには無意味であり、他のばあいには別の意味になる(I am an eel.など)この種の構文上の特徴を、かりに「はしより」と呼ぶ。^{注)}

注) はしよりと名づけたのは、この表現が「ボクハ ウナギヲ タベタイ。」「ボクハ

ウナギヲ 注文スル。」「ボクハ ウナギニ キメタ。」などの末尾の用言的な表現をはしょった表現として起こるばあいが多からである。ただし、ここではこうした構文の発生については問題としない。ただ、できあがった構文の特徴をこう名づけただけである。

はしよりの構文は、形式上は、名詞述語文（あるいは名詞相当の述語の文）であるが、ふつうの名詞述語文には現われないような目的語や連用語が、この種の構文では現われうる。この点で、構造の上からもふつうの構文と区別される。^{注)}（「ボクハ ウナギヲ ヒトツ。」「ボクハ サクサクト オ茶漬ケダ。」など。ただし、これらを目的語とか連用語とかと呼んでいいかどうかはなお検討を要する。）

注) はしよりの構文とふつうの構文との限界は、いまのところあいまいである。「山ハ 雪ダ。」「カレハ アスカラ 学校ダ。」「カレハ アスカラ 講義ダ。」「アスタハ 遠足ダ。」「ワレワレハ イヨイヨ アスタ 出発ダ。」などをすべてはしよりにしてよいかどうか。

資料には、次のようなはしよりの構文があった。便宜上、いくつかに分けて、例をあげる。

(～ガ(ハ) <数詞>(ダ))

▽ソレニ ネギノ ミジン切りガ 大サジ 二杯ホド。 (127-12-13)

▽マズ 第一番ニ 人ノ 親トシテ 日本ノ 国民ト イタシマシテ ドウシテモ コレヲ ダマッテ ミテハ イラレナイト イウ 問題ガ ヒトツ。

(124-20-4)

▽講義資料ハ ^{ヨンジュウキヤク} 四十九ページデスネ。 (123-24-2)

▽エー パセリガ コサジニ 一杯グライデ ゴザイマスネ。 (127-17-15)

(～ニ, ～ヲ <数詞>)

▽ソレデハ ココニ オダシラ 大サジ ^{ヨンハイ} 四杯。 (127-13-22)

▽コレヲ 一杯ト 半デ ゴザイマス。 (127-13-22)

(～ガ ～デ モッテ <数詞>)

▽ソレカラ ハムガ ^{ナナジュウ} 四枚デ モッテ 七十グラムグライデ ゴザイマシヨウ。

(127-17-20)

(～ハ <数詞>カラ <数詞>マデ)

▽デ 第二表ノハ ^{ヒヤク} レインジ百カラ ^{ゴジュウ} 五十マデ。 (122-4-14)

(～ハ ～ダ)

▽キョウハ 洋風ノ オ猷立デ ゴザイマス。 (127-15-3)^{注)}

注) 「キョウハ」を主語とみなしたばあい。もし、状況語とみなせば、ふつうの主

語省略文となる。

(〜ガ(ハ) 〜バアイダ)

▽デ コノ ミツツガ エー ヒトツー コノ 種類ニ ナッテ 売ッテル アルイ
ハ 作ル バアイデ ゴザイマスネ。(125-4-2)

(〜ハ 注)
〜タメダ)

▽エー コレハ 妊娠ノ トキニ イロイロノ 腎臓ガ 悪ク ナッタリ スルノヲ
早ク 見ツケテ コレヲ 防ゴウト イウ タメデス。(125-27-15)

(〜モ 注)
〜トオリダ)

▽エ コレモ ミナサンガ アー ゴ承知ノ トオリデス。(127-25-8)

注) これらは、はっきりかえしの構文の変形ともみられる。(164ページ参照)

次のような複雑なものもあった。これらは、付加構文の一種とみるべきか。

▽ソレカラ タマネギガ 少々, ニンジンガ 少シト パセリノ 枝。

(127-15-13)

▽コノ オロシドレッシングハ サラダオイル 大サジ 一杯, 酢ヲ 大サジ 二杯
塩ヲ 小サジ 一杯, 砂糖 大サジ 一杯デ ゴザイマス。(125-22-14)

▽コノ サラダドレッシングハ サラダオイル 大サジ 一杯, 酢ヲ 大サジ 二杯
塩 小サジ 一杯, 砂糖 大サジ 二杯ニ オロシ大根ヲ カップ 一杯デ ゴザ
イマス。(125-22-16)

f 複合述語的な構文

1・2・2 で述べたように、構文調査では、いわゆる付属的な文節は、文の独立の成分と認めず、文の成分を構成する部分と認めて、作業を進めた。そして、文の述語として、こうした文節を含むものを、複合述語と呼んだ(71ページ参照)。

問題の部分が付属的な文節であるかどうかの認定は、中間的な段階のものがあって、困難がともなう。

この項では、作業上付属的な文節(複合述語の形式的な部分)としないで、独立の述語と扱ったもののうち、付属的な文節に準ずる機能を果たしていると思われるものについて、とりあげる。

たとえば、

▽ココニ イチバン 大キナ 問題ガ アルト(H₂) 思イマス(Z)。(124-34-13)
という文は、/H₂Z/構文に属することになるが、こうした表現では、「思イマス」は、意味上の主体が話し手(質問のばあいは相手)に限られ、話し手(相手)の断定をひかえる表現として使われている。この文は、/SH₂Z/構文の主

語の省略されたものとみなすこともできるが、むしろ、それとは別の（それから派生した）述語の陳述的な面（表現意図的な面など）の分化に応じた新しい型と認めるべきではないか、と考えた。このばあい、H₂の内部の二次成分としての述語「アル(ト)」とこの「思イマス」とが複合したものを複合述語と認め、H₂を分解して、次のような構造と認めることも考えられるだろう。

▽ココニ(M₂) イチバン 大キナ 問題ガ(S) アルト 思イマス(Z)。

当面は、ここまですすめずに、過渡的なものとみとめて、この種の構文を複合述語に準ずる部分を含む構文という意味で、「複合述語的な構文」と呼んでおくことにする。（以下の引用例で、複合述語に準ずる部分を——で示す。）

複合述語的な構文にもいろいろなタイプがあり、研究が進めば、しかるべき位置づけができるはずであるが、ここでは、いちおう問題の部分が形式上どんな成分からなりたっているかという基準で分けて、列挙するにとどめる。

(1) ... Z

<～ト イウ コトデス>

これは、伝聞や意見のまとめなどの表現に用いられるもので、「～トイウコトダ」というZに対応するSを必要としないという点に構文上の特徴がある。

▽トニカク(T) ワタクシガ 短イ アメリカ旅行カラ 得タ 印象デハ(T) ヤハリ 人間ガ 築イテ イル モノト イウ カギリ アメリカノ 家庭生活モ 日本ノ 家庭生活モ ソノ ナカニ 持ッテ イル 問題ハ ソナニ カケハナレタ モノデハ ナイト イウ コトデス(Z)。 (126-33-1)

▽ヨイ シツケハ セッカチデハ デキナイト イウ コトナンデス(Z)。

(125-7-18)

<～ト イウ 評判デス>

評判の内容の表現に用いられるもので、対応するSを必要としない。

▽ソレガ マコトニ 自然デ 暖カイト イウ 評判デス(Z)。 (126-24-2)

<～スル コトデス>

これは、「～スル コトガ 必要ダ、～スル コトヲ 忘レテハ ナラナイ」などをはしよった構文ともみられるが、臨時的なはしよりではなくなっているとみて、ここあけておく。やはり、「～スルコトダ」に対応するSを必要としない。

▽ソレカラ (T) エー オナカラ 暖メル タメニ イロンナ モノヲ 巻キツケル
ノデ ナク、^{ニゾウニ}二重ニ ^{ヌノド}布地ヲ 重ネルヨウナ 形ニ スル コトデ ゴザイマス
(Z)。 (125-2-16)

<～予定デス>

「～」で示されることがらが予定であることを表現するもので、「予定ダ」に対応するSを必要としない。(複合述語と扱った「～はずダ」などに近い。)

▽マー 今晚 オソク 韓国ノ 第 エー ニノ 実力者ト イワレル ^{キン}金情報部長
ガ アー 東京ニ 見エル 予定デ アリマス (Z)。 (139-17-11)

<～スル モノデス>

これは、「者」や「物」の意味から転じて、態度表明の文や道理を示す文(「～スル トキニハ ～スル モノダ」)などに用いられる。～の部分「モノ」の連体修飾語とみなすことができないであろうという点が構文上の特徴である。

▽シカシナガラ (T) コレヲ 祝賀会ダケニ 終ワラセナイデ コノ クギリ目ヲ
境ニ イタシマシテ エー コノ 研究所ガデスネ モット 拡大サレ 強化サレ
テ イク コトヲ /ワタシハ (S) / 心カラ ア 切望スル モノデ ゴザイマ
ス (Z)。 (124-26-16)

▽ソウ スル コトニ ヨッテ 社会ニ 本当ニ 苦シイ カタガタガ イササカデ
モ モレナクトマデ イワナクトモ ^{ハチブ}八分ドオリハ /ワタクシハ (S) / 救イエ
ル コトヲ 確信イタス モノデ ゴザイマス (Z)。 (124-26-16)

▽エー ソレカラ (T) コノ ホカニ レモントカ ダイダイ エー 夏ミカント
イウヨウナ シ…エ ソレノ ツユガ 少シ ホシイ モノデ ゴザイマス (Z)。
(126-16-1)

<～シタ モノデス>

これは、たとえば過去のくりかえされたことがらの表現に用いられるもので、やはり「モノ」が形式化している点が特徴である。

○アノ 当時ハ ヨク 酒ヲ ノンダ モノダ。

次の例も、この類であろう。

▽デ ソレジャ 少シ 不公平ジャ ナイカト イウ コトガ 徹夜ノ 議論ノ 大
キナ 理由ニモ ナッタ モノデ ゴザイマス (Z)。 (139-26-10)

(2)...H₁Z

<～スル コトニ ナリマス>

これは、たとえば、事態の推移・論理の帰結・意見のまとめ・決定事項などの表現に用いられるもので、「ナル」に対応するSを必要としない。(しいてSをいれれば、「事態ハ」「結論ハ」などであろう。それがあれば、この種の複合述語的な構文ではなくなる。)

▽ダカラ(T) トクニ アノ 人ハ 悪イ 人ダト イウノニ コウ ^{バフテン}×点ヲ ツケル コトニ(H₁) ナッテ オル ワケデス(Z)。(134-5-3)

▽ソシテ(T) エー コノ 結論ヲ マー 近ク ウ ^{ヨサカ}小坂外務大臣カラ エカフエノ 事務局ニ 回答スル コトニ(H₁) ナッタデ アリマス(Z)。(139-2-1)

補注) H₁ の二次成分としてのSが、～ハ、～モなどの形になると、ナルの主語としての一次成分と認められる可能性がある。そうだとすれば、それは、/S H₁ Z/構文と認められる。ただし、この判定はむづかしい。

○今度ノ 旅行ニハ 彼ラガ 参加スル コトニ(H₁) ナッタ(Z)。

○彼ラハ(S) 今度ノ 旅行ニ 参加スル コトニ(H₁) ナッタ(Z)。

<～ト イウ コトニ ナリマス>

これは、「～スル コトニ ナリマス」に準じる。

▽イヨイヨ 使オウト 思ッタ トキニハ モット モット イマ 買ッタ トキヨリ 古ク ナッチマッテ モウ ヤクニ 立タナイト イウ コトニ(H₁) ナルンデス(Z)。(134-13-14)

▽ソレデ(T) 天皇ハ ソノ 憲法ニ 定メラレタ ゴク 儀礼的ナ 国事行為ヲ スルダケデ アッテ 政治的ナ 権限ハ ナンニモ ナイト イウ コトニ(H₁) ナッテ オリマス(Z)。(134-3-9)

<～スル コトニ シマス(シマシタ・シマショウ)>

これは、「～スル」が動作を表わし、あとの「シマス」などが、その動作をすることの決定を表わすものであって、決定の時点以後にその動作が行なわれるものであることを示す。動作の主体と決定の主体とは一致しているようである。資料に現われたものでは、すべて、イタス系の謙讓語が使われていて、主体は話し手である。^{注)}

注)「弟ハ ヤメル コトニ イタシマシタ」「彼ハ 行ク コトニ シタ」など主体が第3者である表現もありうる。

▽ソレデハ(T) ツヅイテ インゲンノ ゴマジョウユニアエラ 申シアゲル コト

ニ(H₁) イタシマス(Z)。(127-13-10)

▽以上ノヨウナ 目的ノ タメニ(J) マズ 調査ノ 対象ト ナル 児童ヲ 一定
ニ シマシテ デ 同一ノ 学級ニ ツイテ エ 小学校 ニュ…ノ 入学カラ
六年生マデ エー 六カ年 継続調査ヲ スル コトニ(H₁) イタシマシタ(Z)。

(122-20-19)

▽ソレデハ(T) 最初ニ イー コロモ焼キノ ホウノ 材料カラ オ目ニ カケル
コトニ(H₁) イタシマシヨウ(Z)。(127-11-14)

なお、/SH₁Z//SM...H₁Z/などの構文は、一般に H₁Z が複合述語的な
ものとみることもできるかもしれない。(1-0-1)/SH₁Z/構文参照。

(3) ...H₂Z

Zが「思イマス・考エマス」のばあいは、「思ウ・考エル」の意味が多少形式化
して全体で断定をひかえる（やわらげる）表現になっている。「思ウ・考エル」
の主体は話し手（質問のばあいは相手）に限られる。（ただし、実質的な
「思ウ・考エル」の主語省略文との区別はあいまいであって、以下の用例で
も、あるいはここにいれるべきものでないものもあるかと思われる。）

<～ト 思イマス>

▽デ(T) タシカニ イ ワタクシタチノ 生活ノ ナカニハ 交通政策, 生活ト
イウ モノガ ア アルト(H₂) 思ウンデス(Z)。(124-2-31)

▽ゴ承知ノヨウニ(T) 脳医学ノ 研究ハ 医学ノ 進歩シタ ワガクニニ オキマ
シテモ マダ 他ノ 部門ヨリハ 発達シテ イルトハ イエナイト(H₂) 思イマ
ス(Z)。(124-17-8)

▽エー コレナドハ マー 挿入ト イワレルベキ モノダロウト(H₂) 思イマス
(Z)。(122-15-41)

▽モシモ アノ ゴ賛成イタダケレバ ヤリタイト(H₂) 思イマス(Z)。(122-9-2)

▽ヤハリ コレハ ヒトツノ 一般的ナ 話シコトバノ オー 文型 ヒトツノ 文
型ト 見ルベキジャ ナカロウカト(H₂) 思イマス(Z)。(122-15-22)

▽(略) マタ 一面 新シイ 職場ト イウ セノノ 生活ニ 心配トカ 不安トカ
イウ モノヲ オ持ちノ コトト(H₂) オー 思ウノデ アリマス(Z)。

(127-22-8)

<～ヨウニ 思イマス>

▽デ コノ アー 「ヨ」トカ アー 「ネ」トカ アルイハ 「ノ」トカト, コウ
イウ 助詞ハ エー 相手ニ 向カッテノ 感情表出ト イッタヨウナ 働キヤー
持ッテ イルヨウニ(H₂) 思イマス(Z)。(122-16-11)

<～ト 考エテ オリマス>

▽ソレハ アノ マタ ゴ意見ヲ トリマトメマシテ 一日 機会ヲ モウケテ コ
ノ 時間デ ゴ紹介シテ イキタイト(H₂) 考エテ オリマス(Z)。(127-31-20)

<～ヨウニ 考エマス>

▽シタガッテ(T) ソノ 方法モデスネ 確立シタ アー マスコミノ 言語ノ 研
究法ニハ カクカク カヨウナ モノガ アルト ソノ 概論ヲ 申シアゲラレル
ヨウナ ソウイウ 確立シタ 方法ッテ イウ モノハ マダ アー ナイヨウニ
(H₂) イー 考エルンデス(Z)。(123-35-8)

次にZが「見ラレマス・思ワレマス・イエマス」のばあい。これは、S...
H₂Z構文のZが受身(直接的な)あるいは可能の形になってSが消えてできた
派生的な構文...H₂Zである。上の「思イマス」や「考エマス」が主語(たと
えば「ワタシハ」)を入れることができるのに対し、この類ではそれができない
点で区別がある。ただし、表現効果としては、お互いにちかく、断定をひかえ
る(やわらげる)表現や伝聞の表現など、modalなものの表現にちかくなっ
ている。

<～ト 見ラレマス>

▽デ(T) コレハ ^{注)} マー イワユル ^{母音} ノ ソノリティーノ 違イト イウ モノニ
モ 対応スルヨウナ モノダト(H₂) 見ラレマス(Z)。(122-18-13)

▽コノ 助詞, 助動詞ッテ イウ モノハ ^{注)} ^{日本語} デ 教エマスッテ イウト
五十パーセントニハ ナラナイノデハ ナイカト(H₂) ワタクシモノ 考エデハ
(T) エー 見ラレマス(Z)。(122-6-16)

▽デ(T) コトシノ アメリカノ オー 景気ハ ^{注)} マズ ^上 スデハ ナイカト(H₂)
見ラレテ オル(Z)。(135-15-11)

注) これらを、H₂内部の二次成分の主語とみないで、「見ラレマス」などの主
語とみなすこともできるかもしれない。そうすれば、この構文は、/SH₂Z/構
文となる。

<～ト 思ワレマス>

▽ソウ イタシマスト イウト(T) 大体 イ 三ツノ 数ニ 分類デキルト(H₂)
思ワレマス(Z)。(123-10-21)

▽エー イワバ アラユル ^{陳述} ヲ 同時ニ 含ンデ イルヨウナ ソンナ ^{カタチ}
シテ マア 終止形ト イウ モノハ 考エタ ホウガ アー イインジャ ナイ
カト(H₂) 思ワレマス(Z)。(123-11-7)

<～ト イエマス>

▽ツマリ(T) 子ドモガ 自分ヲ 意識シ コウイウ コトラ ショウト イウ 意
志ヲ モツヨウニ ナルト モウ 手ハ クダサズニ 話シアイトカ 教エルト
イウ コトニ 親ノ シツケノ シカタガ 変ワッテ イクト(H₂) イエルヨウデ
ス(Z)。(126-28-13)

▽デスカラ(T) 足ノ 疲レヲ ナオスニハ 血液ノ 循環ヲ ヨク スルト イウ
コトガ イチバン 効果的ト(H₂) イエルデショウ(Z)。(127-32-16)

なお、次のようなものも「イウ」の主語は必要としない。「～ト イウ コト
トデス」と同類の表現であろう。

<～ト イウ ワケデス>

▽エー ソンテ(T) エー 熱イ トコロデ オ皿ニ オトリン ナッテ 次ノ ソ
ースヲ カケルト(H₂) イウ ワケデ アリマス(Z)。(127-17-8)

次のものは、一種の慣用的な表現であるために、「ワカル」の主語がなくな
っているものとみられる。

▽コレニ ツキマシテハ 数年来 ^ニ日本ノ 国民ノ ミナサンガタガ アラユル
階層ノ 人タチガ ドレクライ 努力シタカ(H₂) ワカリマセン(Z)。
(124-31-16)

(4) ...S Z

<～気が スル><～感が スル・～感じガ スル>

これは話し手(質問のばあいは相手)の気もちの表現として使われ、「ワタ
クシハ(S')」あるいは「ワタクシニハ(M₂)」などが必要なくなっている。

▽トクニ エー 都会ノ オ子サンハ ナンカ 最近 非常ニ コウ 冒険心ガ
ナイト イイマスカデスネー ナンカ コウ 野生味ノ 不足シタヨウナ オ子サ
ンガ 非常ニ 多イヨウナ 気が(S) スルンデス(Z)。(126-12-4)

▽デ(T) 話シコトバト イウ モノハ ソレト 別ニ アルト イッタヨウナ 感
ガ(S) スル ワケデ アリマス(Z)。(122-14-14)

<～ ホウガ イイ>

▽ソノ 具体的ナ 経験デ ヤラセタ ホウガ(S) イイ(Z)。(123-31-17)

▽ヤハリ(T) 天皇ハ(S') ソウイウ 国事ニ エー カンシ 関係サレナイ ホウ
ガ(S) イイ(Z)。(134-9-5)

<～スル コトガ デキル>

可能の表現として使われる。

▽「ユカナイ」ノ 「ユカ」ハ(S) サラニ(J) 「ユカナクテ」「ユカナカッタ」
(D) コンナ フウニ 活用スル コトガ(S) デキマス(Z)。 (123-12-13)

<～シタ コトガ アル>

経験の表現として使われる。

▽ワタクシモ(S) ホカノ アレデ 読ンダ コトガ(S) ゴザイマス(Z)。
(122-9-8)

なお、/S'SZ//S'MSZ/の構文では、大部分のSZが複合述語的になっているとみることもできそうである。

(南不二男・鈴木重幸)

IV. イントネーション

1. はじめに

本章では、独話の共通資料のイントネーションを分析調査して、その実態を明らかにするとともに、「話しことばの文型」のために、イントネーションが積極的に果たす役割りはどのようなものか、また、消極的にどのような参与をしているものかを、述べようとする。このような分析調査のためには、もとより、イントネーションに関する基本的な考えかたを定めなければならないから、「話しことばの文型(1)」にひきつづき、基本的な諸問題についての考究をおこない、それにともなって前報告書の考えかたを改めたところがある。調査対象は、独話共通資料に限定されるが、基本的な問題については、臨時の用例をひくことがある。

2. イントネーションのつかまえかた

2.1 アクセントとイントネーション

音調を、アクセントとイントネーションとにわけると、アクセントは、2段観でとらえられた高低配置の形と型とし、イントネーションは、アクセントを帯びた形式が、話し手の判断や情意の表現のために受けるところの、上がり下がりの変容の形と型とする。たとえば、

▽アクセント	{	形の例……	$\underline{\text{ハナ}}\underline{\text{ガ}}\underline{\text{サイ}}\underline{\text{タ}}$	(ハナガ サイタ)
		その型……	$\underline{\text{ハナ}}\underline{\text{ガ}}\underline{\text{サイ}}\underline{\text{タ}}$	(ハナガ サイタ)
▽イントネーション	{	形の例……	$\underline{\text{ハナ}}\underline{\text{ガ}}\underline{\text{サイ}}\underline{\text{タ}}$	(ハナガ サイタ)
		その型……	$\underline{\text{ハナ}}\underline{\text{ガ}}\underline{\text{サイ}}\underline{\text{タ}}$	(ハナガ サイタ)

したがって、アクセントとイントネーションの2つの型を表記するには、たとえば、「ハナガ サイタ」のようにする。イントネーションの分類とその表記法については、以下に記す。

2.2 準アクセントとイントネーション

イントネーションの当面の調査対象は、東京アクセントと認められる資料に限定したから、部分的に、他の方言アクセントがあらわれたときは対象外とした。したがって、アクセントの認定は、だいたい客観的にできるけれども、いわゆる準アクセントの問題もあるから、アクセントとイントネーションとの弁別については、あらかじめ、はっきりさせておかなければならない。ここでは、つぎのように考えた。すなわち、語（単語）以上の形式のアクセントについて、つぎの4種のアクセントを認める。

- (1) 語連続のアクセント ……(例) アラシガ, グルト_下, (「嵐が」, 「来ると」)
- (2) 語結合のアクセント ……(例) アラシガ, グルト, (「嵐が」, 「来ると」)
- (3) 文節連続のアクセント ……(例) アラシガ_上グルト, (「嵐が来ると」)
- (4) 文節結合のアクセント ……(例) アラシガ_上グルト, (「嵐が来ると」)

これらのアクセントの形が文において用いられるならば、そのまま文の音調として通用すると認められる。しかし、これらのすべてが、文の音調として、平静かつ無表情に、特別の意味を加えることなく使われるとは限らない。このうちの(1)のアクセントの形が、文の音調として実現したとすれば、それは特別な強調の意味の表現にあずかると認められる。つまり、「アラシガ」や「グルト_下」などは、アクセント論での見かたによっては、アクセントの2つの形の結びついたものと言われるけれども、それはアクセント論としての体系の問題に属することであって、もしそれが文の音調として実現すれば、そのまま文のなかで、平静で無表情な音調として使われることはないのではないかと考える。文のなかで、平静で無表情な音調として使われるときは、「アラシガ……」「グルト……」などのように、あとのほうの高い部分は、ごく低くなってしまって、2段観の低いほうに見られる音調となるのが普通である。つまり、語結合のアクセントの形をとるのが普通である。もし、「アラシガ_上……」とか「グルト_上……」などのように、助詞がはっきり高く発音されれば、それは、文の音調としては、何らかの強調卓立の気持の表現にあずかるものと思われる。それは、後に述べる「卓立表現のイントネーション」になってしまうと考える。「ガ」や「ト」などはともかくとして、「ラレル」「ヨウダ」「バカリ」その他、アクセント論上の語の認定とからみ、細部には、なお問題がある。一部、後に述べる。)

2・3 イントネーションの分類と表記法

本書に扱うイントネーションは、つぎの2種に限定する。(イントネーションに関する例文の表記だけは、すべてカタカナの表音式とし、「 」に入れた。)

(1) 意図表現のイントネーション

「アラシガ クルヨ \searrow 」, 「アラシガクルヨ \searrow 」

「ハナガ サイタネ \nearrow 」, 「ハナガサイタネ \nearrow 」

このイントネーションは、 \searrow および \nearrow であらわす。これは、文末述語の末尾の音節について、話し手の判断叙述や質問などの意図表現に参与するものである。それぞれのイントネーションの形そのものは、ピッチレコーダーによってもそのままではあらわれてこないものだが、それを、聞きとりで解釈し抽象化して折線であらわし、

「アラシガ クルヨ \searrow 」 「アラシガクルヨ \searrow 」 「アラシガクルヨ \searrow 」

「ハナガ サイタ \nearrow 」 「ハナガサイタ \nearrow 」, 「ハナガサイタ \nearrow 」

のように表記する。ただし、つねに折線で表記することは、印刷の便宜上、避けなければならないから、簡略表記として、2つの型 \searrow および \nearrow に限ることを原則とする。このような解釈によれば、質問のぼあいの上がる音調だけが、他と対立するから、他は上がらない音調と見られる。前者を「上昇調」と称し、後者を、これと対立的な意味で「下降調」と称し、それぞれ \nearrow \searrow であらわした。「下降調」の概念は、「話しことばの文型(1)」での「平調」の概念とほぼ対応する。この名称の問題については、後に触れる。

(2) 卓立表現のイントネーション

「アラシガ クルヨ \searrow 」, 「ハナガ サイタネ \searrow 」の「ガ」の高い音調、

「アラシガ クルヨ \searrow 」, 「ハナガ サイタネ \searrow 」の「ヨ」「ネ」の高い音調等、

これらは、いずれも、何らかの“強調”的な気持を話し手が表現するためのイントネーションであって、文の音調に変化を与える。意図表現イントネーションが知的内容の表現のためのイントネーションであるのに対して、これは強調的情意の表現のためのイントネーションである。多くは、とくに高められる音調であるが、まれには、とくに低められる音調もある。これを、それぞれ「高調」「低調」と称し、それぞれ、 \wedge \vee であらわす。

以上をまとめて一覧すればつぎのとおりである。

	形 の 例	形の抽象表記例	型の表記例	(意 味)
ア ク セ ン ト	アラシガ クルヨ アラシガクルヨ アラシガ クルカ ハナガ サイタネ ハナガサイタネ	アラシガ クルヨ アラシガクルヨ アラシガ クルカ ハナガ サイタネ ハナガサイタネ	<この表記は 当面不要>	(嵐が来るよ) (嵐が来るよ) (嵐が来るか) (花が咲いたね) (花が咲いたね)
ネ意 図 シ表 ヨ現 ンイ 付 ン 加ト	アラシガ クルヨ アラシガクルヨ アラシガ クルカ ハナガ サイタネ ハナガ サイタネ	アラシガ クルヨ アラシガクルヨ アラシガ クルカ ハナガ サイタネ ハナガ サイタネ	アラシガ クルヨ アラシガクルヨ アラシガ クルカ ハナガ サイタネ ハナガ サイタネ	(嵐が来るよ。) (嵐が来るよ。) (嵐が来るか?) (花が咲いたね。) (花が咲いたね?)
ネ卓 立 シ表 ヨ現 ンイ 付 ン 加ト	アラシガ クルヨ アラシガ クルヨ アラシガクルヨ アラシガ クルカ ハナガ サイタネ ハナガ サイタネ	アラシガ クルヨ アラシガ クルヨ アラシガクルヨ アラシガ クルカ ハナガ サイタネ ハナガ サイタネ	アラシガ クルヨ アラシガ クルヨ アラシガクルヨ アラシガ クルカ ハナガ サイタネ ハナガ サイタネ	(嵐が来るよ。) (嵐が来るよ。) (嵐が来るよ。) (嵐が来るか?) (花が咲いたね。) (花が咲いたね?)

以上、本書に扱うイントネーションの概要を述べたが、これらのイントネーションに類する文の音調は、まだほかにもあり、考えかたによっては、それも文の音調として、広義イントネーションに含まれるのではないかとされる。たとえば、

「エソセンノ リョーミンワ カンコノコエオモツテ コレオムカエ...」
(「沿線の良民は 歓呼の声を以って これを迎え……」)

「チソオモヘニ ワガゴソコソ クニオハジムルコト コーエンニ...」
(「朕思うに わが皇祖皇宗 国を驛むること宏遠に……」)

「ハナ ハト マメ マズ...」 (「花 鳩 豆 榊……」)

などの朗読調あるいはそれに準ずるふしまわしである。また、たとえば、

「キヨ¹ワ² ハナサカジ³イサン⁴ア オハナジ⁵オ シテアゲマスカラ……」

「ウタクジ¹ ダンジ²チ ユ³ヨ⁴ワ⁵チ プ⁶イ⁷オ ユ⁸ツ⁹ス¹⁰ト¹¹ガ デ¹²キ¹³ナイ」

など、文節ごとに、またはいくつかの文節のまとまりごとに、末尾の音節を高く言う調子もある。これは、1つずつでは卓立表現のイントネーションであるが、全体として1つのふしまわしになっているという印象を与える。また、子どものダダコネ調と言われる、

「ヤ¹ア²イ ヤ³ア⁴イ ボク⁵ノウチ⁶ー カエル⁷ア⁸イ」

などは、文節または文節群ひとまとまりの末尾から2音節目が高められるようである。また、「いやだ」という意味の「イヤーン」ということばは、特定のアクセントをきめにくく、いろいろな音調で、

「イヤーン」、 「イヤーン」、 「イヤーン」 「イヤーン」、 「イヤーン」
などと言う。こういう感動詞類は、どれがアクセントだとも、卓立表現のイントネーションだとも言いがたい。

これら、さまざまなふしまわしは、当面の独話資料にはほとんど出て来なかったけれども、イントネーションの範囲に入れるかどうか問題であり、俗に言うイントネーションには、こういうふしまわしも含まれているようである。本書では、これらは、当面扱うところのイントネーションの範囲には入れないでおくことにした。

理由の1つは、これらの多くが、アクセントにとらわれず、その場面での話し手の情緒の表現のためにとられるふしまわしであって、極端なばあいには、浪曲の歌う調子のようなものにもなりうる。さらには、歌曲のメロディーにも、通じる性質のものであろう。これらは種々雑多な音調として、個別的・情緒的であって、ことばの内容よりは、より多く感情の直接的表現にあずかるものと考えられる。理由の第2は、イントネーションは「文」の音調であるが、こういうふしまわしは、発話全体、いわば「文章」の音調で、その発話全体をおおうものと見られる。つまり、より臨時的・個人的なもので、イントネーションよりはメロディーに近いものとするのである。

以上の理由で、これらメロディーに近いものを当面のイントネーションとしては扱わないことにしたが、そのなかにも、卓立表現イントネーションの特定

の型の連続から成るもののように、アクセントの型をみな保存していて、部分ごととして見れば、イントネーションと見られるものもあり、子どものダダコネ調のように、まったくアクセントの型をくずして、イントネーションから遠いものまで、いろいろあるようである。これらは、結果として、対象資料にはほとんど見られなかったことではあるが、この面の研究は、音声研究の今後の一課題としなければならない。^{注)}

注) 「イカガデショーカ」または「イカガデショーカ」などと言うのが普通のところを、「イカガデショーカ」という平板な調子で言うことがある。特別の緊張の感じをとまなうようである。これが、アクセントの変化によるものなら別だが、「イカガ」というアクセントが普通であると見られる現状では、アクセントの型をくずすところの特殊な音調で、当面のイントネーションから除外される。

なお、こういうアクセントの型をくずすものと違って、単に、いわゆるアクセントの自然下降にさからって、ことさらに平板な末尾の音調を保つばあいがある。資料には、つぎのようなものがある。

▽「エー ソレカラ コノ ホカニ レモントカ ダイダイ エー ナツミカン
ト ユーヨーナ シ… エ ソレノ ツユガ スコシ ホシイモノデゴザイマス
 (127-16-1)

言い切りの強さを避けようとするものか、一種の緊張のあらわれか、明瞭な解釈がつかない。こういう平板な末尾の音調を「平調」と称してはどうかと考える。

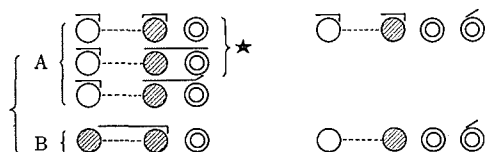
(後述186ページ参照)ただし、これは非昇調のなかの1つの型として意図表現に参与するものとは考えられない。意図表現上は下降調と同じであり、何らかの情緒の表現にあずかると見るべきものようである。したがって、本書のイントネーションの対象外とする。

2.4 「話しことばの文型(1)」とのちがひ

イントネーションの研究は、音声・音韻の研究のなかで、比較的未開拓の分野に属し、とくに、その基礎的研究については、他の部門、たとえばアクセントの研究に比べて、論究が少ない。前報告書「話しことばの文型(1)」(252ページ)では、つぎのような分類と表記法がとってある。

- (I) 平調 「アクセントに従う形式」のイントネーション
- (II) 昇調1 質問(反問も) : ヨ・ナ・ネの上昇傾向
- (III) 昇調2 強勢(プロミネンス)つき終末音節全体の卓立の上昇
- (IV) 降調 きわだった下降 (ヨ・カ等に多い)

(V) @型 (●…終助詞, ○…附加的長音)



(注) @型では ★印の2種だけが共通資料にあらわれた。感動詞・応答詞類は別に扱う。

前書では以上のような分類・名称・表記法をとっているが、本書では、前述したような分類・名称・表記法をとることとした。細部については、前書をも対比参照されたいが、その大体を対比一覧すれば、つぎのとおりである。

話しことばの文型(1)	話しことばの文型-(2)		
	アクセントにしたがうイントネーション	意図表現イントネーション	卓立表現イントネーション
平調	(アクセント表記と一致)	下降調 ↘	
昇調 1 /		上昇調 ↗	(一部高調 ^{注)} ^
昇調 2 ^			高調 ^
降調 ↘			低調 v
@型 ↗ ^			

注) 純然たる終助詞「ヨ」「ワ」「ゾ」などは、質問の「上昇調」となることはなく、すべて卓立の「高調」となることがあるにすぎない。

おもな相違点はつぎのとおり。

(1) 「話しことばの文型(1)」では、イントネーションの形を重視して、これを第1次分類原理とし、「話しことばの文型(2)」では、そのイントネーションが何を表現するかを重視して、第1次分類原理としている。しかし、前書でも、何を表現するイントネーションかを考慮していないわけではなく、また、もともと感動詞・応答詞類は別に扱うなど、表現内容との関連に配慮し

ている。また、本書でも、もちろん、そのイントネーションがどういう形をとっているかを考慮しており、第2次分類では、その形によって、「上昇・下降」「高・低」の対立を認めている。

(2) 前書の「@型」を本書では立てない。格別「@型」を立てなくても、卓立表現のイントネーションとして一括することができないではないと考えられたからである。

(例) 前書の「オドロイタネー」は本書では「オドロイタ[△]ネー」
前書の「アリマスネー」は本書では「アリマス[△]ネー」

(3) 前書では、昇調に1・2の区別を立て、符号として/・^を用いているが、その区別は、昇調2 (^)が、プロミネンス(強勢)をとまなうということ以外、音調の点では、あまり顕著なものではない。もちろん、音調のうえでの区別として、昇調1は「上昇傾向」と見られ、これに対して昇調2は「音節全体の卓立の上昇」と見られており、ことさらにその区別を実現してみれば、モデルとしての区別ができないではない。しかし、実際の多くのばあいには、音調の点では区別がむずかしく、プロミネンスそのものは、音調の区別のきめ手ではないから、本書では、昇調に2種の区別を立てないこととした。たとえば、前書での昇調1の「ネ・ナ・ヨ」と昇調2の「[△]ネ・[△]ナ・[△]ヨ」の区別は、聞きとりでは、そのちがいがはっきりしないから、本書ではその区別をしない。卓立の表現ならば、みな高調として「[△]ネ・[△]ナ・[△]ヨ」と解釈し、意図の表現ならば、みな質問の上昇調として「ネ^・ナ^」と解釈する。「ヨ」は「~ヨ^」という質問の上昇調を持ちえないから、「ヨ」の上がる調子は、みな卓立の高調で、「ヨ[△]」である。

(4) 名称とその概念内容のちがいは、前述するところ、一覧表とで示したが、一言、つけ加えておくと、本書の「下降調」は、前書の「平調」と概念内容がほぼ対応するから、「平調」でもよいが、本書では、「上昇調」と対立する“非上昇調”全体という意味で、「下降調」と称し、\ マークをつけた。理論上は、「上昇調」「平調」「下降調」の3種の区別があると、もっとも都合がよさそうだが、「上昇調」と“非上昇調”との対立以上に、「平調」と「下降調」を弁別することは困難のようである。(ただ、前述した

ように、ことさらに文末を平らに発音することがある。そのイントネーションは本書の対象として限定した2種のイントネーション以外のものではあるけれども、そのような文末の平らな音調のために「平調」の術語をとっておきたい。)そこで“非上昇調”を代表し、「上昇調」との対立的な意味で「下降調」と称し、マークも / と対立的な意味で \ をつけたのである。いわゆるアクセントの自然下降も、イントネーションの現象として、この下降調に含まれると解釈した。

(5) 前書では、文末のイントネーションだけに限定して調査研究が進められたが、本書では、卓立表現イントネーションの一部のように、文末でない部分のイントネーションも扱った。それは、イントネーションそのもののつかまえかたのちがいがから来ている。しかし一方、「構文」の調査研究の範囲のちがいがからも来ている。前書では、いわゆる単純文だけを扱っているが、本書では、そのほかに複合文をも扱っているから、少なくとも句末のイントネーションが問題にされるというように、本書全体が対象とした範囲が拡大されているのである。

なお、前書と本書との考えかたのおもな共通点を付記しておく。

(1) どちらも、アクセントの核をくずさない範囲での音調の変容をイントネーションとしてとらえている。

(2) イントネーションとの関係の深いアクセントについては、2段観をとり、そのアクセントの形のほかに、上がる音調（前書では昇調1・2、本書では上昇調と高調）と下がる音調（前書では降調、本書では下降調と低調）との2つとしてイントネーションをとらえている。

(3) 発話全体の、絶対的音調（ピッチ）の変化としてのイントネーションを扱わず、文の部分ごとに、相対的音調の変容としてのイントネーションをとらえている。

3. イントネーションの調査

3・1 表記法

イントネーションの「形」は、原則として記さない。その「型」の区別だけを記す。したがって、アクセントに従うイントネーションは、原則として表記

しない。

意図表現イントネーションは、\、↗ でその型の区別を文の直後に記す。
卓立表現イントネーションは、∧、∨ でその型の区別を、それぞれ、その音節の上または下に記す。

なお、明らかに東京以外の方言アクセントと見られる部分は、前述したように、はじめからイントネーション関係の資料から除外したが、東京方言アクセントにも、ゆれているものもあり、また、ほかに臨時的な発話の音調などがあることもある。そのばあいには、イントネーションの型を認定しにくいことがあり、認定しえたととしても、他の東京方言アクセントのばあいのイントネーションと同列に論ずることはできない。また、東京方言アクセントのばあいでも、細部についてはイントネーションの型の認定に問題があるばあいがある。これらのばあいには、イントネーションの形をも記し、型の認定その他、それぞれに注記を加え、考慮の結果をまとめて後述する。(198 ページ参照)

3・2 表記例

▽「デ ソノ オー チョーサ[∧] ハンイワ、エー ハンイ[∧] センハッピークサン
ジューネン[∧]カラ アー センキュー[∧]ヒャクゴジューネン[∧]マデ エー ヒャクニジュ
ーネンカン[∧]ニ ナリマス\ ソノ ヒャクニジューネンカン[∧]ラ オー ミツノ
ジキニ ワケマシ[∧]テ センハッピークサンジューネン[∧]カラ センキュー[∧]ヒャクネン
マデ、センキュー[∧]ヒャクイチネン[∧]カラ センキュー[∧]ヒャクジューハチネンマデ、ソ
レカラ ソレイゴ、ソレイゴ ゲンザイ[∧]マデト カイテ ゴザイマスガ、ソレワ
センキュー[∧]ヒャクゴジューネンノ コトラシイ\」(122-2-17)

▽「デ イマ モーシアゲマシタヨ[∧]ーニ アカチャン[∧]エ ムケラレル ヤキモチ[∧]
イロンナ カタチデ アラワレ[∧]テ マイリマスガ エ シゴサイイカノ バアイデ
モ ヤキモチ[∧] アカチャン[∧]ダケガ ゲンインニ ナルト[∧] カギラナイノデス\、
オニーサン[∧]ガ イツモ ベツアツカイ[∧]デ ダイジニ サレテルヨ[∧]ーナ カタイデ[∧]
オニーサンニ アタエラレル トッケンラ ウラヤン[∧]デ オトートガ ヤキモチ[∧]ラ
ヤクノ[∧]モ ゴザイマシヨ[∧]ー\、デ ケンカラ シタ トキ[∧]ニ イツモ キマッテ
シカラレル ホ[∧]ー アー オニーサン[∧]デ ア[∧]レ オトート[∧]デ ア[∧]レ (略)」

(125-13-2)

▽「デ ソレガ ダンダン ダンダン フェテ キマシテ エ ゲンザイデワ イッ
タイ ゼンコクニ ドノクライ ホケンジヨノ カズガ アルダローカ\、マー
ヒトツノ クイズ[∧]ニ ナリマスケレド[∧]モ エー カズカラ イイマスト ユ[∧]ート
ド[∧]ーデショ[∧]ーカ[∧], ミナサン、エー センイジョ[∧]ー アルトオモイマスカ[∧], アル

イワ アー ゴビャクイカデショ一カ、 ジツワ ソノ チューカンデ エー ヤ
 タハッピャク, オヨソ ハッピャク アル ワケデス、 ゼンコクニ ホケンジョ
 ガオヨソ ハッピャク アルンデス、 (125-24-19)

▽「ソレカラ エビデゴザイマス、 エビラ ミジンギリニ イタシマンタノガ オ
 ーサジ ニハイホド、 ソレニ ネギ、 ミジンギリガ オーサジニハイホド、
 ソレカラ オンオラ オー コサジニ ニブンノイチホド イレマス、 ソンテ
 ヤハリ ヨク カキマゼテ イタダキマス、 スコシ カタイ コロモノヨーナ
 カッコーデ ゴザイマスガ コレラ オトーフニ マブシツケマシテ フライバン
 テ アブラヤキ スル ワケデ ゴザイマス、 タイヘン カンタンナ モノデ
 ゴザイマス、 (127-12-13)

3.3 調査結果

3.3.1 イントネーションの上昇調・高調をとまなう音節数

リール ナンバー		上昇調の 意図イント	高調の 卓立イント	発言全体の 時間	定本の行数
122	林 大	0	333	17分40秒	122行
	平井昌夫	2	122	13. 00	88
	大石初太郎	0	99	30. 00	277
123	阪倉篤義	0	146	30. 00	271
	永野賢	0	99	33. 45	229
	興水実	3	180	30. 00	213
	林四郎	0	216	30. 00	252
124	時枝誠記	0	48	13. 56	96
	山本有三	0	28	13. 07	77
	土岐善麿	0	9	4. 48	27
	時枝誠記	0	1	3. 53	33
	内藤濯	0	3	2. 36	23
	桑原武夫	0	3	2. 41	20
	久松潜一	0	16	3. 31	28
	石黒修	0	6	2. 15	19
	林知己夫	0	7	0. 58	9
	千葉勉	0	22	3. 39	28
	颯田琴次	0	0	1. 32	16
	岸本力男	0	47	24. 30	163
きくなみかつみ	0	88	19. 00	145	
	近藤百合子	2	95	10. 45	82
	秋山ちえ子	1	57	6. 40	53

125	白井 常	1	230	8. 30	69
	秋山ちえ子	3	54	7. 20	55
	和田実枝子	0	80	15. 00	95
	佐藤 つねのぶ	0	313	15. 00	136
126	秋山ちえ子	1	44	7. 06	52
	秋田よし子	0	69	7. 11	62
	早川元三	0	124	14. 58	139
	林 麟	0	120	9. 12	67
	小田善一	0	177	20. 21	158
	加藤昇	0	208	13. 49	108
	品川不二郎	0	52	7. 12	63
	鈴木武夫	0	181	13. 11	100
	高橋のぶ子	0	58	3. 48	30
	宮城音弥	0	57	6. 39	56
	磯村英一	0	101	7. 48	62
戸田正直	0	45	8. 48	67	
127	坂田二郎	0	49	14. 11	114
	村田為五郎	0	17	14. 15	89
	間野百合子	1	190	10. 41	79
	西山はる	0	51	11. 47	77
	吉沢久子	0	5	3. 17	27
	水谷統夫	0	25	6. 32	37
	崎川範行	14	86	18. 32	126
	杉捷夫	0	13	4. 13	40
	高田敏江	0	3	4. 16	29
	池田勇人	0	1	3. 48	8
	一松定吉	0	13		16
	合計	28	3991	9時15分41秒	4232行

注) 「上昇調」の数には、引用などの文中の上昇調を含めない。

3・3・2 意図表現イントネーションのあらわれかた

頻出する下降調を除き、上昇調のみ全例を示す。

▽「ヨロシイデスカ」 (122-8-14)

▽「エー イチバント エー サンバント ゴバン エー ロクバンデスネ」
(123-29-7)

▽「エ コノ ジュンパンワ ドレガ イイデスカナ」 (123-29-8)

▽「エー コノ ソレカラ ミナサン オモチニ ナルヨーニ ナッテマスネ、コレヲ。」 (123-29-12)

- ▽「チョード スノジガ サンジューニ ナル コトン ナリマスネア」
(125-3-1)
- ▽「ソレカラ アノ シュルイト ユー モノニ ツイテ カンガエテ ミマショー
カア」 (125-3-8)
- ▽「シブンデ ジブンノ ケンイラ ナゲダシテ イルヨーナ モノジャ ナイデシ
ョーカア」 (125-8-20)
- ▽「デ コノ ヤキモチワ ソーリョーノ オコサマニ トクニ アラワレルノデワ
ナイデショーカア」 (125-11-16)
- ▽「コンシューモ ズイブン イロイロノ デキゴトガ アリマシタネア」
(125-14-3)
- ▽「デ コーユー キョーイクノ コトガ セイジノ アラソイノ ドーグニ ツカ
ワレナイヨーニト ユー コトガ ワタクシタチノ イチバン ノゾム トコロデ
スネア」 (125-15-12)
- ▽「デ ナグリコミナシテ ユーノワ モー イマノ ジダイデワ オヨソ ギャッ
コーシタ ゼンセイキテキナ ホーホーデスネア」 (125-16-11)
- ▽「(略) コンナ コトラ シツモン スルノモ ヨク ナイッテ ユー コトガ
ワカリマスネア」 (126-3-12)
- ▽「ゴキゲン イカガデ イラッシュアイマスカア」 (127-11-3)
- ▽「ワタクシタチノ マワリニワ タクサンノ ゴーセイジュシデ デキタ セイヒ
ンガ アリマスネア, オウチノ ダイドコロニモ ソレカラ ミナサンノ ツクエ
ノウエニモ。」 (127-24-1)
- ▽「(略) サー コレワ ナンデショー。ラジオノ ハコデスネア」 (127-24-4)
- ▽「テレビノ キャビネットデスネア」 (127-24-4)
- ▽「デンワキデスネア」 (127-24-4)
- ▽「(略) イッター イツゴロカラ コレワ デキダシタノデショーカネア」
(127-24-8)
- ▽「エー コンニチワ アー ゴーセイジュシノ ジダイダト オー イワレテ オ
リマスネア」 (127-24-15)
- ▽「トコロデ ミナサン, (略) マ ソーユー コト ゴゾンジデショーカア」
(127-24-22)
- ▽「(略) セルロイドデ ミナサン ゴゾンデスネア」 (127-25-13)
- ▽「オワカリニ ナリマスカア」 (127-25-17)
- ▽「ショーノー コノゴロワ ミナサン アマリ ゴゾンジナイカモ シレマセン
ケレド オー ボーチャーザイニ スル ショーノーデスネア」 (127-25-20)
- ▽「(略) カタエ イレテ カタメル コトガ デキマスネア」 (127-26-23)
- ▽「(略) キンギョナンカラ コー イレタ フクロッテ ユーノガ アルデショー
ア」 (127-28-9)

▽「(略) ソレカラ フロシキ, コノ オー テーブルカケダッテ ソーデスネ↗」
(127-28-16)

▽「(略) カタークテ ジョーブデ キズガ ツカナイ イイノガ アリマスネ↗」
(127-29-6)

これら、文末の上昇調の意図表現イントネーションのほか、文中にあらわれるものがある。それはみな、いわゆる引用句・挿入句の句末にあらわれる。われわれの対象は、1つの文全体であるから、引用句・挿入句自体をとりあげていないが、ここには、参考までに、例示する。(はじめの1例の↗ ↘は挿入句を示す。)

▽「(略) ヨーソデ ナクテ ゼンタイテキナ モノノ ホーガ /サキニ イー
ガクシュー サレルト ユーンデスカ↗/ サキニ イー ハッタツシテ クルト
ユーヨーナ コトガ アリマシテ (略)」 (123-26-2)

▽「(略) オシマイニワ モー 『コレダケ ユッテモ オカーサンノ ユー コト
ガ ワカンナインデスカ↗』ナンテ コー テヲ フリアゲテ シマウッテ ユー
ヨーナ (略)」 (125-7-5)

▽「(略) エー『キミ ホケンジョー ドコ↗』ッテ キキマスト, (略)」 (125-24-7)

▽「(略) ドーデショーカー↗ ミナサン, エー センイジヨー アルト オモイマス
カ↗ アルイワ アー ゴヒャク イカデショーカー」 (125-24-15)

▽「(略) イチイチ オカーサンガ 『サッ ソノ ホンニ イマ ナニガ カイテ
アリマシタ↗ ドー オモイマシタ↗』 コンナ コトラ (略)」 (126-3-12)

▽「(略)『オカーサン オカネ チョーダイ.ソ ダレダレチャンダッテ カッテル
ンダモノ イーデショーカー↗ ワタシモ ホシイノ』ト ユー ワケデ (略)」
(126-5-1)

▽「(略)『(略) アブナイカラ ヤメマショーカー↗』ト マー トメラレテモ ミン
ナガ シテ イル コトガ (略)」 (126-5-2)

▽「(略)『(略) スッカリ カイグイノ クセガ ツイテ シマッテ コマッテマス
ガ ドーシタラ イーデショーカー↗』ト マー ナゲカレタリ (略)」
(125-5-6)

▽「(略) ヨク オボエテ イテ『アノ トキ オカーサンニ シカラレタネ↗』ト
クリカエシ アトデ エー シバラク イッテ イタソーデス」 (126-29-9)

▽「トコロデ 『アメリカノ カテイノ オ スベテガ コノヨーナ タダシイ, アル
イミデワ ゲンカクナ シツケヲ シテ イルカ↗』ト モーシマスト ナカ
ナカ ソーワ イッテ イナイト イエマス」 (126-30-4)

注)「～カ↗」は、質問(判定または説明を求める要求表現)の型である。これに対し、「～カ↘」は、疑念をあらわす不確実判断の型である。疑問文末助詞は、それ自体で質問をあらわすものではなく、疑念の段階にとどまる。「イクカ イカナイ

カラ シラセナサイ」「ドースレバイイカガ ワカラナイ」など、体言相当句を構成して、そのあとに格助詞をとることができ、「～カ」が上昇調をとるときには、そういうことはできない事実も、両者のちがいがから来ていると考える。

3・3・3 卓立表現イントネーションのあらわれかた

a カナタイプ定本1行についていくつの割合であらわれているか(注1)~5)

リール ナンバー		比 (卓立イント /行数)	▲▲	124	千 葉	0.79(22/ 28)
			▲▲	124	林 知	0.78(7/ 9)
125	(白 井)	3.33(230/ 69)	▲▲	127	水 谷	0.68(25/ 37)
122	林 大	2.73(333/122)		127	(西 山)	0.66(51/ 77)
127	(間 野)	2.43(192/ 79)		126	戸 田	0.61(41/ 67)
125	佐 藤	2.26(308/136)		124	きく なみ	0.60(87/145)
△ 126	(高 橋)	1.93(58/ 30)	▲▲	124	久 松	0.57(16/ 28)
126	加 藤	1.93(208/108)		123	阪 倉	0.54(146/271)
126	鈴 木	1.81(181/100)		124	時 枝	0.50(48/ 96)
126	林 謙	1.79(120/ 67)		123	永 野	0.43(99/229)
126	磯 村	1.63(101/ 62)		127	坂 田	0.43(49/114)
122	平 井	1.35(119/ 88)	▲	124	山 本	0.36(28/ 77)
126	小 田	1.20(177/158)	▲▲	124	土 岐	0.33(9/ 27)
125	(近 藤)	1.16(95/ 82)	△	127	杉	0.33(13/ 40)
126	(秋 田)	1.11(69/ 62)	▲▲	124	石 黒	0.32(6/ 19)
125	(秋 山)	1.06(56/ 53)		122	大 石	0.31(88/277)
126	宮 城	1.02(57/ 56)		124	岸 本	0.28(46/163)
125	(秋 山)	0.98(54/ 55)	▲	127	村 田	0.19(17/ 89)
126	早 川	0.88(124/139)	▲▲	127	(吉 沢)	0.19(5/ 27)
123	林 四	0.86(216/252)	▲▲	124	桑 原	0.15(3/ 20)
126	(秋 山)	0.85(44/ 52)	▲▲	124	内 藤	0.13(3/ 23)
123	興 水	0.85(180/213)	▲▲	127	池 田	0.13(1/ 8)
125	(和 田)	0.84(80/ 95)	▲▲	127	(高 田)	0.10(3/ 29)
126	品 川	0.83(52/ 63)	▲▲	124	時 枝	0.03(1/ 33)
127	崎 川	0.83(86/126)	▲▲	124	颯 田	0.00(0/ 16)
▲▲ 127	一 松	0.81(13/ 16)				

注1) カナタイプ定本1行には、だいたい11文節~15文節、44音節~61音節、記されている。

注2) ▲は卓立表現イントネーションの全数30以下、△は行数40以下。▲と△とはほとんど一致する。つまり、しゃべる量の少ないときは、卓立表現イントネーションも少ないようだ。(非常な例外：高橋のぶ子、例外：一松定吉・千葉 勉・林知己夫)

注3) シャべった量が多いのに、卓立のあらわれかたの少ない人がある。阪倉篤義・永野 賢・大石初太郎・岸本力男の諸氏。

注4) ()をつけたものは女性。女性12人のうち9人までが、全体の半分以上の順位にある。注2の非常な例外(高橋のぶ子)、注3に属する女性はいないこと、と考え合わせ、当面の共通資料の範囲では、卓立のあらわれかたに性差があるのではなからうか。直観的に言えば、女性がかかなり冷静無表情にシャべっていると思われるときでも、文字化してイントネーションマークをつけてみると、案外、卓立のイントネーションの多いことがある。

注5) 発言時間、男 7時間39分20秒、女 1時間36分21秒。

b 詞に多いか、辞に多いか(注1)~3)

リールナンバー		辞	詞	計
122	林 大	267	66	333
	平 井	100	22	122
	大 石	84	15	99
123	阪 倉	109	37	146
	永 野	91	8	99
	與 水	165	15	180
	林 四	171	45	216
124	時 枝	39	9	48
	山 本	< 27	1	28>
	土 岐	< 6	3	9>
	時 枝	< 1	0	1>
	内 藤	< 2	1	3>
	桑 原	< 3	0	3>
	久 松	< 14	2	16>
	石 黒	< 5	1	6>
	林 知	< 7	0	7>
	千 葉	< 19	3	22>
	颯 田	< 0	0	0>
125	岸 本	32	15	47
	きく なみ	44	44	88
	近 藤	70	25	95
	秋 山	48	9	57
	白 井	216	14	230
	白 山	50	4	54
	和 田	78	2	80

	佐 藤	224	89	313
126	秋 山	41	3	44
	秋 田	48	21	69
	早 川	83	41	124
	林 藤	108	12	120
	小 田	157	20	177
	加 藤	182	26	208
	品 川	33	19	52
	鈴 木	148	33	181
	高 橋	45	13	58
	宮 城	49	8	57
127	磯 村	70	31	101
	戸 田	34	11	45
	坂 田	34	15	49
	村 田	< 10	7	17>
	間 野	157	33	190
	西 山	35	16	51
	吉 沢	< 3	2	5>
	水 谷	< 18	7	25>
	崎 川	85	1	86
	杉	< 8	5	13>
	高 田	< 2	1	3>
	池 田	< 0	1	1>
	一 松	< 12	1	13>
合 計	3234	757	3991	

注1) 副用語は詞に入れた。

注2) 上の表のうち、< >してあるものは、比率を次表に示さない。

注3) 詞単独の文節と、詞+辞の文節と、両者がどれぐらいの比率で独話にあらわれるか、については、未調査。

注4) 以下に、卓立表現イントネーションが41以上のものについての表を示す。

予想されることだが、結果として、辞のほうに多いと言えよう。辞の機能との関係が深いと思われる。

リール ナンバー	発 言 者	辞 (%)	詞 (%)				
127	崎 川	98.9	1.1	124	時 枝	81.3	18.7
125	和 田	97.5	2.5	122	林大	80.2	19.8
125	白 井	93.9	6.1	123	林四	79.2	20.8
126	秋 山	93.2	6.8	126	高 橋	77.6	22.4
125	秋 山	92.6	7.4	126	高 田	75.6	24.4
123	永 野	91.9	8.1	123	阪 倉	74.7	25.3
123	興 水	91.7	8.3	125	阪 藤	73.7	26.3
126	林 藤	90.0	10.0	125	近 佐	71.6	28.4
126	小 田	88.7	11.3	126	秋 藤	69.6	30.4
126	加 藤	87.5	12.5	127	坂 田	69.4	30.6
126	宮 城	85.9	14.1	126	磯 村	69.3	30.7
122	大 石	84.8	15.2	127	西 山	68.6	31.4
125	秋 山	84.2	15.8	124	岸 本	68.1	31.9
127	間 野	82.6	17.4	126	早 川	67.0	33.0
122	平 井	81.9	18.1	126	品 川	63.5	36.5
126	鈴 木	81.8	18.2	124	品 川	50.0	50.0
					き くなみ		
					平 均	80.8	19.2

c 文節のどういう部分にあらわれやすいか

卓立表現イントネーションは、文節の末尾音節または末尾から2つめの音節につけられることが多く、他は比較的少ない。前記の32名の発言の平均をとると、文節の末尾または末尾から2つめの音節につけられるものが、卓立表現イントネーション全体の約91%に及ぶ。細部の問題を残すが、参考までに大略の%を示す。順序は、その%の高い順、逆に言えば、文節末尾から3つめ以上の音節につけられる卓立表現イントネーションの%の低い順である。(A欄は文節の末尾音節および末尾から2つめの音節につけられている卓立表現イントネーションの%，(B)欄は文節の末尾音節につけられているものの%，C欄は

文節の末尾から3つめ以上の音節につけられている卓立表現イントネーションの%)

リール ナンバー	発言者	A (%)	(B) (%)	C (%)					
123	阪倉	100	(68)	0	127	間野	94	(84)	6
126	林藤	100	(83)	0	123	永野	92	(58)	8
126	佐藤	99	(85)	1	126	鈴木	92	(67)	8
127	崎川	99	(98)	1	126	秋山(3)	91	(63)	9
122	大石	98	(61)	2	126	高橋	90	(62)	10
123	林四	98	(61)	2	122	林大	88	(55)	12
126	小田	98	(72)	2	125	近藤	88	(61)	12
123	興水	97	(77)	3	126	宮城	88	(68)	12
126	戸田	97	(65)	3	122	平井	87	(62)	13
125	白井	96	(89)	4	124	時枝	85	(38)	15
125	秋山②	96	(48)	4	126	早川	81	(31)	19
125	和田	96	(91)	4	126	秋田	80	(25)	20
126	加藤	96	(79)	4	127	坂田	80	(51)	20
126	磯村	96	(56)	4	127	西山	80	(57)	20
125	秋山①	95	(55)	5	124	岸本	70	(19)	30
124	きくなみ	94	(17)	6	126	品川	69	(25)	31

○文節の末尾音節につけられている卓立表現イントネーションの例

(詞のばあい)

- ▽「スナワチ イー サキホト[△] オ チンジュット ユー (略)」 (123-1-19)
- ▽「タトエバ[△] オシヨクジノ マエニワ ケッシテ (略)」 (125-13-15)
- ▽「(略) アケテ オケバ ヒカクテ[△] カゼトーシワ (略)」 (125-18-15)
- ▽「エー タダシ[△] イー トテモ オー エライ ヒトト (略)」 (126-16-13)
- ▽「タイヘン カンタンナ[△] モノデ ゴザイマス」 (127-12-16)

(辞のばあい)

- ▽「ソノ ベンキョーヲデスネ ジブンダケデ シナイテ[△] (略)」 (122-8-4)
- ▽「(略) オメニ カケタイト オモノデ アリマスガ[△] (略)」 (122-17-35)
- ▽「ソノー ダイイチバンメワ[△] エー キョーカショ (略)」 (123-32-18)
- ▽「エー シュクガカイト ユーノニ コーユーフーナ (略)」 (124-6-10)
- ▽「(略) ニッポンデモ[△] カンガエサセラレル[△] モンダイデワ (略)」 (126-31-6)

○文節の末尾から2音節目につけられている卓立表現イントネーションの例

(詞のばあい)

- ▽「ソレカラ ソノ ツギワ ゴジューハチカラ ヨンジュー (略)」 (122-4-15)
 ▽「(略) トニカク ソーユー グルー^フガ セツゾク スル (略)」 (123-5-9)
 ▽「(略) ドーシ^テモ コレヲ ダマッテ ミテワ イラレナイ (略)」 (124-20-4)
 ▽「(略) ロッピャクマント ユー オー^キナ ロードー (略)」 (124-32-17)
 ▽「(略) ウー エンジ^ョノ モンダイニ ツイテワ (略)」 (127-1-12)

(辞のばあい)

- ▽「トクニ コクゴノ シドウナド^デワ ソートー コノ (略)」 (122-9-9)
 ▽「タダ オネガイ シタイ^ノワ アー マー コクゴ (略)」 (124-15-13)
 ▽「(略) オンナジジャ ナイカナ^ト オモーンデスケレド (略)」 (125-6-10)
 ▽「(略) ニンゲン カンケイト ユー コトニ ナリマスル^ノデ (略)」 (126-48-19)
 ▽「(略) ミズヲ イレナク^テモ コーユー フーニ (略)」 (127-19-2)

○文節の末尾から3音節目以前につけられている卓立表現イントネーションの例

(詞のばあい)

- ▽「(略) トーゼン カンケイ^ヅケテ エ オハナシ スルト (略)」 (123-29-8)
 ▽「(略) サンジューネン^イジョーノ ムカシニ ナリマサガ (略)」 (124-2-12)
 ▽「カケブトンナドワ モー ^スグニ ハイデ シマウ」 (125-1-4)
 ▽「(略) エー ニ^{セン}ゴヒヤクグラムヨリ イカノ チイサイ(略)」 (125-28-1)
 ▽「(略) コレヲ ジュー^ブンニ ヤハリ カンガエナキャ (略)」 (126-11-1)

(辞のばあい)

- ▽「(略) コレデ^モッテ ハカレル ワケデス」 (123-40-12)
 ▽「(略) マズ ウー ソノ ゲンデイ^マデト カイテ アル (略)」 (123-41-4)
 ▽「(略) ホーホーガ トラレテルンダ^ロート オモーンデ (略)」 (124-2-30)
 ▽「(略) タイシューカ サレテ キテワ オリマスル^ケレドモ (略)」 (124-22-19)
 ▽「ネギモ オ オナジ^ョーニ ミジンニ シテ (略)」 (127-12-9)

d 句末にはどのようにあらわれるか(注1)・2)

- ▽「(略) イロイロニ カク ワケデスカ^ラ (略)」 (123-40-23)
 ▽「(略) カギラレテ オルヨ^ーデ アリマス^カラ (略)」 (124-4-3)
 ▽「ボンテチョ^ーデスカ^ラ ソンナ フーニ ナッテル (略)」 (125-26-28)
 ▽「(略) コーギスルヨ^ーニ ナッテ オリマスカ^ラ (略)」 (126-18-19)
 ▽「(略) シタバッカリガ カタク ナッテ シマイマスカ^ラ (略)」 (127-13-4)
 ▽「(略) コー ミツ^ニ ワケマシ^テ (略)」 (122-3-3)
 ▽「(略) オナジ モノト カンガエ^テ (略)」 (123-18-19)

- ▽「(略) イナカト ユー イミジャ ナクテ[△] (略)」 (125-25-8)
- ▽「(略) アンマリ ユー コトワ オカシインデシテ[△] (略)」 (126-42-12)
- ▽「(略) オミズヲ マズ イレル コトニ シテ[△] (略)」 (127-12-9)
- ▽「(略) メズラシイ モノデワ アリマセンケレドモ[△] (略)」 (122-15-7)
- ▽「デ ヨーチェンニワ シガツカラ イッテルケレドモ[△] (略)」 (125-10-9)
- ▽「(略) ドーブツヤ ナンカモ イインデアンスケト[△] (略)」 (125-5-1)
- ▽「(略) ト ユー カタガ オーイト オモイマスケドモ[△] (略)」 (126-40-8)
- ▽「(略) ベークライトニ チョット ニテ オリマスケレドモ[△] (略)」 (127-29-1)
- ▽「(略) ヒジョーニ タイセツナ コトデスガ[△] (略)」 (122-4-4)
- ▽「(略) チンジュツヲ フクム カタチデ アリマスガ[△] (略)」 (123-9-9)
- ▽「(略) イロンナ カタチデ アラワレテ マイリマスガ[△] (略)」 (125-13-2)
- ▽「(略) ハット シタノデスガ[△] (略)」 (126-32-20)
- ▽「(略) シホー ヤイテ イタダク ワケデ ゴザイマスガ[△] (略)」 (127-12-22)
- ▽「(略) ゴク ショースーノ レイダケヲ アゲマスト[△] (略)」 (122-5-11)
- ▽「(略) マー ケッロンダケ チョット モーシアゲマスト[△] (略)」 (123-38-13)
- ▽「(略) モノデ アルカッテ ユー コトニ ナリマスト[△] (略)」 (124-2-9)
- ▽「(略) コノー カンテンカラ ホケンジョヲ ミマス ト ユー[△] (略)」 (125-29-12)
- ▽「(略) マトメテ モーシアゲテ ミマス ト (略)」 (127-23-11)
- ▽「マ ソレヲ カリニ サイカツヨート ヨブナラバ[△] (略)」 (123-12-15)
- ▽「(略) コノ ケーケンテツガクニ ヨレバ[△] (略)」 (123-30-16)
- ▽「マタ アラタメラレル モノナラバ[△] (略)」 (124-21-19)
- ▽「マー イイカエレバ[△] (略)」 (125-12-9)
- ▽「(略) ナンカイモ スルト ユー コトニ ナレバ[△] (略)」 (126-42-8)
- ▽「(略) ヒトツモ ワカラナイト ユーノデワ イケマセンノデ[△] (略)」 (123-28-7)
- ▽「(略) マー ソーユーヨーナ コトヲ オッシャルンデ[△] (略)」 (125-11-4)
- ▽「(略) コーユー コトニ ナリマスノデ[△] (略)」 (125-25-9)
- ▽「(略) オクサンガ ガクシュインデダト ユーノデ[△] (略)」 (126-24-11)
- ▽「(略) ジカンガ ゴザイマセンノデ[△] (略)」 (126-53-17)
- ▽「(略) マー スカートヲ ヒッパラレナガラ[△] (略)」 (125-10-4)
- ▽「(略) ホントーニ シンバイソーナ カオヲ ナサリナガラ[△] (略)」 (125-11-6)
- ▽「デ ウスノロダトカ ニクラシクナルトカ ユワレナガラ[△] (略)」 (125-11-8)
- ▽「デ コーユー ジョーキョーヲ ミナガラ[△] (略)」 (125-11-10)
- ▽「(略) ノーベルショーヲ トッテ オラレナガラ[△] (略)」 (126-19-2)
- ▽「(略) オナジク ジュート ユー コトヲ モーシマシテモ[△] (略)」 (122-4-19)

- ▽「(略) ト ユーノヲ クラベテ ミテモ[△] (略)」 (123-17-7)
- ▽「(略) ムズカシインジャ ナイカシラト モーシアゲテモ[△] (略)」 (125-11-4)
- ▽「ソレデー イクラ サゲルニ イタシテモ[△] (略)」 (126-41-19)
- ▽「(略) ソノ コトワ ササイナ コトデモ[△] (略)」 (125-13-15)
- ▽「(略) ヤキモチガ アラワレル コトワ ゴザイマショー[△] (略)」 (125-13-18)
- ▽「(略) ムシニ クワレタリ シヤスク ナリマス[△] (略)」 (125-18-10)
- ▽「(略) ミンナ ナツヤスミデス[△] (略)」 (126-8-3)
- ▽「(略) コトバモ ツカイマスンデ ゴザイマス[△] (略)」 (126-49-1)
- ▽「(略) タシカニー 『メノ トドクカギリ』デ アリマス[△] (略)」 (126-48-1)
- ▽「(略) モーシマッテ ユート カキマシタ トーリ[△] (略)」 (122-3-2)
- ▽「(略) シヤサイト ユーヨーナ コトデ イッテル ワケ[△] (略)」 (123-26-9)
- ▽「ソレガ マー ジョロン[△] (略)」 (123-32-13)
- ▽「ウマレタノガ センハッピークヨンジューキューネン[△] (略)」 (126-17-17)
- ▽「(略) コチラニ ゴザイマスノガ インゲン[△] (略)」 (127-13-13)
- ▽「(略) キヨードノ メーサンヲ オクツタリ スル クセ[△] (略)」 (126-26-15)
- ▽「(略) ミナサンニ オウカガイ シテデス[△] (略)」 (123-28-8)
- ▽「デ ソーユー フー…コトヲ オー シテデス[△] (略)」 (123-45-17)
- ▽「(略) ソーユー エート カンケイ イタシマンテデス[△] (略)」 (126-46-21)
- ▽「(略) ユニットッテノワ ムカシ ハヤッタデスケド[△] (略)」 (123-33-4)
- ▽「(略) カツドーナンテ ユー コトバガ アリマスガ[△] (略)」 (123-30-6)
- ▽「(略) ユッテル ヒトガ アルンデスガ[△] (略)」 (123-30-15)
- ▽「ダカラ コレワ チョット フルインデスガ[△] (略)」 (123-33-15)
- ▽「エー コレヲ オー マゼテ エー ネリマストデス[△] (略)」 (127-25-22)
- ▽「(略) ソーユー ワケニ アリマ…イキマセン[△]デデス[△] (略)」 (123-31-1)
- ▽「(略) ト ユー コトヲ アー イイマンテモデス[△] (略)」 (122-4-20)
- ▽「(略) ホトンド テガ ツケラレテ オリマセン[△] (略)」 (122-14-4)
- ▽「(略) コレワ ノビテ オリマセン[△] (略)」 (126-49-19)
- ▽「(略) ベツニ イー ヒクク ナラナイ[△] (略)」 (122-18-33)
- ▽「(略) コレガ ミギエバカリ イカナイ[△] (略)」 (123-40-6)
- ▽「(略) アルクト ユー コトニ ナッテ シマウヨー[△] (略)」 (126-6-4)
- ▽「(略) モシ モッテ マイリマシタ[△] (略)」 (125-19-8)
- ▽「(略) センモンカニ ナル ナランニ カカワラズ[△] (略)」 (122-9-16)

注1) 「句末」というのは、従属句などの末尾、つまり、多くは接続助詞の部分。
 注2) 句末の語ごとに5例以下を例示した。「～ガ」や「～デ」などは例が多い。

3・3・4 イントネーションの問題例の処置

イントネーションの現象の調査整理にあたっては、イントネーションの基本的な規定に従う整理の方法がとられるのは言うまでもない。前述のような考えかたで、大部分の現象を分析し分類したが、その分類整理のうえで、問題とした実例がある。ここに、問題例とその処置を示しておく。

a アクセントに従う形と認めたもの（ゆれのあるアクセントおよび複合語・接尾要素を持つ語の、もとのアクセントがあらわれたと見られるものを含む。）

- ▽「セケンノ ヒトガ ユフ トキニワ」 (123-24-15)
- ▽「カンシンノ ナイ レンチュー パツカリナデス」 (124-10-19)
- ▽「タトエ ソレガ アブナイ モノデ ナクッテモ」 (126-5-17)
- ▽「コドモタチニ トッテワ サニヨリモ ツライ コトナノデ」 (126-29-16)
- ▽「ヒジョーナ イキオイデ ゴーカ シテ オリマス」 (126-30-21)
- ▽「ミジュード イカニ サゲルト ユー コトワ」 (126-41-18)
- ▽「シタガッテ サナジュニ 下ルト イタシマスト」 (127-2-14)
- ▽「ノーサンブツノ キカイ ワ 列」 (127-9-3)
- ▽「オーサジ コハイ ホト ゴザイマス」 (127-11-18)

これらは、アクセントに従う形と認め、卓立表現イントネーションから除外した。（もちろん、意図表現イントネーションなどではない。）

b 2音節以上の助辞あるいは助辞連続で、アクセントがあらわれたとも解釈されるが、前述（179ページ）の規定によって、卓立表現イントネーションと認めたもの

- ▽「センゴ トクニ サケバレテイルワ」 (123-25-1)
- ▽「ソーユー キツガリョクガナイワ」 (123-25-4)
- ▽「ソノ ハンタイラ イク コトガ オイワ」 (123-26-2)
- ▽「カンレンガ ナイ ウケワナイ」 (123-26-14)
- ▽「ギノダケ シューレンサセタト」 (123-31-22)
- ▽「デンタツノ コーカト ユー モノガ アガッテオリナケレバ」 (123-35-20)
- ▽「ドノ カドカ ヒカリラ アテテ イクカ」 (123-37-1)
- ▽「ト ユー タチバガ アリマスト 下モニ」 (123-37-13)
- ▽「ドンナ アイロデモッテ ソーユー ワルイ コトバガ」 (123-37-14)
- ▽「チャーサ ケンキュート 下モニ アル ワケデ ゴザイマス」 (123-37-22)
- ▽「コレデ ハンノーラ ハカツタノアワ アリマセンガ」 (123-43-6)
- ▽「ギコーガ イルワケテアリマシテ」 (123-45-5)
- ▽「イマアモ ワスレラレナイノデ」 (126-2-15)
- ▽「ヨークューラ ミタス ホーホーノ アカアワ」 (126-5-12)
- ▽「ホントーノ センセイラ フタリダテ」 (126-16-4)

▽「マケギライガ サキニ タツンテシヨニカ , イヤナルト サツサト ヤメテ」 (126-26-16)

▽「ドコノ クニデモ ソンナニ カワル モノデハ ナイト」 (126-29-2)

▽「ユー コトラ キイタ モノダガ」 (126-32-19)

▽「ト ユー コトダケデハ ナクッテ」 (127-3-11)

c 一般の卓立表現イントネーションと認めたもの

(体言・用言についての卓立表現イントネーション)

▽「チンジュツヲ アワセモツテイル カタチデ」 (123-6-6)

▽「ソーユー ハツタツダンカイ カンガエカタカラ」 (123-26-4)

▽「ソレヲ コトモクテニ ミニ ツケサセテ」 (123-31-9)

▽「モー アシバツカリ ニヨキニヨキ ヨコエ ダンテ」 (125-3-5)

▽「ソノ ネンレイノ サハイスデ ヨロシイノジャ ゴザイマセンカ」 (125-5-6)

▽「ジュウマンニ ツイテ ヒトツ ホケンシヨガ ホシイト」 (125-24-20)

▽「ニンゲン イケダガ トクニ ナツクノ イク セイジラ」 (126-27-8)

▽「ニッポンガ モシ ホトニ コノ チイキニ タイシテ」 (127-10-21)

(副詞についての卓立表現イントネーション)

▽「カナラズシモ メズラシイ モノデワ ナイ」 (123-15-5)

▽「ダジカニ ソーユー ノーリツワ」 (123-44-14)

▽「トシテモ トリカエテ ヤラナキャ ナラナイ」 (125-2-5)

▽「ドーシテモ イロイロニ チガウノデ ゴザイマスノデ」 (125-2-5)

▽「マズ ヤハリ オナカラ タイセツニ」 (125-2-8)

▽「ナントカシテ ソノ オコサンノ タダシイ ヨーキューラ」 (126-6-11)

▽「ゼンゼン ワカラナイデス」 (126-10-23)

▽「サイキン ヒシヨニ ボーケンシンガ ナイト」 (126-12-4)

▽「トンデッテ ヤットコ ツカマエテ」 (126-14-5)

▽「アゲテ キタ カタガタガ タクサン アリマシタ」 (126-31-17)

▽「ベンキョーサセル ソノ イチバンノ ショーテント」 (126-34-5)

▽「ソコデ トシテモ コノ ジューオクノ」 (127-2-10)

▽「マー トキトキ オカエシニ ナリマシタ ホーガ」 (127-16-20)

▽「モー トツテモ オイシク」 (127-16-21)

▽「ヒラ ゴト ヨワク」 (127-18-8)

(助辞についての卓立表現イントネーション)

▽「ジューハッセイキニ ナツテカラ コトデ アル」 (122-12-2)

▽「ケーケン テツガクニヨレバ」 (123-30-16)

▽「ドノ ヘンマデワ イッテ ホシイカ マ ホシイカト ユー トコロデ」 (123-37-3)

- ▽「ワリアイニ ハヤク デキアガルノジャナイカト」 (124-18-4)
 ▽「ムシガ デナイヨニヨボシタリ シテ」 (125-22-5)
 ▽「ドノヨーナ コトラ チューイシテ イケバ イイカトニユー コトニ」
 (126-6-8)

- ▽「コノ シキトニユーアワ」 (126-9-8)
 ▽「モット ツカレル トコロエ オイコムッテ ユフガ」 (126-10-23)
 ▽「ダイジナ コトナンデス ケレトモ」 (126-11-2)
 ▽「ヤハリ チャント ジアンデ カンガエテ」 (126-11-7)
 ▽「カンガエテ ハンエイ サセテ イクテ アリマシヨ」 (126-20-6)
 ▽「シシユリニユーハトシテ ナイカクニ ハイリマシタ」 (126-22-13)
 ▽「ソナナ フーニ ブルイシテ イツテ ミタイト」 (126-50-14)

c' 卓立表現イントネーションのうち“遡上り型”かと見られるもの

- ▽「トソニーヨーナ コトモ カンガエテ」 (125-5-13)
 ▽「ダンソノ カイグイノ クセニ ナッテ シマウ」 (126-5-3)
 ▽「オヤニ アンマリ カワイガラレタカ」 (126-9-11)
 ▽「ダイジナ コトナンデスケレドモ」 (126-11-2)
 ▽「ケガナドヲ スル コトデワ モチアリマセン」 (126-12-18)
 ▽「モノニ ツナガルト ユムロン イイスギダト」 (126-31-15)
 ▽「アフリカニ ジュオカレテ オリマス」 (127-5-16)
 ▽「ダイニクニグニノ」 (127-7-14)
 ▽「オサカナヲ ヤキマシタ アツトコロニ」 (127-17-17)
 ▽「キャベツガ ホヤワラカク ナッテ」 (127-18-14)
 ▽「アタエラレタ シゴドンナ シゴトデ アッテモ」 (127-23-14)

以上、原則として、1つの用例は1つの分類項におさめた。実際はその複合したものもある。しかし、以上の各項におさめきれないつぎのようなものがある。

(ア) アクセントがくずれていて、イントネーションの問題の対象とはしがたいと認められるもの。

- ▽「モシマシタヨニ」 (123-8-21)
 ▽「イチガニ」 (123-36-20)
 ▽「ハチハダシケレバ」 (123-40-7)
 ▽「イロンチモ」 (125-2-16)
 ▽「ズット」 (125-3-10)
 ▽「ズット」 (125-3-16)
 ▽「ウツカリシテイマスト」 (125-6-9)

- ▽ 「ドコラアタリマデ」 (126-10-19)
- ▽ 「スクナカラズ」 (126-31-18)
- ▽ 「アシガカリガ デキル」 (127-4-11)
- ▽ 「ココデ」 (127-8-16)
- ▽ 「ゴランイタダキマショー」 (127-15-4)
- ▽ 「マコトニ」 (127-35-9)

おわりの4例は、解釈によっては、イントネーションと見られないではない。どれも、アクセンの下降が消滅して、高のままですづいているから、“アクセントの下降が聞きとれないけれども存在する”と解釈するならば、卓立表現イントネーションの一種と見られよう。しかし、ここでは、そのような拡張解釈をとらないから、当面のイントネーションの問題の対象とはしない。

(イ) 音節そのものを明瞭に聞かせるために、高く(強くも)発音することがある。

- 「イッタ シイ , イッタ ダロニ」 (123-12-4)

これは、“明瞭に聞かせるため”という意味で、狭義に解釈されるプロミネンスと言え。ただそれによって語の意味を強調して相手に伝えるという役割が全然ない。その点で、狭義にもせよ、普通のプロミネンスが、語の意味と、付随的關係を持つてくると性質がちがう。特殊な意味(「タ」の音節を引用的に示す。書けば「イッタラシイ」など、タを打ったりする)をあらわす音調であろうが、意味や機能を見れば、現象としては、卓立表現イントネーションと同じである。^{注1)・2)}

注1) 参考として、1つの語に、いろいろな音調の実現しているものをまとめておく。

○ドーンテモ

- ▽ 「ドーシテモ」 (125-2-6), ▽ 「ドーシテモ」 (125-2-6),
- ▽ 「ドーシテモ」 (125-2-8), ▽ 「ドーシテモ」 (125-3-6),
- ▽ 「ドーシテモ」 (127-2-10)

○ズーット

- ▽ 「ズーツト」 (125-3-10), ▽ 「ズーツト」 (125-3-16),
- ▽ 「ズーツト」 (127-9-19)

○ナニヨリモ

- ▽ 「ナニヨリモ」 (126-29-16), ▽ 「ナニヨリモ」 (126-30-1)

○トツテモ

▽「トツテモ」(125-3-2), ▽「トツテモ」(127-16-21)

注2) この節で問題としたものは、1か所に2つの問題部分があるものを含めて、112か所である。前述した卓立表現イントネーションの総数は、だいたい、3970に及ぶ。問題部分は、その数のうえでは、わずか(約3パーセント)である。

3・4 イントネーションは、話しことばの文型にどういう位置を占めるか

3・4・1 イントネーションと構文

構文は、狭義には、文の内部のことがらの関係構造である。本書では、主として、狭義のほうの構文を扱っており、その類型も、抽象度の比較的高いものを中心としている。したがって、これにイントネーションが直接の関係を持つことはないと言えよう。

たとえば、疑問詞も疑問の文末助詞もないばあいに質問をあらわそうとすれば、文の末尾を上昇調とすることが、一般に、求められる。「来る?」という形式で、質問をあらわすには、一般に、意図表現イントネーションの上昇調をとって、「クル?」と言う必要がある。けれども、「クル?」と言う質問の形式も、やはり「述語」という構文型であるとしてしまい、その点では、「来る。」という断定の表現の「クル。」という形式と同じ「述語」のグループに入れられるとするならば、末尾の上昇調の有無は、問題にならない。つまり、構文型としては、「述語」一本で、その下位区分がないから、イントネーションの関係する手がかりがない。もしも、イントネーションの関係する手がかりを得ようとするならば、「述語」の下位区分として、たとえば、少なくとも「断定の述語」と「質問の述語」という区分をして、それにつけられる(あるいはつけられる)イントネーションが上昇調か上昇調でないかというような関係づけをしてゆくことになる。ということは、単に文の内部構造としての述語というにとどまらず、それに表現意図が加わったものとして考えるのであるから、狭義の構文の問題ではなくなる。

また、卓立表現イントネーションは、たとえば、「本を買った。」を「ホン^へカッタ。」と言うときは、「ほかのものではなくて本を、買った。」という意味で、「本」を「ほかのもの」との対比において強調し限定することができる。しかし、それは、「本を買った。」ということがらの内容自体に変わりはない。つ

まり、ことがら関係の内部構造という狭義構文の範囲では、卓立表現イントネーションもやはり、構文に影響するところがなく、構文と直接関係を持たないと言うことができる。

これについて「話しことばの文型(1)」のイントネーションの項には、つぎのように述べてある。(同書 274 ページ)

「こういう『構文』と、本章で見てきた『イントネーション』との関係は、きわめてうすいものである。述語だけの文であるから平調である、主語＋述語という構造を持つ文だから昇調¹である、といった対応関係は全くない。文末のイントネーションは、文の構造の違いには直接的にはほとんど関係がなく、どういう種類のイントネーションであってもよい。そして、以下に見るように、文末——述語部分にあらわれるイントネーションは、その述語が、どういう形式の語構造なり、意味的形式を持っているかによって、こんどは『表現意図』と関係してくる。すなわち、すでに『表現意図』の章で見られたように、『表現意図』をになっている個々の判叙表現なり、質問的表現なりの、それぞれの特徴的形式は、主として文末の述語部分にあらわれるのであって、そういう特徴的形式を通して、イントネーションは『表現意図』と関係がある。つまり、イントネーションは、『表現意図』とは比較的、直接的な関係にあり、『構文』とは間接的な関係にあると言える。」

しかし、構文を広義に規定するならば、イントネーションは、構文に直接関係を持ってくる。たとえば、「クル」という形式が上昇調をとって「クル[↑]」となれば、それは一般に質問の意味の述語となるし、上昇調でなければ「クル[↓]」で、断定の意味の述語となる。(これらをみな述語に含めて呼ぶこと自体、問題がないではないが、それには触れないでおく。)つまり、同じ「述語」と言っても、述語のはたらきがちがうものである。いわゆる陳述のちからのちがいであり、いわゆる文の性質上のちがいを生むものであって、イントネーションがその標識になることがあるから、広義構文との関係を、意図表現イントネーションは持つと言えよう。

また、「ホン[↑]ヲ カッタ[↓]」の「[↑]ヲ」のような卓立表現イントネーションは、前述のように、ことがらの関係自体をあらわす格の表示「ヲ」につけ加わって、「ほかのものではなくて本を」とか、「本をこそ」とかの意味をあらわすから、ほかのものとの対比において、「本」を強調し限定するはたらきをしている。それはちょうど、文法面での副助詞の機能に相当するものであって、ことがらの内容を加えることはないが、ことがらのありかたについての言語主体

の認識を音調のうえで示すものである。もとより、卓立表現のイントネーションは、副助詞自体あるいは他の種々の語にも加えられて、さらにその機能を強調することがあるから、一般に、強調の表現にあずかるものであって、副助詞の機能に“該当する”とは言えない。しかし、副助詞の機能を、構文の範囲に含めて扱うときは、これに対応する音調としてとりあげることができ、質問の上昇調が、疑問文末助詞に対応することと対比される。

以上のように、イントネーションは、狭義の構文とは直接にかかわるところがないが、広義の構文とはかかわるところがあると見られ、ひいて、イントネーションが「話しことばの文型」において、どのような役割りを果たすと考えるかは、「構文」をどう限定（ないし規定）するかと深く関係すると見られる。

3・4・2 イントネーションと表現意図

前節にも触れたように、意図表現イントネーションは、当然、表現意図と関係するところがある。もちろん、文としての言語形式を媒介としてのことである。そこで、どういう表現意図にどういうイントネーションがあらわれているかをまとめておく。(注)

表現意図 文末のイントネーション	表現意図				
	詠	嘆	判	叙	要 求
下 降 調	4	2333		134	11
上 昇 調	9	0		11	0

注) この表のほか、文末に卓立の高調のイントネーションのつくもの(計156例)がある。

独話資料の性質上、判叙表現の文が多く、それにともない、下降調としての意図表現イントネーションが多いことは、予想されたとおりである。また、対話資料におけるほど、さまざまな文末助詞をとるわけでもないから、文末にさまざまなイントネーションが実現するわけでもないし、意図表現イントネーションは、さらに限定されるから、上記のような結果になる。意図表現イントネーションと言っても、それがなければ、文としての意図表現にさしつかえるというようなばあいは、しばしば前述したように、疑問詞・疑問文末助詞を持た

ない文で質問をあらわそうというばあいだけで、他は、いわば自然にアクセントの形によって意図表現ができてしまう。だから、意図表現イントネーションは、全般的に言って、文の意図表現のための補助手段である。しかし、文を成立させるための音声面の要素としては、不可欠のものであって、アクセントに従う形式だけでは、文の音調にはならない。文においては、いわば、つねに対応的にその意味面と音声面とが相関していて、語彙的・文法的な意味面での表現が不足して、どうにもならないときだけ、音声面の意味的表現能力が前面に浮かぶのであり、その他のばあいは、意味面の表現にかくれて、単に音声面の音調をあらわすにすぎないのが、イントネーションの性質なのである。だから意図表現イントネーションと表現意図との相関関係も、表現意図が、意味面の表^{おもて}にあって、イントネーションはその裏うちをしていると言えよう。ときとして、その裏うちが表に見えるにすぎないのである。

つぎに、卓立表現イントネーションも、その規定で明らかなように、それがあってもなくても、表現意図にかかわらないものである。「クルヨ」の「ヨ」が高い卓立を受けても受けなくても、それは判断叙述の表現であって、表現意図は動かない。「キョーワ クルヨ」の「ワ」が高い卓立を受けても受けなくても、同様である。それらの卓立表現イントネーションは、文全体としての話し手の情意判断のしかたそのものにかかわるのではなくて、文の部分としての特定のことがらに対する話し手の強調の程度にかかわるものである。要するに、一般に、卓立表現イントネーションは、表現意図を左右する性質のものではない。

4. おわりに

このように見てくると、イントネーションは、話しことばの文型に、直接的・積極的にかかわり合いを持つことが少ないけれども、間接的・消極的にかかわり合いを、つねに持つものだということになる。直接的・積極的には、語形式としての特徴を持たないばあいの質問の表現には、文末を上昇調にするが、他はかならずしも上昇調にしないという一般的な性質を持つ。間接的・消極的には、一方ではつねにアクセントに従うイントネーションとして、文の音調を構成しており、一方では、とくに強調したい語句について、その卓立表現にあずかると

ころの卓立表現イントネーションとしてあらわれる。

したがって、イントネーションが、もしも文型教育のために活用されるとすれば、留意すべきところは、質問の上昇調の役割りが第一であり、やや進んだ段階での文型教育において卓立表現イントネーションの役割りに及ぶということになる。それらも、前述のように、文型の規定の狭義のばあい、つまり表現意図を捨象した抽象度の高い文型にあつては、一般に、直接的・積極的な役割りを果たす余地はほとんどないであろう。しかし、より広義に文型を規定するとき、つまり表現意図を含めた具体度のより高い文型において、次第にイントネーションの関与するところが増大すると見られよう。

イントネーションの調査研究は、ほかの多くの調査研究においてと同様、(あるいはとくにそうであろうと思われるが、)つねに基本的課題にたちもどり、理論的体系を構築してゆかなければならない。イントネーションの形は、発話の現実のピッチの変化を抽象したものであり、その型は一定の観点からさらに整理したものであるから、その整理にあたっては、つねに解釈がつきまとう。それゆえ、できる限り、主観的なゆれの生じないような整理の方法をとって解釈してゆかなければならない。解釈に無理が多いならば、たちもどって、その整理方法の改訂が求められよう。しかし、とにかく、ピッチの変化という外形がはっきりしているから、明瞭な発音であれば、文法上の成分の意味関係の解釈などに比べて、はるかに処理しやすいと言える。逆に、発音が不明瞭でピッチの変化が聞きとりにくいときとか、方言アクセントや臨時的な変な音調で発音されたときは、処理に困ることがある。典型を求めるばあいの対象資料としては、この点によほど注意して出発しないと、あとで、対象外とすべきものが頻出してくる。構文における不整表現に対比されるものもあり、その処理には慎重を期したつもりであるが、例外的なものの処理は、つねに、例外ならぬものの処理と深くかかわるから、今後とも、考究を加えたいところである。

なお、残された課題は多い。一部、見通しのつけられそうなものもあるが、ここに記述するに足りないので、項目のみを例示する。

- (1) プロミネンス・速さ・ポーズなど、他の音声要素との関係の問題
- (2) 場面・話し手(性別・年齢別等の問題)・話しの内容・時間などとイン

トネーションのあらわれかたとの関係の問題

(3) イントネーションの実験的調査研究

(4) 方言イントネーションの比較研究

以上は、個別研究項目に属するけれども、どの項目も、イントネーションの基本的問題に触れるところがあることは言うまでもない。アクセント論に言うアクセント素（トニーム）のように、イントネーション素（イントニーム）が想定されるかどうかなど、イントネーション観の基底にかかわる問題もある。今回の観点・態度は上述したとおりであるが、なお調査研究を加えたいと考える。

（宮 地 裕）

V 総合的文型の試み

1. はじめに

表現意図・構文・イントネーションの各面から文の文法的特徴を追究して文型に迫ったが、「I 概要」の章で述べたように、さらにそれらのからみあいを明らかにして総合的文型をとらえることを、とくに「話しことばの文型」の目標とするものである。

表現意図に対しては、その別に応ずる文表現の形式の分化が、主として文末においておさえられるが、さらに、構文・イントネーションと関連し制約しあうところがあると考えられる。また、構文とイントネーションとの間にも、ある種の関連があると見られる。^{注)} それらを明らかにして、3つの面の総合的文型を立てるというのが、総合的文型の構想である。

注) イントネーションと表現意図・構文との関連については、「IV イントネーション」の章でふれている。

しかし、総合的文型の全面的記述は、なお基礎的研究をつみ重ねた上に成り立つ大きな課題である。総合のためには、表現意図・構文・イントネーションのかかわりあうところをほりさげなければならない。たとえば、構文の関係する面について考えるに、陳述的な面を捨象した狭義の構文について見るかぎり、表現意図やイントネーションとの関連、制約関係はほとんどとらえることができない。陳述的な面におよんだ広義の構文について、総合のための追究はなされなければならない。つまり、表現意図・構文・イントネーションのからみあいを追究することによって文の陳述面の構造が明らかにされ、総合的文型がそこから抽出されることになるともいえる。このような要請に対しては、構文の分析になお残されている面があり、表現意図についても、それに応じて、なお幅を広げて見るべき面がある。そこで、総合的文型のためには、あらためて新しい企画をもって出発することが適当であろうと思われる。ここでは、とりあえず、このためのいくつかの問題点を指摘し、解説を加え、あるいは、あ

る程度の見通しを述べたり、部分的に具体的な記述をしたりすることにする。以下3項目に記述するもののほかにも、予想される問題点がいくつかあるが、ある程度見通しの可能なものを、重点的、個別的にあげるにとどめる。

次に、総合の途上のひとつの試みの意味で、単純な相互関係を見るものとして、表現意図・構文・イントネーションの対応を示した文型一覧表をかかげる。主として、取りあつかった独話資料から抽出されたもので、もれている型もあるが、ほぼ体系的なまとまりを得ているものとする。なお、『話文型(1)』でまとめた対話資料による各表現の文の典型の表を、対照のために添えてかかげる。(大石初太郎)

2. 総合に関する二、三の問題

2.1 成分の陳述的変容について

構文の項では、ことがらとして他の部分に関係する成分の分類にあたって、その陳述的な面は、可能な限り無視した。したがって、陳述的な面では異なるものが、成分としては同じものと認められたものがある(主語における「～ハ」と「～ガ」、目的語における「～ヲ」「～ニ」…と「～ハ」「～ニハ」…などや、卓立のイントネーションのあるなし)。また、語順の変換(倒置など)による強調などの陳述的意味のちがいも、構文の型のちがいはみなかった。これらのちがいは、成分の陳述的な変容とみなして、構文の項では、正面から扱うことをさけてきたわけである(Ⅲ 1・2・3 c 「陳述的変容について」参照)。この問題は、広義の構文の問題でもあるが、文の陳述的な側面として、表現意図をはじめ、場面・文脈などと関連するところが多いので、便宜的に総合的な文型の問題として、ここで扱うことにした。ただし、全体的な見通しをもっていないので、今回は断片的に問題をとりあげるにとどまる。ここで陳述的変容と呼んだ現象を文型のどこに、どう位置づけるべきかについては、なお考慮しなければならないところもある。

2.1.1 陳述的変容の表現手段

陳述的変容の表現手段には、次のようなものがある。

- (i) 係助詞の添加、格助詞と係助詞との交換

(ii) 語順の変換

(iii) 卓立のイントネーションのあるなし

(i) が行なわれるのは、大まかにいって基準構文の各成分に限られるようであるが、(ii) (iii) は、すべての一次成分に現われうる。したがって、すべての一次成分は、具体的な文の中では、なんらかの変容を受けているということになる。(i) を別にしても、すべての成分は、具体的には一定の位置にあり(2つ以上の成分が同一文中に共存するばあい)、卓立のイントネーションがあるかないかのいずれかであるからである。(i) の関係する成分をもつ文にとっては、なおさらである。具体的な文の中では、これらの手段が複合して用いられて、全体で何らかの陳述的な意味を表わしているわけである。

2・1・2 中立的な変容

陳述の変容の中には、比較的中立的 (neutral) なものがある。中立的というのは、場面や文脈など、構文にとって臨時的な条件を無視したばあい、比較的ふつうに使われる表現であって、場面や文脈などの条件や、強調の意図などによって変容を受けたというよりも、変容を受けるもとになるものと考えられるものである。たとえば、

○ワタクシハ 学生デス。(卓立のイントネーションなし)

○アサガオガ 咲キマシタ。(卓立のイントネーションなし)

などである。これに対して、

○ワタクシガ 学生デス。(卓立のイントネーションなし)

○アサガオハ 咲キマシタ。(卓立のイントネーションなし)

○ワタクシ^ハ 学生デス。(卓立のイントネーションあり)

○アサガオ^ガ 咲キマシタ。(卓立のイントネーションあり)

○学生デス, ワタクシハ。(卓立のイントネーションなし)

○咲キマシタ, アサガオガ。(卓立のイントネーションなし)

などは、何らかの意味で、陳述の変容がきわだっているといえるであろう。

(中立的な変容と呼んだものは、陳述的な意味がゼロである、というわけではない。中立的なものとするのでないものとのちがいはあくまでも相対的なものである。また、ここで中立的な変容とみなした上の2つの文において、「ワタクシハ 学生デス。」の方はSが主題的であり、「アサガオガ 咲キマシタ。」の方

はSが非主題的であって、陳述的な意味は異なっている。^{注)}

注) 「中立的」という概念はまだじゅうぶんに熟していない。文の段階では、各成分は陳述的な変容の手づぎによっていくつかの変容の形が対立して存在するから、同一の構文の型に属する文でも、陳述的な面で異なっているいくつかの種類にわかれて、全体で変容の体系をなしている。「中立的変容」というのはその体系のなかの1つ(あるいは1つときめられないものがあるかもしれない)を指す。「中立的」という概念は変容の体系を明らかにしていくなかで、深められなければならない。

文型研究にとっては、それぞれの構文の型にとってどのような変容の種類があるか、その変容はどのような意味・機能あるいは表現効果をもつかを明らかにする必要があるが、その重要な一部として、中立的な変容とそうでないものとを明らかにする必要があると思われる。

卓立のイントネーションについては、それがあより、ない方が中立的であるということができる。以下、係助詞の手段や語順の手段による変容のばあいについて、この問題をとりあげる。

2・1・3 係助詞の添加、格助詞と係助詞との交換

格助詞と係助詞との交換については、格助詞「ガ」「ヲ」と係助詞との交換だけを認めた。(Ⅲ 1・2・3・b (4)「陳述的成分」参照)

係助詞の添加のばあいには、一般に、添加されたものより添加されないものの方が中立的である、といえそうである。ただし、体言的な述語の否定の形は「～デ ナイ (アリマセン)」より「～デハ ナイ (アリマセン)」の方がふつうのようである。また、組織などを表わす状況語のばあいも、「～デ」の形よりも「～デハ」の形の方がふつうのようである。これらのばあいに、中立的な変容の形としては、「ハ」のついた形をあげるべきかもしれない。なお、こまかく見ていくと、ほかにも「ハ」のついた形の方がふつうに使われるものがありそうである。(たとえば、「ボクニハ イマ 銀行ニ 預金ガ ナイ。」のような構文における「ボクニハ」など)

次に、格助詞と係助詞との交換のばあい。目的語(M₂)では、「～ヲ」が中立的であって、「～ハ」の方が変容がきわだつといえるであろう(対比強調など)。主語では、2・1・2 であげた例のように、少なくとも「～ガ」が中立的

なタイプと、「～ハ」が中立的なタイプとがある。(このばあいの「～ハ」はいわゆる主題的(題目的)な「～ハ」であって、対比強調の「～ハ」ではない。)ほかに、どちらともつかないものがあるかもしれない。

ちょっとみたところ、動詞述語文では「～ハ」タイプ、名詞述語文では「～ガ」タイプであるようだが、実際はそう単純ではない。

注) 以下、「～ハ」が中立的であるような文あるいは主語のタイプを「～ハ」タイプと略称。「～ガ」タイプもこれに準ずる。

○アサガオハ 夏 咲キマス。

のように、動詞述語文でも、特定の具体的な時間における主体の動作ではなく、主体の性質を述べるばあいには、「アサガオハ 夏 咲ク 花デス。」などの名詞述語文と同様に、「～ハ」タイプのものである。

S'...SZでは、S'は「～ハ」タイプ、Sは「～ガ」タイプである。(「...」はM, H, R, Jなどを示す)。「象ハ(S') 鼻ガ(S) 長イ(Z)。」など。いわゆる句からなるJをもった拡大構文のSJ...Zや、複合構文のSK...ZのSは、「～ハ」タイプであろう。「～ハ ～シタラ(～スレバ、～シタガ、～シタケレド) ～シタ。」など。

主語において、中立的な形が「～ハ」のもの(「～ハ」タイプ)と「～ガ」のもの(「～ガ」タイプ)とがあるとすれば、それを規定するものは何か。S'...SZやSJ...ZやSK...Zのばあいには、構文の型と関連があるといえるであろう。S...Zのばあいには、事情が複雑である。名詞述語文では、「～ハ」タイプのもものが多く、動詞述語文では「～ガ」タイプの方が多いとしても、例外がある以上、品詞上の性格との関連は、直接的ではないであろう。これからの研究課題としなければならない。

変容のどの形が中立的であるかの問題は、述語の表現意図とも関連がありそうである。たとえば、Zが可能動詞であって、可能性の主体がM_±で表わされるようなM_±...Zの構文では、Zが断定の表現であるばあいには、M_±は何らかの係助詞を必要とするが、疑問や質問の表現であるばあいには、そのようなことはない。(166ページ参照)

また、命令的な表現意図をもつ文では、動作の主体は聞き手に限られてい

て、主語を言わないのがふつうであろう。この種の文で主語を言ったばあい、
「～ガ」でも「～ハ」でも変容がきわだつのではないかと思われる。

○太郎サンガ 行キナサイ。(指定強調的)

○太郎サンハ 行キナサイ。(対比強調的)

注) この点で、陳述の変容は、いわゆる成分の省略の問題ともからんでくるとい
なければならない。

以上あげたように、「～ガ」「～ニ」「～デ」などが中立的なタイプと、「～
ハ」「～ニハ」「～デハ」などが中立的なタイプとがありそうだということは、お
なじ形でも、その文や成分のタイプによって、異なった意味や機能をもつこ
とがあることを示している。たとえば、主語の「～ハ」と「～ガ」については、
すくなくとも、

- { 雨ガ 降ッテ イマス。(中立的な非主題的主語)
雨ガ コノ 交通事故ノ 原因デス。(指定強調的な主語)
{ 雨ハ 自然現象ノ 一種デス。(中立的な主題的主語)
雨ハ 降ッテ イマス。(風ハ 吹イテ イマセン。)(対比強調的な主語)

などの区別がある。

「モ・サエ・コソ・デモ」などの係助詞があるばあいは、それらのないばあ
いにくらべて、変容がきわだっているといえるであろう。また、助詞のつかない
名詞のはだかの形も、SやM₂の変容と認められるものがある。(「ワタクシ
知りマセン。」「ソノ 本 トッテヨ。」など)

なお、係助詞のあるなしの交換が不自由な文もある。たとえば、疑問詞など
を含む疑問や質問の文では、疑問詞の成分には係助詞がつかない(「ダレハ ガ
ラスラ コワシタカ?」とはいわない)。また、ある種の自立語の述語は、
「～ガ」「～ハ」のうちいずれかの主語を選ぶというような現象もある。たと
えば、

(「～ハ」と言いかえられない「～ガ」)

▽コウイウ モノヲ 大ヅカミニ 調ベナキャ イケナイト イウ コトガ(8) 第
一デ アリマス(2)。 (123-36-8)

(「～ガ」と言いかえられない「～ハ」)

▽コレハ(8) モッテノ ホカデス(2)。 (124-32-15)

補注) 中立的な主語が「～ガ」タイプのものと「～ハ」タイプのものとの対立は、

文（および付加構文の従属句）の主語においてだけおこるようである。連体修飾語内部の主語においてはもちろん、ここでいう状況語や複合構文の従属句の内部の主語においても、こうした対立はない。（そこには、主題的な主語「～ハ」は現われない。そこでは、中立的な主語は「～ガ」だけである。したがって、中立的な主題的主語「～ハ」の変容である指定強調の「～ガ」の意味もそこでははっきり浮かび上がってこない。「太郎サンガ 委員長デス。」と「太郎サンガ 委員長デ アルコトハ……」との「太郎サンガ」の意味のちがいに注意。前者には指定強調のニュアンスがあるが、後者にはそうしたニュアンスはないであろう。）

こういった点で、文（および付加構文の従属句）の主語は、他の二次成分内部の主語とちがった面がある。

主題的な「～ハ」は基準構文の成分の陳述的な変容としては文（および付加構文の従属句）の主語（およびM_?）にしか現われないが、対比強調の「～ハ」や他の係助詞による変容は、文の主語以外の成分（二次成分としての主語、一次成分としての主語以外の成分）にも自由に現われうる。主題の「～ハ」は、この点で、他の変容とは質を異にするようである。これを他の変容と同一の次元で扱ってよいかどうかは疑問がある。残された課題である。

さらに、この主題的な「～ハ」は、付加構文の付加的な部分とここでみなした陳述的成分(T)の「～ハ」（「パセリハ ミジンギリニ シタ モノヲ 使イマス。」の類）と“主題を表わす”という面では共通している。

われわれの構文の扱いでは、この面の共通性は浮かび上がらない。この面を扱う部門を文型のどこに位置づけるかも今後の課題である。

2・1・4 語順の変換

一次成分どうしのあいだの語順は比較的自由であるが、その自由さにもいろいろなタイプがあるようである。たとえば、/SH₁Z/の骨組みのように、ふつうはほとんどSH₁Zという語順で現われ、その他の語順、H₁SZなどはまれにしか用いられないようなタイプもあるし、/M₂SZ/（M₂がかりかを示すばあい）のように、M₂SZの語順のほかにはSM₂Zという語順が比較的よく現われるようなタイプもある^{注)}。前者のような比較的固定的な語順をもったタイプでは、その変換は、それに応じて、陳述的変容（強調その他の意味ないし表現効果）がきわだつてであろうし、後者のような比較的浮動的な語順をもったタイプでは、そのあいだの語順の変換は前者ほどの効果をあげないであろう。語順の変換は、それ自身として一定の陳述的な意味のちがいに対応するものではなく、他の条件（ここでは構文の型における語順上の性格）とからみあっ

て、全体で陳述の意味と対応するのであろう。

注) 共通資料のうち、いわゆる句を含まない文では /SH₁Z/ は 29 例、 /H₁SZ/ は 1 例であり、"ありか₁を表わす M₂については M₂SZ は 24 例、 SM₂Z は 4 例であった。

固定的なタイプ、浮動的なタイプのちがいは相対的なものである。それぞれの構文の型によっていろいろな段階のものがあるようであって、それぞれの型において、その性格を明らかにしなければならないであろう。

また、同じ構文の型に属するものであっても、語順上の性格が同じであるとは限らない。たとえば、慣用的な SZ である「気が ツク」などは普通の SZ と比べて、そのあいだのむすびつきが固く、そのあいだに M₂ や R などがほとんどはいらないであろう。(「コレニハ 気ガ スコシモ ツキマセンデシタ。」などとはあまりいわない)

したがって、ばあいによっては、それぞれの構文の型をさらにいくつかにかけて扱わなければならないかもしれない。(M₂のようなものは、下位区分しなければならない)

さらに、語順は、あるばあいには、係助詞による変容とからんでいて、同じ構文の型でも、そのうちの成分の係助詞による変容のちがいと語順のちがいとが相互関係をもっているばあいもある。たとえば、M₂S ~ SMZ₂Z では、S が「～ガ」のばあいと「～ハ」のばあいとでは、M₂ と S との語順のちがいがありそうである。前者のばあいには M₂SZ、後者のばあいは SM₂Z というよ^{注)}うな。もしそうだとしたら、このばあいの陳述の変容は格助詞と係助詞との交換と語順の変換というふたつの手つづきで表現されているといえるだろう。このばあい、M₂ と S との語順の変換だけをとりだして、その意味的なちがいを論じることではできないであろう。この語順の変換はむしろ「～ガ」→「～ハ」の交換に従属しているとみることができよう。

注) 上の注であげた資料で"ありか₁の M₂をもつ /M₂SZ/ ~ /SM₂Z/ の語順と係助詞のあるなしとの関係は、次のようであった。

/M ₂ SZ/ 24 例	～ニ (係助詞あり)	～ガ	13
	～ニ	～ガ	11
/SM ₂ Z/ 4 例	～ハ	～ニ	3
	～ハ	～ニ (係助詞あり)	1

つまり、Sが「～ガ」のものは全部M₂SZであり、「～ハ」のものは全部SM₂Zであった。この資料の数がすくないので、はっきりしたことはいえないが、M₂の方の係助詞のあるなしは、語順の変換とあまり関係がないようである。

一般に、浮動的なタイプほど、他の要因（上の例でいえば、「～ガ」→「～ハ」による主語の主題化あるいは対比強調）に従属した語順の変換が現われやすいといえるかもしれない。（むしろ、それを浮動的なタイプといったのかもしれない。）

文型研究にとっては、それぞれの構文の型において、どのような語順が陳述的変容として中立的であるかを明らかにする必要がある。（中立的な語順が1つときめられないタイプもあるかもしれない。）また、それと同時に、どのような条件にあるばあい、どのように変換されるか、変換された語順はどのような陳述的な意味ないし表現効果をもつか（あるいは、もたないか）を明らかにする必要がある。このばあい、各構文の型（必要に応じてそれを下位区分したもの）の語順上の性格（浮動的か固定的か）や、他の陳述的変容の手つづき（係助詞のあるなし、卓立のイントネーションのあるなしなど）との関連などを考慮する必要があるだろう。こうした調査は、数多くの等質的な資料を分析して、要因の単純なものから、複雑なものへと段階的にすすめるべきではないであろう。対象が複雑であるから、資料が少ないばあいには、分析のしようがない。今回は、骨ぐみ成分の語順の小調査を試みたが、数が少なくて分析ができず、その結果はたいして意味をもたないので、ここでは記述を省略する。

補注) 語順の変換は、一次成分どうしの間で行なわれるのが原則である。（というよりも、ここでは、語順の変換がふつうに行なわれうるということを一成分の特徴とみなしたのが実情である。Ⅲ・1・2・2「一次成分」参照。）ところが、他の特徴から一次成分であることがはっきりしている成分が、他の一次成分の内部に、その構成部分（二次成分など）のあいだに、間投的に挿入されていることがある。たとえば、次の例の／／で示された成分がそれである。

▽シタガッテ(T) イカナル 法律ヲ モッテモ、コノ 人権ヲ 制限スルト イウ
コトハ /ワタクシハ(S) / デキナイ モノデ アルト(H₂) カヨウニ(h₂) 考
エテ イマス(Z)。 (126-51-11)

▽ソレカラ(T) ツギニ(T) サッキ 申シアゲタ /ワタクシハ(S) / 愛情が
必要ジャ ナカロウカト(H₂) 思ウ(Z)。 (126-53-6)

▽オ互イノ 人格ヲ 尊重シアウ コト コレガ 人權ノ /ワタクシハ(S)/内容
ヲ ナス モノダト(H₂) カヨウニ(h₂) 考エテ イマス(Z)。 (126-57-7)

▽ソコデ(T) コノ 六ツノ 活用形ト イウ モノニハ(M₂) /カナラズシモ(T)
ワレワレハ(S)/ コダワル 必要ハ(S) ナイ(Z)。 (123-5-19)

▽シカシナガラ(T) コレヲ 祝賀会ダケニ 終ワラセナイデ コノ 区切り目ヲ一
境ニ イタシマシテ エー コノ 研究所ガデスネ モット 拡大サレ 強化サレ
テ イク コトヲ /ワタクシハ(S)/ 心カラ ア 切望 ウ スル モノデ
ゴザイマス(Z)。 (124-5-22)

▽デ(T) エー コウイウ イワユル コノ 音声的ナ 要素ガ エー /話シコト
バデハ(J)/ オー 文法ニ アズカル 点ガ(S) スクナクナイ(Z)。

(122-17-15)

▽ワタクシハ(S) ドウカ(T) コノ タビノ 総選挙ニ オキマシテ ミナサンガ
タガ 沖縄ノ 人タチト 同ジヨウニ 勇気ヲ モツテ /ドウカ(t)/ 日本共
産党ニ 対シマシテ オオッピラニ 積極的ニ 支持シテ クダサル コトヲ(M₂)
オ願イイタシマス(Z)。 (124-36-8)

▽シカン(T) ダカラト イッテ(T) 冒険ト イウノハ(S) パカナ メチャメチ
ャナ 勇気ヲ 出シテ 身ヲ 危険ニ シテ ソレコソ 一生 トリカエシノ ツ
カナイ ヨウナ ケガナドヲ スル コトデハ /モチロン(T)/ アリマセン
(Z)。 (126-12-17)

▽(略) ヒトツ カストロサン ン ヒマガ アッタラ エー モスクワモ 訪問シ
マセンカト イウヨウナ コウ /タイヘン(R)/ エー 親善関係ヲ(M₂) アタ
タメタソウデ アリマス(Z)。 (127-9-1)

これは、おそらく話しことばの性格と関連があるものと思われる。あるものは、不
整的な表現とも関連があるであろう。(23ページ「『ワタクシハ』の受けのないもの」
参照。) 不整的な表現として除外したものをも含めて、このような現象と 構文の型と
の関係を考察する必要がある。(鈴木重幸)

2.2 「主題一解説」の類型について

2.2.1 目的

本項の目的は、独話資料における「主題一解説」の文構成の実態を調べ、総
合的文型についての基礎的調査研究の1つとすることにある。

2.2.2 「主題一解説」の意味

たとえば、

▽子ドモタチハ 感受性ガ 強い。 (124-21-3)

▽(略) 父親ニ 対スル 嫉妬モ 見ラレル コトガ ゴザイマス。 (125-13-12)

などに顕著なように、「ハ・モ」などによって示される成分のはたらきは、「ガ」によって示される狭義主語の成分のはたらきとちがう。「ハ・モ」などのいわゆる係助詞によって示される成分は、一般に、文末まで係る。つまり、文末まで意味的な直接関係を持つから、連体修飾句のなかでは納まりきれないが、主語の成分は、その述語まで係るから、連体修飾句のなかにも納まることのできるという。たしかに、この事実によって象徴される係助詞機能と格助詞機能とのちがいは、国語の構文上、注目すべき現象である。しかし、だからと言って、「ハ・モ」は係助詞機能だけを果たし、「ガ」は格助詞機能だけを果たすとは言いきれない。「ハ・モ」については、

○彼女^{カノコ}ハ 酒^{サケ}ハ 飲^{ノム}マナイ 人ヲ 夫ニ 選^{シユ}ビマツタ。

○予防注射^{カクシ}モ シテ クレル 医者ニ 行^イキナサイ。

などは、それぞれ「酒ハ 飲マナイ 人」,「予防注射モ シテ クレル 医者」という形で、連体修飾句のなかに納まる。ここでは、「ハ・モ」が格関係（2例とも「ヲ」格を内包する）のうえに、副次的な限定的意味を加える副助詞機能を果たしていると言えよう。

また「ガ」については、質問への答えとして、

○カレガ 小山デス。（←小山サント イウノハ ドノ カタデスカ?）

○レコードガ 買イタインダ。（←君ノ 買イタイノハ ナンデスカ?）

のように、それぞれ、「小山ト イウノハ カレデス」,「買イタイノハ レコードダ」のひっくりかえしだと言われることもあるように、相手との諒解ずみでないもの、つまり普通なら述語に置く「カレ」「レコード」を、主語の位置に置く表現がある。こういうばあいの「ガ」のはたらきが、一般の事実判断の主語を示す「ガ」のはたらきと同じだということは疑問だと思われる。少なくとも特殊な主語としなければならないであろう。

一般に「ガ」で象徴される判断を事実判断と呼び、「ハ・モ」で象徴される判断を解説判断と呼べば、「主語」というのは事実判断の対象体を表現するものであり、「述語」というのは事実判断の判断のありかたを表現するものである。これに対応して、「主題」というのは、解説判断の対象体を表現するものであり、「解説」というのは解説判断の判断のありかたを表現するものである。事実判断はいわゆる存在判断を含むし、解説判断はいわゆる命題判断を含

む。いずれも、やや広い意味に使うものとするれば、判断の対象体である点で、「主語」と「主題」は共通性を持ち、判断のありかたである点で、「述語」と「解説」は共通性を持つ。その共通性のために、短いいわゆる単純文では区別がむずかしいことがある。ものごとのありかた自体は同じものでも、それを事実判断として表現することもあり、解説判断として表現することもある。それは言語主体の表現の問題である。表現としてでなく、表現の解釈として、言語形式にその特徴的意味・機能を付与しようとするとき、一般的に「ガ」は格助詞であり、「ハ・モ」は係助詞だと言うのであるが、その前提のもとでは、事実判断の対象体は「ガ」によって示され、解説判断の対象体は「ハ・モ」によって示されると言ってよいであろう。

以上のように、判断形式に事実判断・解説判断の2類を立て、細部についてはその分化型と見ることとするれば、これは以下のようにまとめられる。

- (1) 事実判断 ○本ガ アル。○ムカシ アル トコロニ オジイサント オバア
(主語—述語) サンガ 住ンデ イマシタ。○本ガ オイテ アル。○雨が 降
 ッテ イマス。○空ガ 青イ。
(特殊主語—特殊述語) ○カレガ 小山デス。○レコードガ 買イタインダ。○象
 ガ 鼻ガ 長イ。○帽子ヲ カブッテ イルノガ 彼女デス。
 ○オトナシイ ホウガ 妹デス。
- (2) 解説判断 ○雨ハ 降ルモノダ。○空ハ 青イモノダ。○人ハ 死ヌモノダ。
(主題—解説) ○空ハ 青イ。○人ハ 死ヌ。○子ドモハ 感受性が 強イ。
 ○象ハ 鼻ガ 長イ。○カレハ 胃ガ 丈夫ダ。○オジイサンハ
 オ酒ガ スキダ。
 ○人ハ コレハ 死ヌモノダ。○人, コレハ 死ヌモノダ。
 ○子ドモハ コレハ 感受性が 強イ。○子ドモ, コレハ 感受
 性が 強イ。
 ○象ハ コレハ 鼻ガ 長イ。○象, コレハ 鼻ガ 長イ。
 ○コノ カメラハ コレヲ 2万円デ 売ル。○コノ カメラ,
 コレヲ 2万円デ 売ル。
 ○コノ カメラハ コレニ 2万円 払ウ。○コノ カメラ, コ
 レニ 2万円 払ウ。
 ○コノ カメラハ 2万円デ 売ル。○コノ カメラハ 2万円
 払ウ。

ここでは、上記の(2)解説判断の類型を当面の独話資料について調査し記述

するものである。

2・2・3 独話資料での実態

もっとも多かった型は、「主題(ハ)一解説」の単一のものである。(ここにとりあげることとした型に該当する文例は、すべて「句を含まない文」を対象とすることと限定し、全部で906例であったが、そのうちの過半数567例が、この単一の「主題(ハ)一解説」の型である。)たとえば、

▽ジョンソンノ ホウハ デンバー大学ノ 特殊教育ノ 学長デ ゴザイマス。
(122-9-12)

▽コレハ 四段活用ノ バアイデ アリマス。 (123-3-23)

▽(略) 社会党ハ ナカナカ 言ウ コトヲ 聞キマセン。 (124-35-2)

▽台所デ イチバン ジメジメシガチナノハ 流シノ シタノ 所デ ゴザイマス
ネ。 (125-19-7)

▽(略) 四オグライマデノ 時期ト イウノハ 自分デ 体ヲ 制御スル コトヲ
知りマセン。 (126-10-15)

▽第1回ノ 閣僚会議ハ 来タル 四月十九日 開カレル 予定ニ ナツテ オリマ
ス。 (127-3-20)

などだが、ついで多いのは、おなじく「主題(ホ)一解説」の単一のものである(95例)。たとえば、

▽発表ノ 時期モ 同ジヨウナ モノデ アッタノデ アリマス。 (122-3-22)

▽(略) イウヨウナ コトヲ 研究スルト イウ 立場モ アル ワケデ アリマ
ス。 (123-37-12)

▽(略) ワタシモ ヒトツ 注文ヲ 出シタイト 思イマス。 (124-19-3)

▽(略) ドレモ ソクナニ 値段ノ 高イ モノデハ ゴザイマセン。 (125-21-18)

▽(略) コレモ マタ 心配デスネ。 (126-1-9)

▽(略) 机ノ シタデ コンナ 足ノ 体操ヲ スルノモ ヨイデショウ。
(123-32-18)

などであり、これに準ずる「主題(コ)一解説」で助詞のないものもある。(21例。これらのうち、あるものは、「ガ」の格とも解釈される。ぜひ「ガ」の格と解釈すべきものは「主語」とみとめ、他は、ここに一括した。)

▽(略) イチガイニ コレ ヤハリ 何トモ 言エナイ。 (123-36-20)

▽(略) 自由民主党 マタゾロ 七百億円減税ト イウ 看板ヲ 持ち出シマシタ。
(124-33-16)

▽キョウハ ハンペンノ オツユ, (略) ソシテ 青葉御飯ナド イカガデ ゴザイ

マシヨウカ。(125-22-10)

▽(略) 急ニ パット トマルヨウナ コト デキナインデス。(126-10-16)

▽(略) ミコヤンサン (略) 大変 活躍ヲ シテ オルト。(126-10-17)

単一の「主題一解説」の型として主要なものは以上の3型であろうが、助詞の機能から見れば、「ハ」や「モ」に準ずると見られる「デモ」(5例)「ダッテ」「デハ」「サエ」「シカ」「ナラ」(各1例)をとるものが少しある。

たとえば、

▽(略) コレデモ レインジニ、頻度十デ アリマス。(122-4-19)

▽(略) ドレクライノ 高サカラ トベルカ 自分デモ ワカラナイ ワケデス。
(126-10-19)

▽(略) 女ノ カタデモ モチロン ソウデス。(126-16-12)

▽(略) 夫婦ノ 問題デモ ソウデシヨウ。(126-46-21)

▽(略) 健康ナ 人デモ 食欲ガ ナクナルトカ ダルクナルトカ イタシマス。

▽雨具ダトカ (略) 袋, (略) 風呂敷 (略) テーブルカケダッテ ソウデスネ。
(127-28-16)

▽蔭介石ヤ 李承晩ガ コワイヨウナ 人間デハ トテモ トテモ 話ニ ナリマセン。
(124-30-16)

▽(略) 演説モ (略) 岸サンヨリハ ムシロ ウケガ イト 言ウ 人サエ ア
リマス。(126-25-12)

▽(略) ソノ ^{ナカ}中ニモ 「大」ノ字ガ ^{オオキ}「オオキ」ト イウ 読ミカタシカ ノッテ
オリマセン。(122-1-4) (*「ハ」が正しい言いかたであろう。)

▽シカシ タイガイノ 男ナラ コレデ マイッテ シマイマス。(126-26-4)

以上の諸例は、みな「主題一解説」に内包される格関係が、「主語(ガ)一述語」の関係にあるものばかりであるが、「主題一解説」に内包される格関係には、その他の格関係、とくに「ヲ」格や「ニ」格を持つものが多い。たとえば、

▽(略) ソレニ ツイテノ 説明ヲ 申シアゲルト イウ コトハ 省略イタシマス。
(122-14-26)

▽確カニ 記者ガ 書イタ 文章ハ ヨク 理解シタ。(123-37-7)

▽(略) コレラノ 指導者ノ 追放ハ イタサナケレバ ナリマセン。(124-21-14)

▽ソレデ 母子手帳ト イウノハ (略) モウ ヒトリノ アカチャント イウ コト
デ 2冊 モラウ ワケデス。(125-26-17)

▽(略) ソレデモ ヤッパリ 本ハ 読マナケレバ イケナインデシヨウカ。
(126-1-8)

▽デ ソノ オ塩ハ (略) 少シ 多メニ オ使イクダサイマスヨウニ。
(127-16-9)

▽(略) 表ニ ヨル 調査モ イクツカ 行ナッテ オリマス。 (122-24-12)

▽ケレドモ コレモ イレナキヤ イケナイ。 (123-27-10)

▽(略) ソウイウヨウナ ユトモ 会ノ トキニハ 皆サンガ オ話シニ ナッテル
ワケデ ゴザイマス。 (124-7-15)

▽ジフテリヤノ 予防注射モ ヤリマス。 (125-28-7)

▽ソレデ スローガンモ (略) ソノヨウニ イタシタ ワケデ ゴザイマス。
(126-44-19)

▽エビトカ ソレカラ ピーマンナンカモ ナマデ イタダキマス。 (127-20-15)

などは「ヲ」格を内包する。こういう「ハ・モ」などに内包される格は、どういふものか、当面の資料の範囲では、「ヲ」格と「ニ」格だけが考えられて、他の格は考えられないようである。とくに上記のような「ヲ」格が圧倒的に多い。(右の表参照。○…助詞ゼロ)

「ニ」格を内包すると見られる「ハ」「モ」の文というのは、4例で、

	ヲ	ニ	計
～ ハ	48	3	51
～ モ	29	1	30
～ ○	20	0	20
計	97	4	101
～ シカ	1	0	1
～ サエ	1	0	1
～ ダケ	3	0	3
～ダケハ	1	0	1
～ デモ	1	0	1
計	7	1	8
合 計	104	5	109

▽(略) コノ オフサルモグラフハ アトデ マタ モウ イチド クワシク 触レ
マス。 (123-40-18)

▽デ マズ ソノ 切ラレマシタ モノハ オ塩ヲ イタシマス。 (127-16-9)

▽エー カタッポウハ イマノ オー タダノ ^{ワズ}綿ヲ 入レマシタヨ。
(127-25-14)

▽顔ノ シワヲ 気ニ スルト 同様、足ノ シワモ ^{ジユウケン}十分 ゴ注意 クダサイマセ。
(127-33-5)

である。「ニ」格とも「ガ」格とも考えられるばあいには、「ガ」格のほうに入れた。また、「構文」の章では、「ニ」格を内包する「ハ・モ」をともなう成分は、「陳述的成分」に属している。(このほか、不整と見られる表現は、ここから除外して、その項で扱ってある。)

これら、「ヲ」格や「ニ」格を内包すると解釈される「主題」あるいは「主題的表現」を、本項に扱う対象の範囲に入れるかどうかは、規定のしかたとともに、論のわかれるところであるが、ここには、こういう格関係を内包していても、主題的に表現するところが、日本語の構文の1つの特徴だと思われ、その意味で「陳述的成分」という「構文」の面からの考えも出てくるから、問題としても興味あるところなので、広義「主題」に含めることとしたのである。

以上は、単一の「主題—解説」の構文であるが、このほか、成分の組み合わせによる比較的複雑な「主題—解説」の構文がいろいろある。はじめに例示した「子ドモタチハ 感受性ガ 強イ。」などもその1つだが、以下に順次その例を挙げる。大体の順序は、

a 「ガ」格の成分のものばかり2つ以上を含む構文

b 「ガ」格は1つで、他に「ヲ」「ニ」などの格の成分1つ以上を含む構文

c 「ガ」格を含まず、「ヲ」「ニ」などの格の成分2つ以上を含む構文

であり、その細目は下記のとおりである。(ただし、「ヲ」「ニ」などの格助詞を伴わない成分についての構文に限定し、例示の記号はつぎのように定める。 ～…「ガ」の格の成分、 ≈…「ヲ」「ニ」などの格の成分、 —…述語の成分、 ○…助詞ゼロ)

	(例数)		(例数)
a (1)	～○ ～○ — (1)	b (1)	～○ ≈ハ — (3)
(2)	～ハ ～ハ — (36)	(2)	～ハ ≈ハ — (2)
(3)	～ロ ～モ — (3)	(3)	～ハ ≈モ — (2)
(4)	～モ ～ハ — (1)	(4)	～ハ ≈シカ — (2)
(5)	～モ ～モ — (2)	(5)	～ハ ≈デモ — (1)
(6)	～モ ～シカ — (1)	(6)	～モ ≈モ — (2)
(7)	～ハ ～ハ ～ガ — (4)	(7)	～モ ≈モ ～ガ — (1)
(8)	～ハ ～ハ ～ハ — (3)	b' (8)	≈ハ ～○(ガ) — (1)
(9)	～モ ～ハ ～ハ — (1)	(9)	≈ハ ～ガ — (3)
(10)	～モ ～モ ～モ — (1)	(10)	≈モ ～ガ — (1)
a' (11)	～○ ～ガ — (1)	(11)	≈ハ ≈ハ ～ガ — (1)
(12)	～ハ ～ガ — (56)	c (1)	≈ハ ≈ハ — (2)
(13)	～モ ～ガ — (2)	(2)	≈モ ≈モ ≈モ — (1)
(14)	～ハ ～ガ ～ガ — (2)		以下に例文を記す。

- a (1) ~ ○ ~ ○ — ▽財源 決シテ 不自由 ゴザイマセン。(124-26-2)
- (2) ~ ハ ~ ハ — ▽モ・テムハ ソノ 五十語ハ 意義ノ 広イ コトバ。
(122-7-1)
- ▽六ツノ 活用形ト イウ モノニハ カナラズシモ 我々ハ コダワル 必
要ハ ナイ。(123-5-19)
- ▽シカシ 政府ハ 一言モ 本当ニ ハッキリシタ コトハ 言エナイ。
(124-31-1)
- ▽(略) ヨク 知ッテ イルノハ コレハ オ料理ヤサンダトカ (略) オ
呂ヤサン。(125-24-2)
- ▽コレハ, 本人ノ 実話デスカラ, マチガイハ アリマセン。(126-24-8)
- ▽(略) オ目ニ カケテ オリマスノハ コレハ (略) スイファント イウ
オ料理ナンデ ゴザイマス。(127-20-4)
- (3) ~ ハ ~ モ — ▽日本ノ 国民ノ コトモ 彼ラハ ヨク ワカラナイ。
(124-32-4)
- ▽(略) 梅毒ト イウ 病氣ハ (略) 知ラナイ マニ 不幸ニシテ ウツツ
テル パイモ ナイ ワケデハ ナイ。(125-27-5)
- ▽エラクナイ 人ハ 「イワン」ダケノ 人モ アル。(126-16-13)
- (4) ~ モ ~ ハ — ▽(略) コレモ スデニ 解決ノ 方向ハ アル ワケデス。
(127-27-16)
- (5) ~ モ ~ モ — ▽(略) コノ 否定形ト イウ フウナ 形モ コレモ ヤハ
リ 内容デ アリマス。(123-8-7)
- ▽崖サンモ ドウモ ダンダン (略) 振りマワサレタ 感じモ アリマス。
(126-26-22)
- (6) ~ モ ~ シカ — ▽(略) コレモ デスネ (略) 基礎ト ナル 読ミノ ヨウナ
コトシカ 考エラレナイ。(123-27-8)
- (7) ~ ハ ~ ハ ~ ガ — ▽(略) 「水ガ 出ナイ」ト イウノハ コレハ 一ツノ
客体的ナ 状態ヲ 表ワス 形トモ 考エル コトガ デキマス。
▽ソレハ (略) コノ 類ノ 活用形ハ サラニ 第三次活用ヲ スル コトガ
デキル ワケデ アリマス。(123-12-2)
- ▽(略) セマク シタ ホウガ 能率ハ (略) 送信ヲ 送ル ホウノ 能率ハ
高マル ワケデス。(123-44-13)
- ▽コノ 玉ツキハ (略) コレハ タイヘン 値段ガ 高インデス。
(127-25-2)
- (8) ~ ハ ~ ハ ~ ハ — ▽コレハ (略) コレガ 絶エマ ナク 続ケラレテ
イルト イウ 状態ハ 反面ニ コウイウ コトガ アルト イウ コトハ
(略) 経済ノ 繁栄ガ 国民生活ノ 向上ト イウ モノト 結びツイテ

オラナイト イウ チグハグナ 状態デ アルカラデ ゴザイマス。

(124-23-3)

▽岸政府ハ 日本政府ハ アメリカカラ 核兵器ヲ モラッタ コトハ ナイト。
(124-31-8)

▽コウイッタ シキノ モノハ ソレハ 効果ハ アリマセン。(125-8-10)

(9)~モ ~ハ ~ハ — ▽(略) ミンナガ ツギツギニ アレコレト 言ウノモ
コレハ 叱ラレタ 本人ハ 反発ヲ 感ジマス。(125-8-15)

(10)~モ ~モ ~モ — ▽(略) 賛成ノ オ声モ 反対ノ オ声モ マッタク
無關心ト イウ オ声モ ゴザイマシタ。(127-31-10)

a (11)~〇 ~ガ — ▽(略) 昔ニ ナリマスガ, ワタクシ ニューヨークニ マイ
リマシタ コトガ アリマシタ。(124-2-11)

(12)~ハ ~ガ — ▽(略) 助動詞ヲ 持ッテ イル 活用形ハ (略) サラニ
再活用スル コトガ デキマス。(123-12-4)

▽子ドモたちハ 感受性が 強イ。(124-21-3)

▽(略) ピンヤ ツボヲ 置ク 下ノ アタリハ (略) カワカシテ オク
コトガ タイセツデ ゴザイマス。(125-19-13)

▽農村ナンカハ コノ 近隣ノ 生活ガ 家庭生活ト イッショニ ナッテ
オリマス。(126-49-17)

(13)~モ ~ガ — ▽ワタクシモ ホカノ アレデ 読ンダ コトガ ゴザイマス。
(122-9-8)

▽(略) 父親ニ 対スル シットモ 見ラレル コトガ ゴザイマス。

(125-13-12)

(14)~ハ ~ガ ~ガ — ▽(略) 学習活動ッテ イウ モノハ (略) 大部分ガ
コレガ (略) 生活経験ト イウ モノニ ナッテル ワケデス。

(123-32-3)

▽コショウナンカハ 最後ニ オフリニ ナッタ ホウガ カオリガ ヨウ
ゴザイマス。(127-21-7)

b (1)~〇 ≈ハ — ▽ジョンソントノハ ワタクシ 知りマセン。(122-10-1)

▽(略) 梅毒ナンテ イウ オソレハ ナイト コウイウ コトハ ミナサン
オ考エデショウ。(125-27-4)

▽(略) 燃エカタヲ スルッテ イウノハ セルロイドデ ミナサン ゴゾン
ジデスネ。(127-25-12)

(2)~ハ ≈ハ — ▽コレハ, 生命ノアルカギリハ, (略) 自分ノ 胃袋ハ 保
護シテ オルンデ アリマス。(126-53-2)

(3)~ハ ≈モ — ▽ カレハ (略) 東条内閣ノ 商工大臣モ ツトメマシタ。
(124-32-9)

▽バスノ 車掌サンモ コウイウ 面モ 先輩ハ 活躍シテ オラレル ワケ

デ アリマス。(127-22-19)

(4)〜ハ ≈シカ — ▽(略) 岸サンハ コンナ コトシカ ヨーク イワナイ。
(124-31-6)

(5)〜ハ ≈デモ — ▽チョット 親ハ 危険カナート 思ウヨウナ コトデモ
(略) ヤラシテモ イインジャ ナイカシラ。(126-10-6)

(6)〜モ ≈モ — ▽使用者側モ (略) 一機関デ アルカノ ゴトク 考エル
トコロノ 考エカタモ コレマタ 捨テナケレバ ナリマセン。
(124-21-17)

▽(略) イヤナ 季節モ 心ガケンダイデハ (略) 楽シク 迎エル コトモ
デキルノデハ ナイデショウカ。(12-18-6)

(7)〜モ ≈モ 〜ガ — ▽(略) カビノ 繁殖ナドモ (略) 真夏ヨリモ (略)
ツウドキノ ホウガ ズット 早イノデ ゴザイマス。(125-18-3)

b(8)〜ハ 〜〇(ガ) — ▽(略) コレガ オソロシイ 戦争デ アル コトハ ワタ
クシ 申スマデモ ゴザイマセン。(124-20-15)

(9)〜ハ 〜ガ — ▽(略) ソノ 漫画病ノ 診断法ハ 小学校ノ 先生ガ オ決
メニ ナッタンダソウデス。(126-3-1)

▽(略) ソノ 中デモ コノ 池田夫人ハ ミンナガ ホメマス。
(125-23-18)

(10)〜モ 〜ガ — ▽(略) ヤキモチノ アラワレモ イロンナ 原因ガ 考エラ
レルカモ シレマセン。(125-17-13)

(11)〜ハ ≈ハ 〜ガ — ▽コノ 生命ッテ イウ モノハ イカニ 神秘的ナ
モノデ アルカハ コレハ ワタクシガ 申シアゲルマデモ ナイ。
(126-52-15)

c(1)〜ハ ≈ハ — ▽(略) 六ツノ 活用形ト イウ コトハ コレハ 一応 別
ニ 考エタラ イイ ワケデ アリマス。(123-5-20)

▽(略) 先生ガタノ 愚カナ 行為ト イウ モノハ コレハ タダチニ ヤ
メサセナケレバ ナリマセン。(124-20-5)

(2)〜モ ≈モ ≈モ — ▽態度モ 技能モ 知能モ ゼンブ 含ンデル。
(123-30-21)

2・2・4 文型への参与

前節に見るような「主題一解説」の型は、当面の独話資料でのものであつて、これで話しことばにおける「主題一解説」の型の細部について、すべてを尽くすわけではないし、これらのすべてを総合的文型に加えなければならないというわけでもない。成分の組み合わせを考えれば、もっと多くの型が得られるし、逆に、並列や指示の同位の関係にある主題を、1つ1つ別の型に立てる

必要は、かならずしもないかもしれない。目的に応ずることでもあるが、前節の例について見ても、主題・主語の重複する型のなかのかなりのものは、並列や提示の関係にあり、これらをも含めて複合ないし重複という分化型を立てることもできよう。

ここで前述第2節『主題一解説』の意味において概観した種々の型を、実際に見られた前述第3節の各文型と対照して整理しなおすならば、以下のようになる。

単一の「主題一解説」の型のうち、主題が「ガ」格のものは、もっとも一般的な型であって、量的にも過半数を占める。主題が「ヲ」格・「ニ」格のものについては、「主題」を広義に解して、この型に含めて一括して扱ってきたが、一方では、格と言っても、主格と目的格・補格などとは区別すべきだとも考えられる。すなわち、「ガハ」「ガモ」という助詞の複合はありえないが、「ヲバ」「ヲモ」「ニハ」「ニモ」などありうるということも根拠となって、「ガ」格の主題と「ヲ」格・「ニ」格などの主題とは区別すべきだとも考えられる。そのばあいには、「ガ」格の主題を「直格主題」、他の格の主題をこれに対して「斜格主題」と称することとする。また、「構文」の章で、「提示語」とした「独立語」の一種は、このような直格・斜格の別をも超えた「主題」の一種と見られる。これを「無格主題」と称することとする。ただし、本項は、「ハ・モ」の有無によって、「主題」という「陳述的成分」と、「提示語」という「独立語」とを区別する立場に立つものではないから、直格か斜格かに解釈しうるものは、それぞれにそのいずれかに属させ、その解釈に無理があると見られるばあいにはのみ無格に属させることとした。

つぎに、単一でない「主題一解説」の型は、これらの分化型であって（前出の例文から1例を引く）、

- (1) 主題—解説
 <主語—述語>

▽コドモたちハ 感受性ガ 強イ。 (124-21-3)

の型が、まず、目につく。

つぎに、主題が2つ以上あらわれて、

(2) 主題—主題—解説

▽(略) ヨク 知ッテ イルノハ コレハ (略) オ風呂屋^ヲサン。(125-24-21)

(3) 主題—主題— $\frac{\text{解}}{\text{主語—述語}}$ — $\frac{\text{説}}{\text{主語—述語}}$

▽コノ 玉ツキハ (略) コレハ タイヘン 値段ガ 高インデス。
(127-25-2)

などの型をとるものが多いが、こういう主題2つ以上の多くは、後の主題が前の主題の指示であったり、繰り返してあったり、部分であったり、細説であったりするものであって、そういう関係にある主題は、構文上はたがいに同格に立つ。したがって、(2)は単一の「主題—解説」の型の分化であり、(3)は(1)の分化であると見られる。それぞれに、直格主題・斜格主題を持つから、こまかくはさらに2分されるし、前の主題を後の主題と区別して呼ばば、

(2)' 提示主題—主題—解説

の型と云うる。(3つの主題のときは、さらに、「題目主題—提示主題—主題—解説」のように区別して呼ぶ必要が起こると思われる。ただし、いずれも並列の同格でない主題のばあいについて言うべきであろう。)

つぎに、主題は2つであっても、成分の意味関係が違っていて、

(4) 主題—<主題—解説>

▽(略) ワレワレハ コダワル 必要ハ ナイ。(123-5-19)

の型がある。おおまかに言えば、これも、

主題— $\frac{\text{解}}{\text{主語—解説}}$ — $\frac{\text{説}}{\text{主語—解説}}$

の型で、単一の「主題—解説」の型の複合型と見られるが、こう見れば、主題・解説がそれぞれ2つあらわれるから、その区別を立てれば、上記同様、主題と提示主題を区別し、解説にも、解説と説明解説とを区別して呼ぶのが適当かと思われる。すなわち、(4)は

提示主題— $\frac{\text{説明解説}}{\text{主語—解説}}$

と示される。ということは、「解説」は主題に対する解説で、提示主題に対する解説は「説明解説」と呼ぶことである。(対応して題目主題に対する解説は「解題解説」とでも呼ぶべきかと思われる。)したがって、(2)'では解説が1つ

だが、意味的には、「解説」と「説明解説」とが重なっている。便宜、共通の「解説」で示してあるにすぎない。

以上のように対照整理を重ねると、ほぼ各例の構文の分類ができると思われる。ここには、前提として「判断」の2類を立てたが、ここでいう「判断」は「判断表現」においてはもちろん、「要求表現」にも内在するものと考えているから、それらを通じて整理分類の基盤としうらと思う。当面の共通資料の「句を含まない文」は、ほとんどすべて「判断表現」であったし、少数の「要求表現」についても、基本的な考え方の変更を必要とするものはなかったけれども、なお、多くの「要求表現」について、調査考察を行なうことが望ましいであろう。ここには、前述の範囲に関して、「主題—解説」の類型をまとめておくこととする。

(1) 単一の「主題—解説」の型

(2) 単一の「主題—解説」の分化型

(a) 「主題」の分化

- ① 「主題」には「直格主題」と「斜格主題」との別が立てられる。
- ② それぞれに、「主題」が2つ以上ある文においては、「主題」「提示主題」「題目主題」の別が立てられる。
- ③ そのうち2つの相互の意味関係において、後の主題が、前の主題に対して「指示同格」に立つことがよくある。(前の主題が後の主題に対する「指示同格」に立つことも、時として、ある。)
- ④ 2つ以上の主題が、相互に「並列同格」に立つこともあるが、そのばあいは、それ全体がまとまって「主題」となる。

(b) 「解説」の分化

- ① 「解説」のなかに「主語—述語」または「主題—解説」の含まれることがある。
- ② その「主題—解説」は、全体として「説明解説」として「提示主題」に対する「解説」となる。

以上のように考えられるが、ここでは、目的語・補語・狭義連用修飾語などの成分、および、連体修飾語とその内部の構造は捨象してある。そのうちのか

なりの部分の構文については、「構文」の章に述べられている。上記のまとめは、その組み合わせとして文型にあらわれるから、そのすべての組み合わせは相当の数にのぼり、前述した $a \cdot a' \cdot b \cdot b' \cdot c$ 合計 26 の文型は、その一斑にすぎない。『『解説』の分化』は、比較的簡単であるから、ここには、『『主題』の分化』を中心として、そのモデルを示して、本項のまとめに代える。

○「直格主題—解説」

- コノ カメラ, 2万円ダ。
- コノ カメラハ 2万円ダ。
- コノ カメラモ 2万円ダ。

○「直格提示主題—直格指示主題—解説」

- コノ カメラ, コレ, 2万円ダ。
- コノ カメラ, コレハ 2万円ダ。
- コノ カメラ, コレモ 2万円ダ。
- コノ カメラハ コレハ 2万円ダ。
- コノ カメラモ コレモ 2万円ダ。

○「直格提示主題— $\frac{\text{説明解説}}{\text{直格主題—解説}}$ 」

- コノ カメラ, 値段ハ 2万円ダ。
- コノ カメラハ 値段ハ 2万円ダ。
- コノ カメラハ 値段モ 2万円ダ。
- コノ カメラモ 値段ハ 2万円ダ。

○「直格題目主題—直格指示提示主題— $\frac{\text{説明解説}}{\text{直格主題—解説}}$ 」

- コノ カメラ, コレ, 値段, 2万円ダ。
- コノ カメラ, コレ, 値段ハ 2万円ダ。
- コノ カメラ, コレハ 値段ハ 2万円ダ。
- コノ カメラ, コレモ 値段ハ 2万円ダ。
- コノ カメラハ コレハ 値段ハ 2万円ダ。
- コノ カメラモ コレモ 値段ハ 2万円ダ。

以上が「直格」に立つ「主題」の分化によって見られる「主題—解説」の分化型として、主要なものである。例文はモデルにすぎないから、助詞についても、 $\overset{\text{ば}}{\text{〇}} \cdot \text{ハ} \cdot \text{モ}$ の大略を示すにすぎない。つぎに「斜格」に立つ「主題」の分化を、同様に示しておく。

○「斜格主題—解説」

- コノ カメラ, 売ルヨ。
- コノ カメラハ 売ルヨ。
- コノ カメラモ 売ルヨ。

○「斜格提示主題—斜格指示主題—解説」

- コノ カメラ, コレ, 売ルヨ。
- コノ カメラ, コレハ 売ルヨ。
- コノ カメラ, コレモ 売ルヨ。
- コノ カメラハ コレハ 売ルヨ。
- コノ カメラモ コレモ 売ルヨ。

つぎに、「無格」に立つと認められる「主題」の分化を、同様に示しておく。

○「無格提示主題—^{説明解説}—_{<斜格主題—解説>}」

- コノ カメラ, レンズ 売ルヨ。
- コノ カメラ, レンズハ 売ルヨ。
- コノ カメラハ レンズハ 売ルヨ
- コノ カメラハ レンズモ 売ルヨ。
- コノ カメラモ レンズハ 売ルヨ。
- コノ カメラモ レンズモ 売ルヨ。

○「無格題目主題—無格指示提示主題—^{説明解説}—_{<斜格主題—解説>}」

- コノ カメラ, コレ, レンズ 売ルヨ。
- コノ カメラ, コレ, レンズハ 売ルヨ。
- コノ カメラ, コレハ レンズハ 売ルヨ。
- コノ カメラ, コレモ レンズハ 売ルヨ。
- コノ カメラ, コレモ レンズモ 売ルヨ。
- コノ カメラハ コレハ レンズハ 売ルヨ。
- コノ カメラモ コレモ レンズハ 売ルヨ。
- コノ カメラモ コレモ レンズモ 売ルヨ。

以上のように考えると、「無格主題」は、「提示主題」「題目主題」のうち
<斜格主題—解説>を「説明解説」としているものに限定することになる。したがって、

- 地図ハ 下ノ 揭示モ 見テ クダサイ。
- ダイコンハ ハツパハ 捨テマス。

などの「地図ハ」「ダイコンハ」の類が「無格主題」に属することになる。

なお、「並列同格」に立つ「並列主題」は、2つ以上まとまって主題に立つから、直格にも斜格にも無格にも立つ。

- 「 $\frac{\text{直格主題}}{\text{<並列主題—並列主題>}}$ —解説」
○コノ カメラモ アノ カメラモ 2万円ダ。
- 「 $\frac{\text{斜格主題}}{\text{<並列主題—並列主題>}}$ —解説」
○コノ カメラモ アノ カメラモ 売ルヨ。
- 「 $\frac{\text{無格提示主題}}{\text{<並列主題—並列主題>}}$ — $\frac{\text{説明解説}}{\text{<斜格主題—解説>}}$ 」
○コノ カメラモ アノ カメラモ レンズハ 売ルヨ。

以上「『主題』の分化」を中心として「主題—解説」の主要と思われる型を示したが、これらの複合型は多岐にわたり、ここに記すには及ばないと思う。また、ここに触れることを避けた類似の表現の問題もあるが、当面の問題をまづははっきりさせたいと考え、ここでは省略した。 (宮地 裕)

2・3 表現意図との関連から見た状況語について

状況語のなかには、それが含まれる文の文末に現われる表現意図との関係が相当密接なものがある。とくにここで最初「句」という名称のもとに扱ったもの(連用形で終わったり接続助詞あるいは形式名詞で終わったりしているもの)については、それが問題になるように思われる。総合的な文型を考えるためにはどうしても注意を払わなければならない問題なので、その一端を取り上げておくことにする。

状況語のなかには文末における表現意図の現われに制約を加えると認められるものがある。たとえば、^{注1)}「～ノデ」という状況語があると、文末の述語には命令形、禁止の形(「～ナ」)、意志の形(「～ウ・ヨウ、～マイ」)などが現われにくい。「雨が 降ルノデ カサヲ 持ッテ イケ。」「字が ワカラナイノデ シビキヲ ヒコウ。」などとは言いにくい。このことはすでに指摘されている^{注2)}とおりでである。

注1) ここでは一応「状況語が、表現意図の現われに制約を加える」としたが、逆に「表現意図が状況語の現われを規定する」とする可能性がまったく否定されたわけではない。これについてはなお考えなければならない。

注2) 永野賢『『から』と『ので』とはどうちがうか』（『国語と国文学』334, 1952）

一方、文末の表現意図にこの種の制約を加えない状況語もある。「～バ」（仮定の条件を表わすもの）などはそうで、「（モシソノトキ）雨ガ 降レバ カサヲ 持ッテ イケ。」「（モシソノトキ）雨ガ 降レバ カサヲ モッテ イコウ。」「雨ガ 降レバ イクナ。」などいくらでもいえる。ところが、この「～バ」は上述の点については制約を加えないけれども、他の点で制約を加えることがあるように思われる。この種の「～バ」（仮定の条件を表わすもの）が文中に出てくると、文末には「～タ」（単純な過去を表わすばあいの「～タ」）が現われにくい。つまり、あたりまえの話だが、仮定の「～バ」と単純な過去の「～タ」とは共存しない。

「雨ガ 降レバ 中止シタ。」「雨ガ 降レバ 休ンダ。」という形はもちろんある。しかし意味がちがう。これは<雨ガ降レバ中止シタモノダッタ><イツデモ雨が降レバ休ンダ>という<過去の習慣、過去においてくりかえし現われた動作・状態>の意味を表わすのがふつうである。なお、東京その他関東地方の方言に出てくる「～タツケ」という形も仮定を表わす「～バ」とは共存しにくい。もし共存すればやはり<…シタモノダッタツケ>の意味になるのがふつうである。

また、「～テ」という形の状況語では、そのあるもの（継起する動作・状態などを表わすもの）は、上のような制約（「～ノデ」式のものおよび「～バ」式のもの）を述語の表現意図に加えない。「戸ヲ シメテ 出テ イク。」「戸ヲ シメテ 出テ イッタ。」「戸ヲ シメテ 出テ イケ。」「戸ヲ シメテ 出テ イコウ。」などどれでもいえる。ところで、同じ「～テ」という形の状況語でも、他のあるもの（理由などを表わすもの）は「～ノデ」と同様な制約を述語の表現意図に加えるようである。「風邪ヲ ヒイテ（＝ヒイタノデ）休ム。」「風邪ヲ ヒイテ（＝ヒイタノデ）休ンダ。」とはいうけれども、<風邪ヲヒイタカラ休モウ>の意味で「風邪ヲ ヒイテ 伏モウ。」とはいわない。<雨がフルカラ行クナ>の意味で「雨ガ フッテ 行クナ。」ともいえない。

そこで、最初「句」として扱っていたもののなかで状況語としたものをひろくながめてみると、大体次のようなことがいえそうである。

(1) 「～ノデ」のように述語に命令形、禁止の形、意志の形が現われにくい

もの。

(2) 「～バ」(假定を表わす)のように述語に「～タ」(単純な過去を表わす)が現われにくいもの。

(3) 「～テ」(継起する動作・状態を表わす)のように、上の(1)(2)の制約を加えないもの。

これについて大ざっぱに假定した結果を表にしてまとめて示すと次のようになる。

述語	状況語	J ₁	J ₂	J ₃
		連用形 ズ・ズニ テ ₁	バ ₁ タ ₁ ラ ₁ ラ ₁ モ ₁ (ト)	ト ナガラ ノデニ テ ₂ バ ₂ タ ₂ ラ ₂ モ ₂
命令		○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	× × × × × × × ×
～ナ(禁止)		○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	× × × × × × × ×
～ウ・ヨウ		○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	× × × × × × × ×
～マイ		○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	× × × × × × × ×
～タ(過去)		○ ○ ○	× × × × ×	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

イ J₁としたものは、述語の表現意図に制約を加えないもの。「～連用形」「～ズ(ズニ)」「～テ₁」いずれも <継起する動作・状態> (または並列的な動作・状態)を表わす。

ロ J₂としたものは、述語に「～タ」(単純な過去を表わす)の現われにくいもの。すべて、いわゆる仮定の条件を表わすものといってもよさそうだ。なお「～ト」は「雨が降ロウト 風が吹コウト」の「～ト」だが、その性格がややはっきりしない。一応ここに入れておく。

ハ J₃は、述語に命令、禁止、意志の形の現われにくいもの。「～ト」は「冬ニナルト 寒クナル。」の「ト」。「～ナガラ」はいわゆる逆接の「ナガラ」。連用語(R)とした「～ナガラ」(継続)とは区別する。「～テ₂」は先述のとおり理由などを表わすもの。「～バ₂」「～タ₂」は仮定の条件を表わすものではなくて、「フリカエッテ ミレバ 犬ハ マダ 門ノアタリヲ ウロウロシテ イタ。」「コレヲ ノメバ(イツモ) ネムレ

ル。」「行ッテ ミタラ モウ 終ッテ イタ。」などの類である。「～テモ」は J₂ とした仮定の逆接条件ではなくて、「チョット 考エテ ミテモ ワカリマス。」の類。「(略) 銀座ナドヲ 歩イテ オリマシテモ コノ カストロヒゲト イウンデ コレヲ マネシタヨウナ 人が オリマス。(127-8-24)」非常に大ざっぱにいうと、J₃ としたものはいわゆる確定(既定)条件関係の意味を表わすものといえるようである。

これについてはなお問題となることがいくつかある。そのうちのいくつかについて簡単にふれておく。

(1) 上にあげた状況語の分類はきわめて大ざっぱなものであって、こまかに見ていくと簡単にいかないような事実が出てくる。たとえば、同じ J₂ とした「～バ」と「～タラ」でも、「オ作りニ ナッタラ スグ 召シ上ッテ クダサイ。」というところを「オ作りニ ナレバ スグ 召シ上ッテ クダサイ。」^{注)}とはいえない。こうしたこまかい点についてはさらにくわしい調査と考察が必要である。

注) 宮島達夫(当研究所書きことば研究室)の教示による。

(2) 最初「句」として扱っていたもの以外の状況語でも、ここでのべたような制約を述語の表現意図に加えるものがある。たとえば、「キノウ」という状況語はここでいう J₃ と同様な制約を加えるもののものである。「アシタ」は J₂ と同じような制約を加える。これは意味上当然のことだろう。

(3) 複合構文における従属句もここにいう J₃ と同様な制約を述語の表現意図に加えるのではないかと考えられるふしがある。たとえば、「君ハ 酒モ ノムガ タバコモ ノメ。」とか、「君ハ 酒モ ノマナイガ タバコモ ノムナ。」とはいえない。こうした点で複合構文における従属句は状況語に近いといえる。これは「～ガ」という従属句が連体修飾語のなかにはいることもあることを考え合わせるべきである。「酒モ ノムガ オ菓子モ タベル 彼」

(4) ここでのべたような一部の状況語(また従属句も?)の文末の述語における表現意図に対する制約は、その1つ1つの状況語そのものの性格(とくに意味的性格)によることはもちろんであろうけれども、一方また構文の型の間にも関係がありそうに思われる。すなわちここで問題にしたような表現意

図に対する制約の問題がおこるのは基準構文のなかのことであって、付加構文における付加的要素（T、DあるいはK）と述語の表現意図との間にはこうした制約の問題はおこらないのではないかと考えられる。それについて問題となることをすこし取り上げておこう。

付加構文においてはまた別種の問題がある。T（とくに陳述副詞）と述語の表現意図との関係などがそれ。ここで問題にした状況語と述語の表現意図との関係とは一見似ているけれども、どこかにちがいがあるのではないかと考えられる。どこにちがいがあるのか、それは今後の問題である。

さきに、従属句でも複合構文に現われたばあいは状況語（とくに J₃）に似た制約を述語の表現意図に加えることがあるらしい、といったが、従属句でも付加構文におけるばあいは何らの制約も加えないと考えられる。「ボクモ ヤルカラ、キミモ ヤレ。」また、さきに「～ノデ」を J₃ の代表のようにしてあげて、これが出てくると述語に命令、禁止、意志の形は出てこないといったが、実際の用例をみると、かならずしもそうではない。とくに敬讓表現をとまなうばあいには、出てくることもある。

▽ドウゾ デキアガリガ ゴザイマスノデ ゴランクダサイマセ。(127-11-4)

▽イマ オトウフガ オ水ノ キレタノガ コチラニ ゴザイマスノデ チョット
オ目ニ カケマシヨウ。(127-12-6)

これらを基準構文とすると、そして「～ノデ」を状況語とすると、これらは例外ということになる。しかし、これを付加構文とし、「～ノデ」を付加的な要素と認めて、述語に命令や意志の形が現われうるのはそのためであると説明することもできる。ここでは一応その説明をとった。^{注)}

注) こうしたばあいの「～ノデ」は状況語とせずに従属句として扱った。もし状況語としておくと、この研究でとった成分および構文の型の整理についての原則——すなわち状況語は基準構文を形成する成分の1つであるとする原則、また付加構文は基準構文に他の要素がついたものであるとする原則をくずさなければならないことになる。

さらに想像をたくましくするならば、次のようなことを考えることができる。すなわち、基準構文における状況語拡大構文(あるいは複合構文)では、状況語(あるいは従属句)と述語との結びつきが比較的かたいたために上述のような制

約関係がおこるのではないか、それに対して付加構文のばあいは、付加される従属句と、それが付加される基準構文（または述語）との間の結びつきがゆるいために制約関係が現われないのではないかということである。意味の面についていうならば、基準構文のばあいは、状況語あるいは従属句と述語との間の論理的な意味関係（たとえば条件など）がはっきりしているのに対して、付加構文のばあいはそれがぼやけてははっきりしなくなっているといえるのではないか。そしてそのことが、基準構文にはここで問題にしたような制約関係が現われ、付加構文には現われないということと関係があるのではないかということである。

ここでとり上げた問題をもっと明らかにするためには、個々の状況語や従属句についてのくわしい調査と考察が必要なことはもちろん、構文の型全般や表現意図の分析についてもさらにつつこんだ検討を加えなければならない。

（補注） 上のような状況語の区別は、それがたがいに重なって現われるばあひ、あるものが他の一部となりうるかどうか（Ⅲ1・2・3 b(6)「句の扱い」参照）ということとも関係があるようである。たとえば、 J_2 は J_3 の一部になりうるが、 J_3 は J_2 の一部になりにくいようだ。「雨が 降ッテモ(J_2) 仕事ヲ 続ケタノデ(J_3) 工事ハ 意外ニ 早ク 完成シタ。」とはいうが、「雨が 降ルノデ(J_3) 休ンダラ (J_2) 工事ハ ソレダケ 遅レルダロウ。」という形はちょっと考えられない。

最後に、次のことを付け加える。状況語が述語の表現意図の現われに加える制約の事実が、ある句(最初作業上たてた)が他のある句の一部となっているかになっていないかの判定に役立つことがある。「寒イノデ 手ヲ コスリナガラ 歩ク」という文の「寒イノデ」という部分は一見「～ナガラ」という句（これは連用語）の一部となっているように見える。そうだとすると、前にたてた状況語は連用語の一部とはなりえないという仮定（Ⅲ1・2・3 b(6)「句の扱い」参照）を廃棄しなければならない。ところで、述語の「歩ク」を命令形にして、「寒イノデ 手ヲ コスリナガラ 歩ケ。」とはいいにくい（「寒イカラ 手ヲ コスリナガラ 歩ケ。」とはいえる）。もし「寒イノデ」が「～ナガラ」という連用語のなかに含まれているものならば、述語はどんな形であってもいいはずである（連用語は述語の表現意図に制約を加えない）。このばあひ、述語を「歩ケ」とはしにくいのは、「寒イノデ」が「～ナガラ」という連用語の

外にあって、述語の表現意図の現われに制約を加えているためであると見なければならぬ。したがって、これに関するかぎり、状況語は、連用語の一部とはなりえないという仮定もまだ廃棄する必要はない。(南 不二男)

3. 構文の型と表現意図・イントネーションとの相互関係一覧表

この表は、構文の型と、それに現われうる表現意図およびイントネーションとの相互関係を大まかに表わしたものである。表現意図・イントネーションの説明は、独立語構文、述語構文(骨組み構文……)など比較的大きい分類のところにまとめてあげた。

ここにあげた構文の型は、ありうる型を全部あげたものではない。また、今回調査した資料を参考にしたが、そこにあった型だけとは限らない。それぞれの型には参考のために、用例として作例をあげた。例文の語順についてはなお検討を要する。これが典型的な語順であるとはかならずしもいえない。

構文の説明に用いた略号は本文のものと同一であるが、念のためそのローマ字記号の意味をあげておく。

D 独立語, T 陳述的成分, Z 述語, S 主語(S' いわゆる総主), H 補語(H₁ 結果的補語, H₂ 内容的補語), M 目的語(M₁ 「～ヲ」の関係に立つ目的語, M₂ 「～ニ」の関係に立つ目的語, M₃, M_カ などこれに準じる) R 連用語, J 状況語, K 従属句(K₁ 「～ガ」の形をとる従属句, K₂ 「～カラ」の形をとる従属句, K₃, K₄ などこれに準じる)

イントネーションについては、その章(IV)に述べたように、表現意図に応じる文表現の文末に、意図表現イントネーションがあらわれる。概観すれば、①②④の文末には、一般に下降調の意図表現イントネーションがあらわれるが、①④の多くは、いわゆる一語文で、アクセントの形の定まらないものもあるから、文としては音調の形が安定的でない。③のうち質問的表現の文末には、一般に上昇調の意図表現イントネーションがあらわれる。とくに、疑問詞、疑問の終助詞など疑問の形式をとらなわれないばあいに顕著だと見られる。③のうち命令的表現の文末には、一般に下降調の意図表現イントネーションがあらわれる。また、卓立表現イントネーションは、文のいろいろな部分に随時あらわれるから、ここに一般的にすることはできない。

構文の型	表現意図	例
1 独立語構文【D】 D TD TDD	⑨ コミュニケーションの成立に関するもの ① 歎嘆表現 ④ 応答表現	○モジモジ ^イ へ ^ハ ○コンニチハ ^ハ ○ゴキゲンヨウ ^ウ へ ^ハ ○オ ○ア ^ー へ ^ハ ○オッ ^ハ へ ^ハ ○タイヘン ^ハ へ ^ハ ○エエ ^ハ へ ^ハ ○イエ ^ハ へ ^ハ ○ソウデス ^ハ へ ^ハ ○ハイ(D)④ ○ミナサン(D)⑥ ○ ○デハ(T) ゴキゲンヨウ(D)⑥ ○ ○デハ(T) ミナサン(D) サヨウナラ(D)⑥ ○
2 述語構文【Z】	② 判叙表現 .1 判断既定の表現 .1 事実の叙述表現 .1 態の表現 .2 相の表現 .3 時の表現 .2 断定の様相表現 .1 断定の表現 .2 伝聞の表現 .3 希求の表現 .4 推定の表現 .5 意志の表現 .2 判断未定の表現 .1 判断の未確定の表現 .2 判断への疑念の表現 ③ 要求表現 .1 質問的表現	○本ガ 置イテ アル ^ハ へ ^ハ ○手紙ヲ 書イテ ヤル ^ハ へ ^ハ ○胸ヲ ウタレル ^ハ へ ^ハ ○絵ヲ 書カセル ^ハ へ ^ハ ○目ガ サメタ ^ハ へ ^ハ ○客ガ 来タ ^ハ へ ^ハ ○キョウモ 雨ダ ^ハ へ ^ハ ○モウ 帰リマス ^ハ へ ^ハ ○アシタ 来ルソウダ ^ハ へ ^ハ ○ヤガテ 着クト イウ コトダ ^ハ へ ^ハ ○パンガ タベタイ ^ハ へ ^ハ ○顔ヲ 見タイ ^ハ へ ^ハ ○予算ヲ 削ルラシイ ^ハ へ ^ハ ○車ヲ 買ウカモ シレナイ ^ハ へ ^ハ ○出席シヨウ ^ハ へ ^ハ ○アソビニ 行コウ ^ハ へ ^ハ ○映画デモ 見ルカ ^ハ へ ^ハ ○マダ ダメカ ^ハ へ ^ハ ○ソウシテ ミマシヨウカ ^ハ へ ^ハ ○コレガ イイ 字ナノダロウカ ^ハ へ ^ハ

- 1. 肯定要求の表現
 - 1. 確認要求の表現
 - 2. 判定要求の表現
- 2. 選述要求の表現
 - 1. 選択要求の表現
 - 2. 説明要求の表現
- 2. 命令的表現
 - 1. 消極的行為要求の表現
 - 2. 積極的行為要求の表現

1. 基準構文 [Z]

1. 骨組み構文 / ... Z /

S Z

S H₁ Z

S H₂ Z

S M₁ Z

S M₂ Z ~ M₃ S Z

S M₁ Z

? A_{1,2} Z ~ M_{3,4} S Z

- ミナサン ゴ存ジデシヨウ /
- ワカリマスカ /
- イキマスカ, イキマセンカ /
- ドコニ アリマス /
- モウ スコシ 考エテハ
- ライテ イタダキタイ /
- 言ッテクダサイ /

- アソコニ 見エマスカ /
- イケナインデシヨウカ /
- 酒デスカ, ビールデスカ /
- ナンジデスカ /
- ドウデスカ /
- ココデ ハタ
- ヤッテ ゴラン /
- ハヤク オイ

- 火ガ (S) 燃エマス (Z) ②. ○ 風ガ (S) 吹クデシヨウ (Z) ②. ○ コレハ (S) ナンデシヨウ (Z) ③?
- コドモタチハ (S) オトナニ (H₁) ナリマシタ (Z) ②.
- ボクハ (S) 「コリヤ マズイ」ト (H₂) 思ッタ (Z) ②.
- サルガ (S) リンゴヲ (M₁) カジッテ イマス (Z) ②.
- ツバメハ (S) 南ニ (M₂) 帰ッタ (Z) ②.
- 学校ニハ (M₂) グラウンドピアノガ (S) アリマスカ (Z) ③?

- 調査隊ガ (S) ネパールヘ (M₁) 出発スル (Z) ②.
- シベリヤカラ (M₂) 白鳥ガ (S) 飛ンデ キマス (Z) ②.

- 酸素ハ (S) 水素ト (M₁) 化合シママスネ (Z) ②。
 ○アイスクリームハ (S) タマゴト 牛乳デ (M₂) デキテ
 イマス (Z) ②。
 ○国民ハ (S) K氏ヲ (M₂) 大統領ニ (H₁) シマシタ (Z) ②。
 ○ワタシハ (S) ソノ 発言ヲ (M₂) 正シト (H₂) 認メ
 マス (Z) ②。
 ○彼ハ (S) 彼女ニ (M₂) 首ッタケニ (H₁) ナッタ (Z) ②。
 ○彼女ハ (S) 黒板ニ (M₂) 「絶対反対」ト (H₂) 書イタ (Z) ②。
 ○市長ハ (S) 彼ニ (M₂) 大キナ 権限ヲ (M₂) 与エタ (Z) ②。
 ○蜜蜂ハ (S) 花カラ (M₂) 蜜ヲ (M₂) 集メマス (Z) ②。
 ○コノ 木ハ (S) 枝ブリガ (S) オモシロイ (Z) ③。
 ○ワタクシタチハ (S) 大事ナ コトヲ 忘レテイタト (H₂)
 気が (S) ツキマシタ (Z) ②。
 ○第一項ハ (S) 第二項ニ (M₂) 関連ガ (S) アリマス (Z)
 ②。
 ○和子サンハ (S) 良夫サント (M₁) 結婚バナシガ (S) ア
 リマシタ (Z) ②。
 ○オハヨウ ゴザイマス (Z) ②。 ○残念デシタ (Z) ②。
 ○結構デス (Z) ②。 ○オ料理ノ 時間デス (Z) ②。
 ○美容体操ヲ (M₂) ハジメマシヨウ (Z) ②。
 ○六時ニ (H₁) ナリマシタ (Z) ②。
 ○憲法ニハ (M₂) 「戦力ハ モタナイ」ト (H₂) 明記シテ
 リマス (Z) ②。

S M₁ Z
 S M₂ Z

 S M₁ H₁ Z
 S M₂ H₂ Z
 S M₂ H₂ Z

 S M₂ H₁ Z
 S M₂ H₂ Z
 S M₂ M₂ Z
 S M₂ M₂ Z
 S' S Z
 S' H₂ S Z

 S' M₂ S Z

 S' M₁ S Z

 Z

 M₂ Z
 H₁ Z
 M₂ H₂ Z

.2 拡大構文
 R 拡大構文
 R / ... Z /

原則として、骨ぐみ構文に準じる。

SRZ	○火ガ(S) パット(R) 燃エタ(Z)㉔。
SRH1Z	○コドモタチハ(S) ミンナ(R) オトナニ(H1) ナリマシ タ(Z)㉔。
SRH2Z	○報告ハ(S) ハッキリ(R) 「……」ト(H2) 書カレテ イ マス(Z)㉔。
SM7RZ	○サルガ(S) イモヲ(M7) モグモグ(R) タベル(Z)㉔。
SRM-Z	○子ドモタチハ(S) ソロッテ(R) 学校ニ(M-) 行ッ タ(Z)㉔。
:	
RR/...Z/	
SRRZ	○火ハ(S) 一時ニ(R) パット(R) 燃エアガッタ(Z)㉔。
SRRH1Z	○ワレワレハ(S) 酒ヲ クミカワシナガラ(R) ミンナ (R) ユカイニ(H1) ナッタ(Z)㉔。
SM7RRZ	○サルガ(S) イモヲ(M7) ウマソウニ(R) モグモグ(R) タベテ イル(Z)㉔。
:	
RRR/...Z/	
SRRRZ	○火ハ(S) 一時ニ(R) パット(R) 一メートルバカリ (R) 燃エアガッタ(Z)㉔。
SM7RRRZ	○彼女ハ(S) ウデヲ(M7) 片方ズツ(R) 十回グライ(R) グルグル(R) マワシタ(Z)㉔。
:	

J 拡大構文

ある種の「J」があるばあいには、表
現意図の現われか-制約をうける。た
とえば、キノウ<昨日>という「J」が
つくると、㉔の意志の表現とか㉔の命
命向表現などは現われない。～ノチ
のはあいなども同様。(V 2-3参照)

J / ... Z /

S J J Z ~ J S Z

S J H₁ Z ~ J S H₁ Z

S J H₂ Z ~ J S H₂ Z

S J M₁ Z ~ J S M₁ Z

S J M₂ Z ~ J S M₂ Z

:

J J / ... Z /

S J J Z

S J J H₁ Z

S J J M₁ Z

:

J J J / ... Z /

S J J J Z ~ J J J S Z

J J J S M₁ Z

- 火ハ (S) 午前三時ニ (J) 消エマシタ (Z) ㊟。
- 雨ガ 降レバ (J) 運動会ハ (S) 延期デシヨウ (Z) ㊟。
- アノ トキノ 子ドモタチハ (S) コトシハ (J) 二十歳ニ
(H₁) ナリマス (Z) ㊟。 ○過勞デ (J) 彼ハ (S) 肝臓
炎ニ (H₁) ナッタノデス (Z) ㊟。
- ボクハ (S) ソノ トキ (J) 「コリヤ マズイ」ト (H₂)
思ッタ (Z) ㊟。
- 七月ニ (J) 彼ハ (S) 日本ヲ (M₁) 去ル (Z) ㊟。
- 瀬戸丸ハ (S) 台風ガ 近ゾイタノデ (J) 神戸ニ (M₂)
避難シタ (Z) ㊟。
- 火ハ (S) ミンナノ 努力ニ ヨッテ (J) 午前三時ニ
(J) 消エマシタ (Z) ㊟。
- 長岡発準急ハ (S) 大雪ノ タメ (J) キョウハハ (J) 運
休ニ (H₁) ナッタ (Z) ㊟。
- 学生タチハ (S) 去年ノ 夏 (J) 霧ガ降デ (J) グライ
ダローヲ (M₁) 習イマシタ (Z) ㊟。
- 大雪ノ タメニ (J) キノウカラ キョウニ カケテ (J)
各地デ (J) 列車ガ (S) 立ち往生シタ (Z) ㊟。
- 運動会ハ (S) 雨ガ 降ッタノデ (J) 体育館デ (J) 午
前十時カラ (J) オコナワレマシタ (Z) ㊟。
- 核実験ニ 抗議シテ (J) キョウ (J) 公園デ (J) 市民
ガ (S) 集会ヲ (M₁) 開イタ (Z) ㊟。

J R / ... Z /	:	S J R Z	○船ハ (S) 汽笛ヲ ナラシタ アト (J) ユックリト (R) 停船シタ (Z) ②。
J R R / ... Z /	:	S J R R Z	○火ハ (S) 風ヲ ウケテ (J) 一時ニ (R) パット (R) 燃エアガッタ (Z) ②。
J J R / ... Z /	:	S J J R Z	○彼ハ (S) キョウ (J) 病院デ (J) タンノンニ (R) 診察シテ モラッタ (Z) ②。
.3 複合構文 K / ... Z / K _# / ... Z /	:	S K _# Z S K _# H ₁ Z S / K _# S Z	○火ハ (S) 一度 燃エアガッタガ (K _#) 消エタ (Z) ②。 ○ソノ 法案ハ (S) イッタン 提出サレタガ (K _#) 廃案ニ (H ₁) ナッタ (Z) ②。 ○彼ハ (S') 酒モ ノムガ (K _#) オ菓子モ (S) 好キダ (Z) ②。
K _{#p} / ... Z /	:	S K _{#p} Z S K _{#p} H ₁ Z	○コノ 録音器ハ (S) 軽イカラ (K _{#p}) 便利デス (Z) ②。 ○ワタシハ (S) 運動ヲ シタカラ (K _{#p}) ショウブニ (H ₁) ナッタノデス (Z) ②。

SK _{pp} M _± Z	○ボクハ (S) イソガシイカラ (K _{pp}) 家ニ (M _±) 帰リマス (Z) ②。
⋮	
K _{rld} /...Z/	○コノ カメラハ (S) 安イケレド (K _{rld}) 優秀デス (Z) ②。
SK _{rld} Z	○コソドノ 家ハ (S) 駄カララハ 遠イケレド (K _{rld}) 広ク (H1) ナッタ (Z) ②。
SK _{rld} H1Z	○彼ハ (S) ジュウブソ 健康ニ 注意シタケレド (K _{rld}) カラダヲ (M _r) コロシテ シマイマシタ (Z) ②。
SK _{rld} M _r Z	
⋮	
K _r /...Z/	○彼女ハ (S) 頭モ イイソ (K _r) 健康デモ アル (Z) ②。
SK _r Z	○ワタシハ (s ^l) 熱モ サガツタシ (K _r) 気分モ (S) ヨク (H1) ナッタ (Z) ②。
S ^l K _r SH1Z	○彼ハ (S) 酒士 ノ マナイシ (K _r) タバコモ (M _r) スロナイ (Z) ②。
SK _r M _r Z	
⋮	
KR/...Z/	○火ハ (S) 一度 燃エアガッタガ (K _r) 急ニ (R) 消エテ シマッタ (Z) ②。
SK _r RZ	
⋮	
KJ/...Z/	○ボクハ (S) 午後 予定ガ アリマスカラ (K _{pp}) 午前中ニ (J) ウカガイマス (Z) ②。
SK _{pp} JZ	
⋮	
KJR/...Z/	○チカゴロ (J) 彼ハ (S) ホトンド 論文ヲ 書カナイケ
JSK _{rld} RZ	

.2 付加標文 K[Z]	T[Z] D[Z]	レド(Kラフ) コツコヅト(R) 勉強シテ イルララシイ(Z) ②。
T[Z]	T S Z T S H ₁ Z T S H ₂ Z T S M ₁ Z T S J M ₂ Z T M ₁ Z	○タブン(T) 風ハ(S) オサマルデシヨウ(Z)②。 ○オソラク(T) 出発ハ(S) コノ 夏ニ(H ₁) ナリマス (Z)②。 ○例ノ 問題デスガ(T) ワタクジハ(S) 「……」ト(H ₂) 考 エマス(Z)②。 ○サチ(T) コノ ネコハ(S) ナニヲ(M ₁) ヤルンデン ヨウ(Z)③? ○タブン(T) 調査隊ハ(S) キョウ(J) 基地ニ(M ₂) 帰 ルデシヨウ(Z)②。 ○パセリハ(T) ミジンギリニ シタ モノヲ(M ₁) 使イマ ス(Z)②。
D[Z]	: S D R Z D S H ₁ Z D M ₁ , H ₂ Z S D M ₂ Z :	○火ガ(S) ホラ(D) ミゴトニ(R) 消エマシタヨ(Z)②。 ○一部ノ 市民タチ(D), 彼ラガ(S) ソノ 運動ノ 発起 人ニ(H ₁) ナッタノデス(Z)②。 ○気筒容積 360cc 以下ノ 四輪車(D), コレヲ(M ₁) 軽自 動車ト(H ₂) 名ヅケル(Z)②。 ○彼ハ(S) オシイカナ(D) 数学ニ(M ₂) ヨワカッタ(Z) ②。

付加されるTがとくに表現意図に密接な関係を持つものであるばあいには、それに応じて現われる表現意図に制約がある。

K[Z]		
K _# [Z]	K _# SZ	○ツケアワセハ ジャガイモデスが(K _#), ヒトリアタリノ分量ハ(S) 二個デス(Z)②。
	K _# SH ₁ Z	○ミナサンモ モウゴ存ジノ コトト 愚イマスガ(K _#), ○サンガ(S) 博士ニ(HI) ナリマシタ(Z)②。
	K _# SM _± RZ	○公園ニハ サルガタクサン イマスガ(K _#), 彼ラハ(S) ヒトニ(M _±) ヨク(R) ナツイテ イマス(Z)②。
	:	
K _{#2} [Z]	K _{#2} SZ	○アノ 子ガ 遊ンデバカリ イル モンダカラ(K _{#2}) 親ガ(S) ヤキモクスルンダ(Z)②。
	K _{#2} SH ₁ Z	○雨バカリ 降ル モンダカラ(K _{#2}) 道ガ(S) ドロニコニ(HI) ナルンダ(Z)②。
	K _{#2} SM ₂ Z	○ボクハ サキニ 帰ルカラ(K _{#2}) 君ハ(S) コレヲ(M ₂) カタヅケトイテ クレ(Z)③。
	:	
K _{rrr} [Z]	K _{rrr} SZ	○ ^ん 葉ガ アケマシタケレド(K _{rrr}) 葉サハハ(S) キビシユウゴザイマスネ(Z)②。
	K _{rrr} SH ₁ Z	○ソナンニ 使ッタ ツモリハ ナインダケレド(K _{rrr}), サイフノ 中ハ(S) カラニ(HI) ナッテ イタ(Z)②。
	K _{rrr} SM _± Z	○ミンナガ オマチシテマスケレド(K _{rrr}), アナタモ(S) アチラニ(M _±) イラシヤイマセンカ(Z)③。
	:	
K _r [Z]	K _r SZ	○風モ ダンダン ツノッテ キタジ(K _r), 雨モ(S) 降り

ダシタ (Z) ㊦。	○年モ タッタ コトダシ(K _ツ), 子ドモタチモ (S) 大キ ク(HI) ナッタ ワケダ(Z) ㊦。
○風モ ツヨク ナッタシ(K _ツ), ワレワレモ (S) 港ニ (M _±) 帰ロウ (Z) ㊦。	
○委員長ハ T氏デアリ(K運用形), 副委員長ハ (S) S氏 ダッタ (Z) ㊦。	
○会議ハ 五時ニ オワリ(K運用形), 例ノ 問題ハ (S) ア トマロシニ(HI) ナッタ (Z) ㊦。	
○議長ハ U氏デ(K運用形), Wサンハ (S) 書記ヲ(M _ツ) ツ トメマシタ (Z) ㊦。	
○コノ 問題ハ スデニ 解決ズミデ アリマシテ(K _ツ) ミンナモ (S) ナツクシタル ハズダス (Z) ㊦。	
○雨ハ アケガタマデ ドシヤブリニ フツテ(K _ツ), センタ クモノハ (S) ミンナ (R) ビシヨヌレニ(HI) ナツテ シマッタ (Z) ㊦。	
○電車ハ 事故ノ タメ トマツテ シマツテ(K _ツ), ヒトビ トハ (S) タクシーヲ(M _ツ) ヒロツタ (Z) ㊦。	
○屋根ハ 十分 キラ ツケテ 作ツテ アリマスノデ (K _ツ), 雨ハ (S) モリマスマイ (Z) ㊦。	
○寒サハ コレカラ キビシク ナリマスノデ(K _ツ), アナ	

K _ツ SH ₁ Z	
K _ツ SM _± Z	
⋮	
K _ツ 運用形[Z]	
K _ツ 運用形SZ	
K _ツ 運用形SH ₁ Z	
K _ツ 運用形SM _ツ Z	
⋮	
K _ツ [Z]	
K _ツ SZ	
K _ツ SRH ₁ Z	
K _ツ SM _ツ Z	
⋮	
K _ツ [Z]	
K _ツ SZ	
K _ツ SH ₁ Z	

$K_{\#}M_{\#}Z$	タモ(S) オダイジニ(H ₁) ナサイマセ(Z)③。
:	○サイワイ 予備ガ アリマスノデ(K _#), ソレヲ(M _#) 使 ッテ オキマシヨウ(Z)②。
TD[Z]	○サア(T) ミナサン(D) オモチガ(S) ヤケマシタヨ (Z)②。
:	○私ハ ヨク 知ラナインデスガ(K _#) タブン(T) 彼ハ (S) 生キテルデシヨウ(Z)②。
DK[Z]	○ボクモ 行ッテ 応援シタンドガ(K _#), オシイカナ(D) ウチノ チームハ(S) 一点ノ 差デ(B) マケテ シマ ッタ(Z)②。
:	○ソレジャ(T) ミナサン(D) タイヘン タイツツナ 話 デ モウシワケ アリマセンデシタガ(K _#) 文法ノ 話ハ (S) オシマイデス(Z)②。
TDK[Z]	
:	
$K_{\#}M_{\#}Z$	
:	
TD[Z]	
:	
TK[Z]	
:	
$K_{\#}TSZ$	
:	
DK[Z]	
:	
$K_{\#}DSRZ$	
:	
TDK[Z]	
:	
$TDK_{\#}SZ$	
:	

次に、『話しことばの文型(1)』でまとめた対話資料から得た各表現の文の典型の表を、対照のためにかかげる。

1. 詠嘆表現の典型

- 1・1 未分化的な表現 <感動詞の>独立語
- 1・2 やや分化した表現 (主語_(ハ))—(連用修飾語)—<形容(動)詞の>述語

2. 判叙表現の典型

- 2・1 判断既定の表現 (主語_(ガ・ハ))—(連用修飾語)—述語
- 2・2 判断未定の表現 (主語_(ガ・ハ))—(連用修飾語)—述語_{カ・カナ・カシラ}

3. 要求表現の典型

- 3・1 確認要求の表現 (主語_(ガ・ハ))—(連用修飾語)—述語_{系・チ・ダロウ・デシヨウ・ジャンナイ(ノ・カ)}
- 3・2 判定要求の表現 (主語_(ガ・ハ))—(連用修飾語)—述語_(カ)
- 3・3 選択要求の表現 (主語_(ハ))—(連用修飾語)—<判定要求の形式の>述語—(独立語)—(連用修飾語)—<判定要求の形式の>述語
- 3・4 説明要求の表現 (主語_(ハ))—(連用修飾語)—<不定詞を含む>述語_(カ)
 (主語_(ハ))—(連用修飾語)—<不定詞を含む>連用修飾語—述語_(カ)
 <不定詞を含む>主語_(ガ)—(連用修飾語)—述語_(カ)
 <不定詞を含む>主語_(ガ)—(連用修飾語)—<不定詞を含む>連用修飾語—述語_(カ)

- 3・5 消極的行為要求の表現 (主語_(ガ・ハ))—(連用修飾語)—<すすめ・希求
- 3・6 積極的行為要求の表現 ・依頼・命令などを表わす形式の>述語

4. 応答表現の典型

- 4・1 未分化的な表現 <応答詞の>独立語
- 4・2 やや分化した表現 (主語_(ハ))—(連用修飾語)—<応答を表わす形の>述語

上記の程度に抽象された段階について見れば、独話にあらわれる文型、対話にあらわれる文型のそれぞれの特色めいたものは、文末の助詞などの一部に関する面を除いては、ほとんど認められない。しかし、文型の種類のあらわれる頻度においては、かなりの差異があると思われる。すなわち、独話においては、判叙表現に属する文型のあらわれる率が、対話におけるよりも高く、特に、詠嘆表現や応答表現に属する文型はあらわれることが少ないと想像される。「表現意図」の章の終り（63ページ）にかかげた、この調査に用いた独話資料についての文表現の分類表は、その状況を示す一資料である。

<参考> これまでの文型研究

日本語の文型に関する国内の研究に関して見ることを主とし、外国の文献のおもなものを添える。

1. 概観

日本語の文型研究は、戦前は、主として、外国人に対する日本語教育のためという動機でなされた。

戦後、その流れがとぎれたが、1956～7年ごろから、文型研究がまた起こってきた。主として、国語教育のためという立場によるものである。一方、外国人に対する日本語教育のための文型研究が、最近また起こってきそうなようである。

ところで、文型をどのような角度からとらえようとするか、すなわち、文型の求め方に関しては、さまざまな立場がある。たとえば、文型を文の成分関係の構造の型として求めようとするものがある。この立場では、主述や修飾の関係などによる構造が目標となる。次に、言表の意図に従ってどういう形式が用いられるか、その類型をとらえようとする立場がある。このばあいは、文末の形式が主として注目されるが、言表の意図なるものをどういう幅で考えるかによっては、文末に限られない。また、助詞・助動詞その他の語の用法から文型を考えるとという立場がある。これは、大体は、構文の型を求める立場や言表の意図による形式を見ようとする立場と表裏をなすものともいえる。助詞を目じるしとして構文をおさえることができ、助動詞などによって文末陳述をおさえることのできる場所が多いからである。

実用的立場では、概して「基本文型」を目標としているが、それがどういう基準で求められるか、文型と基本文型との関係はどうかなどについても、さまざまな考え方がある。基本文型の「基本」の意味としていわれているおもなものとしては、

- (a) 使用頻度が高い。
- (b) 習得しやすい。
- (c) 命題叙述の根本をなす。(主・述/の構文を最も基本的とする。)
- (d) 各種の変容に対して基準・標準となる。
- (e) それだけで間に合わせられる。

などがあげられる。

以上の各種の基準の中には、互いに相いれないものもある。そのどれによって基本文型を考えようとするか、あるいは、どれを中心として考えるかは、研究者により、また、研究目的によって、相違している。

なお、いずれにせよ、基本文型を文型から取り立てて考えるのが一般的な考えかたといえようが、文型研究の作業の上で、その手続きを示しているものは、あまり多くない。

2. 文型研究文献抄

直接、文型を問題にしたものに、ほぼ限る。

- (1) 岡本千太郎 基礎文型の研究 国語教育 25—2~5 1940年
- (2) 三尾 砂ほか 共同研究 基本文型への手がかり コトバ 3—2 1941年
- (3) 垣内松三 基本文型の問題 コトバ 3—2 1941年
- (4) 浅野 信 「基本文型」の問題 一文型と文体— コトバ 3—2 1941年
- (5) 松尾捨次郎 外国人に教へる日本語の基本文型 コトバ 3—2 1941年
- (6) 乾 輝雄 日本語の基本文型 コトバ 3—2 1941年
- (7) 興水 実 言表の典型について コトバ 3—2 1941年
- (8) 浅野 信 基本文型の細論 コトバ 3—3 1941年
- (9) 三尾 砂 基本文型の問題、再び コトバ 3—3 1941年
- (10) 山本忠雄 基本文型に就て コトバ 3—4 1941年
- (11) 徳田 浄 基本文型の問題 コトバ 3—4 1941年
- (12) 大出正篤 日本語の初歩教授から見た文型の考察 コトバ 3—6

1941年

- (13) 岡本千万太郎 日本語教育と日本語問題 1942年 (1)を収める)
- (14) 青年文化協会 日本語練習用 日本語基本文型 1942年
- (15) 興水 実 日本語教授法 1942年
- (16) 国際文化振興会 日本語表現文典 1944年
- (17) 三尾 砂 国語法文章論 1948年
- (18) 神保広至 基本文型について 季刊国語 6 1949年
- (19) 松下 厚 日本語基本文型試論 静岡大学教育学部浜松分校研究所年報 5 1955年
- (20) 加藤十久雄 文型に関する一考察 言語研究 29 1956年
- (21) 永野 賢 学校文法 1956年
- (22) 宮城県教育研究所 基本文型とことばの指導 1957年
- (23) 堀川勝太郎 基本文型とことばの指導 実践国語 98 1957年
- (24) 堀川勝太郎 基本文型による読解指導 一学力向上のための実践文法—
1957年(文型の表は(22)に同じ)
- (25) 服部四郎 ソシユールのlangueと言語過程説 言語研究 32 1957年
- (26) 永野 賢 基本文型 日本文法講座 5 1958年(文型の表は(21)に同じ)
- (27) 永野 賢 学校文法概説 1958年(文型の表は(21)に補足)
- (28) 三上 章 基本文型論 国語教育のための国語講座 5 1958年
- (29) 中沢政雄 文法教育の体系と方法(小学校) 国語教育のための国語講座 5
1958年
- (30) 白石大二 教育文法論 1958年
- (31) 鳥山榛名 文型指導の諸問題 ことばの教育 106 1958年
- (32) 遠藤嘉基 文型教育について ことばの教育 106 1958年
- (33) 服部四郎 発話・文・形式について 国語学 37 1959年
- (34) 石垣幸雄 KAMAE(日本文型) RÔMAZI SEKAI 511 1959年
- (35) 白石大二 助詞・助動詞の用法から考えた口語の文型 教育科学 国語教育
11 1960年

- (36) 国立国語研究所 話しことばの文型(1) 一対話資料による研究— 1960年

- (37) 林 四郎 基本文型の研究 1960年
- (38) 佐藤純一 最初歩の教育の諸問題 ー基本文型を中心にー 国語シリーズ48; 外国人に対する日本語教育 1960年
- (39) 三上 章 文法教育のために(1)~(6) いずみ 37~42 1960・1961年
- (40) 三尾 砂 基本文型(1)~(7) 実践国語教育 245~252 1961年
- (41) 石垣幸雄 日本語の組立て いずみ 42, 43 1961年
- (42) 京都市教育研究所 書きことばの文型 ー「文・連文」理解のための研究ー 1961年
- (43) 石垣幸雄 書評「話しことばの文型(1)」 国語学 44 1961年
- (44) 上田保一 小学校指導用文型百二十五種 ー表現意図に関する文型ー 1961年
- (45) 石垣幸雄 文型論 ことば 26 1961年
- (46) 佐藤純一 日本語教育における文型練習のプログラム 日本語教育のために 創刊準備号 1962年 (文型の表は(38)の改訂)
- (47) 小出詞子 日本語の文型について 日本語教育のために 創刊準備号 1962年
- (48) 石垣幸雄 文素論 (1) (2) 計量国語学 21・22 1962年
- (49) 鈴木重幸 文の構造 NHK文研月報 12—11 1962年
- (50) 宮地 裕 文における表現の類型 NHK文研月報 12—12 1962年

以上、戦前のおもなものをもらさぬ程度とし、戦後のものは、指導法に関するものなどは別として、一応もらさぬようにつとめた。

以下、外国文献のおもなものをあげる。

- (51) Jespersen, Otto : Analytic Syntax 1937年
- (52) Fries, Charles Carpenter : The Structure of English 1952年
- (53) Lado, Robert and C.C. Fries : English Sentence Patterns 1957年
- (54) Roberts, Paul : Patterns of English 1956年
- (55) Roberts, Paul : English Sentences 1962年
- (56) Bloch, Bernard : Studies in colloquial Japanese II Syntax (はじめ Language 22. 200-48-1946 に発表。のち、Readings in linguistics 1957年に収められた。)

(57) Jorden, Eleanor Harz : The syntax of modern colloquial Japanese (Language, Vol. 31, No. 1, 1955, Supplement)

3. 諸説の紹介

(1) 青年文化協会『日本語練習用日本語基本文型』（文献14）その他

『日本語練習用日本語基本文型』は、保科孝一・今泉忠義・大西雅雄・黒野政市・興水実の共編で、外国人の学習用であり、基本文型を体系的に記述した最初のものである。「表現の種々の場合に於ける文型」「語の用法に関する文型」「文の構造に関する文型」の3編から成り、それぞれに文型と例文とを配列している。

「表現の種々の場合に於ける文型」では、命令、許可、禁止、義務、質問、推量、陳述、否定、過去、未来、使役、受動、仮定、条件、比較、動作の開始、同時に2つの動作……等の表現法について、文末部の形式を中心として、大きくは34、細分しては159の文型をあげている。

「語の用法に関する文型」では、主として助詞・助動詞の用法を例文によって示している。

「文の構造に関する文型」では、1. 主語を用いない文、2. 主語の構造、3. 述語の構造、4. 補語の構造と位置、5. 独立語、6. 重文・複文、の項目を立て、たとえば、主語の構造では、「○○ハ」……、「○○ト○○ハ」……、「○○ダケ(ハ)[サヘ]」……、などのように示している。

以上の3種の文型を考える考えかたは、のちに踏襲する者が多かった。

宮城県教育研究所『基本文型とことばの指導』（文献22）は堀川勝太郎の作業である。これは「語の用法に関する文型」を中心とし、その中で「表現の種々の場合における文型」「文の構造に関する文型」にも触れていこうとしたとして、主語の表わしかた、述語の表わしかた、連体修飾語の表わしかた、連用修飾語の表わしかた、接続語のつかいかた、並立語の表わしかた、独立語のつかいかた、の項目を立て、たとえば、主語の表わしかたでは、「が」「の」「は」「も」「さえ」「すら」「しか」の用法を説明するというやりかたである。

白石大二『助詞・助動詞の用法から考えた口語の文型』（『教育文法論』の

うち) (文献30) も、助詞の用法を整理して文の構造への参加のしかたを明らかにし、助動詞を補助用言やその他のいいかたと並べて表現の型に当てて整理したものである。

なおさかのぼって、岡本千万太郎『基礎文型の研究』(文献1)も、助詞・助動詞に着目したものである。文型の考察は、文節または文節群の「すがた」(相)と、文節または文節群の間の関係(格)とを考察することだとして、1文節文型、格助詞を目じるしとした単文の文型8種(「……ガ……」「……ニ……」など)、接続助詞を目じるしとした複文の文型13種(「……ト、……」「……バ、……」など)をあげている。これは『日本語練習用日本語基本文型』の前段階のものといえよう。

(2) 国際文化振興会『日本語表現文典』(文献16)

湯沢幸吉郎の執筆によるものである。「ある意味を表現するには如何なる表現文型を採るべきかを説いたもの」と、はしがきに述べており、主として日本語普及のためという立場によっている。

第2編「口語の表現法」がこの書の主要部で、「二事物の一致を表す言ひ方」「事物の存在を表す言ひ方」「事物の性質・情態を表す言ひ方」「知覚・感情及び巧拙を表す言ひ方」「受身を表す言ひ方」「疑問・反語の意を表す言ひ方」「命令・禁止を表す言ひ方」「条件を表す言ひ方」その他の29章より成る。大体『日本語練習用日本語基本文型』の「表現の種々の場合に於ける文型」に当たるものを詳しく説いたものといえるが、「二事物の一致」「事物の存在」「事物の性質・情態」「知覚・感情及び巧拙」など、『日本語練習用日本語基本文型』で見られなかったものがあり、「受身」「疑問」「命令」「禁止」「条件」などについても、この方が周到詳細である。たとえば、疑問のいいかたについては、

問の文に推量の助動詞を用ひると、語調が和いで、丁寧の意が加はる。

あれは学校でせうか。

其処に新聞がありませうか。

否定文の間には推量の助動詞を用ひることがある。この場合には語調が殊に和いで、「問」といふよりも「話しかけ」「相談」といふ程の心持を表すのである。

あれは学校ではない[の]でせうか。

其処に新聞がございませんでせうか。

などの記述もある。文型とはいうものの、表現法の説明というべきものである。「表現文典」の名を冠しているゆえんであろう。

(3) 永野賢『学校文法概説』（文献27）

『日本語練習用日本語基本文型』の構想を受けて、内容的に発展させたものといえる。「文の構造に関する文型」と「文表現の意図に関する文型」（「表現の種々の場合に於ける文型」に当たる）とを記述している。

「文の構造に関する文型」では、まず1語文を「呼びかけ」「命令・勧誘」「疑問・質問」「感嘆」「叙述」「答え」と分けて、それぞれの型を示し、次に、格助詞・接続助詞の用法を示し、さらに補足的に疑問詞の用法を示し、文と文との関係に及んで接続詞の用法を示している。

「文表現の意図に関する文型」では、「主として文末の表現形式のヴァリエティを見ていく。」として、呼びかけ、命令、依頼・要求、反論、問いかけ、疑問、反語、念をおす、叙述、自問自答、推量、希望、意志、感動、嘆声の15項に分け、計147の文型を示している。たとえば、

命令

〔用言・助動詞の命令形〕早く歩け。 急いで送らせろ。

〔――なさい〕もう寝なさい。

〔――な〕さっさと歩きな。 そんなことはやめな。

〔――た〕さあ、起きた、起きた。

〔――がいい〕さっさと帰るがいい。

制・義務

――なければならない〕期限までに納入しなければならない。

禁止

.....

勧誘

.....

許容

.....

なお上田保一『小学校国語科指導用文型125種』（文献44）は、この永野の「表現の意図に関する文型」の中で、教科書および児童文集に使用回数の多いもの、かつ小学生の使用率の高いもの（質問法調査による）125種を選び、学年配当を試みたものである。

(4) 三上章『基本文型論』（文献28）

基本文型をどのようにとらえるかという、構想を主とするものであり、その構想は、言表の構造の分析に沿って、段階的に基本文型を考えようとするものである。すなわち、「具体的なセンテンスは、コト+話手+相手+場面として成り立つ。」「この順序を逆にして、抽象から具体への四つの段階についてそれぞれ基本型を立て」として、次のように示す。

第1段 コトの類型 Xガドウスルカ、Xガドンナデアアルカなどなど5型

第2段 コト+話手 題述関係としての有題・無題・略題の3型

第3段 コト+話手+相手 平叙文・疑問文・命令文・感嘆文の4型

第4段 コト+話手+相手+場面 伝達条件の大別による普通調と丁寧調の2型

第1段のコトの類型の5型とは、

主として物語り文に使われる型

1の甲型 Aガドウコウスル(シタ)コト

乙型 A=Bガドウコウスル(シタ)コト

主として品定め文に使われる型

2の甲型 Aガドウコウデアアル(アッタ)コト

乙型 A=Bガドウコウデアアル(アッタ)コト

3の型 AガBデアアル(アッタ)コト

で、「各型は、補足語をふやして拡大することができる。」とする。

第2段のコト+話手の段階の3型は、日本語では「センテンスは、コトの題述関係のワクにはめて表現するのが典型的」であるという見かたによって、提題の「ハ」による題目のある有題、それのない無題、および題目が文面にあらわれていない略題に分けたものである。

以上の、コトにおける論理面と題述関係における構文面への着目が、三上の構想の中核である。

(5) 林四郎『基本文型の研究』（文献37）

国語教育のためという立場で、「小学校のうちに身につけさせたいもの」という意味を含めた基本文型を示したものである。

個々の文は起こし文型・運び文型・結び文型（それぞれ、「言い始めの時の姿勢、言い終りまでを見通した姿勢、言い終る時の姿勢が採用する文型」）の3つをもつとする。

起こし文型は、始発型（始発記号のあるもの、始発記号のないもの）と承前型（承前記号のあるもの、承前記号のないもの）とに分類され、たとえば始発記号のある始発型として、「もしもし」「みなさん」「さあ」「むかしむかし」「ある所に」その他があげられ、承前記号のない承前型として、「述語に解説性のある文」（「——からだ」「——のだ」など）、「追加・延長等を表わす副助詞を含む文」（「も」「まで」）、「成分の一部を前文に仰ぐ文」その他があげられる。

運び文型は、孤立型・結合型（2点結合型・多点結合型）・連続型（複線連結型・複線展開型）と分類される。孤立型は1語文および1語文的な文、結合型は一般の単純文、連続型は重文および合文のもの、大体においていえる。たとえば、多点結合型には、「◎提題語は体が用」「◎提題語は体は用」等の文型があげられる。

結び文型は、従来の「文の表現意図による文型」に当たるものといえるが、表現内容を言表する描叙の段階、主体の判断（肯定・否定・可能・過去認定・推量・疑問）の段階、それらを含んだものがある感情で包んで投げ出される表出（感動・期待・願望・うらみ・懸念・おそれ・意志・決意）の段階、相手への伝達（単純な伝達、押しつけふうの伝達、勧誘ふうの伝達、命令ふうの伝達、質問）の段階と分析して、それぞれの主として文末形式を示す。また、以上のほかに、文によっては、局部文型として各種の相をもつ。

以上のように、本書の文型の記述は異色のものであるが、この構想は、「文型とは、心中の想が言語化されるに際して、想の流れに一応のまとまりをつけるために、支えとして採用される、語の並びの社会的慣習である。」「文型において『構造』として大切なのは、文法上の構造ではない、もっと、意味に即した構造である。」という考えかたにもとづいている。

(6) 三尾砂『基本文型』（文献40）その他

『基本文型』は未完で、構想をうかがいうる段階にとどまっているが、注目すべき見解がある。その1つは「基本文型と派生文型」の概念である。「それぞれの思考の型に従ってそれぞれの表現の型をとるということがいえるであろう。その表現の型が基本文型である。」とし、その基本文型が、文脈に応じて変

容され、派生文型ができる、とする。すなわち、1つの型の思考に属するもの
のうち、典型的な文型が基本文型であり、その変容したものが派生文型であ
る。たとえば、

基本文型 「……には……がある」

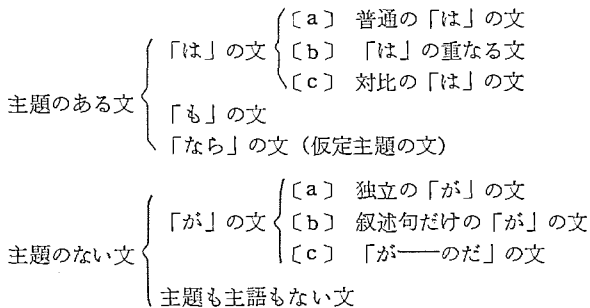
派生文型 「……には……が多い」「……に……がある」

文型は基本文型と派生文型との総称である。これは、はじめに示した従来の
種々の基本文型観に対して異色のものである。

注目すべき点の2は、「基本連文型」の概念である。「AはBだ。Cだ。D
だ。」は1つの連文型で、「Cだ。」「Dだ。」を主語の略された文としない。
「……は……。……は……。」という対比の「は」の連文型、「……。だから…
…のだ。」という「前提文。——帰結文。」の連文型、「……。それは……か
らだ。」という「前提文。——理由文。」の連文型等を指摘している。

なお、石垣幸雄『文型論』（文献45）にも、これと同趣の「連文型」の概念
の提示がある。

三尾は早く『基本文型への手がかり』（文献2）で、基本文型の構想を発表
している。（叙述文の単文の構文上の基本文型の一部として）



『基本文型』では、「今日もこの考え方に変わりはない。しかし、これは形
態だけから見た分類なので、ここでは、場と思考の型（思いのわく組み）とを
考慮に入れて、具体的な文型を調べていきたいと思う。」と述べている。

(7) 京都市教育研究所『書きことばの文型』（文献42）

長田久男の研究である。「児童・生徒の『文・文章』理解（読む）の過程を

きわめる」ための研究の1つで、「具体的な文について、その構成の型を求め
る」という立場である。

小・中学校の国語教科書の文章の中の地の文と一部の新聞記事の文を資料と
して、文の構造を分析し、それにもとづく4つの基準によって文を分類し、そ
の組合せによって文型を立てている。文の構造について、まず成分の係・受結
の関係をとらえ、次に、係の成分および受結の成分の構造を分析している。読
むという理解行為を予想する立場での文の解剖を主とするものと見られる。

文の分類の4つの基準は、次のとおりである。

- a 甲類 (<係₁> (文頭にある係) が接続詞であるもの)・乙類 (<係₁> が
接続詞でないもの) の別
- b 1次・2次・3次…… (係・受結関係の数) の別
- c 複線 (文の解剖の過程で、ある段階以後を平行して解剖しなければなら
ないもの)・単線 (そうでないもの) の別
- d 体言体 (<受結_N> ((文末にある受結)) の末部の詞が体言であるもの)・
用言体 (<受結_N> が用言であるもの) の別

以上の組合せによって、たとえば、甲類単線2次体言型・乙類二次複線用言
型等の文型が立てられる。

研究の目標にもとづいて「書きことばの」と対象を限定していることと、分
析の方法とに、独自性がある。

(8) その他

石垣幸雄『KAMAE (日本文型)』(文献34)は、日本語の basic sentence-
pattern として、次のように示している。(原文はローマ字書き)

1. PガX

- 1・1 なまえ文 (「ぼくがサトウだ。」など) 1・2 ありさま文 (「空が青い。」な
ど) 1・3 うごき文 (しかけ) (「風が吹く。」など)

2. PガQ=X

- 2・1 なまえ文 2・2 ありさま文 2・3 うごき文 (しかけ) 2・4 う
ごき文 (うけみ) (「ねこが犬にほえられる。」など)

3. PガRヲX

- 3・1 なまえ文 (Pハ/ガ Rガ/ヲ X) 3・2 ありさま文 (Pハ/ガ Rガ/
ヲ X) 3・3 うごき文 (しかけ) 3・5 うごき文 (やらせ) (「雲が雨を

降らせませす。」など)

4. PがQ=RヲX

4・3 うごき文(しかけ) 4・4 うごき文(うけみ) 4・5 うごき文(やらせ)

また、石垣幸雄『日本語の組立て』(文献41)では、文の成分の種類、各成分の構造やはたらきなどに及んで、文型の方法的基盤を明らかにしている。石垣の文型論は、構文型の追究の立場にあるといえる。

松下厚『日本語基本文型試論』(文献19)も構文型を目標とするもので、述語文節・主語文節・補語文節・連用文節・接続文節・並立文節の6つを文の基本成分として、これらの組合せによる14種の文型を立て、これに2次成分と成分の品詞的考察を加えて下位文型を考えるという構想のものである。

教育の立場の文型論が多い中で、中沢政雄『文法教育の体系と方法(小学校)』(文献29)では、「学習基本文型」を提唱している。中沢の学習基本文型とは、児童の表現意識と文法的能力の発達に即して段階的に考えられるものであるが、必ずしも構造の難易の順に、単純から複雑へと進むものではないと見られる。たとえば、1年生の作文から頻度の高いものを選んで、それを1年生2学期の初めにおける学習基本文型とする。

国語教育の立場の文型論に比べて、外国人に対する日本語教育のためのものは、概して、いっそう実用的色彩が濃い。前記、青年文化協会の『日本語練習用日本語基本文型』がそれだったが、佐藤純一『日本語教育における文型練習のプログラム』(文献46)も、その類である。これは「構造的分類を原則とし、若干意義的分類を折衷した文型練習」で、「構造的分類の最初の基準は文末述語の種類によるが効果的」と述べていることによって、その態度や構想がうかがわれる。その文型一覧は、(1)「——(い)——デス」、(2)「アリマス」「イマス」(3) 動詞、(4) 助詞の強調的用法、(5) 「デシタ」「マシタ」、(6) 「デショウ」「マショウ」、(7) 分詞、(8) (9) 句形式、(10) 句(文)の連結、(11) 句形式、(12) 「アゲル」「クレル」「モラウ」、(13) 話法、(14) 「レル」「ラレル」「セル」「サセル」、(15) 敬語、といった組織である。

多くの文型論を吟味してきて、なお最後に、文型概念に関して注目しておきたいのは、服部四郎の文型の説である。服部の文型の説は、『ソシュールの

langue と言語過程説』(文献25)『発話・文・形式について』(文献33)等に見られるが、服部によれば、次のとおりである。——「文は、音調の型(及び強調の型)、文型・統合型、形式に分析される。」「ソノ ホン トッテヨ。」は((目的語+命令的述語))文型を有する文であり、「トッテヨ。」は((命令的述語))文型を有する文である。「アタタカイア」という文と「アタタカイヽ」という文は同じ((述語))文型を有し、その意義のちがいは、音調の型のちがいによる。——服部の文型は、文の構成要素として考えられているものであり、主として成分関係の文の構造(構文)に関するものと見られる。

(9) 外国文献関係

以下にあげるものは、“文型”を直接問題にしているか、あるいは日本語の文法の記述の際にいくらかなりとも文型あるいは文型に関係した事実に言及しているもののみにかぎる。もちろん、あげていけば、文型の問題を直接扱っていなくても、文型についての考察の背景となる原理的な問題を論じたものまで取り上げなければならないであろうが、ここではそういったものにはふれないことにした。

a. Jespersen, Otto : Analytic Syntax (文献51)

ある特定の言語のシンタクス、またはシンタクティックな現象を、記号で表わされた成分の連続の型——あるいはそうした記号の連鎖によって表現された公式——として記述する試みとしては早い方のものである^(註)。Jespersenの意図は、文の成分を化学における元素のように記号でもって表わし、それに数学あるいは論理学における記号のような便利さをあたえようということにある。彼の文法学説によって分析された文の要素にいろいろの記号をあたえ、それによって文の構造を説明している。使っている記号は、S (subject), V (finite verb), O (direct object), O (indirect object) など、文の成分を大文字のローマ字でもって表わし、とくに問題になる前置詞とか助動詞その他を小文字のローマ字で表わしている。また、彼のいわゆる Rank には 1(primary), 2 (secondary), 3 (tertiary), ……といったぐあいに数字を使う。おもしろいのは $\frac{1}{2}$ などというのまで使っていることである (Chap. 16 Split Subject or Object)。そのほか、いろいろな関係を示すカッコ類、文の種類を

示す?, !, !!, などの記号, および補助的な記号がいくつかある。例としてあげる言語は英語が主であるが, デンマーク, オランダ, フランス, フィンランド, ギリシャ, イタリア, ラテン, ポルトガル, ロシヤ, スペイン, スウェーデンの諸語の例を随時あわせてあげている。

その記号による表わし方の 2, 3 の例をあげておく。

Rank は次のように表わす (Chap. 3 Junction)。

Old men 21 The crown inn 321

Good enough arguments 231

文の成分のくみあわせは,

I live. SV He takes a glass. SVO

He gave her it. SVOO

というように表わす (Chap. 7 Independent Nexus その他)。

文の種類は

Question: Is he ill? VSP?

Special questions: Who said it? S?VO

What has he? O?VS

Exclamation: You fool! SP!

Wie spät Sie kommen! 4!3SV

など。

記号による表わし方はやや機械的, 平面的ではあるが, すべてを網羅的にあげようとしている。今日の眼から見れば方法論的に問題となる点もいくつかあると思われるけれども, シンタックスを記号による一種の合理的なやり方で記述しようとした試みとして重要なものといってよいであろう。

なお, 1936年コペンハーゲンで発行された Specimens of syntactic formulas という小冊子がある。これは第4回 International Congress of Linguistics に献呈されたもので, その内容はその翌年刊行された上記 Analytic Syntax の予告のようなものである。Analytic Syntax に用いられた記号の説明および用例を簡単にあげている。

注) 文法的要素をいろいろの記号で表わそうとする試みは, Jespersen 以前にもい

くつかあったようである。Jespersen が本書であげているものなかのおもなものには、次のようなものがある。

A. Stöhr : Algebra der Grammatik (Leipzig, 1898)

Maurice Bologne : Analyse grammaticale à l'aide de signes conventionnels (Liège, 1935)

Viggo Brøndal ; Morfologi og Syntax (København, 1932)

b. Fries, Charles C. : The Structure of English (文献 52)

Lado, R. and C.C. Fries : English Sentence Patterns (文献 53)

まず The Structure of English について。1940年代から急に発達した構造主義的な方法による英語のシンタクスの記述。英語の文型の設定とか文型論の追求とかをそのおもな目的としたものではないけれども、本書の観点からする分析はけっきょく文の構造を“文型”的にとらえる方向にむかうことになる。事実、このあとに出た英語の文型に関する研究(後述の Roberts のものなど)や、英語教育の実践面において大きな影響を与えていることはよく知られているとおりである。

Fries の分析は、おもに文のある位置にどんな形式が入れかわって現われうるかという“substitution”の手順によっている。これは構造主義的な立場にたつ行き方として当然であろう。やや具体的にのべるならば、substitution のためのいくつかのワク (frame) を設け、それぞれのワクのある位置に入れかわりうるいくつかの形式を類にまとめる。そして、この類を文の構造 (の型) に参加する要素と考えるわけである。そのようなやり方で、まず“parts of speech”として Class 1 から Class 4 までの4類を認める (名詞、動詞、形容詞、副詞にあたる。記号は数字 1, 2, 3, 4 を使う)。それに対して、文の構造においておもに文法的意味をもつものを“function word”として Group A から Group O までの15種に分かつ(冠詞、前置詞、助動詞、代名詞など。大文字のローマ字で表わす)。文の構造の類型はこれらの記号の組み合わせとして表現される。

The concert was good. A 1 2 3

The concert may be good. A 1 B 2 3

The concert may not be very good then. A 1 B C 2 D 3 4

など。

また、直接成分 (immediate constituent) の考え方を導入し、文の構造において第1次的に分析されて取り出されるものと、第2次以下の分析で取り出されるものとの段階を区別している。

前にもふれたように、英語の文型をきわめて exhaustive にまとめて記述したものではないけれども、この立場からする文型論の方向は一応はっきり示されているということができよう。

つぎに、English Sentence Patternsは、前述の The Structure of English の考え方を英語教育——とくに文型の面からの英語教育に応用しようとしたものである。きわめて実践的な意図をもった教科書であるから、どうしてもそこにあげられる文の構造の類型は単純な、いわば“基本的”なものになるのは当然であって、複雑なものまでをすべてあげつくしているわけではない。

中心になる考え方のうちでおもなものは、やはり substitution である。比較的簡単な型から比較的複雑な型へと、いくつかの型を整理して各 lesson に配当し、それぞれの lesson では、その型において問題となる位置にどんな形式が入れかわりうる (substitutable) かについての exercise を行なうのを原則としている。

c. Roberts, Paul : Patterns of English (文献 54)

Roberts, Paul : English Sentences (文献 55)

どちらも、純然たる文型論の研究書でもなく、また先にあげた Lado-Fries の English Sentence Patterns のようなきわめて実践的な教科書でもない。英語の教師あるいは大学生あたりをめあてにした一種の教科書というべきか。英語の文型を一応網羅的に説明し、かつそれぞれの項目に exercise をつける。

Patterns of English は、原則的には先述の Fries の考え方に従った分析をしている。4つの“form class”(Friesのparts of speechにあたる)を認める点、いくつかの“structure group”(Friesのfunction wordにあたる)を考える点、そして文型をこれらのform classとstructure groupの組み合わせとして表現しようとする点など、まったくFriesの行き方を踏襲し

ているものといえる。さらに文以下の小さなかたまりとして“noun cluster,” “verb cluster” を認め、また subject, predicate, object ……といった“function unit,” immediate constituentにあたる“pattern parts” をたてている。まず、文を request sentence, question sentence, statement sentence の3種に分け、その中でも statement sentence の pattern をあげるのに重点をおいている。これは当然だろう。statement sentence は、その中心的要素(heart)が、Noun-Verb であるとし、その basic な pattern 4種をあげる。これをもとにして、さらにこまかい問題に進み、noun や verb の cluster, pattern parts, function unit を説明し、他の sentence pattern あるいは joining sentence pattern についてふれ、またイントネーションや句読の問題にまで言及している。方法論においてとくに Roberts 独特の新しい見方が多く出ているわけではないけれども、Fries 流の考え方を相当忠実に英語にあてはめたらどんな文型が設定できるかといういい見本である。記述もなかなか要領よくまとめている。

English Sentences は、前の Patterns of English の内容を改め、また追加したもの。基本的な考え方については、新しい見方による分析 (transformation) を取り入れた点以外はそんなにかわっていない。術語を改めるとか、記述のしかたをかえるとかといったちがいはいくつもある。また、sentence pattern のあげ方も、前書では basic なものをまず4つあげていたが、こちらでは Pattern One から Pattern Ten までをあげて説明し、そのあとでそれに伴うこまかな問題に及んでいる。

方法論的に前書ともっとも異なるのは transformation の見方による分析であろう。transformation は、同じ構成要素をもったある基本的な型から別の型をつくる際の説明に用いられる概念であって、これが構造主義言語学に導入されたのは比較的最近のことである。この考え方を積極的に取り入れようとした人としては、Noam Chomsky や Zellig S. Harris をあげることができる。^{注)} Roberts も本書で Chomsky の考えに負うところが多いことを述べている。しかし、本質的には同じような考え方、または transformation によって扱われうるような文法的現象の認識、というものはずっと早くからあ

たというべきである。たとえば、教科文法で教えるところの能動文から受身文をつくるつくり方などはそれである。Fries や、前書で Roberts がとったやり方というのは、すべていくつかの要素がいろいろな方法でたがいにプラスされて一つの文（あるいはその型）をつくるという説明のしかたであった。たとえば、主語となる名詞と述語となる動詞が結合して statement sentence ができるというようなくあいにてである。この方法は、シンタクティックな事実の多くをその射程内に収めうるが、同じと認められるいくつかの要素でちがった型ができるようなことがおこったときにその説明に窮することがある。transformation の概念はその欠点を一応すくうことができる。また、ある型とある型との間の相互関係も、この見方を導入することによって今までよりもはっきりさせうる可能性がある（どちらが基本的なもので、どちらがそれからできたものかなど）。この概念による分析についてはなおいくつかの問題があるように思われるけれども、それが成功すれば、文型論をいわば静的なものからある意味でやや動的なものにすることも可能なのではないかと考えられる。

注) Chomsky N.: Syntactic Structures (1957) Harris, Z. S.: Co-occurrence and transformation (Language 33, 283-340-1957)

なお 南不二男「構文論」(『国語学』47) 参照。

d. Bloch, Bernard : Studies in colloquial Japanese II Syntax

(文献56)

Jorden, E. H.: The syntax of modern colloquial Japanese

(文献57)

どちらも文型そのものの研究をとくに目的にしたものではないけれども、現代日本語の、しかも話しことばのシンタクスであり、またそのなかで文型に関係したことがらを取り扱われているので、取り上げておくことにした。

Bloch は、現代日本語の文を大きく2つに分けて“major sentence type”と“minor sentence type”の2種を認め、それぞれの特徴を記述している。^{注)}major sentence というのは末尾が終止句 (final clause) で終る文である。終止句というのは falling, あるいは rising, あるいはまれに high-falling のイントネーションをもち、かつあとにポーズが続く句である。Bloch のいう

句 (clause) は述語で終る形式 (連続) である。つまりこのような終止句で終るのが major sentence なのであって、他のもので終る文はどんなものでも minor sentence である。だから minor sentence というのはわれわれの報告書でいう独立語構文も含むし、また中断文も含む、major の文となっている方はまだわかるにしても、minor の文の方の内容は問題であろう。それはとにかく、それに含まれる下位のタイプの種類からいっても、また実際の現われ方からいっても、major の文の方が minor の文よりも圧倒的に多い。Bloch は major, minor それぞれの一般的な構造の特徴および句の構成を記述してはいるが、それをいくつかの type に分けて全面的に整理することはしていない。つまり、先述の Roberts が英語について行なったような成分の組み合わせの pattern をいくつかたてるようなことはしていないわけである。

Jorden も、Bloch とほぼ同様 major sentence と minor sentence とを分けている。ただ Jorden が Bloch とことなるところは、major sentence の構成要素としての直接成分 (immediate constituent) の分析を徹底的に行ない、そのタイプをいくつかたてていることである (39種)。この直接成分の分析のしかたも、またその結果も、問題はあるけれども、日本語の文型の考察にとって参考になると考えられる。

注) major sentence と minor sentence とをまず分けるという行き方は、L. Bloomfield の考え方に従ったものと考えられる。Bloomfield, L.: Language (Chap. 11 Sentence-types) 参照。

4. 結 び

以上見てきたところによって、これまでの文型研究においては、文型の概念も、目的観も、方法も、きわめて多様で、統一的方向を得ていないことがわかる。国内の文献についてだけ見ても、たとえば、三上章や三尾砂のように、ことばのあり方の根本的考察に向かい、そこの分析から出発しようとするものがあり、永野賢・林四郎・堀川勝太郎らのように、ことばの理解・表現のための方法として具体的に体系化を試みているものがある。また、同じく具体的体系化

を示しているものの中でも、たとえば、林四郎のものや永野賢や堀川勝太郎のものを比較すれば、文型ないし基本文型の構想がちがいが、記述の組織がいちじるしくちがう。これは、その文型あるいは基本文型をどう役立てようとするか、どう役立つと期待するか（同じく国語教育のためとはいっても、具体的に予想するところに、差異がありうる）のちがいにともづくものであろう。

文型の構想について、傾向を大きく分ければ、やはり、文の構造の型（構文型）の追究を主とするものと、意味的な面の表現法の型の追究を主とするものがあるといえようが、そのどちらについても、今後さらに詳しい研究を必要とする状態にある。ことに構文型の確立は、今後、文法的研究が詳しく進められた上に期待されるものである。実用の立場からの要求に応ずるものも、以上のような研究の積み重ねの上に編成されるべきものである。

（大石初太郎・南不二男）

索 引

この索引は、本書の中のおもな事項を五十音順にかかげたものである。

〔ア〕 行	
あいさつ	84, 135
相手	76~77, 101
アクセント	182, 186, 201, 239
~とイントネーション	178
~に従うイントネーション	184, 186, 199, 206
~の核	186
~の下降	202
~の型	183
準~とイントネーション	178
方言~	187
イカガ	56, 58
意志の形	233
意志の表現	32, 50, 240
一語文	239
一次成分	3, 67~71, 217
イツ	56, 58
意図表現のイントネーション	7~8
	180, 184, 187, 191,
	203, 205~206, 239
~のあらわれかた	189
依頼	60
イントネーション	7, 178, 239
~と構文	8, 203
~と表現意図	8, 205
~の型	186
~の形	186
~の上昇調・高調をともなう音	
節数	188
~のつかまえかた	178
~の表記法	186
~の表記例	187
~の分類と表記法	180
~の問題例の処置	198
アクセントと~	178
アクセントに従う~	184, 186,
	199, 206
準アクセントと~	178
句末の~	186
文末の~	186
引用句	123, 160, 191
引用提示句	13, 150~151
引用文切れ	23, 27,
ウ	50, 54, 72, 93
受身	101, 165
~・使役の表現	42
間接的な~	126, 130, 165, 168
直接的な~	119, 122~123,
	126~129, 136
	165
まともな~	165
めいわくの~	126, 129, 165
打消し	70, 121, 164
詠嘆	205
~表現	32, 34, 84, 240, 251
~文	34
応答	85, 205
~詞	251
~表現	32, 62, 84, 136,
	240, 251
遅上がり型	8, 201
音調の型	265

	[カ] 行	
カ	53, 55~56, 59, 78~79,	
	181, 183, 191	
ガ(格助)	83, 180, 212,	
	214~216	
～格	221, 223~224, 228	
ガ(接助)	86, 90~91, 94, 98, 105,	
	107, 146, 198, 236	
解説	218~233	
～の分化	230~231	
～判断	219~220	
解題～	229	
説明～	229~233	
回想の表現	43	
解題解説	229	
係助詞	69, 96, 219	
～機能	219	
～の添加	212	
格関係	83, 219, 222, 224	
格助詞	76, 220, 224	
～機能	219	
～と係助詞との交換	212~216	
拡大	102, 104, 109, 115, 137~146	
～構文	4, 95, 98, 100, 104~105,	
	107, 109, 115, 137, 242~243	
～成分	4, 100, 102, 137, 146	
確定条件	105, 236	
確認の表現	43	
確認要求の表現	32, 52, 241, 251	
下降調	7, 180, 184~186, 205, 239	
カンラ	54	
活用形	66	
可能	101, 119, 122~123, 126~128,	
	133, 137, 165~166, 176	
可能動詞	42, 120	
カモ	49, 72	

カラ(格助)	80, 88
カラ(接助)	86, 91, 94, 105,
	107, 146
間接的な受身	126, 130, 165,
	166, 168
間接的な目的語	167
完全自動詞	116
間投詞	84~85
感動詞文	113
感動文	34
慣用省略文	27
完了	36
希求	60
～の表現	240
基準構文	4, 95, 98, 100~106, 109,
	115~148, 237, 241
基礎構文	100
基礎的な型	116
詰問	56
疑念	191
希望の表現	32, 47
基本構文	100
基本文型	12, 100, 253~254,
	260~262
基本連文型	262
疑問	213
～詞	55, 203, 205, 214, 239
～兆候の表現	33
～文末助詞	191, 203, 205
逆接	105
教育の立場の文型論	264
強調	96, 202, 205, 211
共通資料	13, 71
切れ	23~24
禁止の形	233
句	67, 86~96, 113, 233, 238
～関係不整	20, 25

～を含まない文	230
空間	79, 140
クセニ	80, 86
句点を越える結び	20, 25
句末	191, 198
～のイントネーション	186
～の卓立表現イントネーション	196
継起	142
経験の表現	177
形式	265
形式名詞	86, 90
敬讓表現	115, 134, 237
形容詞・形容動詞	117, 132
～の連用形	78～79
～述語文	104, 113
関係を表わす～	126～127
存在・関係・相手に対する心理 状態などを表わす～	125
結果的な補語	78
ケレドモ(ケレド, ケドモ, ケド)	86, 90～91, 105, 146
原因	79, 141
限定	203
語彙的形式	2, 31, 35, 50, 59
語彙的特徴形式	42, 48
構造主義	267, 269
降調	183～184, 186
高調	7, 180, 184, 186, 188
イントネーションの上昇調・～を ともなう音節数	188
卓立の～	184～185
肯否要求の表現	32, 241
構文	3, 64～65, 121, 186, 204, 209, 224, 228
～型	203, 264
～の型	3, 5, 65～67, 93, 95, 97 ～99, 109, 113～177, 213,

	236, 239
イントネーションと～	203
派生的な～	119, 122, 126 ～130, 133, 165
複合述語的な～	170～177
国語教育の立場の文型論	264
試み	36
語順	12, 21, 66, 68, 75～76, 96, 104, 133, 215, 217, 239
～の変換	215～218
ことがら	81, 83, 96, 115
～の序列	133
語の誤用	21～22
語の不足	20, 22
語の用法に関する文型	257
コミュニケーションの成立に関する表現	84, 135, 240
孤立語	113

〔サ〕 行

材料	78
サエ	72, 76, 214
サセル	42
さそい	51
作用性	37
シ	86, 91, 146
使役	101, 125～126, 129～130, 165
～による派生	167
時間	79, 141
～の副詞	79
指示	227
～語	158
～同格	230
斜格～主題	232
直格～主題	231
直格～提示主題	231
無格～提示主題	232

事実の叙述表現	32, 35, 240
事実判断	219~220
質問	183~184, 191, 203 ~204, 206, 213
~的表現	32, 52, 239~240
~の表現	206
~文	52
指定強調	214~215
詞的形式	31
辞的形式	31
自動詞	118, 122, 124~127, 167
~構文	166
~文	113
自発・可能の表現	42
自問	51
謝意の表現	34, 135
斜格	228, 231, 233
~指示主題	232
~主題	228~233
~提示主題	232
終止的な成分	99
終止の位置	114
終助詞	239
従属句	70, 82, 86, 91, 100, 105 ~107, 109, 146, 152, 236~237
重文	86
従文	86
主格	228
祝意の表現	135
主語	64~65, 68, 71~73, 83~84, 94, 100~102, 105~106, 108, 115~116, 131, 215, 219~222, 228~229
~の省略	170
~の省略文	115, 134, 174
~のない述語構文	134

~・目的語の転換	165
指定強調的な~	214
主題的な~	211
対比強調的な~	214
中立的な~	214~215
非主題的な~	212, 214
授受	36
主題	9, 218~233
~的な主語	211
~的な「一ハ」	215
~の表現	224
~の分化	230~231, 233
斜格~	228~233
題目~	229~230, 232
直格~	228~231, 233
提示~	229~230, 232
並列~	233
無格~	228, 232
述語	64~65, 68, 71~73, 84, 99~102, 104~106, 121, 130, 203~204, 213, 219 ~220, 222, 228~229
~省略	60
述語構文	4, 84, 95, 98~107, 115~177, 240
主語のない~	134
首尾の不照応	20
準アクセント	179
~とイントネーション	178
順接	105
状況語	4, 9, 71, 73, 75, 79~80, 84, 88, 100, 102, 104~ 106, 108, 134, 140~146, 233~239
~拡大	140~146
~拡大構文	107~108, 237
消極的行為要求の表現	32, 45, 51, 58,

	241, 251
条件	79, 143
情態副詞	79
上昇傾向	183, 185
上昇調	7, 53, 55, 180, 184~186, 188~189, 191, 203~206, 239
イントネーションの～・高調を ともなう音節数	188
非～	185
文中の～	191
昇調1	183~186
昇調2	183~186
省略	99~100, 103, 115, 120~121, 171, 214
除外資料	19~22
助詞	66, 88
～の誤用	25, 28
～の抜け	29
～の複合	228
助動詞	66, 93
自立語	66, 73
ズ(ズニ)	86, 88, 235
数詞	169
数量	104, 134
推定	53
～の表現	32, 43, 48, 240
すすめ	58
成分(文の成分)	64~65, 73
～の省略	100, 214
～の陳述的変容	9, 210~218
終止的な～	99
同格の～	102
任意の～	101, 122, 131
非終止的な～	99
必須の～	100~101
積極的的行為要求の表現	32, 61, 241

	251
接辞	66
接続詞	81
接続助詞	86
～切れ	22, 27
～的な性格	86
説明解説	229~233
説明要求の表現	32, 56, 241, 251
接尾語的助動詞	35
選述要求の表現	32, 241
選択要求の表現	32, 55, 241, 251
セル	42
ゼロ	44
～辞	35
総合的文型	9~11, 209, 227
相互承接	37
総主	72, 102, 115, 131
ソウデス	49
挿入	6, 29, 84~86, 90, 160~163, 217
～句	191
相の表現	32, 42, 240
それ	23~24
存在性	37
存在判断	219

〔タ〕行

タ	93, 234~235
ダ	35, 44, 49
ダ(デス)	163
ダ(デス, デアリマス)ガ	83
ダ(デス, デアリマス)ケレド (ケレドモ)	83
タイ	47, 168
体言	68, 76
～相当句	192
「<～>ガ」の示す関係	72

「<~>カラ」の表わす関係	77
「<~>デ」の表わす関係	78
「<~>ト」の表わす関係	77
「<~>ニ」の表わす関係	76
「<~>ヘ」の表わす関係	77
「<~>ヲ」の表わす関係	76
助詞のつかない~	76
体修語	113
題述関係	260
対象語	72
態の表現	32, 35~36, 240
対比強調	212, 214~215
題目主題	229~230, 232
直格~	231
無格~	232
対話	1, 252
~資料	251
卓立的上昇	183, 185
卓立のイントネーション	53, 96, 211
~212, 217	
卓立の高調	55, 184, 185
卓立表現イントネーション	7~8, 179
~180, 182, 184, 187,	
192, 194, 202, 204, 207,	
239	
句末の~	196
詞の~	195
辞の~	195
女性の~	193
ダダコネ調	182
ダッターラ	92
他動詞	120, 122, 124, 128~129
~構文	166
たのみ	58
タラ	72, 80, 86, 89, 105, 235
タリ	72, 86, 88
ダロウ	53, 93

単純文	186, 220
~不整	20, 23
断定	53, 170, 174~175,
203~204	
~の表現	32, 38, 42, 44,
213, 240	
~の様相表現	32, 44, 240
中断	19, 22~23, 27
~文	71, 100
中立的な語順	217
中立的な主語	214~215
中立的な変容	211
重複	24, 228
直格	228, 231, 233
~指示主題	231
~指示提示主題	231
~主題	228~231, 233
~題目主題	231
~提示主題	231
直接成分	268, 271
直接的な受身	119, 122~123, 126~
129, 136, 165	
~による派生	165
直接的な目的語	165
陳述	31, 80
~的成分	4, 71, 80~84, 90, 96,
100, 105~106, 109, 114	
~115, 149, 152, 155,	
159, 223~224, 228	
~の変容	96, 115, 137, 166,
168, 210~218	
~副詞	68, 81, 93, 237
つぎ	23~24
ツツ	72
テ	72, 79~80, 86, 88,
91, 94, 234~235	
~アル	38~39, 72, 88, 92, 103,

	119~120, 122~123, 126
	~129, 136, 165~166
～イク	38, 40, 72
～イタダク	38, 41, 59, 72, 88
～イル	38~39, 72, 88, 92
～オク	38, 41, 72, 88
～オル	38, 72
～カラ	80
～クダサル	60~61, 72
～クル	38, 40, 72
～クレル	72, 168
～ゴランナサイ	62, 72
～シマウ	38, 40, 72
～ホシイ	60, 72, 168
～ミル	38, 41, 72
～モラウ	72, 88, 101, 126, 129
	~130, 165, 167~168
～ヤル	38, 41, 72, 88, 168
デ(格助)	79~80, 101, 214
～ハ	214
デ(助動詞の連用形)	72, 198
～アル	44, 72
～ハ	212
提示	81, 84, 86, 109, 228
～語	228
～的部分	83, 150
提示主題	229~230, 232
斜格～	232
直格～	231
直格指示～	231
無格～	232~233
無格指示～	232
提題	96
～の表示	151
低調	7, 180, 184, 186
程度	79, 104, 139
～副詞	79

丁寧語	93
デキル	42~43
デショウ	48, 53
～カ	51, 53
～ネ	53
デス	35, 44, 93
～ネ	53
テハ	58, 72, 88
テモ	72, 80, 86, 89, 107, 236
デモ(係助)	214
テンス	104
転成終助詞文	27
伝聞	38
～の表現	32, 38, 46, 175, 240
ト(格助)	53~54, 78~80, 151,
	160, 171, 173~176
～イウ	46, 171, 173, 176
～イッショニ	80
～キタラ	92
～シテ	80, 88
～シテハ	88
～終止	27, 41, 56
～スレバ	92
～チガッテ	80
～トモニ	86
～ハ別ニ	80
ト(接助)	72, 80, 86, 88~90, 235
ドウ	55~57
同格	6, 69, 99, 102,
	156~160, 229
並列～	233
統合型	265
動作性	37
動作名詞	142
動詞	123
～述語文	168, 213
～の連用形の「一ニ」の形	142

倒置	29
時の表現	32, 43, 240
特殊主語	220
特殊述語	220
特徴的文末形式	35
独立語	4, 68, 71, 81~82, 84 ~86, 90, 96, 99~100, 105~106, 109, 113~ 114, 151, 159, 228
~構文	4, 81, 85, 95, 98~ 99, 113~114, 240
独話	1, 64, 252
~資料	1
「ド」系統	56~57
トコロガ(形名+ガ)	80, 86

〔ナ〕 行

ナ	183, 185
ナイデ	86, 88
内容的な補語	78
ナガラ	79~80, 86, 88~89, 94, 235, 238
ナラ(ナラバ)	80, 86, 89, 91, 105
ニ	78, 79~80, 101, 142, 214
~格	222~224, 228
~ハ	212, 214
二次成分	3, 67~71, 80
日本語教育のための文型研究	253, 264
認識の根拠	144
ネ	180~181, 183, 185
ねがい、	58
ノ(準体助)	44, 53~54, 76
~ハ(ガ)	163
ノタメニ	80
ノデ	80, 86, 89, 91, 96, 105, 107, 233~235, 237~238
ノニ	80, 86, 90, 96, 105, 107

のぼし	23~24
ノホカニ	80

〔ハ〕 行

ハ	72, 76, 83, 93, 212, 214~216
バ	72, 80, 86, 88~89, 96, 105, 107, 234~235
はしょり	6, 168~170
ハズ	46, 49, 72, 172
派生	6, 98, 130, 165~168
~的な型	116
~的な関係	104
~的な構文	119, 122, 126~ 130, 133, 165
~的な骨ぐみ	137, 165
~文型	261~262
はだかの形	79, 214
発見	129
『話しことばの文型(1)』	33, 64, 113, 180, 183, 204, 251
場面	100, 115, 134, 211
反語	33, 51
判叙	205
~表現	32, 34, 53, 62, 84, 205, 240, 251
反唱の表現	33
判断	128, 230
~既定の表現	32, 35, 240, 251
~形式	220
~辞	35, 44
~叙述の表現	135
~の未確定の表現	32, 51, 240
~表現	230
~への疑念の表現	32, 51, 55, 240
~未定の表現	32, 51, 55, 240, 251
判定要求の表現	32, 53, 241, 251

反問	183
比較	77, 80, 127
非上昇調	185
ひっくりかえし	6, 163~165, 219
ピッチ	186, 207
評価	81~82, 128, 149, 151
表現意図	2, 30~31, 81~82, 84, 104, 109, 115, 134, 137, 149, 166, 233~239
～に应ずる文表現	2
～に应ずる文末の形式	3
～に应ずる文の文末部分	33
～の分類	32
イントネーションと～	205
表現の種々の場合に於ける文型	257
品詞	66, 104, 213
類発	38
付加	109, 168
～構文	95, 98, 100, 105~109, 115, 148~156, 215, 237, 247
従属句の～	152
陳述的成分と従属句の～	155
陳述的成分と独立語の～	152
陳述的成分の～	149
独立語の～	151
不確実判断	191
複合	109, 115, 146~148, 228
～構文	95, 98, 100, 105, 107 ~109, 115, 237, 245
複合述語	5, 45, 71, 87, 92, 134, 170
～的な構文	6, 170~177
～的な表現	35
複合的形式	45
複合文	186
副詞	78, 117

～文	113
時間の～	79
副修語	113
副助詞	204
～機能	219
複文	86
ふしまわし	181~182
不整	18
～・誤用	19, 22~29
～的な表現	157, 218
付属語	66
付属的な文節	67, 170
付属の関係	67, 71
不定詞	251
部分主語	73, 102, 115, 131, 147
プロミネンス	183, 202
文	64
～の構造	64, 267~268
～の構造に関する文型	257, 259
～の主語	215
～の成分	64
～の陳述的な側面	210
～の類型	64
主語が省略された～	134
トで終止する～	151
文意不明	21
文型	10, 257, 259, 264~265
～教育	207
～研究	253, 264
～論	264
実用的な～	66
理論的な～	66
文節	67
～連続	71~72
付属的な～	67, 170
文表現	2, 32
～の意図に関する文型	259

～の細分	32
文法的形式	2, 30~31, 35
文法的特徴形式	42, 48
文脈	100, 115, 134, 211
～的導入	81, 109, 149
～不整	19
平調	180, 183~186
並立	69
並列	227~228
～主題	233
～同格	230, 233
変化	37
方言アクセント	187
補格	228
補語	4, 71, 73, 78~79, 100~102, 115~116, 121, 128, 133, 136~137
結果的な～	78
内容的な～	78
補充資料	13
補助動詞	35
補足	29
骨ぐみ	66, 102, 109, 115~137, 146
～構文	4, 95, 98, 100~105, 109, 115, 241
～成分	4, 66, 102, 115
～の分類	116
総主のある～	131
派生的な～	137, 165

〔マ〕 行

マイ	93
マショウ	48, 51, 59
マス	44, 93
マデ	80
まともな受身	165

無格	228, 232~233
～指示提示主題	232
～主題	228, 232
～題目主題	232
～提示主題	232~233
むすびつき	102, 142, 237~238
名詞	68, 116, 127
～述語文	169, 213
～述語の中止	86
～のはだかの形	79, 214
～文	113
命題判断	219
命令	58, 213
～形	233
～的表現	32, 58, 239, 241
～文	52, 61
めいわくの受身	126, 129, 165, 167
メロディー	182
モ	72, 76, 83, 214
目的格	228
目的語	4, 71, 73, 76~78, 83~ 84, 100~102, 115~116, 124, 129, 133, 137
ありかを示す～	125
間接的な～	167
主語・～の転換	165
直接的な～	165
もてあまし	37

〔ヤ〕 行

ヨ	180~181, 183~185, 206
要求(文法上の)	73~74, 80, 101, 115
要求	205
～表現	32, 48, 52, 84, 191, 230, 240, 251
用言	68
～(用言+助動詞, 体言+助動詞)の	

連用形	86
ヨウデス	48
ヨウニ	59~60, 174
呼びかけ	84~85, 151
～・わかれなどの表現	32~33
ヨリ	80

〔ラ〕 行

ラシイ	48
ラレル	42
理由	79, 141, 234~235
理論的な文型	66
類縁表現へのそれ	24, 28
例示	37
～経験	37
レル	42
連体修飾語	68, 92, 105~106, 121, 215, 236
連文型	262
連用形	88, 91, 235
形容詞・形容動詞の～	78~79
動詞の～の「一ニ」の形	142
用言・体言+助動詞の～	78
連用語	4, 71, 73, 75, 79, 84, 88, 100, 102, 104, 106, 134, 137, 139, 238
～拡大	137~140
連用修飾語	65~66, 68, 73
連用中止	86
朗読調	181

〔ワ〕 行

ワ	184, 206
「ワタクシハ」の受けないもの	23
ワ	76, 204, 212
～格	219, 222~224, 228

α 型	184
immediate constituent	268, 271
major sentence	270~271
minor sentence	270~271
Nebensatz	86
paradigmatic な関係	66
structural meaning	107
subordinate clause	86
substitution	267~268
syntagmatic な関係	66
transformation	269

昭和 38 年 3 月

国立国語研究所

東京都北区稲付西山町

電話 東京 (901) 8154 (代表)

UDC 495.6:415

NDC 815

997

国立国語研究所刊行書目

国立国語研究所年報

1～13 (昭和24年度～昭和36年度)

国立国語研究所報告

- 1 八丈島の言語調査
- 2 言語生活の実態 (秀英出版刊 ¥300)
—白河市および付近の農村における—
- 3 現代語の助詞・助動詞
—用法と実例—
- 4 婦人雑誌の用語
—現代語の語彙調査—
- 5 地域社会の言語生活 (秀英出版刊 ¥300)
—鶴岡における実態調査—
- 6 少年と新聞
—小学生・中学生の新聞への接近と理解—
- 7 入門期の言語能力
- 8 談話語の実態
- 9 読みの実験的研究
—音読にあらわれた読みあやまりの分析—
- 10 低学年の読み書き能力
- 11 敬語と敬語意識
- 12 総合雑誌の用語 (前編)
—現代語の語彙調査—
- 13 総合雑誌の用語 (後編)
—現代語の語彙調査—
- 14 中学年の読み書き能力
- 15 明治初期の新聞の用語
- 16 日本方言の記述的研究 (明治書院刊 ¥600)
- 17 高学年の読み書き能力
- 18 話しことばの文型(1)
—対話資料による研究—
- 19 総合雑誌の用字
- 20 同音語の研究
- 21 現代雑誌九十種の用語用字 (第一分冊)
—総記および語彙表—
- 22 現代雑誌九十種の用語用字 (第二分冊)
—漢字表—

国立国語研究所資料集

- 1 国語関係刊行書目(昭和17～24年)
- 2 語彙調査
—現代新聞用語の一例—

3 送り仮名法資料集

4 明治以降国語学関係刊行書目 (秀英出版刊 ¥300)

5 沖繩語辞典 (大蔵省印刷局刊 ¥2,500)

国立国語研究所論集

1 ことばの研究

国語年鑑

(昭和 29 年 版) (秀英出版刊 ¥450)

(昭和 30 年 版) (秀英出版刊 ¥600)

(昭和 31 年 版) (秀英出版刊 ¥450)

(昭和 32 年 版) (秀英出版刊 ¥480)

(昭和 33 年 版) (秀英出版刊 ¥500)

(昭和 34 年 版) (秀英出版刊 ¥550)

(昭和 35 年 版) (秀英出版刊 ¥800)

(昭和 36 年 版) (秀英出版刊 ¥950)

(昭和 37 年 版) (秀英出版刊 ¥950)

高校生と新聞 国立国語研究所 共著 (秀英出版刊 ¥280)
日本新聞協会

青年とマス・コミュニケーション 日本新聞協会 共著 (金沢書店刊 ¥280)
国立国語研究所

RESEARCH
OF SENTENCE PATTERNS
IN COLLOQUIAL JAPANESE

(2)

(On Materials in Speech)

- I Outline
 - II Sentence Moods
 - definition — classification
 - III Sentence Construction
 - object and method — patterns of construction
 - IV Intonation
 - method — description
 - V Some Considerations of “Synthetic Sentence Patterns”
- Supplement: survey of previous works
- Index

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

TOKYO JAPAN

1963